
INFINITE WITCHES **—無限の蒼穹を駆ける白き龍—**

シュウ禅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INFINITE WITCHES | 無限の蒼穹を駆ける白き龍

【Nコード】

N4483X

【作者名】

シュウ禅

【あらすじ】

白騎士事件・・・その日を境に俺たちの世界は一変した。理不尽で歪んだ世界へと・・・
その5年後、歪んだ世界を破壊するかのように突如世界は異形の者たちに襲われた。
その者達の名はネウロイ・・・
この物語は一人の少年と空を駆ける少女達の物語

護りたいから俺は飛ぶ！！

この小説はストライクウィッチーズとインフィニットストラトスのクロスモノでオリジナル主人公が出ます。若干のアンチ要素が含まれます。作者はこれが処女作です。それでもいいという方は是非お読みください

EP・01 扶桑の白き籠（前書き）

ストライクウィッチーズとES インフィニット・ストラトスのク
ロスモノです。

作者はこの作品が初めてですので至らない点などもございますがそ
れでもよろしければお付き合い下さい。

EP・01 扶桑の白き龍

今日も太陽は世界を照らし続ける。

世界が例えどれほど凄惨な出来事が起きていても

平等に

無慈悲に

世界は今

滅亡の危機に瀕していた

「伏せるー!!」

その声が届くのとほぼ同時、爆発音がその声をかき消すように響いた。

「くたばれ!!ネウロイ共!!」

「アハト・アハト8・8 cm砲射撃用意ー 撃てえ!!」

その巨大な砲が火を噴く

次の瞬間目の前にいる黒い異形に砲弾がぶち込まれた。瞬間激しい閃光と轟音がその場にいる兵士達を襲う。

「やったぞ!!」

「敵反撃来ます!!」

「司令部!Dフィールドにネウロイ6! 繰り返す、Dフィールドにー」

「地雷原、突破されました!!」

「くそ、予備陣地へ後退!!」

その指示に従い、後方へと下がる兵士達。

しかしー

「走れ!走れ!!」

「急げ!」

「急ー」

逃げる兵士たちを空から赤き閃光が無慈悲に襲う

「ぎゃあ!!」

「フライング・ボット
飛行壺!!」

「くそオ……」

「多すぎる……」

一人の兵士が呟く……

その眼前には……

無数の黒き異形が人類をあざ笑うかのように立ち塞がっていた。

2039年・・・

その年を境に我々の世界は一変した

その変化を一言で表すとすれば、

我々は
人類は互いに殺し合うことを楽しむ余裕を失った、ということだ！
遊戯

7

ネウロイーーー

突如出現した「異形の敵」

人類はこの黒き異形の者たちと種の存亡をかけた戦いを繰り広げる事になったのである

人類が敵対している敵、ネウロイ。

彼らは『瘴気』をまき散らし、大地を腐敗させる。

その強力な瘴気に人間は太刀打ちできず、死に追いやられる。

しかし、中には瘴気に打ち勝つ者たちがいた。

遙か昔より存在する魔力という力を持つ者

その者達は自らの魔力を機械によって増幅し、普通では持つことのできない兵器を軽々と操り、自在に空を飛び回り、敵の攻撃を障壁で受け止める

人々は尊敬の念を込めて彼女たちをこう呼んだウィッチ魔女と……

欧州―帝政カールスラント東部、ボズナニア

欧州で最も激戦区であるこの地では日々、地獄のような激しい戦闘が繰り広げられていた。

「C中隊！残弾確認！！」

「もうカンバン！！」

「再配分お願いします！！」

「……チっ！！」

C中隊隊長セシリア・グリンダ・マイルズは軽く舌打ちをする。

彼女たちブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊の周りは木々は倒れ、いくつものクレーターができていた

彼女たちの目の前には巨大なネウロイの姿。

その黒き体から伸びた砲塔が彼女達に向けられる。

「……！ 総員、障壁展開！！」

その瞬間、マイルズは部下に指示を飛ばす。

ネウロイの砲から赤い赤い光の奔流がC中隊を襲う

辺りに衝撃が走った

砂塵が舞い、彼女たちを包む。

「被害報告！！」

「全員、生きてます！！」

「よし！全軍、総攻撃！！、敵正面に全弾叩き込め！！」

次々と巨大ネウロイに無数の砲弾が叩き込まれる。

「マイルズ大尉！ 徹甲弾残量僅少！！」

「構うな、叩き込めえ！！」

なおも倒れぬネウロイ

「いい加減墜ちてええええええつ！！！！！！」

そしてついに

KYRAAaaaaa.....

甲高い、ネウロイの叫びがあたりに響くとネウロイはその巨体を光の破片に変えた。

「敵ネウロイ、破壊確認.....」

「ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊よりHQ.....敵大型ネウロイを撃墜、Dフィールド制圧完了しました。」

『こちらHQ、これより代替部隊を送る。部隊到着後、補給に戻れ。それまで現状を維持されたし』

「了解、交信を終了します。」

「.....ふっ」

ほっと息をつくマイルズ。

「大尉、司令部はなんと」

そばに控えていた彼女の副官が声をかける

「代替部隊の到着後、補給。それまで現状を維持せよ、だそうよ」

「そうですか、これで少しは休めますね」

「ええ……中隊円周防衛隊形！各員周辺を警戒せよ！！みんな悪いけどもう少し頑張って！！」

「……了解！！」

指示に従い、円周状に固まる中隊の隊員たち。

しかし、その動きにいつもの精彩さはなかった。

平時であれば、マイルズは緩慢な動きをした部下を怒鳴り散らすところであるが彼女はその気にはなれなかった。

（……みんな相当疲れてる、無理もないわね。）

黒海付近に大規模怪異が発生し、欧州に侵攻を開始したのは今から八か月前の2039年4月のことである。

平和に酔っていたオスマルクを瞬く間に占領し、大国カールスラ

ントに電撃的侵攻を開始したのである。

欧州各国をはじめ、世界は震撼した。

現在、カールスラント・オストマルク国境では絶望的な防衛線が繰り広げられている。

ネウロイの侵攻は激しく、このままではカールスラントも席捲せっけんされてしまうのは時間の問題と思われていた。

世界各国から援軍が送られてはいるが、強大なネウロイを食い止めるには至っていない。

彼女たち、ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊もその送り込まれた援軍の一つであった。

（派遣されてからというものの、あちこちに狩りだされてるくに休みを取ることもできなかつたわね）

彼女たちはネウロイのカールスラント侵攻初期から参戦し、今現在もこうして前線に立ちつづけ、欧州防衛の一端を担っている。

それ故に連戦に次ぐ連戦により部隊の疲労も蓄積されていた。

（けどこの作戦さえ終われば後方で久しぶりに休暇がもらえる。・・・お休みももらったら何しようかしら？）

彼女たちが周辺を制圧したことでほぼ八割がた今回の侵攻作戦は成功したといえる。

他の戦域も時期に制圧されるだろう。

この作戦の成功の暁にはカールスラントの首都、ベルリンで役3か月ぶりの休暇を取れることとなっている。

隊のみんなでベルリンを観光するのもいいかもしれない……

そんなふうはこのあと休暇のことを考えていると

「ま、マイルズ大尉！ う、上を見てください！！！」

部下の一人から突然悲鳴のような声で報告が入る

「どうした!？」

上を見上げてみると……

「そんな……」

空にひととき巨大な存在が彼女達の前に現れる

巨大な白鯨を思わせるシルエットの巨大なネウロイが小さな僕をつれそこに君臨していた

巨大爆撃型ネウロイ・ディオミディア

最近現れるようになった敵の新型だ

突如として現れた強敵に隊員たちの顔が絶望に染まる

彼女たちは装甲歩兵だ。陸上の敵は何とかできても空にいる敵はど
うにもできない。

ディオミディアがその身につけている機銃を彼女たちに向ける。

もう駄目だ……………

そう思ったとき、

どこからか砲弾が飛来し、ディオミディアに直撃する。

『こちら代替部隊だ、遅くなって済まない』

無線機から代替部隊の隊長と思わしきの太い男性の声が聞こえる

「あ、ありがとうございます!!」

『これより敵の注意をひきつける!!君たちはその間に撤退を!!』

「で、でもそれじゃあ!!」

魔女ウィッチでもない者が敵の攻撃を食らえば一溜まりもない。

彼らは文字道理死にいくようなものだ

『魔女君たちは我々の希望なんだ！！こんなところで命を無駄にするな
！！』

そう叫ぶ代替部隊の隊長

「……すぐ戻ってきます、だから絶対に死なないでください！
」

マイルズはそう答えるのが精いっぱいだった

『気にするな、いい女を待つのは男の甲斐性さ。さあ、行けえ！！』

「はい！！全軍後退！！」

そう叫び後退しようとするマイルズ

しかし……

ディオミディアから一条の閃光が走り、代替部隊を襲った。

その攻撃で代替部隊の戦車のほぼ半数が壊滅。

「そ、そんな！！」

さらにマイルズたちを逃すまいと無慈悲にその砲塔を彼女たちに向け、放つ。

「くう、・・・・・・・・!!」

何とか障壁で防ぐが押されるマイルズ。

「もう、駄目・・・・・・・・」

今度こそ終わりだ・・・・・・・・そう思った瞬間

一条の雷光がネウロイを貫く

瞬間、激しい轟音と共にネウロイは光の欠片となって消えた。

「・・・・・・・・え？」

一体何が起きたのだろうか。

あまりに唐突な出来事に呆然としてしていると突如インカムに若い男の
声が入ってくる。

「大丈夫か、その陸戦ウィッチ！」

声のする方を見上げると、そこには一人の少年がこちらに降りてき
た。

年齢は15、6といったところか、背は170cm半ば、扶桑人特
有の艶やかな黒髪がところどころはねており、髪だけを見れば年相
応かそれよりも下に見える。しかしそれなりに容姿が整っているの
に加え、強い意志が宿る蒼く澄んだ瞳が大人びた雰囲気を出していた

「こちら、義勇^{ぎゆう}統合^{とうごう}戦闘^{せんとう}飛行^{ひこう}隊^{たい}隊長^{ちゆうじ}、緋村^{ひむら}優^{ゆう}刀^{とう}大尉^{だいう}だ！そっちの指
揮官^{しゐくわん}は誰^{たれ}だ？」

「は、はい！！ブリタニア王国陸軍第四戦車旅団C中隊セシリア・
グリンダ・マイルズ大尉です。助けただきありがとうございます
す」

「いや、こちらこそ遅れてすまない。今全線域がしっちゃかめつち
やかでデカブツを発見するのが遅れた。マイルズ大尉は今のうちに
戦車部隊の怪我人の救出、手当てを頼む」

そういつて優刀は肩にかけていたリュックサックを下ろす。

「メデイカルキットまで・・・いったいどこから？」

「何、近場に補給所があったからな、来るついでにもしかしたら、

と思ってもって来たんだ。あと……マルセイユ!!」

そう上空に向かって叫ぶと上空を警戒していたウィッチが一人おりてきた。

その手には武装コンテナがぶら下がっていた。

「あと弾薬もついでにおいていく」

「いたりつくせりね。」

『優刀!!』

突然無線に少女の音が響く。

「武子、どうした?」

『三時方向から敵第三波!!すぐ戻ってきて!!』

「了解、今戻る!!」

「新手?」

「ああ、あとは俺たちが相手する。航空型だけみたいだからな、今のうちに怪我人をつれて後方へ下がってくれ」

「後武運を!!」

優刀は敬礼をして空へと去っていく

「あの噂は本当だったのね。」

「はい。最初はびっくりしましたが、男のウィッチメールウィッチ、一Waib Drache《白き龍》は実在したんですね。」

魔法を使えるのは圧倒的に女子が多い、

しかし、極稀に魔法力を生まれながらに持つ男子が現れる

今日の前に現れた少年もその一人である。

しかし、彼が有名なのは魔法が使える男子だからではない。

「オストマルク撤退戦において、迫りくるネウロイの軍勢を抑え込んだ扶桑の英雄……」

オストマルクの都市、クラカウより民衆がカールスラントに避難する折、ネウロイが大規模侵攻をしてきたことがあった。あわやカールスラントにまで侵攻されるところまできた。その時、部隊を率いて難民防衛に当たったのが緋村優刀率いる扶桑国軍遣欧艦隊義勇飛行中隊であった。

その時に多くの難民を救ったこと功績からカールスラントの人々から畏怖と尊敬の念を込めてこう呼ばれるようになった

一Waib Drache《白き龍》と……

「下原、敵の数は？」

「はい、距離110000、高度15000、数は小型種12、中

型種3です。」

下原定子少尉の報告が入る。

「なんだ、いつもの雑魚どもか。」

下原の報告を聞いたドミニカ・S・ジエンタイルがめんどくさそうにつぶやく

「ちよつと大将、不謹慎よ。」

その不謹慎な発言にエディータ・ロスマンが頭を抱えながら苦言を呈す。

「まあエディータ、大将の言うことももつともだ。ここ最近は特に張り合いがないのが多くてつまらん。」

「ラルまで……」

「ところで優刀、彼女たちはどうだった？」

いつの間にか横についていたヴァルトルートクルプンスキーが意地の悪い笑みを浮かべて聞いてきた

「ああ、伯爵の予想通り、可愛い子ぞろいだったよ。」

「それはよかった！ 優刀あとで一緒に彼女たち食事に誘いに行こうよー！」

「……伯爵、お願いだからやめて」

クルプンスキーの彼女らしいいつもの調子にこの部隊の副隊長、加藤武子が頭を抱える

「さてと、おしゃべりは終わりだ………加藤隊はロスマン隊と共に小型機の牽制を、残りのモノは俺と共に中型をつぶすぞ！
……化け物どもに我々の恐ろしさを思い知らせてやれ！！」

「了解！！」

年若い少女たちの凜とした声が蒼き戦場に響き渡る。

優刀の合図とともに少女たちはいっせいに行動を開始する。

「定子ちゃんついてきて！、エディータ、フォローよろしく！」

「了解！！」

真っ先に行動を開始したのは加藤。

僚機である下原に声をかけ敵にめがけて一気に急降下する。

加藤と下原は持っていた機銃を小型の一群に掃射する。

敵は突如頭上から降り注いできた銃弾になす術もなくその身を撃ち抜かれる

エディータとその僚機であるエーリカ・ハルトマンがタイミングを見計らい、続いて降下する

加藤と下原を追いかけていた敵が更に上空からくる二人に気づくが時すでに遅く、反撃しようとして試みるもそれよりも早くエディータとハルトマンが銃弾を叩き込む。

予期せぬ第二波に敵は対処するまもなく次々落ちていく。

当初確認された敵はその数を12から8に落とした。

加藤たちが小型をひきつけてできた隙間を6つの影が一気に駆け抜ける。

駆け抜けた後には数はさらに減り、5

「ジェンタイル隊は右の、ラル隊は左を頼む！」

「了解」

「ああ、任せろ」

6つの影が一気に加速する。

接近に気付いた敵が表面につく機銃を掃射するが6つの影は華麗にすり抜ける。

ジエンタイルの後ろについていたフェデリカ・N・ドツリオが前に躍り出てその身に持つ大型の機関砲を構え、中型に襲い掛かる。

その強力な火力に敵は抗うこともできず、その身を削られる。

すると、ひときわ深く削られた場所から突如赤い宝石のような物体が姿を現す。

「大将、お願い!!」

「任せろ」

ジエンタイルはさらに加速、

その赤い宝石めがけて矢のように飛んでいき、肉薄、

「墮ちろ」

赤い宝石にそのまま拳を勢いよく叩き込む。

拳を叩き込まれた赤い宝石はなすすべなく砕け散る

次の瞬間、

砕け散った宝石に呼応するかのように中型に亀裂が入り、その身を

無数の光る破片に変えた。

「やれやれ、大将も豪快だね。まさか拳でコアを潰しちゃうなんてさ。」

「奴らしいといえば奴らしいけどな。クルプンスキー、そろそろ仕上げるぞ」

「OK、ラル」

そういつて二人は中型にとどめを刺すべく向かっていく。

相対するは彼女たちのゆうに10倍はあるつかという巨大な怪物。

しかしその身は傷だらけであり、今にも崩れ落ちそうである。

GYAaaaaAAAAAa

声にならない咆哮を上げ、

向かってくる彼女たちを落とそうと、機銃を放つが二人は華麗な機動ですべてを躲し、銃弾を放つ。

そしてついに、

「これで、終わりー！」

クルプンスキーが装甲を削り、ついに中型のコアを露出させる。

その隙を逃さずラルがコアを貫く。

「ふ、他愛ないな」

そういつて髪を書き上げるラル。

次の瞬間、

背後で敵が崩れ落ちる体を光の破片に変えた。

G Y a o o o O O O O ! ! !

残る一体になった敵は仲間の敵を取ろうとその攻撃を更に強める。

その銃弾の嵐の間を華麗にすり抜けて敵の身を削る影があった。

「そこだ、食らえー!!」

その間をすり抜け機銃を次々と潰していく少女、ハンナ・ユステイ
ーナ・マルセイユ。

しかし彼女は先のラルやドリリオのようにその装甲を削るようなこ
とはしない。

かのじよは機銃だけを狙い破壊している。

そのはるか上空から敵に向かい突撃していく一つの影。

優刀だ

その少年が手に持つのは銃ではなく、一振りの刀。

その姿に気付いたのか、敵は男に向かって機銃を掃射する。

しかし、少年はそのすべてを見切り最小の動きで躲す。

刀を上段に構え勢いを殺さず、敵に降下

「もらったぁああ!!!」

そのまま敵を一刀のもとに両断。

二つに分かれた敵は音を立て、その身を光り輝く破片に変えた。

「ネウロイ、全滅を確認!!」

マイルズは副官から歓喜の報告を聞く。

マイルズはその報告を聞き微笑み一言つぶやく

「Waib Drache《白き龍》が私たちを助けてくれたの
ね・・・」

「義勇統合戦闘飛行隊、任務完了。これより帰還する!」
RTB

2039年

それは、何の前触れもなく人類の前に現れた。

それを我々はネウロイと名付けた。

ネウロイがどこから、何のために来たのか誰にも分からなかったが、彼らによって人々は故郷を、国を追われたのは確かだった。

しかし、彼らに対抗する者たちが現れた。

人々は彼女たちをこう呼んだ

ウィッチ
魔女と・・・

これはウィッチ達と共に空を駆ける一人の少年の物語・・・・・・・・

EP-01 扶桑の白き龍（後書き）

どうも初めまして、シュウ禅です。

以前からやりたかったストライクウィッチーズ（以下SW）とインフィニット・ストラトス（以下IS）のクロスものがやっとできました。

すみません……とか言いながらこのEP-01

ISのイの字も出てきません

ISファンの皆様ごめんなさい。

今回はプロログなのでオリ主やその周りのウィッチという存在の説明を優先した結果ISを入れる余地がありませんでした。

たぶん、篝やら、セシリア、IS学園の子達の登場はもう少し先になります。

4、5話はたぶん優刀達、義勇統合戦闘飛行隊の周りの世界観と情勢の説明の回になると思います。

あ……でも、あの子はみんなに先行して出るかな？

さて、今回出てきたウィッチですがはつきり言います。

ほとんどアニメには出てきていません

アニメに出てきていたのは今回名前だけでできたハルトマンだけです。(あとマルセイユも一話だけでてます)

マルセイユやマイルズは原作者のフミカネ氏の同人誌、「アフリカの魔女」シリーズのキャラです。

他のキャラは島田フミカネ氏のサイトに掲載されている *World Witches* のキャラです。彼女たちがどんなキャラかはそちらのほうを見てください。

あと何人かはちゃんとメディアに出ています。

この作品のモットーは

ウィッチ達を可愛く、かつこよく書く

ISとSWではあまり待遇の良くない男たちにも活躍の場を

という感じですよ。

さて、このあとがきも書き終わりのテンションそのままに書いてしまったのでなんだか長くなってしまいました。

優刀がこの先どのような物語を彼女たちと繰り広げるのか、彼女達のかわいい姿をお届けできるよう頑張りたいと思います。

以上、シュウ禅でした。

EP・02 義勇統合戦闘飛行隊（前書き）

どうも、シユウ禅です。

遅くなりました

と、いうわけで第二話です。

それではどうぞ！

EP-02 義勇統合戦闘飛行隊

俺の名前は緋村優刀。

扶桑国空軍大尉

このカールスラントで義勇統合戦闘飛行隊を率いている世にも珍しい男のウィッチメルウィッチだ。

義勇統合戦闘飛行隊は各国のウィッチを集めて結成された航空ウィッチ部隊だ。

各国の精鋭を集めた部隊とは謳われているが、正確に言えば各国から派遣されたウィッチの寄せ集め部隊というのが本当の所だ。

そんな女子だらけの部隊に男が一人。

他の男連中から見ればおいしいシチュエーションのように見えるのであるが

正直言って彼女たちをまとめ、指揮するのは大変な仕事である事の上ない。

もちろん、彼女たちといるのは楽しいし、かけがえのない仲間だとも思っている。

俺には俺なりの苦労がある、ということだ。

「うん」

午前11時30分

書類を見ながら俺は一人うなり声をあげていた。

「変な唸り声をあげて一体どうした優刀」

そういつて声をかけてきたのはグンドユラ・ラル

カールスラント空軍所属のウィッチで、優秀な航空魔女が所属するJG52の中でも指折りの腕利きだ。

うちの隊の中でも視越し射撃の腕は一、二を争い、年若い隊員からは頼れる姉のように慕われている

「最近ネウロイの装甲が固くなってきただろ、なにか使える武装はないかなと思ってさ」

「なるほどな・・・確かに固かったな、あいつは」

ここ最近のネウロイは急激にその性能を伸ばし始めてきた。

今までは小銃でも十分に貫けた装甲が防弾装甲に変化していたり、再生機能を持つている中型も多くなってきた。

それで何か使えそうな武器があるなら物資の補給の発注と一緒に頼んでみようと思ってカタログを見ていたというわけだ

「いまは何とかなっているが、防弾装甲持ちの小型が出てきたら今のままじゃ手に負えなくなる」

その言葉にラルもうなずく

「だが一番厄介なのは、あの兵器だろうか？」

「ああ、」

そうである。

ネウロイが進化したことで得た厄介な力。

光学兵器である
ビーム

やつらはいまだ人類でも実用できていないビームを使うようになった。

古くからSFの世界で使われている強力な兵器が現実になって我々を襲ってきた

正直言ってこれが怖い。

記録ではビルをまるまる消滅させたとか。

破壊ではない、消滅。

この世界から存在が消えてなくなったのだ。

「今はまだ防げる程度だからいいが、そのうち防げなくなるぞ。」

「今でさえ防ぐと魔法力をこっさり持つてかれるもんな」

今は何とか障壁で防げるからいいがそれもいつまでできるか……

この世界から跡形もなく消えるとか勘弁願いたい。

「どうにかならんもんかね」

そんなふう二人で頭を悩ませていると……

グ~~~~~

何やら奇妙な音が鳴った

「……今のつて」

そう言っつてラルの方を見ると

「違う。私じゃないぞ」

即、否定するラル

その顔はほんのり赤かった

「じゃあ、いったい誰が……あ」

ある部屋の一点を見る

そこはこのオフィスに置かれている応接用のソファアの所であった。ただし応接用とはいっても、今まで本来の目的で使われたことはない。ちゃんとした応接室はほかに用意されている。

大体は隊員が寛いだりするのに使っている以外は今のところ使われていない。

いつもは武子や下原などあたりが気を遣い掃除をこまめに行っつておりそこそこ綺麗なのだが

今日はその真逆

ビールやらワインやらの空き瓶が大量に置いてあった。

昨日、部隊の年長組で飲んでいてそのまま片付けず就寝。

朝片付けようとも思ったのだが、急いで先日の作戦の報告書を作らねばならなかったのでそのまま放置しっぱなしだったのだ

そのゴミ置き場の中心から何かがムクリと起き上がる

「んんんんっ、朝か・・・」

「おはようさん大将」

起き上がってきた相手、ドミニカ・S・ジエンタイルに挨拶する。

彼女の名前はドミニカ・S・ジエンタイル

リベリオン合衆国の精鋭部隊第八航空軍に所属するウィッチだ。

気怠げな振る舞いが目立つが、その実は即断実行、意気と情熱の熱血魔女

その思い切りの良さや面倒見の良さからついたあだ名が「大将」

「ああ、おはよう……ところでボス、今何時だ？」

「今11:45だ」

「……もうそんなになるのか。ほかの奴らは？」

「エディータは新人三人の訓練、武子は非番、伯爵は……どこ行っただんだ？」

「さあな。あいつも今日は非番だからな、どっかそこらへんで女の子をナンパしてるんだろう」

「だろうな」

「まあ、伯爵は置いといて……ボス、なんか食べるものないか？」

「冷蔵庫に何かしら入っているだろ？ 適当に自分で作れ」

「……了解」

そういつて隣接される給湯室に入っていく。まあ、給湯室といっても窓際に仕切りを敷いて冷蔵庫とガスコンロをつけただけの簡易的なものだが。基地の給湯室は遠いので仕方がなく簡易的に作った。

そもそも義勇統合戦闘飛行隊が使っているこのオフィス、元々はミールディングルームだったので少々広い。

スペースが余っているのでちょうどよかったのだ。

「じゃあ、私はコーヒーでも入れてくるか」

ラルも席を立ち、給湯室に向かう。

給湯室にはきちんとしたコーヒーミルがおいてある。

コーヒーにこだわりのある武子とラルがわざわざブリタニア製の手動式ミルを取り寄せた。

しかも二つ。

ラル、武子がそれぞれ買い求めたらしい。

一つでいいじゃんと思うのだが、ミルによってはだいぶ味が変わること

まあ実際、二人の淹れたコーヒーはインスタントより格段においしいので文句はないのだが

しばらくするとドミニカは料理を乗っけて戻ってきた。

リベリオン合衆国の国民食、ホットドックである。

「優刀」

「サンキュー」

ラルからコーヒーを受け取り一口

「うまいな」

「そうか」

満足そうに微笑むラル

「ところで二人は何の話をしていたんだ？」

自分の席でホットドックを食べながらドミニカは先ほどの話を聞いてきた

「最近、敵が頑丈になってきただろう？」

「それで何かいい武器はないかって話をしてたんだ」

「なるほどな……」

「リベリオンでなんか使えそうな武器ってないか？」

「そうだな……」

あまり興味なさそうに返すドミニカ。

この態度だけを見ればあまり人の話を聞いていないようにとられるかもしれないが、

そんなことはない。彼女はちゃんと聞いている。

気だるげなのが彼女が一番リラックスできる状態なのだろう。

彼女はきちんと仕事をしているので問題はない。

「どうだったかな、あまり覚えがない。機関砲じゃダメだろ？」

「ああ、どつちかというとり回しのいい機関銃の方がいいかな」

「じゃあ、ないな。今のはどれも一緒だ」

「そうか」

「いつそのこと、ショットガンでも使うか。リベリオンにいいのがある」

「でもそれだと装填数が少なくて長時間戦えないぞ？」

「無駄弾を撃たなきゃいい。至近距離で当てれば問題はない」

「確かにそうだがハイリスクだな」

「やっぱり、機関銃が航空歩兵が持つには一番いいってことか・・・」

「そうなるな、しばらくは戦い方を工夫して、戦っていくしかないな」

事実こうやって自分の意見をきちんと出してくれる。

三人であーでもない、こーでもないと次々に案を出していると

「失礼します、緋村大尉はいらっしゃいますか？」

「ああ下原か、どうかしたのか」

外で訓練をしていた下原定子が執務室に顔を出した。

この時間であれば、いつもなら訓練が終わり次第そのまま食堂に移動しているのに、何か用だろうか。

「はい、整備小隊の土田曹長が時間があればご足労願いたいと。」

どうやら伝言を頼まれたようだ。

「さっさと来いってことか。」

「・・・おやっさん」

土田曹長

統合戦闘飛行隊のストライカーユニットの整備を担当する整備小隊の長。

基本的に整備中隊の切り盛りする最上級下士官というのは現場の叩き上げで登り詰めた人物が多い。

そんな百戦錬磨の人物に俺みたいなひよっこ大尉が逆らえるわけが無い

事実上の出頭命令である

「はあ・・・言ってくるか」

「そうだな」

そういつてラルと執務室を出ようとする

「私も行く」

ドミニカも席を立ちともに行くこととしていた

「いいのか？今日非番だろ？」

「特にやりたいことも決まってるからな、暇つぶしにはちょうどいい」

「そうか、じゃあ下原留守番頼めるか？」

「はい、任せてください」

「じゃあ、言ってくる。」

下原に見送られ、三人は執務室を出て行った

「ご足労いただきありがとうございます」

オフィスを出て格納庫に赴くと格納庫の前で土田曹長が直立不動で待ち構えていた

「あゝ、堅苦しいのは抜きでお願いします」

正直言つて土田曹長に敬語で話されるのはきつい。

何せ扶桑海軍変から自分のユニットを見てもらっているのだ。そんな人物に敬語で話されるのは背中がかゆくなってしょうがない。

「いえ、部下の手前もありますから。」

即答である

確かに曹長より階級が上の大尉がペコペコ頭を下げていたんじゃない。部隊の士気にもかかわる

「……わかった、それで用件つてのはもしかして頼んでいた件か？」

「はい、とりあえずいろいろうちの者たちで試してみたんですが……」

そういつて格納庫の奥へと案内される

案内された先には巨大なモノが鎮座されていた

ーISSだ

正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定されて作られたマルチフォーム・スーツである。しかし当初の目的である宇宙進出は一向に進まず、様々な思惑から兵器へと変わり、さらに『スポーツ』へと落ち着いたーーー
ーーー 所謂、飛行パワードスーツだ。

しかし、『スポーツ』へと収まっただけのISSだが、その既存の兵器を凌駕するスペックを持って余りすぎて、スポーツという枠にすら収まらず、軍事力の要となってしまうのである。

そんなスポーツ用品なのか兵器なのかもいまいち定義が定まらないモノがなぜこの格納庫の片隅においてあるのか？

答えは簡単。

うちの部隊にISSを使える人物がいるからだ。

「ドツリオ中尉！大尉が来ましたよ！！」

曹長が叫ぶとISSの後ろから一人の少女が顔を出す。

「Ciao、優刀。報告書は片付いたの？」

そういつて陽気な笑みを向ける彼女の名前はフェデリカ・N・ドッ
リオ

ロマーニヤ公国出身のウィッチでISのロマーニヤ公国代表候補と
いう風変わりな経歴の持ち主である。

国家代表とはISの世界最強を決める世界大会『モンド・グロツソ』
が二年に一度行われる。その大会に出場する選手のことである。

要するに代表候補と言つのは国家代表のIS操縦者のその候補とし
て選出される人達の事である。簡単に言うとエリートだ。

「フェデリカ、どうだ量子変換システムの方は？」

「うーん、とりあえずサンプリングは終わったんだけどね。はい、
これがそのデータ」

目の前にディスプレイが表示される。

「うーん…へえ、思っていたよりも展開のエネルギー消費が少ない
な」

出されたデータの内訳に驚く

「ええ、しかもこれマガジンありよ。」

「すごいな、展開に一秒しかかからないなんて驚きだ」

予想どおりといえば予想どおりの結果に驚く五人。

頼んだ件というのはストライカーユニットにこの量子変換システムを搭載できないかということだった。

三人が見ていたのはISの機能の一つ、量子変換システムの稼働サンプリングデータであった。

試しにカールスラント航空ウィッチの正式装備であるMG - 42を量子変換して展開させてみたのだが、予想以上の良い結果に思わずほおが緩む。

量子変換システムを使うことができれば戦闘に携行できる武装も多く出来るようになる。そしてら継戦能力もずっと長くなって多様な作戦行動もとれるようになる。

正直言って航空ウィッチは積載^{ペイロード}限界が低く、携行できる武装が少ない。最初から装備していた分のマガジンを打ち尽くせばあとはせいぜい予備のマガジンを一つ持てるかどうかだ。

それでは装甲の厚い大型のネウロイが多数出現している欧州の戦いはこれからどんどん苦戦を強いられるのは目に見えている。

フェデリカが使用しているMG - 151のような大型の兵装は強力ではあるが取り回しに難がある。

「量子変換システムに登録できる兵装はこの分だと4つぐらいか？」

今までだとせいぜい一丁か二丁だけである

そついった事情から今回のテストの結果は上々ともいえる。

「ストライカーユニットに搭載できるか？」

「大丈夫だと思うけど、魔力配分をいじらなきゃいけないから今乗っけるエンジンのままじゃ余力がなくてスペックダウンは免れないわね」

「出力不足か・・・」

確かに、搭載することができるとはできるようだがこれでは他の性能が下げなくてはいけない。

持てる兵装が多くなることは重要だが、だからと言ってほかの性能を削るといふ行為はあまりしたくない

「使えると思ったんだけどね」

「そういえばフェデリカは実戦で使わないな、どうしてだ？」

ふと、ドミニカはフェデリカがISを使わない理由が気になったのかフェデリカに尋ねた。

「ああ、それはね・・・」

ヴウーーーーーヴウーーーーー

突如、格納庫に外から耳を切り裂くようなけたたましいサイレンが鳴り響く。

「敵襲!？」

「まさか、おととい作戦があつたばかりだぞ!？」

「大尉、司令部から連絡がー!!」

下原が電話を持って駆け込んできた。

「はい、緋村」

「ボニンだ」

電話の相手はJG52の飛行隊指令フーベルタ・フォン・ボニン少佐からだつた。

「いったいどうしたんですか？」

「ああ、先ほど全魔女支援要請が入つた」
フロックンアロー

全魔女支援要請が出るなんて多々事じゃない。

「いったいどこから」

「カールスラント・オラーシャ国境沿いを航行する輸送機からだ。どうやら避難民をカールスラントに護送している最中に襲われたらしい。」

「リバウの航空隊が護衛にあたっているんじゃないんですか？」

「どつちやら違つらしい」

オラーシャからカールスラントへの護送任務であるなら航続距離の長い零式艦上戦闘脚を装備している扶桑遣欧艦隊所属のリバウ航空隊が当たっていると思っただんだが・・・

どうやら別の部隊が当たっているらしい。

「今はうちの第二中隊も第三中隊も出払っていて出せる部隊がお前の部隊だけだ。・・・いつてくれるか？」

「了解です、ただちに出击します」

「今、クルピンスキーに指令書を持たせた。詳細は奴に聞け」

「伯爵が・・・？」

意外な名前が出てきたのでふと引っかかる

たしか伯爵は今日は非番だったはず。・・・まさか

「少佐・・・まさか」

「・・・ちょうど奴好みのいい酒が手に入ったんでな、安心しろ、まだ開けていない。奴は素面だよ。後でお前も飲みに来い」

どうやら昼間から飲み比べをしようとしていたらしい。

ヴァルトルート・クルピンスキー

無類の酒好き女好きの享楽主義者で楽道家。

すらりとした長身と優雅な身のこなしからついたあだ名が「伯爵」
勇猛果敢、敢闘精神に溢れるあまり必要以上にネウロイに接近しユ
ニットを壊す部隊内のクラッシャー。

飄々とした性格で怒られたって気にしない。大概のことは笑って流
す。

朝から姿が見えないと思っていたら指令室にいたのか。

「……………本当でしょうか？」

指令に念を押して確認する。

「当たり前だ。酔っ払いを飛ばせられるか」

「わかりました。信じましょう」

「では頼む」

電話が切れると同時に、伯爵が駆け込んできた。

「優刀、出撃だよ！ 指令から連絡は？」

「今聞いた！」

「はいこれ、指令書。」

そういつて指令書を渡してくる

目的地はここからずいぶん離れている。増槽をつけていくか

「曹長!?!」

「了解です、てめえら!?!出撃準備だッ!?!回せッ!?!」

「おおっ!?!」

土田曹長が声を挙げ、部下の整備兵に指示を出す。

次々に滑走路にストライカーユニットの発進台が並べられる。

「優刀!」

滑走路に出ると武子が真っ先についていた

その後ろにエディータ、ハルトマン、マルセイユがこちらに向かって走っているのが見える。

「いったいどうしたの!?!」

「スクランブル緊急発進だ!?!ネウロイ敵が避難民の乗った輸送機を襲っている。これからオラーシャ方面に向かう。」

「オラーシャの? こっちよりもリバウ航空隊の方が近いような気がするけど……」

「考えるのは後だ先生！大尉、速く出撃しよう！！」

「ああ！！」

マルセイユが自分のユニットに飛び乗りエンジンに火を入れる。他の隊員も出力を上昇させる。

自分もユニットー零戦ーに飛び乗り銃を手に取る

「義勇統合戦闘飛行隊、出るぞっ！！！！」

EP・02 義勇統合戦闘飛行隊（後書き）

どうも、シユウ禅です。

何とか一週間以内に二話目投稿できました。

本当はもう少し前に投稿するつもりだったんですけど、今週なぜかいろいろ忙しくて週末の投稿になりました。

これからは何とか週一で投稿出来たらなあ、と思います。

今回は、ISのあの人たちが登場です。

それではまた。

EP・03 IS インフィニット・ストラトスー（前書き）

三話目です。

一話と二話が長すぎたように感じたので今回は少し短くなっています。

それと今回からやっとIS組が登場します。

それではどうぞー！

「けど、護衛についているのはいったいどの部隊なのかしら？」

目的地に向かう途中、右横を飛んでいた扶桑国空軍、加藤武子が疑問を口にした。

「さあな・・・通常だったらリバウ航空隊が当たると思うんだが」

扶桑国遣欧艦隊所属リバウ航空隊

リバウ航空隊が装備する零式艦上戦闘脚は長距離航行に優れており、その為オラーシャからの護衛任務であるならばリバウ航空隊所属のウィッチが適任だ。

であるはずがそのリバウ航空隊ではなくほかの部隊が当たっている。

ではオラーシャのウィッチ、または戦闘機部隊が当たっているのだろうか。

先ほど司令部からの新しい情報によるとそちらも違うようだ。

「まあ、行けばわかることだ」

「そういうこと」

左横のラルの意見に同意する

ここであれこれ予想を立ててもしょうがない。

百聞は一見にしかず

現場に行けばわかることである

「そこに助けを求める人がいるならば助けに行く。そしてその力をより多くの人々の為に使う、それが俺たち？ウィッチ？だ」

その言葉にうなづく隊員たち。

例え何があるうとも人々を守るために戦う・・・それが俺たちウィッチだ

「こちら、オラーシャ連邦第583輸送機部隊！ 我、ネウロイの攻撃を受けつつあり！！至急応援を求む！！繰り返す！！我ネウロイの攻撃を受けつつあり！！至急応援を求む！！」

オラーシャの乾いた空の下、三機の輸送機が黒き異形から逃げ惑っていた。

「くそ！！来るぞ！！」

一条のビームが一機の輸送機を襲う

「粉くそおおおおっ！！！！」

ハンドルを思いっきり右に逸らし 機体を右に向ける

その機体の船艇下部をビームがカスめる

「き・・・奇跡だ・・・」

『だ、大丈夫ですか！？』

通信から聞こえてきたのは女性の声。

「何とかな！それよりも早くネウロイを落としてくれ！！こっちは避難民が乗っているんだ！！そんな急激な機動は何度もできない！！！」

『は、はい！！』

それを最後に通信が切れた

「くそ！！なんでこんなことになっちまったんだ！！」

「いつもならリバウ航空隊のウィッチ達が護衛についてくれているのになんで今日に限って！！」

いつもであればリバウにいる航空ウィッチの部隊が護衛にあたってくれるはずなのだが今回に限って違う部隊が当たっていた。

彼女たちも何とか頑張ってくれているが、その動きは扶桑の精鋭といわれるリバウ航空隊と比べると格段に見劣りする。

「くそ、このままじゃ・・・!!」

「機長!!」

「どっした!!」

「っ、通信です!!」

「ど、どこからだ!!」

「ウィッチからです!!」

その言葉は喜びに満ちていた

「なんだと!! よし! つなげ!!」

『こちらリバウ航空隊、竹井少尉です!! そちらにあと10分で着きます! だからあともう少しだけ持ち堪えてください!!』

「————お安い御用だフロイライン!! 待っているぞ!!」

そう言っつて通信を切る機長

「ふ、ふふ・・・副長」

「はい・・・!!」

「あと10分! あと10分で我々の戦友が来てくれる!! それまでなんとしても生き残るぞ!!」

「はい!!」

絶望の色に染まっていた瞳には今や希望の光が宿っていた。

「はあああっ!!」

掛け声とともに突き出された巨大なランスがネウロイに突き刺さる。

「くらいなさいっ!!」

次の瞬間ランスに内蔵された四連ガトリングガンが火を噴き、ネウロイを内部から破壊した。

「これで三機!!」

息をつく間もなくそのまま次の標的に向かって飛翔する水色の機体。

その水色の機体はいま欧州で多くみられるウィッチの使用するストライカーユニットとは大きく違った

確かに人の形をしているが、手足は一回り大きく、全長は優に3メ

「トールはあろうかという大きさ。」

「そう……ISである。」

「世界最強の兵器とされるISが今、ネウロイと交戦していた。」

「しかし……」

「きゃあー!!」

「いや、こないで!!」

「そのISで構成された部隊はいま、窮地に立たされていた。」

「山田先生!!」

「青い機体を装備していた少女、更識楯無はこの部隊を指揮する人物、山田真耶に声をかける。」

「更識さん!どうかしましたか!!」

「このままでは全滅です!増援はまだ来ないんですか!?」

「は、はい!今通信が入ってあと10分でリバウの航空ウィッチが来てくれるそうです」

「そうですか……」

「増援が来るまであと10分」

楯無のかおが曇る

このままじゃあと10分も立たずに全滅する。

その時

二人の間に一条のビームが走る

「くっ!!」

楯無はガトリングガンを、真耶はアサルトライフルをネウロイに向かって放つ。

二人の攻撃を受けたネウロイはその身をむなっしく光の粒子に変えた。

「先生、このままじゃ!!」

「はい、わかっています!!」

楯無が懸念していることは他の隊員達の事であった。

いや、

正確には彼女たちは軍人ではない

彼女たちはIS操縦者を養成する機関、IS学園に所属する学生である。

ではなぜ学生とされる彼女たちがこの戦場にいるのか。

その理由はISという機体にある。

ISはそもそも、宇宙で活動するための装備として開発されたのだがいつの間にもやら世界最強の兵器として軍事力の要とされた。

今回の大規模怪異発生に伴い欧州の防衛の為に世界中ISも世界中から派遣された。

彼女たちIS学園の生徒もその部隊の内の一つであった。

楯無含め、派遣部隊に選ばれた生徒は皆、各国の代表候補性や、学園でも選りすぐった優秀な人材ばかりだ。

しかし、皆実戦の経験はない。率いている山田先生すら実戦は初めてなのだ。

そのような誰も実戦経験者のいない中での出撃。

敵は派遣以前に渡された資料によると小型のラロスという機種が15機。

機種としては旧式に分類されるのだが、その旧式にすら生徒たちは手こずっている有様であった。

このままではまずい……

楯無はそんな予感がしていた。

そして、その予感不幸にも的中してしまう。

「も、もういやあああああつ！！！！」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！！」

突如、生徒の一人が錯乱し、戦闘空域から逃げようとした。

敵がその隙を逃すわけもなく

「……避けてえつ！！」

ネウロイは容赦なく逃げようとした生徒の背中に機銃を放つ

「きゃああああつ！！」

無残にも背中から撃たれ落下する生徒

「よくもつ！！」

ガトリングガンをラロスを放ち撃ち落とす

「もういや……」

「あたしまだ死にたくない！」

まずい！！

楯無がそう思った時、すでに遅かった。

仲間の一人が落ちたことで最後まで保っていた緊張の糸がぷつぷつ

と切れてしまったのだ。

死ぬかもしれないという恐怖

その恐怖が皆に伝染する

皆戦うことを放棄してしまった。

戦意を喪失したのを感じたのか、ネウロイは戦意を失った生徒の横を通り過ぎ輸送機に攻撃を仕掛けようとする

「みんな!!! しっかりしてください!!!」

真耶が攻撃しようとしたネウロイを撃墜し、彼女たちを立ち直らせようとするが一度恐怖に支配されてしまえばそこからすぐ立ち直るのは困難を極める。

楯無は戦えなくなった仲間をそのままにして一人戦い続ける。

「先生!!! 生徒よりも輸送機を!!!」

「けど、更識さん!!!」

「ISには絶対防御があります!!! たとえ落とされても命には危険はありません! それよりも輸送機を守らないと!!!」

「そ、そんな・・・更識さん」

楯無の無常ともいえる言葉に真耶は困惑の声を挙げる。

「先生！！しつかりしてください！！ あの輸送機には罪のない民間人が乗ってるんですよ！！ 見殺しにするつもりですか！！」

「！！！！」

楯無の言葉でようやく我に返り自らのやるべきことを思い出す真耶。

「更識さん！！ 私たちで増援が来るまで敵の注意をひきつけます！！」

「はいっ！！」

「他のみなさんはまず自分の身の安全を考えてください！！ まだ戦えるっていう人は私についてきてください！！」

そう言ってネウロイの集団に攻撃を仕掛ける麻耶たち

何人が二人に触発され攻撃に加わる。

そうして麻耶たちはネウロイに攻撃を仕掛け足止めする。

しかしたかが数人では足止めするには限界があり

「しまった！ 抜かれた！！」

一機が真耶達を抜いて輸送機へと向かう。

「更識さん！！」

「はい！！」

楯無がその後を追いかける。

「このおおおっ!!」

ネウロイに向けてガトリングガンを放つが当たらない。

そしてついにネウロイは輸送機をその射程にとらえた

「だめええええっ!!」

楯無が叫ぶがネウロイは止まらない

ネウロイが輸送機に向けて機銃を放とうとしたその時

ネウロイに向かつてはるか上空から銃弾が降り注ぐ。

思わぬところからの攻撃にネウロイは何もできずに光る欠片となり
消滅した。

「え?・・・」

予想外の出来事にあっけにとられる楯無

「わはは、よし命中」 あの距離で全弾命中なんて、私ってば最強ねー!」

「はっはっはっはっ!」 相変わらずいい腕だな! 義子!」

「何とか間に合ったみたいね・・・」

声が出たかと思うと楯無の頭上を疾風のように駆け抜ける三つの影

「こちら扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です!!」
「これより貴官らを援護します!!」

EP・03 IS インフィニット・ストラトスー（後書き）

ついに登場しましたIS組！！

やっとです。

しかもしよっぱなから最強の生徒会長、さすが、生徒会長！強い！！

………とはいきませんでした。

扱いが結構不遇になってしまった。……ごめん、楯無さん

いや、IS好きですよ？ ブルーティアーズとか、打ち鉄とか、ラファールとか、かつこいい機体がたくさんありますから！

けど、扱いが不遇とか言ってるけどなんだかんだで楯無さん、ネウロイを旧型の小型とはいえ5機落としてますから普通にエースです。しかも初の実戦で。ちなみに現実でもSWの世界でも合計で5機以上落とすとエースって呼ばれるようになります。

そうやって考えるとドイツのパイロットはすごいですね、撃墜数三桁叩き出しているのはほとんどがドイツのパイロットです。日本にも一人三桁を越すトップエースがいます。

……あまり素直に喜べることではないんでしょうが。

話がそれました。

今回の第3話、ISファンの皆様からはもしかしたらお叱りを受けるかもしれませんが。

この作品のIS、最強って言ってますが、無双のような活躍はしません。機体のレベルを下げたとかそういうつもりは作者の中にはありません。機体は間違いなく時代最高峰の性能を持っています。優刀が作中で言っていたように使える機能が満載です。

それでも今回、生徒が落とされたのは単純に使い手の問題です。

一応、彼女も設定では代表候補生だったんですけどね。話の展開の都合とか、この作品の土台的なものとか考えたら第三話、IS勢があまり活躍できなかった。

最後のなりますが、ご意見ご感想の方、お待ちしております！

ではまた次回！！

EP・04 魔女とIS Apart (前書き)

すいません、遅れました

というわけで、第4話です。

今回は少し長めになりそうなので二つに分けました。

それではどうぞ

Ep-04 魔女とIS Apart

「こちら扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です！！これより貴官らを援護します！！」

目の前の少女が高らかに叫ぶ

「……ウィッチ魔女」

私はその光景を見て、知らず知らずのうちにそう呟いていた。

ウィッチ魔女……

遙か昔よりこの世界に存在する魔法という不思議な力を持った者たち。

しかし魔法といってもいきなりどっかに瞬間移動とか、怪しい術で悪魔を召喚したりとかは出来ない。

出来ることといえば、少し障壁を張ったり、遠くにある物を少し動かしたりする程度であり役には立たない。

そんな役に立つかどうかの力を持つもの……魔女

しかし、彼女たちのその力はネウロイに対しては絶大な驚異であり、ことネウロイ戦に対しては人類の切り札ともいえる存在である。

そんな存在が今日の前にいる。

「この部隊の指揮官の方は誰ですか？」

「は、はい！ IS学園欧州派遣部隊隊長、山田真耶です。」

突然声をかけられ、声を裏返して返事をしてしまった。

声をかけてきた向こうの隊長を見る。

向こうの隊長のその若さに驚く。

「あ、あなたが隊長ですか？」

「はい、そうですが？」

年は14、5といったところである。

そんなまだ年端もいかない少女が部隊を指揮してこの戦場にいるということに驚かない人間はいないだろう

「扶桑国遣欧艦隊288航空隊、竹井醇子少尉です。ネウロイは我々が相手を行いますので輸送機の護衛をお願いします。」

「え！でも、そちらの人数は3人だけのようですが。それならば我々も一緒に……」

「そちらの隊員は見たところによるとPTSDを起こしています。戦闘続行するのは不可能です。」

そう言つて生徒たちのほうを見る竹井少尉。

そこには金切り声ですすりなき、金縛りで動けなくなった生徒たち、無表情になり何かを呟き続ける生徒の姿があつた。

「あなたたちは今はここを一刻も早く離れるべきです。このままでは生徒は持ちません」

「!?!」

「ここは我々だけで十分ですので早く退避を」

そう言つて仲間の元へ戻つていく

「……………先生、ここは彼女たちの言つ通り輸送機の護衛に回るべきです」

いつの間にかそばに来ていた更識さんにそう提案される

確かにその通りだ。

このままでは生徒がみんなつぶれてしまう。

部隊を預かつたものとして隊員のことを考えるともう限界だ。

此処は彼女の言葉に甘えるべきだ

「…そうですね、みなさん！私たちは輸送機の護衛に専念します！
万一敵が来た場合は慌てず騒がず私に報告！！私が相手をします！
！・・・動ける人は動けない人のフォローに回ってください！！」
私は生徒たちに指示をだし、離れてしまった輸送機に向かった。

「ふう、ようやく往ったわね」

離れていくISの部隊を確認した醇子はほっと一息をつく。

もしかしたら隊長もPTSDになっていないかと思ったがどうやら
正常な判断はできるようだ。

そこへネウロイが攻撃を仕掛けてくるが・・・

「・・・甘いわ！！」

その攻撃を軽やかに躲し、手にもつ九九式二号二型改13mm機関
銃でネウロイを落とす。

「まずは一機・・・！！ 美緒、後ろ！！」

そう醇子が叫び視線を上空に向ける

美緒と呼ばれた少女の後ろに敵が張り付いていた。

少女を落とそうと機銃を放とうとするが、突如ネウロイの正面から少女の姿が消える。

「はあああつー!!」

ネウロイの上空から少女が、その手に握った扶桑刀がきらめく。

両足を複雑に動かし、後回転の要領で一瞬で宙返りをして相手の上を取ったのだ

「貰った!!」

上空から急降下し、そのままネウロイを一閃、敵を両断する。

「これで二機!!」

「後は……義子!! 二時方向の敵をお願い」

「ん、了解」

竹井の指示に気のない返事で返す少女。

地表に背を向けた状態から一気に降下する

降下した少女の先には敵が4機。

そこに向かって恐れることなく一直線に落ちていく

敵に突っ込みながらすれ違い様に次々とネウロイに銃弾を叩き込む

「終わり〜」

少女が通過した後、次々とネウロイは光の破片に変わった。

「ふう……終わったか」

「ええ、二人とも周囲を警戒して」

すべての敵を倒した三人はそのまま上空を周回して残敵がないか警戒する。

「しかし……彼女たちが例の部隊か」

上空を警戒していた坂本美緒飛曹長は心底つまらなそうに呟く

「ええ、IS学園選りすぐりの精鋭部隊っていう噂だったけど……」

「てんで駄目じゃん」

「しかし、なんでまたあんな訓練兵ばかりの部隊を送り込んだんだ？」

「少しでも実績がほしいんでしょう？向こうは怪異が発生してからその開発費に見合う戦果を残せていないみたいだしね」

「それで訓練生の部隊まで送ってくるか？」

「ただでさえ機体の数が少なくて前線に回せる機体がない以上、少しでも使えるなら送って実績を上げたいのよ。なんだかんだで今一番ISを保有しているのはIS学園のようだし。一応代表候補生は軍で一通りの訓練は受けているみたいだけど……」

坂本と竹井は遠くで輸送機の護衛に当たっているIS部隊に目を向ける。

初の実戦を経験したということもあり緊張が抜けていないのか、IS学園の生徒の飛ぶその姿はフラフラしておりかなり危なっかしい。

「あれでか？…… あれだったらまだ戦闘機のほうが全然役立つぞ？」

「軍にもメンツというものがあるのよ、国民の血税で賄っている軍事費の大部分を開発費に使ってるのよ？それなのにいざって時に全く役に立ちませんでした、なんて口が裂けても言えないわよ」

「確かにそうかもしれないが……」

「だからって訓練生を送ってくる上層部の考えなんて私には理解できないけど」

「あんなものにお金をかけているんだつたら、こつちに補修部品の一つでも送ってほしいものだ。現場は倉庫で埃を被っていた旧式の戦闘機や戦車を引っ張り出して使っているんだぞ。」

ISが軍事転用され防衛の要となった後、軍事予算の多くはISの開発費に回され、既存の兵器である戦闘機や戦車の新型機開発計画は凍結、または縮小を余儀なくされた。その為、現在欧州戦線では10年から20年前の旧世代の戦車や戦闘機を使っている。

更に補修部品の生産ラインも縮小してしまった為、補修部品がまったくと言っていいほど足りない。今や前線では足りない部分をどうしようかと整備兵が日々頭を悩ませているというのが現状である。

「だけどさすが醇子だね。」

「ああ、よく輸送機がここのルート通るとわかったな」

「ええ、まさか本当にこのルートを通るなんて思わなかったわ。」

元々、今回の任務は彼女たちの部隊が行うはずだった。しかし、任務に入る直前、他の部隊が行うとされ中止を言い渡されたのだった。

何か嫌な予感がした竹井は自身の部下であり、親友でもある坂本美緒飛曹長、西沢義子飛曹長と共に哨戒任務の名目で普段は飛行しない空域に向かった。そして輸送機は竹井が予想した通りの航路を取っていた。

「なににせよ、輸送機が無事でよかったわ。」

「はっはっは！そうだな！」

「じゃあ、さっさと帰ろうよ。私お腹がすいた〜」

「駄目よ、少なくとも安全圏まではついていないと。輸送機をこのままにしては置けないわ」

今、竹井たちが飛んでいる空域は人類側の勢力圏ではあるがしばしばネウロとの交戦が行われる空域に近いため、安心はできる空域ではない。

「うえ〜、めんどいな、もう。」

げんなりする義子

「そういわないの。……………さてと、二人とも弾薬の方はまだ残ってる？」

「ああ」

「問題なし」

「よろしい、……輸送機部隊、これより我々も護衛へつきます。よろしいですか？」

『ああ、頼む。』

「山田さん、よろしいですね?」

IS部隊の方にも確認を取る

『は、はい!お願いしま………!! 竹井少尉!』

「どうしました!?」

突如、インカムの向こうから真耶の悲鳴が聞こえてきた。

『よ、4時方向に大きな機影!………お、大きい』

「なんですって!?」

竹井はその方向に目を向ける

そこには

巨大な黒き影が竹井たちをあざ笑うかのように悠然とこちらに向かって飛行していた。

Ep-04 魔女とIS

Apart

(後書き)

リバウの三羽鳥、登場!!

Bpartへ続きます

「竹井少尉、新しい敵が！」

「こちらでも見えています。・・・山田先生。そちらで戦えるのはどれくらいいますか？」

「私を含めて4人です」

「そうですか・・・」

竹井は顎に手を当て思案する。

真耶はああ言っているが実際の所は数に入れていいかどうかはかなり怪しい。

IS学園の生徒たちは客観てきに見ても、もう戦うのは限界だろう

しかし、あの大型を相手にするにはウィッチ三人ではまず無理だ。

大型単体であれば時間がかかるが何とか倒せるだろう。

しかし大型の周りには小型機が数機、護衛についている。

しかも、今回は避難民を乗せた輸送機もいる。

まだ交戦距離には入っていないものの、足の遅い輸送機をつれて逃げるといふ選択肢もとれない

「……山田さんたちに輸送機を守ってもらおうか？」

いや今の彼女たちでは心もとない。

竹井が思案していると

「山田先生！！ た、大変です！」

突然生徒の一人が声を荒げる

「ど、どうしました！！！」

「8時方向に機影を確認しました！！その数……10！！！」

「ま、まさか……敵の増援！？」

その報告を聞いた真耶の顔がみるみる青ざめていく

「一直線にこちらに向かって来ます！」

「全機全兵装使用自由！！オールウェポンズフリー 我々で迎撃します！！！」

半ば悲鳴のように指示を出す真耶。

「待ちなさい！！！」

迎撃体勢に入るIS学園を制す竹井

「美緒、？ 視える？？」

「ああ、問題ない」

竹井の問いに簡潔に答える坂本。

そう言って、右目の眼帯を外した。

眼帯に隠されていた右目の魔眼が赤く光る。

「日月旗を抱く白い龍のマーク……優刀だ」

「ということは義勇統合戦闘飛行隊ね」

「それって、あの義勇統合戦闘飛行隊ですか!？」

その名を聞いて驚く真耶。

そこへ……

「竹井、済まない遅くなった」

編隊を離れ一人の少年が竹井たちの所まで飛んできた。

「お久しぶりです、緋村大尉。」

「はっはっは！久しぶりだな、優刀」

「美緒も元気そうだな」

「やつほくホムラ大尉」

「・・・西沢、ホムラじゃない、緋村だ」

おおよそ軍隊のあいさつとは思えぬフランクさであいさつを交わす
4人。

そんな中、IS学園の生徒たちの方から小さなつぶやきが聞こえて
きた

「え・・・男？」

「なんで男がいるのよ」

「男のくせに」

「本当に増援なの？」

そのつぶやきを聞いた坂本は生徒達を睨み付ける

何かを言おうと振り向こうとするが・・・

肩を掴まれることで止められた。

「優刀・・・」

「いちいち相手にするな、毎度のことだ。」

そう言ってため息をつく優刀。

「しかし……」

「いいさ、それが彼女達の？常識？なんだろう？」

「……わかった」

「……山田先生、生徒たちを連れて向こうへ行ってもらえますか」

「え、でも……」

「我々であの大型をどうするか話し合いますので周辺にこれ以上敵の増援がないか見張っていてください。」

「わ、分かりました……」

何かを言おうとする真耶だったが、自身を見る竹井の冷たい目に何も言えず、従うしかなかった。

「・・・すみません、緋村大尉。いやな思いをさせてしまいました」

「いいさ、それよりも今はあの大型だ。」

そう言っつて大型のいる方向に視線を向ける優刀

「ああ、でどうする？我々全員で当たるか？」

「いや、全員で当たるには後ろが心配だ。ここはうちの隊だけで当たる。竹井たちは最終防衛ラインについてくれ。撃ち漏らすと、後ろの警戒を頼む。」

「了解です」

「やれやれ、味方を警戒しなくてはならんとはな」

「最悪、あいつらがパニックになったら撃ち落としたって構わない。連中には絶対防御があるからな、たぶん死にはしないだろ。」

「本気か？」

「ああ、撃ち落としてもここは人類の勢力圏内だ。陸戦型にやられることはない。上層部もコアが無事なら文句は言わないだろうし。なにより一番怖いのは奴らがトチ狂って輸送機を危険にさらすことだ。指揮官のあの様子じゃとてもじゃないけど何か起きたときに部下を抑えられんだろう」

「そうですね」

「奴らは一応学生だぞ？いいの？」

「ISなんて代物を使っている時点で学生だからなんて言い分通用しない。ISが国の防衛力であることを知っていて自らが使うことを選んだんだ。その選択をした時点で人を護る側の人間であって、護られる側の人間じゃない。それが嫌ならISそんなんもんを使うべきじゃない」

「うへへ、いくら死にはしないからって人に銃を向けるのは嫌だな」

「誰だつて嫌に決まっている。けど俺たちは軍人だ。民間人を護るのが仕事だ。相手がなんであれ、民間人を危険にさらすのであれば倒す。それだけだ。」

「そうだな……我々も覚悟をしなければいけないか」

「すまないな……ここで起きたことのすべての責任は俺がとる。」

「いいさ、気にするな。あんな連中のために誰がお前に責任を取らせるか」

「美緒の言うとおりです。大尉に責任なんて取らせません、後ろは私たちに任せてください。」

「そういうことだよ氷室大尉」

「ありがとう、三人とも……あと西沢、俺は氷室じゃない、緋村だ」

「わははははっ」

「じゃあ、ここは頼んだ。竹井」

「御武運を!!!」

互いに敬礼を交わし、優刀は先行していた編隊に戻っていった。

「下原、敵の正確な数は？」

俺は編隊に戻ると下原から敵の詳細を報告してもらおう

「はい、高度9000、距離11000に小型機が15機、先行してこちらに向かってきています。その後方に大型が一機接近してきています」

「そうか・・・」

下原の報告を聞き俺は作戦を考える。

「よし、部隊を二つに分ける。まず、俺とジェンタイル隊で敵小型編隊に突入、牽制。大型への道を作る。一呼吸おいて加藤は残りの隊員を率いて大型の相手を頼む。」

「了解」「」

「.....」

隊員から返答が返ってくるが大将 ジェンタイル は返答を返さず一人、ある一点をじっと睨んでいる

「大将、どうした？」

「.....いや、なんでもない。すまなかった。了解だ」

俺の言葉に返答を返すも、ジェンタイルはまだ心ここに非ずといった風だ。

「なんでもないことあるか。そんないかにも悩んでいますって顔してる奴と一緒に敵陣の中に入ったでいけるか。」

「……済まない」

「で……どうした」

「……胸糞悪くしてしょうがないんだ。」

一拍おき、ジエンタイルは口を開く。

「何が？」

「あいつらだ」

そう言っている方向に視線を向ける

「さっきのあいつらの物言いが気に食わなくてな」

「……ああ、そういうことか」

先ほどのIS学園の生徒の俺に向かったの陰口をどうやら偶然聞い

てしまったらしい。

「・・・あいつら、ボスに向かつて？男のくせに？なんてふざけたこと言っただぞ。ISを使えるからっていい気になって、普段はえぱり腐っているくせにいざ戦闘になっただら何の役にも立ちはない、そんな奴らがずっと前線で戦い続けたボスに？男のくせに？だと？一体あいつらは何様のつもりなんだ」

普段の彼女の姿からは想像できないほどの怒りを表すジェンタイル。隣を飛んでいたフェデリカがかなり驚いた顔をしている

それはそうだ。彼女がこんなに怒っているところを隊員の誰も今まで見たことない

「ボスたち、男の人達だつて皆、今もこの戦場で必死に戦っているんだ。家族を、国を、護ろうと、必死で戦っているんだ。そこに男も女も関係ない。私たちと共に戦っている？戦友？だ。その？戦友？をあいつらは貶したんだぞ？そんなの許せるか！」

「大将・・・」

「世界最強の兵器であるISを使えるのは女しかない。だから女は偉い？だから男は私たちに跪け？はっ、恐れ入るよ。だったら今すぐこの世界を救ってみる、世界が救えないなら多くの命を救ってみる。それすらも出来ないで、敵を前にびくびく震えてビビッていた奴が前線で命を懸けて戦ってる仲間に向かつてエラそうな口叩くな！！」

「大将・・・もういいよ」

「ボス、いいわけないだろ。あいつらはコケにしたんだぞ！！私たちの仲間を！！」

「大将、いいんだ。？俺たち？は大将達がそう思っていてくれるだけで・・・それだけで十分だ」

そう、？俺達？は彼女達がそう思ってくれているだけで十分だ。

彼女の言いたいことも痛いほどよくわかる。

ISが登場してから世界は変わった。世界最強の兵器、ISはなぜか女性にしか反応しなかった。その為、女と男の社会的パワーバランスは崩れ、この世界は女尊男卑の世の中になり、男は女よりも弱い生き物と言われるようになった。

ISによる女尊男卑の世界になったことで被害を一番受けたのは間違いなく軍に籍を置く者たちだろう。

特に空軍、戦闘機パイロットたちはその一番の被害者といえる。

役割の大部分はISに取って代わられ、その規模の縮小を余儀なくされた。

それでも今も大部分の軍人は男である

もちろん男にはISを扱う事は出来ないし、俺のように魔法力を持

つ男子は本当に稀にしかない。

でも俺は今の欧州がこうやって何とか持ちこたえているのは特別な力も持っていない彼らのおかげだと思っている

きつと戦っているのがウィッチャやISだけであつたらとつくに世界はネウロイの手に落ちていただろう。

皆が力を合わせているから今もこうして戦ってられる。

そんな共に戦っている俺たちの仲間を、IS学園の生徒は貶したのだ

俺だつてそんなの許せるはずがない……………だが。

「しょうがないさ……………彼女たちはまだ本当の？戦場？を知らないんだ」

そう、彼女たちは知らない

戦場というものがいったいどれだけ過酷で悲惨なのかを……………

絶えず響く銃声

人々の泣き叫ぶ声

人の焼ける匂い

町が燃えていく様

真っ赤に燃える空

そこに浮かぶ黒き影・・・・・・・・

それらの前では男も女も関係ない

皆、等しく命を奪われる

それが戦場・・・・・・・・

そんな光景を彼女たちは知らない。

だが、俺は知らない方がいいと思っっている

そんな経験はもう二度と起きない方がいいに決まっっている。

「俺は彼女たちがそれを知らないことは仕方がないと思っっている。」

「だから、俺たちは彼女たちの言うことなんて気にしない、ただ俺たち軍人はやることをやるだけだ。・・・けど、もしそれを知ってしまっても尚、同じことを言うようであつたら・・・は許さない」

「ボス・・・」

「だから・・・大将が、少なくともウィッチの皆が俺達、男のことを共に戦う？戦友？と思ってくれているのなら、それだけで十分だ。」

そう言っつて大将に向かって笑いかける。

「ふ、・・・当たり前だ。ボスは私たちの隊長だ。誰もが認める私たちの最高の隊長だよ」

そういつてふつと笑みを見せるジェンタイル。

「やっぱり大将はそうじゃないと。そうやって笑っっている方がしか

め面よりずっと似合う。やっぱり美人は笑っていないとな」

その言葉にきよとんとする大将。

周りに微妙な空気が流れる

あれ？

もしかしてまた何か俺やつちゃったか？

100

「ぷッ、ふふふふふ、あはははっ！！ さすが優刀！ 言うことがちがうな！このジゴロめ！」

「ちよ、痛っ！何すんだよラル！」

いつの間にか真横に来ていたラルが人の肩をバシッと強くたたいて軽快に笑う。

「誰がジゴロだ！誰が！」

「まったく自覚がないのか？ だったら余計達悪いな天然ジゴロ！」

「天然ジゴロ!？」

「まったくもう……これだから扶桑の人間は」

ロスマンが呆れたように頭を振る

「大将が羨ましいわ。私にも誰か言ってくれないかしら」

頬に手をやり、はあ、とわざとらしいため息をつくフェデリカ

その肩をちよんちよんとつつく影、

「あら何、伯爵？」

「フェデリカ Quanto sei bello! Non t
i faccio dormire per tutta l'an
otte………《君はなんて素敵なんだ！ 今夜は
寝かさないよ………》

「おそらく、クルピンスキーは口説き文句であろうセリフをロマーニ
ヤ語でフェデリカに囁く。

「あら伯爵ロマーニヤ語上手ね」

フェデリカはそれを軽くいなす

「残念、行けると思っただけどね」

そういうクルピンスキーの顔は大して残念そうではなかった。

「伯爵には悪いけど、私ノーマルなのよ。というわけで……
優刀！今の伯爵の言葉を言ってくれないかしら!？」

「フェデリカ、何言ってるの!？」

「ねえロスマン先生、伯爵はなんて言ったの？」

ローミーヤ語が解らなかったハルトマンはロスマンにその意味を聞く

「フラウはまだわからなくていいのよ」

ロスマンは笑顔でそう答えるが額に青筋が浮かんでいる。

あ、すげー怒ってるな。

「はいはい、もうその辺にきなさい。敵とあと少しで接敵するわよ」
ちょうどいいタイミングで武子が締めてくれた。

「了解だ」

そう言って話は終わりとはかりに前を向く。

まったく、クルピンスキーとドツリオに感謝しなくちゃな。

「よし皆、準備はいいな!! これより戦闘を開始する!! 我々と出会ったことを奴らに後悔させてやれ!!」

「了解!!」

その言葉を聞くよりも早く俺とマルセイユ、ジエンタイル、ドツリ
才の四人は敵群に向けて最大戦闘速度で呐喊する。

突出した俺たちを先頭の小型ネウロイは当然狙い撃つがその攻撃を
体を少しひねることで紙一重で躲す。そのまま敵に向かって両手に
持つMG34の銃弾を打ち込む。

まず一機

その両隣にいた敵を左はジエンタイルが、右をマルセイユが撃ち落
とす

そのまま敵編隊を真っ二つ割る様に突撃、抜けたところで左右にブ
レイク。二つに分かれた敵編隊の背後をそれぞれ強襲する。

「今よ!」

武子達が絶妙なタイミングでその隙間を次々と駆け抜けていく

そしてその勢いを殺さずに大型のネウロイに向かっていった

これで大型は大丈夫だ。

しかし敵もそう簡単に武子たちを行かせようとしない。

敵の一機が急旋回し、武子たちの後を追おうとする

「そうはさせない!!」

追おうとする敵を撃ち抜く

今度は敵の一機がこちらに向けて銃弾を放つ

その攻撃を障壁で防ぎ、編隊の周りを大きく迂回するように旋回しながら攻撃を放った敵を撃ち落とす。

そのまま編隊の側面に向かって突撃、向かってくる一機を銃で牽制、その横を通り抜ける

そこへ・・・

「マルセイユっ!!」

「はあっ!!」

マルセイユが上空から攻撃を仕掛ける。

そのままなすすべもなく撃ち落とされる敵

そのまま低空へと抜けていくマルセイユ。

敵の一機がマルセイユを脅威と感じたのか、そのあとを追いかける。降下速度も加わって敵はどんどんマルセイユに勢いよく近づく。

ついに射程にとらえようとしたとき、

「甘い!!!」

マルセイユはロールしながら機首を上げ、弧を描く螺旋を描がきながら飛行する特異な機動を取る。

マルセイユがその機動を取ったことにより、勢いがつき過ぎていた敵はそのままマルセイユを追い抜いてしまった。

「もらったっ!!!」

敵の背後を取ったマルセイユはその隙を逃さず敵に機銃を叩き込む

「これで三機目!」

残りは小型は9機。

、右の編隊に向けて攻撃を仕掛けるジエンマイルとドツリオ。

二人は敵編隊に反撃の隙を与えまいと勢いよく呐喊する。

ジエンマイルは自身の前方にいる敵の攻撃を気にしないといった風にそのまま敵に突っ込み続ける。

そのまま至近距離まで近づき……

「くらえ！」

右手に持つショットガン、レミントンM870を敵の機首ギリギリのところまで発砲。

敵は粉々に碎け散る

「ふむ、威力は問題なし」

銃を一回転させて排莖、次弾装填。

そのまま、次の自分に向かってくる敵に撃ち込む。

次の敵も粉々に砕け散る。

「ち、連射性と射程、速度が問題か・・・やはり航空機動戦にはあまり向かないな」

そういうとレミントンM870を肩にかけ、背負っていたM249を左手に、ホルスターからデザートイーグルを抜き右手に持つ

次々と敵機がジェンタイルに向かって攻撃を仕掛ける

「今の私のは最高に機嫌が悪いんだ、落とされたくないやつは近づくな・・・」

「大将怖すぎるわよ。・・・まあ気持ちは分からなくないけどね」

ジェンタイルの斜め後方についていたドゥリオは自身に向かってくる敵をM151で撃墜しながらつぶやく

「さてと……彼女たちに教えてあげようじゃない。自分達が思っているほどあなたたちはすぐくないって事を」

ドツリオは一体の敵に目をつけると一気に加速し突撃する。

敵は撃ち落とさんと機銃を放つがドツリオはなんてことないようにその攻撃を体の重心を移動させることで攻撃をかわす。

そのままの勢いで狙いを定め、銃弾を叩き込む。

「まずは一機目！」

上昇、そして次の標的に狙いを定めて急降下、敵にぶつかりそうになるほど近づくまで銃弾を叩き込む。

「これで二機、次！」

次の標的に向かおうとするが、

「・・・上!?!」

上空から敵機が一機、ドツリオに強襲する

その攻撃をシールドで防ぐ

「いい攻撃ね・・・けど!」

ドツリオは手に意識を集中させる。次の瞬間、彼女の手には光が集まり、その手に剣の形を成していく。

109

「それじゃ私は落とせないわよ!!」

その手に現れた剣で迫るネウロイを両断する。

「あと、一機!」

最後の一機の方へ向いた瞬間、

「残念、終わりだ」

最後のネウロイはジェンタイルの手によって葬られた。

「あら、とられちゃったわね。 どう？ すつきりした？」

「ああ、気分爽快だ。」

そう言って口の端をわずかに吊り上げるジェンタイル。

「そう」

そう言うてにこやかに笑いかけるドッリオ。

「さて・・・あっちも終わった様だな」

ジエンマイルが視線を向ける。

その視線の先いた優刀達は。たった今最後の小型機を撃ち落とし、武子たちの所に向かおうとしていた。

「さて・・・私たちも行きましょうか」

「今更私たちが行っても間に合わない気がするけどな」

「ラル隊はそのまま攻撃を続行、コアをあぶりだして！ ロスマン隊は砲座に攻撃を集中、ラル隊を援護！ 定子ちゃん、私たちは敵右翼を叩くわよ！」

「はい！」

敵大型ネウロイに対して勢いよく降下する武子と下原。

二人が狙うのは、敵ネウロイの両翼、その付け根の部分

付け根に向かって二人は急降下し機銃を放ち翼を根元から吹き飛ばす。

「このまま左翼も……!!」

そのままネウロイの上に上昇。再度左翼に向かって降下する。

「はあっ!!」

続いて左翼を破壊

しかしネウロイはすぐ再生し、元の姿を取り戻す

ネウロイは再生が完了すると武子に向かってビームを放つ

112

「やはりコアを破壊しないと駄目ね」

「武子!! コアを発見した! 胴体のちょうど真ん中だ!!……
くそ、もう再生しているのか!」

ラルからコア発見の報を聞き、武子はすぐに指示を出す。

「了解、エディータ! 胴体上部、前方左側の銃座をお願い!」

「了解！」

「ラルは右側の銃座を！」

武子の指示にを聞いたエディータとラルは次々と銃座を破壊していく。

「これで対空砲は破壊した。再生するまでコア周辺は丸裸……やるなら今ね ドラツへ02より各機……これより敵コアを破壊する。援護されたし！」

「了解！！！」

武子は下原をつれて急降下を開始する。

降下中も加速し、大型との距離を縮める

目の前には視界を覆うほどの巨大なネウロイ。

その大きさに圧倒されそうになるが、ただひたすらに距離を詰める

「……今！」

引き金を絞る。

機銃から放たれた銃弾はネウロイの装甲を深く抉り、コアを露出させた。

「定子ちゃん！」

「はい！」

後方を飛ぶ下原の銃撃

下原の放った銃弾は吸い込まれるようにコアへ

次の瞬間、

バーーンッ！！

ガラスが割れるような音があたりに響き、赤いネウロイのコアは碎け散る

コアが破壊されたことにより、ネウロイはその巨体を光の破片へと変えていった。

「山田先生！！敵大型ネウロイの破壊を確認しました！」

生徒の一人からそう報告される。

報告してきた生徒の声は喜びに満ち溢れていて、今にも泣きだしそうである。

「やったー！！」

「わ、私たち生きてる……」

周りにいる生徒たちも歓喜に沸いていた。

そんな中、ただ一人だけ表情を暗くしている人物が一人

「更識さん、どうかしました？」

「……いえ、なんでもありません。みんな無事でよかったです。」

「そうですね、落とされた子も無事のようにですし、本当に良かったです」
「ええ、そうですね」

真耶の言葉に笑顔で答える楯無ではあったがその胸のうちは暗澹あんたんとした思いだった

(……結局、今回の私たちの戦果は旧型の小型機が6機。しかも彼女たちが来なければ輸送機も守れずあのまま私たちはやられていた。敵もすべて撃墜できず、輸送機も満足に護れなかった……世界最強の兵器が聞いてあきれるわね)

今回の戦果は旧型の小型機が6機。しかもこちらの損害はISが1機である。

幸いコアは無事だったものの、IS一機に見あう戦果じゃなかった。

(いえ、私たちが未熟だった……ということ。この結果に？上

？はなんて言うかしら？ 怒ってまたとんでもない無茶なことをや
るぞとするわね）

己の未熟さを痛感する楯無

そしてある一つの決意をする

その瞳はある一点を見つめる

一点を見据える彼女の瞳には強い決意の光が灯っていた

Ep-04 魔女とIS B part (後書き)

Ep-04 終了です。

ごめんなさい、めっちゃ長くなりました。

なんか、IS学園の生徒たちが嫌な子達に見えちゃいましたね。

でも、あの反応がISでは一般的なんじゃないですかね。

個人的には大将の言いたいことが伝わっていねばと、そう思います。

EP・05 One・Man Air Force

VS

MY

どうも、シユウ禅です

EP・05です。

そねどはぶじゆん……

「・・・私には行かない」

吹き荒れる嵐の中、静かに告げる

「先生！！先生がいないと私・・・！！」

一人の少女が叫ぶ

「坂本…… 君のその誰かを… 何かを守りたい… 君のその胸の誓いを果たせるか否かは正直に言っただけには判らない…」

彼女が何をしようとしているのか判っているはずなのに……………

「……………」

俺はそれを止めることができない……

「優刀……」

向けられたその眼は優しく語る

だから……

「少佐……心配しないでください、自分たちが必ず作戦を成功させます」

そんな月並みな言葉しか言えなかった

そして……

「うおおおっ！……！」

目の前にはいるそこにはずのない人物

「やめろおおおっ！……！」

青く光る光の剣この身に迫る

光の剣にこもる殺意……

死を覚悟した瞬間、目の前の景色がガラス細工のように崩れ去る

「はあッ！はあッ！はあッ！」

ベットから跳ねるよつに起き上がり、目を覚ました。

周囲を見渡す……

古ぼけたところどころにシミのある壁。そこに無機質で質素な時計がかけられており、時刻は午前7:00ちよつと前を指している。

夜間哨戒に出ているナイトウィッチを出迎える準備をしているのだろつ、外からは朝早くから整備兵たちの活気ある声が飛び交っている

ようつやく現実であることを確認し、息を整えるように長く息を吐く

「はあ、・・・・・・・・くそ、またあの夢か」

今まで何度も見てきた夢だ・・・

いや、夢ではない。

記憶といった方が正確である・・・・・・・・

何回も、何十回も

忘れないと、忘れさせまいと、何度も夢としてあの光景がよみがえ

る。

繰り返される悪夢・・・・・・・・

いい加減見飽きている夢だから、立ち直るのも早く済む。

つい一週間前にも見た夢だ。

この夢を見る原因というのは大体決まっている。

立ち上がり、酷く汗に濡れたタンクトップを脱ぎ捨てデスクに置いてある扶桑国空軍の男性士官用制服に手早く袖を通し、着替える。

コンコンッ

「少佐、起きてらっしゃいますか？ 朝食ができましたので呼びに来ました」

そこへ今日の朝食当番である下原が俺を呼びにきた。

「ああ、分かった。すぐ行く」

いつまでも夢のことを気にしていてもしょうがない。

今日も今日とて片付けなければいけない書類が山のよつにあるのだ。

「よし、行くか」

デスクの上の昨夜見ていた資料を掴み、自室を出る。

……今日の朝食は何だろうか？

上空を飛ぶ二つの黒い点を見つめる俺、ラル、エディータの三人

我々義勇統合戦闘飛行隊の面々は滑走路でただいま模擬航空格闘戦の真っ最中。

であるはずなのだが……

「うん……」

「これは」

「ねえ……」

三人の口からは呆れているとも、驚いているともとれるため息を吐く

そんな彼らの視線の先では

「もらった!」

「く・・・まだまだ!」

義勇統合戦闘航空隊の一番槍、ワン・マン・エアフォースことドミニカ・S・ジエンタイルと・・・

ISオラーシャ連邦代表、更識楯無が苛烈な空中戦を繰り広げていた

「はああああっ!」

楯無は手に持つ巨大なランス、『蒼流旋』に装備されたガトリングガンでジエンタイルに向かって放つ。

ジエンタイルはそれを微妙な緩急をつけて左右に移動することで紙一重で躲しながら楯無に突撃。

近距離でM249のフルオート射撃を放つ。

「はっ！」

それをギリギリで躲し、ジエンタイルにランスの突きを繰り出す。

それを体を捻ることで躲すジエンタイル。

捻った反動を利用しジエンタイルは側面に移動、突きを放ったことでがら空きになった楯無のボディに右手に持つショットガンを撃ち込み、抜ける。

「く……！」

腹部に放たれた一撃で崩れた体勢を立て直し、ジェンタイルの後を追いかける

ジェンタイルの後を追う間も、狙いをつけてガトリングガンを放つがそれを後ろに目がついているかのごとく次々と躲すジェンタイル。

「……………」

ジェンタイルが自身の直線ラインに入った瞬間、楯無は一気に加速、ランスでジェンタイルを貫かんと呐喊する。

「ふっ!!」

しかし、ジェンタイルはそれをバレルロールで躲し、逆に楯無の背

後を取る。

「もらった……!!」

M249とレミントンM870を楯無に向ける。

「甘いわ!!」

つきだしたランスをそのまま真一文字に薙ぎ払うように振るう。

「なに!?!」

ジエンタイルはその一撃をシールドで防ぐも、その巨大なランスの勢いを殺すことは出来ずに押し負け、吹き飛ばされる

「ちいっ!?!」

吹き飛ばされた勢いを利用して上昇するジェンタイル

「逃がさない!?!」

その後を追う楯無。

.....

「へえ、やるじゃないか。彼女」

いつもは軽快な軽口を言っている伯爵が驚嘆の声を漏らす。

「はえ〜すごいね〜」

「ふ、ふん、隊長の方が強いぞ！」

「あ、あはははは……」

上空を見据えていた年少組のハルトマンただ感心し、マルセイユはふてくされた顔をしている。下原に至っては乾いた笑いしか出てこない

そうしている間にも二人の戦いは続く……

そもそもなぜ、IS学園派遣部隊に所属している彼女が義勇統合戦闘飛行隊の隊員であるジエンマイルと模擬戦をしているのか？

話は数日前に遡る……

数日前

「緋村大尉、ボニン少佐が指令室までお越しください、とのことですよ」

昼前、隊のオフィスで報告書と格闘していた俺に連絡士官がそう告げた。

共に書類仕事をこなしていた武子を連れ、何事かと指令室に駆けつけるとそこには温和そうな紳士然とした基地司令アドルフ・ローラント大佐にJG52飛行隊司令、フーベルタ・フォン・ボニン少佐とカールスラントではあまり見かけない東洋人の男性がいた。

「祖国のお客人だ、緋村」

そういつてボニン少佐が東洋人を紹介する。

男性は優刀にニコリと笑いかけた。

「やつほー緋村、久しぶりだね。」

「お、おのだ織田大臣官房、なんでこんなところに!？」

目の前にいる人物に驚く

彼の名前はおのだこうげん織田高顯

扶桑国防省に勤務する官僚であり、扶桑国全軍の任免、給与、懲戒、服務その他の人事その他もろもろを統括する部署の長だ。

織田大臣官房とはある事件で知り合い、扶桑にいたときは一時期彼直属の部下のような形で個人的に任務を渡されることがあった。

近所の溝浚いから、孫の送り迎えに首相夫人の警護まで、個人の趣味から重要任務までやらされた。

性格を一言でいえば食えない狸親父である。

「ずいぶん活躍しているようだね、扶桑国民として僕も誇らしいよ。先日、撃墜数100機を突破したらしいね。おめでとう、現時点で君は扶桑派遣組の中でトップ・エースだ」

「はあ」

「さて、君の活躍に僕たちも答えてあげなきゃと思ってね。今回、君に功四級金鷄勲章を叙勲することに決まったよ。名誉だよ、緋村」

「はあ」

なんで今更……口には出さないものの、内心疑問が残る。

「追って正式に通達があるだろう。授賞式はパリで行う予定だ。各国の大使を呼んだ派手なパーティーだって、楽しみにしていよいよ」

「ありがとうございます」

とりあえず一礼。

まさか本当にこれだけのためにこの人は最前線くんだりまで来たのか？

「さらに君は本日付で少佐に昇進、よかったね」

「はい？」

今、この人なんて言った？

俺が少佐だって？

「あれ？聞こえなかったかしら？ 少佐だよ、緋村」

「い、いえ……あまりにも突然の事でしたので」

「まあ気持ちはわかるよ、何せ前例がない。君の年で佐官なんて誰もいないからね」

「は、はあ」

「まあとにかく君は今日から少佐だこれからもがんばってくれたまえ」

「ありがとうございます」

釈然としないまま敬礼。

「おっと、最後にもう一つ」

「……まだ何か」

まだあるのか……

「なんでいやそうな顔するのかしら？ 君って今反抗期？」

「違います、こつもつまい話ばかりですから何か裏があるんでしよう？」

「さすが、緋村鋭いね」

「やっぱり……」

何かあると思ったよ。この人がこんなところにまで来ているんだ、何も無いわけが無い

「今回君の昇進を機に一人君の隊に補充人員をまわすことになった」

「え？……補充人員ですか？」

「いや、なに、こちらとしても君の頑張りには最大限こたえてあげようと思ってるね」

「……で、その補充人員に問題があると」

「うーん、当たらずも遠からずってどこかしら？」

どういふことだ？

「彼女自身はとても優秀だよ、それは間違いない。……ただ」

「ただ？」

「彼女の背後がいろいろとややこしくてね、正直、現場そっちにも迷惑がかかるかもしれないね」

「うえ……そうなんですか？」

「そ、文武両道、容姿端麗、座れば牡丹、歩く姿は何とやら、きれいなバラには棘があるってね」

「なんですかそれ……」

「とにかく明後日の午後には着くんじゃないかしら？ ま、詳しい話は彼女から聞いてちょうだいな」

- - - - -

というわけであの得体のしれない狸親父から彼女、更識楯無を押し付けられたというわけだ。

更識楯無

IS学園一年生でオラーシャ連邦代表の扶桑出身で自由国籍権を持つ16歳

今回、どういうわけかうちに配属されることとなった

なぜ彼女が配属されたのか

「ISとウィッチの連携運用法の確立と運用データの収集」というのが目的らしい。

何はともあれうちに配属されたからには戦力として数える。

物は試しに模擬戦をやらしてみたのだが……

「すごいな」

ラルが素直に驚嘆の声を漏らす。

「ええ……切れのある機動、的確な状況判断、遠近の兵装選択、回避と防御のバランス。どれをとっても高いレベルでこなしています」

「代表は伊達じゃないって事か」

ふと、更識の方を見続けているとふと違和感を覚える

「あれ？……」

「どうかしたのか？ 優刀」

「あ、ああ……いや、なんでもない」

違和感の正体がなんなのか必死に頭を捻って考えるが、結局その違和感の正体がなんなのか解らなかつた

装甲している間にも二人の戦いは激しさを増す。

「見ろ、決まるぞ」

「はあ…!」

楯無はガトリングガンを放つ

「ちいつ…!」

それをジェンタイルはロールして躲しながら接近、楯無もジェンタイルに呼応するように呐喊していく。

そのさなか、楯無は蛇腹剣「ラストイー・ネイル」を展開、ジェン
タイルに向けて振るう

「ちいつ!!」

その攻撃をシールドで弾き返すジェンタイルだが、突撃の勢いはそ
がれてしまった。

「貰ったわ!!」

そこヘランスの突きがジェンタイルを襲う。

楯無は勝利を確信した

が、ジェンタイルは思いがけない行動に出る。

「まだだっ!!」

ジェンタイルは左手の甲の部分にシールドを展開、迫るランスの
一撃を裏拳の要領で弾き飛ばす。

「うそ!?!」

さすがに楯無もこの行動は予想しておらず、啞然とする

「もらった!!!」

その隙を逃すジェンタイルではない。

楯無の懐に入り込み、その拳を振りぬく

「ふっ!」

その一撃は楯無のISのシールドを破壊し、楯無自身に襲い掛かる。

「ああっ!?!」

連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打連打

反撃の隙を与えまいと次々に拳を楯無へ叩き込む。

「いれで」

拳にすべての力を込める

「終わりだ!!」

渾身の右ストレートを楯無に叩き込む

パライイイインッ

シールドが砕ける

ジエンタイルの右拳は楯無の腹部へと吸い込まれ……

「そこまで!!」

ジエンタイルの拳は楯無の腹部に当たる寸前で止まっていた

審判をしていた武子が模擬戦終了のホイッスルを鳴らす。

「勝者、大将」

武子の声が空に響いた

意外にも早く来てしまいました。

ウィッチ VS IS

ここ最近、ばつちり大將は活躍してます。

それに比べて武子、影薄いの何の……

好きなんですけどね、なかなか難しいです。

次は他の子を書きたいなと思います。

では次回。

EP・06 聞いた百より見た一つ（前書き）

どうも、シユウ禅です。

EP・06です。

では、またね

EP・06 聞いた百より見た一つ

「加藤中尉、ジエンタイル中尉、更識少尉、お疲れ様でした！」

模擬戦が終わり、下原が降りてきた三人にスポーツドリンクを渡していく

「ありがとう、定子ちゃん」

「助かる」

「ありがとう」

「それで？ どうだった大将？」

「ああ」

大将はいくらか考え込むそぶりを見せた後、その口を開く。

「問題ない、十分に実戦に出れる。」

「そうか」

その言葉を聞き安堵する

「他のみんなはどうだ？」

「問題なし」

「右に同じく」

「問題なしよ」

「いいよ」

「い〜んじゃない？」

「少佐がそういつなら・・・」

「はい、賛成です!」

「いいわ」

「というわけだ、改めてよろしく頼む」

そういつて楯無に俺は手を差し出す。

「ええ、よろしく、少佐」

そういつて楯無はその手を取り、握手を交わす。

「よし次は2対2の模擬空中戦を行う。ラル、クルピンスキー、ロスマン、ハルトマン。準備しろ!!」

「了解!!」

俺の号令のもと、四人は自分のストライカーユニットに向けて駆けて行った。

少ココト・・・

「隊長、少し聞いてもいいかしら？」

空中で繰り広げられる模擬戦闘を見ていると、いつの間に隣に来ていたのか更識が俺に話しかけてきた。

「なんだ？」

「単刀直入に聞いわ………私たちISをどう思う？」

「ずいぶん唐突でストレートだな」

「新参者ですから、早いうちに部隊の皆とは仲良くなっておきたいからね、私たちIS関係者をウィッチの子達がどう思っているか知っておきたいのよ」

「そうか」

「それに私、あなたに興味があるのよ」

そういって下から人の顔を覗き込む楯無。

「俺に？」

視線は今、空中で模擬戦しているラルたちに向けたまま答える

「そう」

そうやって元の位置に戻る更識

「扶桑国空軍緋村優刀少佐。世界でも数少ない男性のウィッチで扶桑海事変の頃からネウロイとの前線に立ち続けている扶桑の誇るトップエースの一人」

空に視線を戻し続ける更識

「欧州がネウロイの脅威に晒されると遣欧艦隊の航空部隊隊長に任命され欧州戦に参加。欧州に来てからの活躍は目覚ましく、オストマルク撤退戦の活躍から、《Weib Drache》と呼ばれるようになった」

一拍おき

「そんな誰よりも戦場を知っている君がIS私たち操縦者のことをどう思っているのか知りたいの」

まさかこんなにストレートに聞いてくるとは

「わかった、答えてやる」

「ありがとう」

そういつて微笑む楯無。

一呼吸おいて俺は口を開く

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「わかった、答えてやる」

彼がそう答えた時、私は少し体を強張らせる。

それはそうだろう

自分は今とんでもない事を聞こうとしているのだから

分かり切った事を聞いていると自分でも思う。

前線にいる軍人がIS関係者を快く思っていないのは分かり切っていることなのだ。

それはしょうがないと思っている。

私たちのような戦場を知らない者が、我が物顔で好き勝手やっているのだ

それを好意的に受け止める、というのが無理な話だ。

だが、私はあえて聞く

今日の前にいる、数多の戦場を駆け抜け、欧州の人々から畏敬の念を込めて？扶桑の白き龍？と呼ばれるこの少年に……

彼と初めて出会った、あの護衛任務を生涯忘れはしないだろう。

彼の戦いを見て私は身震いした

キレがあつて正確で華麗な航空戦技

的確な部隊指揮によつて、瞬く間にネウロイを殲滅したあの後ろ姿
は今でも瞳の奥に焼き付いている

「ありがとう」

私は緊張を悟られないように彼に微笑む。

彼が一呼吸おいて口を開く

「別に」

「へ？」

「別に何とも思っていない」

視線を逸らさず答える

「へ？」

予想外の言葉にあっけにとられる。

「そ、それってどういう意味かしら？」

「意味ってなんだ？」

「ほら、私が言うのもなんだけど、私たちってある意味、女尊男卑社会の象徴みたいなものじゃない？ そんな私たちのことをどう思っているのかな・・・て」

彼の言葉の真意を解りかね、何とか意味を聞こうとする

「ああ、別にどうとも思っていないぞ・・・いや、正確にはそ

の括りで判断する？意味？がないって思ってる、と言ったところか」

言ってることの意味が解らない

「え、ええつと……ごめんなさい、分かるように説明してくれる？」

結局、私は理解できず彼に説明を求める。

「そうだな……例えば、俺達扶桑人は世界の人からはどう思われているか知っているか？」

「ええつと……確か？扶桑人は口数が少なく無表情。自己主

張しないで、言われたことだけを淡々とこなす？ だつたかしら？」

「ああ、世界から見た扶桑人像はそうらしい、でも扶桑人全員がそうか？」

「ちがうわね……」

自分の幼馴染の姉妹をを思ひだし、否定する

確かに姉の方は扶桑人像のまんまであるが、妹の方はマイペースきまわりなく、扶桑人像からは遠くかけ離れている

「口数が多い奴もいるし、表情豊かな奴もいれば、自己主張が激しい奴もいる……全ての扶桑人が世界の人が持つ扶桑人の印象の人物ではないわけだ」

「確かに……」

「前線にいる兵の持つIS操縦者の印象と云えば？ いつもは威張っているくせに、いざというには役に立たない御嬢様？ と言った処だろっ」

「う……」

やはりそうかと少し落ち込む

分かっていたことだがそれでも少し胸が痛む

「だが、実際は全員がそうなのかって言われるとそうでもない。中にはちゃんとした連中もいる」
中

彼は言葉を続ける。

「要するにIS操縦者であるからと言って？更識？個人を嫌う理由にはならない。付き合つて、話してみなければその人がどういう人物なのかなんて分かりはしないしな」

「え……」

「所詮、ISを使えるかどうかなんて、個人の才能の一個に過ぎない。大事なのはISを使えるかどうかじゃない…… その人間が何を思い、どう行動するか？ だと俺は思っている」

「……」

彼の言葉に私は何も言えなくなっていた

す……

その一言しか思いつかなかった。

『所詮、ISを使えるかどうかなんて、個人の才能の一個に過ぎない。大事なのはISを使えるかどうかじゃない・・・ その人間が何を思い、どう行動するか？ だと俺は思っている』

彼の言うとおりだ

大事なのは力を持っていることじゃない。

何を考え、どう行動するかだ。

それによって人は決まる……

例えISを使えようが、行動した結果が評価されなければ、人は評価されない。

彼の横顔を見る

その表情からは彼が何を考えているのか読み取ることにはできない。

「ねえ、」

「なんだ」

「いいえ、ごめんなさい……なんでもないわ」

私は？あること？を彼に聞こうとしたが……やめた。

少なくとも私はまだ？それ？を聞けるほど、彼とは親密な仲ではない。

「そうか」

深くは追求してこない。

彼はなぜ戦っているのか、何のために、どうして？

聞いてみたいとも思った。

けねど、

一番聞いてみたいと思った事は……

？ブリュンヒルデ？が憎いか・・・

その彼の青く澄んだ眼は今も空の仲間たちを見つめ続けている

その青い瞳に、この世界はどう映っているのか……………

今の私には分からなかった

EP・06 聞いた百より見た一つ（後書き）

やっと、メインになりました

今まで主人公らしきこと何もしてません、優刀。

これから、ちゃんと主人公をさせたいと思います。

この分だとIS組、いつだせるんでしょうね

それと、感想を書いてくださった方々、貴重なご意見の数々ありがとうございます。

皆様から頂いたご意見を参考にこれからも頑張って書いていきたい
と思います。

皆様からご指摘いただいた一夏の処遇なのですが、まだ決まってい
ません。

出すなら性格は原作一夏のままどうにか出したいとは思っています
が。

いっそのこと……だすのやめようかな？

それを含めて検討中です。

感想やご要望などは随時受け付けておりますので、気軽にお願いします。

以上シユウ禅でした、ではまた次回！

EP・07 国家代表（前書き）

Ciao! というわけでどうも、シユウ禅です

今回は割と技術的な話になっています。

それではどうぞー！

「緋村少佐、少佐はお昼どうなされますか？」

大将对更識戦の後、何回か模擬戦を行い太陽が我々の頭上まで上がってきた頃に訓練は終了。

周りにいた整備中隊の整備兵がストライカーユニットを格納庫へかたづけ隊員が隊舎に戻っていく中、本日の食事当番である下原が訪ねた。

「そうだな・・・悪い下原、これから整備班長のところ行かなきゃいけないから、何か適当につまめる物を作って置いてもらえるか？」

「分かりました。じゃあサンドウィッチか何かでいいですか？」

「ああ、頼む」

「ごめんなさい定子ちゃん、私の分も作っといってくれる？」

す

るといつの間にか人の隣に来ていた、フェデリカが申し訳なさそうに下原に頼んだ

「え……中尉の分もですか？」

「ええ、これから私、格納庫にこもっちゃうからね」

「分かりました」

「ああ済まない下原、私も頼む」

「ラル中尉もですか？」

「ああ、私は自分の銃のメンテをしようと思ってな。」

「分かりました。作ってテーブルの上に置いておきますね」

「ああ、頼む」

下原はそついでと頭をペーリと下げ退舎へと向かっていった

「定子ちゃんいい子よねっ」

去っていく下原の背中を見ながらフェデリカは呟く

「ああ、料理洗濯掃除が出来て器量よし、まさに扶桑撫子の鏡だな」

ラルがうんうんと頷き同意する

下原定子、扶桑国空軍軍曹で義勇統合戦闘飛行隊に所属する新人三人のうちの一人。

元はリバウ航空隊所属のウィッチで竹井や坂本の下で経験を積んでいたが、義勇統合戦闘飛行隊発足時に？索敵能力の高い夜間戦闘もこなせる優秀なウィッチ？として引っこ抜いてきた。

戦闘技能はハルトマンやマルセイユに一步劣るもの何事もそつなくこなし、大人しい性格ではあるが他人との協調性も高い事から組む相手を選ばない。

敢闘精神旺盛なウィッチが多いこの部隊では彼女たちの背中を守る心強い優秀なウィッチである。

「ホント、将来いいお嫁さんになりそうだな」

そう言って二人に同意する

「・・・・・・・・へえ」

「・・・・・・・・ほお」

なぜだかわからないが二人は意地の悪い笑みを浮かべ、近所の主婦の井戸端会議よろしく、ひそひそと話し始める

「聞きました奥様？ 彼つてばまた無意識に言ってますわよ・・・・・・・・」

「

「まったくこれだから困るんだ扶桑のウィッチは・・・・・・・・」

・・・・天然ジゴロとか、女の敵とか聞こえるが、俺には聞
かない

「まあ、彼女の料理は後のお楽しみということでしたと行こう」

いつまでも滑走路のど真ん中に立っているわけにもいかないの
でひそひそ話している二人を促し格納庫へ向かった

「それにしても彼女すごいわね」

向かってる最中、フェデリカが何ともなしに呟く。

「彼女？……ああ、更識か」

「ええ……彼女、あの年でオラーシャ連邦の代表よ？しかも自由国籍権を取得してのオラーシャ代表……ただモノじゃないわね」

「そんなにすごいのか？ 彼女。」

いまいちその凄さにピンとこないラルが訪ねる。

「ええ・・・元々ISのテストパイロットって、そのISとの相性がいい人物を私たちの年代から選ぶの」

「そうなのか？ 普通テストパイロットと言えば経験豊富な高い技量を持つベテランがやるものだろ」

「ええその通りなんだけど・・・ISの場合それができないのよ。アラスカ条約のせいだ」

まったくばかばかしいわ、と呆れたようにため息をつくフェデリカ。

「アラスカ条約でISを保有する世界各国はISに関する情報の全面開示を義務付けられているの。例え開発中の機体であろうが、開発中止を言い渡されて廃棄される機体だろうが常にそのデータを開示しなくちゃいけないわけ」

「なるほど・・・」

「兵器開発において開発中の機体のデータを開示するなんてご法度他国に技術を盗まれるばかりか兵器そのものの優位性が失われるって訳か・・・」

「そういうこと」

「確かに・・・」

フェデリカの言葉に同意する。

いつの時代も情報というのは大事である。特に戦争においてはそれが顕著だ。いつどこどこに敵がせめて来るとか、敵の兵站の場所はどこにあるとかが分かっていれば対策の取りようがある。

たった一つの情報が多くの人を救うこともあれば、命を奪うこともあるのだ

その中でも新兵器開発においては情報の漏えいというのは命とりである。

新兵器開発において一番重要なことは敵の兵器より優れている兵器であることが絶対条件である

その絶対条件が情報漏えいによって対策を取られ優位性を失ってしまえば終わりだ。

実際、過去の戦争では敵側に味方側の兵器の情報が洩れ、対策を取られてしまい劣勢に立たされた例は多々ある

「そこで原則あらゆる国家から干渉を受けないIS学園でデータを取ることにしたのよ。あそこなら少なくとも3年間は誰も生徒に手出しできない。その生徒が得たデータも叱り、国家は生徒の同意がないものはそのデータに触れることができない。」

「なるほどな……」

「ま、要するに大勢の専用機持ちと呼ばれる代表候補生は高い技量を持っているからテストパイロットに選ばれたわけじゃなくて、少しIS適性が高かったから選ばれたわけよ」

「でも、更識は違うわけか……」

「ええ、代表候補生は国家または企業が選ぶけど、彼女の場合その所属を自由に選ぶ事が出来るの。」

「自らがその所属を決めることができるか……すごいな」

「ええ、よっぽど操縦者の技量が高くないと選ばれないわ」

そんなふうに話をしていると義勇統合戦闘飛行隊が使用している第三格納庫の前につく。

中に入ると左右にストライカーユニットが俺たちを出迎えるように並んでいた。

ストライカーユニット……

ウィッチ達の魔法力を魔導エンジンと呼ばれるもので増幅し、駆動する飛翔ユニット。

発表されたのはISと同時期であった為、その性能差から当初、航空戦力の主力となることは敵わなかったが、使えるのがウィッチのみという制約があるものの、男子でも女子でも魔法力があるものなら扱え、何より既存の兵器よりも安いコストで生産出来、ISには及ばないものの優れた機動性を発揮した為、開発が細々と続けられた。

その後コストパフォーマンスに優れた兵装として、ISの予備兵力の名目で少しずつ配備され始めた。

そしてネウロイとの戦争が始まるとISの兵器としての欠点が次々に露呈、その立場は一気に逆転し、現在ではネウロイとの航空戦の主役としてこの大空を駆けている

「土田曹長、ストライカーユニットの整備要望リスト持ってきまし

た

「わざわざすいません、緋村少佐。ご足労いただきありがとうございます」

中に入り、ストライカーユニットの整備をしていた土田曹長にリストを渡す。

「班長、奥借りるわね」

「ええ、構いませんよ」

フェデリカは曹長に許可を取るとユニットが整備されている場所のさらに奥の少し広まったスペースへと駆けていく。

そのスペースには大きな台座が二つあった。

そのうちの一つの前にフェデリカは立つと右腕を突き出し、目を閉じ右手のバングルに意識を集中する

「行くわよ、テンペスタ」

パアツ、とフェデリカの周りを光が包む。

その光が晴れると、そこには赤い装甲を纏ったフェデリカがいた。

「いつみてもすごい光景だな」

ラルは今の光景に感心したように言葉を漏らす。

それはそうだろう。

人が光に包まれたと思ったらそこに機械を纏った人間がいるのだ。
驚かないわけが無い

第三世代型IS

『デンベスタ・ロッシン
赤い嵐』

ロマーニヤ公国が開発している第三世代型ISでフェデリカの専用機。

既存のISよりも一回り小さく細身で、更識の専用機、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女と同様に他のISに比べて装甲が少ない。

全体的な印象としては航空機の印象で特に脚部と腕部装甲は鋭角的なフォルムで無駄のないすっきりとした形をしている。

脚部の側面には可変式の折りたたまれた翼がついており、ストライカーユニットの名残とも見れる。

ひときわ目を惹くのは両肩に浮かぶと非固定浮遊部位《アンロック・

ユニットとスカートアーマーだ。スカートアーマーは後方にストライカーユニットに酷似した二つのブースターが伸びて機体が高機動型なのがよくわかる。

アンロック・ユニット
非固定浮遊部位ブースターからは従来の航空機の翼のような翼が伸び、折れたたまれている。その姿はいつか空を駆ける日が来るのを待つ猛禽類もうちきこのようだった。

「すごいわね……これがドツリオ中尉のISS?」

ふと後ろから声がして振り向くといつの間にか来ていたのか更識が立っていた

「ええ、そうよ。第3世代型ISSテンペスタ・ロッシン『赤い嵐』よ。」

そういつてフェデリカは台座にテンペスタを預けると装着解除してひよいとISから飛び降りる

「もしかして機体は完成しているの？」

「ええ、？基本的な部分？はもう完成してるわ。けど特殊兵装の方がまだよ」

「そう、ちなみにその特殊兵装って？」

「教えないわ」

きつぱりと言いつ切るフェデリカ。

「そう、残念」

とはいうものの、その答えを予想していたのか更識はあまり残念そうな顔をせず、クスリと笑うだけだった。

「当たり前でしょう？ いくら同じ部隊の仲間とはいえ、他国の代表にそこまで？ 無条件？ で教えるわけにはいかないのよ」

さすがロマーニヤ公国の代表候補

相手には不必要な情報は与えないというわけか。

俺たちの部隊は様々な国の人間が一致団結して日夜戦い続けている。

けれど、決してお手手つないでみんなで仲良くしましょうという集団では決してない。

みな共通の目的を持って集まった者たちで、強いきずなで結ばれていると思っっているが、それでも必ず超えてはならない一線というものが互いにある。

「それに、あなたの機体も同じようなものだと思うけど？」

「私の機体も？」

そういつてフェデリカは更識の方へ目を向ける

「あの機体、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女も特殊兵装の方がまだ完全に出来てはいないんじゃないかしら？」

「その根拠は？」

「機体の装甲が少なすぎるのよ。いくらISに絶対防御があるから

と言って、装甲のないところに絶対防御でも防ぎきれない攻撃が直撃すれば致命傷になる。それなのに敢えて装甲を減らしているのなら、何か別の方法で機体を守るすべがあるはずよ」

更識はフェデリカの言葉を黙って聞いている

「最初は防御を無視して機動にリソースを割り振った大胆な設計なのかと思っただけど、そういう設計ならもっと極端に機動性が高い筈けどさっきの模擬戦では確かに高機動だったけど極端な速さではなかった。だとすれば、左右に浮遊するクリスタル状のユニットが自立して防御シールドを展開をするのかと思っただけどそれも違った。」

「ああ、そうかそうだったのか……違和感の正体はそれだ」

先ほどの模擬戦を見て引っ掛かっていた違和感の正体がわかった。

あのクリスタルだ。

あの時はただ更識の技量に目が云っていたが、確かにあのクリスタル上のものは特に何もせず浮かんでいた。

「特殊兵装が出来ていないって考えればすべて納得いくのよ。あのクリスタルは何もしなかったんじゃない、何もできなかった。そして、あなたの機体の特殊兵装はたぶん、攻撃にも防御にも転用できる物なんじゃないかしら？」

そういつて言葉を締めるフェデリカ。

話を聞き終えた更識は……

「はあ、参ったわ……降参よ。まさかたった一度の戦闘でそこま

で見破られちゃうなんてショックだわ」

降参とばかりに両手を上げる更識しかし、その顔はあまり残念そうではなかった

「正解よ、ドツリオ中尉。まだ私の霧纏ミスデリアス・レイティの淑女は特殊兵装の方が出来ていないの。そして特殊兵装も攻撃にも防御にも使える機能つていうのもご推察の通り」

「そう、よかったわ当たってて」

にっこりとほほ笑むフェデリカ

「でもこれじゃフェアじゃないわ、あなたの機体の兵装も教えてくれないと」

「いいけど条件があるわ」

「条件？」

「そ、条件」

そういつてフェデリカはニヤリと口端を釣り上げる

「一人より二人、三人より四人……お互い、特殊兵装の開発に戸惑っているみたいだし、ここはロマーニヤ、オラーシャ仲良く共に開発と行こうじゃない」

EP-07 国家代表（後書き）

今回はフェデリカさんの話でした。

彼女はオリキャラって思った方には申し訳ないですが、彼女は完全なオリキャラではないです。

一話のあとがきで話した通り、この作品に出てきているウィッチの多くは島田フミカネ氏のサイトに書かれている `World Witches` が元ネタです

当初は501のメンバーでISとクロスさせようとしたんですが、いくらなんでもSW一期開始時の戦争が苛烈を極めている最前線にいきなり原作の一夏や篝たちが乱入するのは話の整合性が取れず、めっちゃくちゃになるだろうなと思いました。

個人的に凝り性で話に一定の整合性がないと嫌なんです

詳しいことは第零章が完結した際に書くつもりですがそんなこんなでアニメのキャラクターはほとんどが出演しないという事態になり、代わりに大将や、フェデリカといった設定上にしか存在しないキャラが出演することになりました。

そもそもSWに出てくるキャラクターは第二次世界大戦で活躍したエースパイロットをモチーフにしており、その数だけで結構います。

実際元になったパイロットたちもそうですが、設定だけにしとくにはかなりもったいないぐらい彼女たちは魅力的なキャラです。

そんな彼女たちが活躍したりする姿が見てみたいと思った事もこの作品がこういったオリジナル要素の多い作品になった一因でもあります。

二つの作品のエピソードはいずれちゃんと言いますが、少なくとも第零章はオリジナル展開で進んでいきます。

ちゃんとここで書くべきことを書いておかないと、後で説明不十分なことがいろいろ起きてしまいそうなので。

第零章は後の章を楽しむための土台だと思ってください。

次回から二、三話は彼女がメインの話になるかもしれません。

ここ最近はISの悪い点の指摘ばかりしか書いていなかったのですが、今後はもう少し彼女たちウィッチを活躍させようかなと思っています。

彼女たちのこの作品での設定などは近いうちに上げようかなと思っています。

最後になりましたがご意見、ご感想、評価などお待ちしております。

以上シュウ禅でした

どうも、シユウ禅です。

ウィッチ達の使っている機材が知りたいというご意見がありましたので、登場人物の紹介を作りました。

とりあえず、今までメインまたはサブとして出てきた子達だけです。

登場人物紹介

緋村優刀

年齢 15歳 誕生日 6/20
身長 175cm 階級 扶桑国空軍大尉

概要

この作品の主人公。

世界でも数少ない男性のウィッチ。

扶桑海事変より参戦しており、同事変のエースの一人。

性格は穏やかでどんなときもあきらめない芯の強さを持つ。

扶桑刀による近接戦闘能力が得意でその腕前は扶桑でもトップクラス、魔力コントロールも超一流。

部下を束ねる統率力に優れ、戦場では常に冷静沈着、優れた洞察力と柔軟な思考を持ち合わせた指揮官としても優秀。

真面目で事務仕事も極めて有能ではあるが、堅物ではない。

ここ最近^{ワーカー・ホリック}は補給物資の調達に奔走しており、仕事中毒になりつつあるらしい。

容姿は艶やかな黒髪だがツンツンにはねている。蒼く澄んだ瞳が印象的な少年。

戦闘時は制服の上着を脱ぎ、魔法繊維で編みこまれた白い羽織を羽織る。

ウィッチの義姉がいる

ポジションは前衛

固有魔法

「大気操作」

ハルトマンと同じ自身の魔力で大気を操ることができる。

しかし、その威力は桁外れで、大気中の魔力を操作することによって雷を発生させることも可能。

(その場合、魔法力の消費も比例して多くなる)

使用武器

M G 5 4

扶桑刀(陸奥守吉行)

ストライカーユニット

十二試艦上戦闘脚

メツサーシャルフ B f 1 0 9 E

(扶桑海軍にて扶桑に持ち込まれた新型エンジンDB - 6 0 1搭載の先行試作型のうちの一機。)

-
-
-
-
-

加藤武子

年齢 1 5 歳 誕生日 9 月 2 8 日

身長 1 6 3 c m 階級 扶桑国空軍中尉

概要

扶桑空軍きつての名指揮官。

欧州の大規模怪異発生の前年に起きた扶桑海事変において、江藤敏子中佐による指揮の元、優刀と共に飛行第一戦隊に所属し勇戦。江藤中佐の下で指揮官としての経験を積む一方で、自らも扶桑刀による居合い技「無双神殿流・空の太刀」を用い2機のネウロイを撃墜している。

この頃から既に個人戦績には興味がなく、部隊単位での戦術を模索していたようである。

同隊に所属した穴拭智子少尉（当時）とは戦友。また、加東圭子少尉（当時）を加え「扶桑海三羽烏」と賞された。

基本に忠実で堅実な戦法を重んじる反面、欧州の機材や戦訓を積極的に吸収するなど、進取の気性も持ち合わせている。

穏やかな性格だが、優刀曰く、「怒らせるとやばい」らしい

事変後、優刀の副官として共に欧州へ派遣され、彼を陰に日向に支えている部隊の縁の下の力持ち。

最近の悩みはどっかの誰かさんにストライカーユニットが日々壊されること

ポジションは後衛

使用武器

扶桑刀

MG54

ストライカーユニット
長島飛行脚 キ43 一式戦闘脚 隼

固有魔法

「三次元空間把握」

- - - - -

グンデユラ・ラル

年齢 15 歳 誕生日 3 / 10

身長 169 cm 階級 カールスラント空軍中尉

概要

義勇統合戦闘飛行隊に所属するカールスラント空軍ウィッチ。
はさばさばした姉御肌で、どんなに厳しい状況でも笑みを忘れずに
周囲を安心させる豪胆さを持っている。
見越し射撃の名手で、芸術的な空戦技能を持つ。
また指揮官としても優秀で、以前はJG52の中隊長をしていた。

義勇統合戦闘飛行隊では主に前衛を担当

使用武器

MG54

ストライカーユニット
メッサーシャルフ Bf109E (黒の13号機)

- - - - -

ドミニカ・S・ジエンタイル

年齢 15歳 誕生日 12/6
身長 174cm 階級 リベリオン合衆國中尉。

概要

リベリオン空軍の精鋭、第8空軍出身。
気怠げな振る舞いが目立つが、その実は即断実行、意気と情熱の熱血魔女。
抜群の体力と動体視力を持ち、それは戦闘や趣味のボクシングでも遺憾なく発揮されている。
戦闘スタイルは単純明確、敵を見たら突っ込んで、撃って、落とす。

義勇統合戦闘飛行隊では主に遊撃を担当

使用武器

レミントンM870

M249

デザートイーグル50AE

S & a m p ; W M 5 0 0

ストライカーユニット

ノースリベリオン P - 5 1 B (3 9 - 8 6 9 1 3 号機)

-
-
-
-
-

フェデリカ・N・ドットリオ

年齢 1 5 歳 誕生日 4 / 2 4

身長 1 6 6 c m 階級 ロマーニヤ空軍中尉 (赤ズボン隊

? パンタローニ・ロツシ?) 書類上はその他三軍から独立した指揮権があるロマーニヤ公室直属精鋭部隊。

概要

ロマーニヤ公国のウィッチ。機械好きで技術者を志望し、ストライカーユニット技術者を目指し軍でストライカー等の研究に従事していたが、後に魔法力が発現し、試験的に受けた飛行訓練で高い空戦ウィッチとしての適正が判明。技術学校から士官学校に入校し直し、

航空ウィッチへの道を進んだ。

技術職へのこだわりから、正規教育を受けて少尉に任命された後、戦闘部隊には入隊せず民間メーカーのテストパイロットとなった。そのメーカーがIS開発も行っているメーカーで、技術者として興味があつたのか、ISをふとしたきっかけで触ってしまった。その際高いIS適正が発覚しそのままISのテストパイロット、代表候補生へと駆け上がった。いった。

明るく陽気な性格だが冷静な一面も持ち合わせており、要所要所で確かなアドバースを行う。

余談だが、赤ズボン隊在籍時、前線への戦意高揚等の目的でウィッチの「せくしーカレンダー」を企画。

「高揚し過ぎちゃうから危ない」という理由でロマーニヤ公からやんわりと止められた。

これに対し一部の過激派青年将校の間でクーデターが計画されたという噂がある。

義勇統合戦闘飛行隊では遊撃（ジェンタイルの二番機を担当）

使用機材

M G 1 5 1 / R

ストライカーユニット

ファロットG55チエンタウロ

IS

第三世代IS

『デンススタ・ロッシン赤い嵐』

オリジナル武器紹介

MG 54 機関銃

カールスラント軍が正式採用した最新機関銃。カールスラントの名銃ラインメタルMG 42に連なる機関銃で分隊機関銃から車載用に至るまで幅広く使用されている。優刀や武子はその性能の高さから自国製の機関銃よりこちらを使用している。優刀曰く？こっちの方が性能がよくて、デザインが好き？らしい

(デザインはMUV - LUVオルタの戦術機 EF - 2000タイプ
フーンの装備、Mk - 57中隊支援砲)

MG 151 / R 機関砲

ウィッチが使用する専用の機関砲。ウィッチはもともとあまり重量のあると武装が持てないということが問題視してされており、それを克服するために開発された。元は第二次世界大戦の航空機に搭載されていた機関砲、MG 151を現在の技術で再設計し、ピストル

グリップや電気発火式のトリガー、サブグリップ等を装着し手持ち式に改修した。型式番号のRは？再生？の意味

というわけで、登場人物紹介でした。

いかがでしたか？

この登場人物紹介が作品を面白くする隠し味となってくれれば幸いです。

あと、劇中で彼女たちが使っている武装なんですが、一部の子達は第二次世界大戦中の武装をそのまま使っていました。

ごめんなさい、作者の調査不足です。

後、ストライカーユニットなんですが、原作通り第二次世界大戦中の機体をモデルにしています。

もちろん性能自体は2039年代の技術で作られているため原作とは比べ物にならないほど高性能ではありません。

これは本篇に入れる必要のない、比較的どうでもいい作者の完全な裏設定なんです、

白騎士とストライカーユニットがその性能を比較された際にある一人の試験官が、「ISとストライカーユニットではF-22？ラプター？とゼロ戦くらい差がある」と言われた事に腹を立てた扶桑のストライカーユニット開発陣が後に扶桑軍が正式採用する際、意返しにゼロ戦よりも前の機体、96式艦上戦闘機をモデルにした

96式艦上戦闘脚を開発したという事がきっかけで、軍部から戦闘機の活躍の場を奪った最新鋭とされるISへの皮肉と、もう一度戦闘機が大空を舞う日を夢見て、過去の名機の名前を付けるといった慣習が世界に伝わった、といった裏設定があったりします

まあ・・・実際どうでもい話なんですけどね

現行のラプターとかF-2とかもスタイリッシュでかっこいい良くて好きなんです、ああいう第二次世界大戦の機体には今の機体にはない、古いが故のかっこよさがあったて好きです。

時期的にはちょっと悪いかなとも思いましたが、少し作者の息抜きも込めて作りました

引き続き、ご意見ご感想をお待ちしますので、ガンガン送ってきてください。

作者の励みになります。

以上シュウ禅でした

EP・08 JASFT(前書き)

どうも、シユウ禅です。

今回もフエデリカさん回です

それではごっげ

「ちょっと、待てえっ!？」

フェデリカはとんでもない条件をつきだしてきた。

「何かしら優刀？」

さすがに今の話は部隊の指揮官として看過できない話だ

「お前、自分が言ってることの意味わかってて言ってるんだよね
!..?」

「ええ、そうよ。当たり前じゃない」

「それならいいけど、一応俺にも分かるように話してくれるか？
場合によってはさすがに俺一人でどうにかできる問題じゃなくな
る」

「ああ、ごめんなさい。あまりに突飛過ぎたわね」

さつきまでテストパイロットやら情報がどうやらの話をしていた直後の話だ。

普通に考えればいい手かもしれないが、二人は国家代表という国を背負っている人物たちだ。個人がどうこう、というレベルの問題じゃない

「では説明するわね・・・まず第一に私が使っている機体が欧州統合防衛計画『イグニッション・プラン』の次期IS主力機選定のトライアルに参加しているのは覚えているわよね」

「ああ、そういえばそうだったな」

そういえば彼女がこの部隊に配属された当初、そんな説明を受け

た記憶がある。

「今の所、他にトライアルに参加しているのがブリタニアのティ
アーズ型と、カールスラントのあの？アホ部隊？が使っていたレー
ゲン型の二つ」

「……………あいつらか」

「……………」

フェデリカの言葉に一瞬嫌な記憶がよみがえり、俺とラルは顔を
歪ませる

そんな俺達の事を無視しフェデリカは話を続ける

「で・・・今のところ特殊兵装の開発に一步リードしているのがブリタニアのティアーズ型モデルで言われているんだけどはつきり言って何処の国もいまだに実用化の目処が立ってないの」

「なるほど・・・で、お前は二つの国を出し抜いて先に特殊兵装を完成させて、次期主力機に採用させたいって訳か」

ラル
フェデリカの言いたいことが解ったのか納得したという顔をする

「ちがつわ」

ラルの言葉を即座に否定する

あ、ちょっとラルがふてくされた

「私自身もそうだけど、ロマーニヤ軍と開発メーカーはそこまで今IS開発に本腰を入れてるわけじゃないのよ。」

「……その割には毎日いじっている気がするが」

ちよっとぶすっとして、珍しいな

「ラル拗ねるなよ。似合わない「フンっ!!」「っイタあっ!?!」

ゲシっ!!

思いっきり足を踏んづけられた

「はいはい、二人とも夫婦喧嘩は後でやってね………で話を戻すけど、はっきり言ってこれから先、欧州はIS開発には力はいれられなくなると思うのよ」

「ま……まあ、そうだろうな」

踏んづけられた足をさすりながら考える。

今の現状で金が馬鹿みたいにかかるIS開発を強行しようなんて考える国はまずないだろう。

それ故に、各国のIS開発部門やら政府から助成金をもらっている会社は何かISに戦果を上げさせ、開発の凍結を防ごうとしているのだろう。

……おかげで前線の俺たちはいい迷惑だが

「じゃあ、なぜお前はそんなに急いで特殊兵装を完成させようとしているんだ？ 聞いている限りだとあまりイグニッションプランに乗り気じゃないみたいだが？」

「個人的にイグニッション・プランでどこの国のISが選ばれようが興味ないんだけど、政府から助成金が出ているうちに開発させておきたいシステムがあるのよ」

「システム？」

「そ、そのシステムが私の機体の特殊兵装で、そのシステムを開

発することが私やロマーニヤ軍、ファロット社、ていうよりは、統
合先進打撃航空技術開発計画にとって一番重要なことなのよ」
J A S F T

「ああ、そういふことか」

統
合
先
進
打
撃
航
空
技
術
開
発
計
画
の
名
前
を
聞
い
て
納
得
す
る。
J A S F T

統
合
先
進
打
撃
航
空
技
術
開
発
計
画
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
J A S F T

欧州へのネウロイ侵攻の前年に扶桑とヒスパニアに大規模な怪異
が発生した

後に言われる『ヒスパニア戦役』と『扶桑海軍変』である。

この二つの事件後、各国はネウロイを人類共通の天敵として認識し、今後ネウロイが発生した場合、各国が共同でこれに対応することと決定した。

そうして連合軍が結成されていく中で推し進められている計画の一つが統合先進打撃航空技術開発計画である。
JASST

元々の計画の内容は各軍の次期主力航空兵器の開発を一本化し、各国の軍の要求を満たせる共通の機体を開発する事だった。

しかし、計画の要である次期主力航空兵器の最有力候補であったISが『扶桑海軍変』で兵器としての欠点が次々と露呈し、各国が防衛戦力の中核をISから他の航空兵器に変更せざる負えない事態に陥った為、計画は変更を余儀なくされた。

代替プランとしてストライカーユニットを各国は次世代航空主力兵器の開発機種に選定したのだが、ここでも問題があった。ISのように生産数が限られておらず、ストライカーユニットは他の二機に比べ比較的安価に生産でき、高い費用対効果を見込める優良な機体ではあったが、積載量が航空戦闘機やISと比べて圧倒的に少ない、二つの機体に比べてアビオニクスや火器管制能力が著しく低い、上記二つの要素から他の二機種のような多用途性マルチロールが持つことができ

ない、いった問題があった。

・・・・・・・・要するに長い説明であったが、今やこの計画は多用途ストライカーユニットの各国の基本仕様の構築を目的とした概念実証研究計画といっても過言ではない。

確かにストライカーユニットの問題点はアビオニクスと火器管制能力をつけて積載限界をアップさせるだけで解決できるので、航空戦闘機はともかくISの問題点克服より遙かに現実的である。

ストライカーユニットであれば基本単価が安く、たとえマルチロール化による機体の単価が上昇したとしても他の機種よりも安く済むというデメリットらしいデメリットにならなかったというのもストライカーユニットを選んだ理由なのだろう。

「だったら最初から統合先進^{JASFT}打撃航空技術開発計画の一環っていつてくれ。言ってくれたらこんな回りくどい説明をしなくて済んだろ」

「何言ってるの、すっかり忘れていたくせに。聞いたら武子が怒るわよ?」

「まったく……でも、これで更識がなんでうちに来たのか納得がいったよ」

「え、それってどういづことかしら?」

今まで黙ってフェデリカの話聞いていた更識が俺の言葉に疑問を持ったのか口を開く

「うちの部隊、?書類上?は義勇統合戦闘飛行隊は統合先進^{JAS}打撃航空^{FT}技術開発計画の直轄部隊なんだよ」

「ああ、そういえばそういう情報があったわね」

更識が納得したようにポンッと手を叩く。

いろいろあつて俺たちが義勇統合戦闘飛行隊設立することになった際、上層部から多国籍部隊の前線での詳細な運用データがほしいという通達があつたのだ

データを提出する代わりに補給の方を優遇してくれるという結構な高待遇であつたので、この後どんな無理難題を言われるのかと当初は警戒していたのだが、実際は部隊が統合先進打撃航空技術開発計画JASFTの為に何か特殊な任務などには着いたことがなく、定期的にデータを寄越すよう連絡が入るのみだったので記憶の彼方に追いやられていた。

この計画責任者が更識の霧纏ミスティアス・レイティの淑女の特殊兵装のデータがシステム

の開発に使えると踏み、この部隊に送ってきたのだろう。

「と、まあそんな訳でオライシャも計画に参加しているから、私が彼女に共同開発を持ちかけてもOKな訳よ」

「なるほど……………」

ラルが納得いったと頷く。

「で、どうかしら？ 更識さん、私に協力してくれるかしら？」

更識は少し考える素振りをして……………

「いいわ、協力しましょう」

そういつて右手を差し出す

フェデリカは微笑み、握手を交わす

「よかつたわ。じゃあこれから宜しくね、え〜と………楯無
つて呼んでも？」

「ええ、構わないわ。私もフェデリカって呼ばせてもらっから」

どつやら、話は纏まったようだ。

こうして本日よりここ、JG52基地・義勇統合戦闘飛行隊格納庫
でIS第三代機？赤い嵐？と？霧纏の淑女？の共同開発がスタートしたのだった。

また小難しい技術がどうのこうのという話になってしまいました。

肝心のフェデリカのISの特殊兵装がなんなのか明かすことができませんでした。

ごめんなさい……

次回ではきちつと明らかになりますので楽しみにしてください。

ヒントを上げるとするならばミスティアス・レイデイの特徴はなんなのか、フェデリカさんは何？

という感じです。

……話が一向に進まないですね、速くIS組を出したいんですけどやっぱりきちつと書きたいので……

最後になりますがご意見ご感想、この作品を見てふと思った事などお待ちしています！

出来る限り、すべての感想には返信をきちつと書きたいと思います！

以上、シュウ禅でした

Ep. 09 temporale rosso 〈赤い嵐〉 (前書き)

どいつもシユウ禅です

今回、ついにあのキャラが出てきます

そねどほどいんぞ

「それじゃあ、さっそく？霧纏ミスデリアス・レイディの淑女？の特殊兵装を教えてくださいませんか？」

互いに握手を交わして早々にフェデリカは本題を切り出した

「そっちから教えてはくれないのかしら？」

「ええ、ちょっと私の機体のはちょっと変わっていてね、まずあなたの機体からの方が分かりやすいでしょう？」

にこやかに笑って答えるフェデリカ

これ以上問答しても意味がないと感じたのか、更識は早々に聞き出すことを断念し、

「はあ……わかったわ、まずは私から説明するわね」

しょうがないとばかりにため息ひとつ、説明を始める

「まずはおそろい……隊長、IS第三世代は何を目標に開

発が進められているのか知ってる？」

「ええつと・・・確か、操縦者の操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載だったよな？」

いつぞや読んだIS関連の論文の一文を思い出し、答える

「そ、正解。第三世代は操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載っていうのが目的なの。例えば、昔アニメでやってたファン Öl みたいないわゆるトンデモ兵器ね」

「トンデモ兵器ってお前……」

「私の？ミステリアス・レイディ霧纏の淑女？はその中でもかなり特殊でね、水を自由自在に操ることができる能力なの」

「な……」

「……またえらいトンデモ兵器を作ろうとしたものだな」

ラルが呆れたように息を吐く。

「ふふ、自分で言うのもなんだけど結構トンデモ兵器でしょ？」

パンツと開いた扇子で口を隠し、上品に微笑む。

ちなみに扇子には『水芸』とえらく達筆な字で書いてあった

いつの間に書いたんだ？

呆れたような顔をしている俺とラルの二人に対し、フェデリカは・

・
・
・

「すごいわ！ まさかそんな発想が出てくるなんてビックリよ！

もっと詳しく聞かせて!!」

喜色満面で更に詳しく聞こうと更識に詰め寄る

更識はフェデリカのその様子がうれしかったのかにこやかに笑みを浮かべると更に説明を続ける。

「ミステリアス・レイディ霧纏の淑女?の左右のクリスタルはISのエネルギーを伝達するナノマシン製造プラントなの、そこで作られたナノマシンが空気中の水分を利用して水の鎧と楯を形成する。そしてその水は攻撃にも使える・・・予定よ」

いまだ完成していないのではっきりと言えなかったのだろう、最

後の方は少し自信なさげだった。

「まだ兵装のシステム構築が完全に出来ていなくて、待機静止状態の形状維持ができないの、」

「なるほど、それで実戦では使われていないって訳か……」

「ええ、待機状態の形状まで私の方で制御していたら、いくらなんでも私の方が疲れちゃうのよ」

「だから、当面の問題はいかにイメージインターフェイスを介さないで静止状態を維持できるようにするか、っていうところね。」

「そう……でも、大丈夫。二人より三人、三人より四人。扶桑のことわざでもあるように三人寄れば何とやら、私たちで完成させましょ?」

「フェデリカ……」

「・・・お前、いったいどこで扶桑のことわざなんか覚えたんだ？」

「ふふ、内緒」

そういつて微笑むフェデリカ

相も変わらずそのほほえみは明るく、人を元気にさせる。

「じゃあ、今度は私の番ね。」

そう言いつつ、何やらフェデリカは台座からコンソールをひっぱり出してきて素早くキーを叩き始める。

数瞬後、フェデリカの周りに空中投影型のディスプレイが現れ、次々と細かいデータが表示される

「……私の機体、？テンベスタ・ロッシ赤い嵐？の特殊能力はおおざっぱに言えば『魔力行使』これに尽きるわ」

「…………え、それだけ？」

「ええ、そう」

更識が何とも間の抜けた顔をし、二人の間に微妙な空気が流れる・・・

「あ、ああ、ごめんなさい。その、ええ・・・と、なんというかあまりにも予想外だったから、ちょっとビックリしちゃった」

「まあ、フェデリカの言葉だけじゃ、その反応が普通だよなあ・・・」

「まあ、だまされたと思ってちょっと見てちょうだいな。．．．
ねえ優刀、あれやってくれる?」

「はあ、しょうがないな．．．．．」

そういとフェデリカは一体どこから出てきたのか分からないが、廃棄されたストライカーユニットの装甲板を取り出し、適当な高さの台を見つけてその上に置く

「さて、こちらにあるのが先日、うちの部隊のあほの飲んだくれが破壊してくれましたストライカーユニットの装甲．．．．．と
いうわけで、はいこれ」

そういつて渡してくるのは一本のダーツの矢。

「はあ……」

おもむろに受け取り、狙いを定めて投げる。

ヒュッ……

矢は装甲板に当たるも案の定弾き返され、床に転がった。

「ま、刺さらないわよね、普通は」

「ええ……」

「じゃあ、今度は………優刀お願いね」

「りょーかい」

そう言って、俺は目を閉じ、意識を集中させる。

・・・いくぞ、？相棒？・・・

自身の中に眠る友に心で声を掛ける

次の瞬間、体を青白い暖かい光が包み、穏やかな風があたりに吹き始める

そして意識をダーツの矢に集中……

そして、さっきと同じように投擲……

放たれた矢はそのまま、吸い込まれるように板へ……

ドンッ……

なにかが爆ぜる音が格納庫内に響きわたる

「……………嘘」

更識は信じられないといった風に装甲板を見ている。

先ほどまでそこにあった堅牢そうな装甲板が見るも無残に大穴をあけ、その大穴から後ろの格納庫の壁にめり込んでいるダーツの矢が見えた。

その光景に驚くなという方が無理だろう。

「はい、というわけで分かってもらえたかしら？」

「え、ええ……要するに魔力は物体の強化に使えるのね？」

いくらか今の出来事にあっけにとられながらも、更識は納得いたという風に呟く。

「そういふこと」

ウィッチは魔力で身体を強化したり、障壁を張るほかにもう一つ出来る事がある。

それが、物に魔力を込めるということであつた。

魔力を込められた物体は強度が増し、丈夫になる。

それは個人の技量にもよるが大抵、2〜3倍ほどは強化することが出来る。中には物質に魔力を圧縮して対象に魔力を徹すことが出来るウィッチもいる。

「……………ま、そんなこんなで搭乗者の魔力を機体、または武装に付与し、機体の性能を上げるシステムが？赤い嵐？テンベスタ・ロツンの特殊兵装と言えるんだけど、一つ重大な問題があるのよ。」

そういつて、言葉を区切る

「……………私たちが魔法を使用するとき、使い魔が魔力コントロールをサポートしてくれるんだけど、IS使用時に魔力を使おうとすると、どういうわけかISの稼働率が極端に下がって、動作不良を起こしてしまうの」

「動作不良？」

「ええ、ISって体の四肢の操作はともかく、PIC、情報、通信は操縦者の思考制御じゃない？その思考制御システムが使い魔の思考まで読み取っちゃうのよ」

「なるほど……………」

「実際、私のほかにもIS適正の高いウィッチが何人もいて、上層部はウィッチの装備品としてISを運用しようとしたんだけど、これが原因で断念したのよ」

「魔法を使わないでISを使用しようとは思わなかったの？」

「もちろん、上層部も一度、通常ウィッチにはストライカーユニット、その中でも優秀で適性のあるウィッチにISを支給しようと考えてたわ……でも私も含めて前線のウィッチは一度も実戦で使おうとは思わなかったわ」

「どうして？」

「ええっと……どう説明すればいいのかしら……ISは四肢の稼働をするとき、皮膚の電位差を計測してISのコアが判断、四肢を動かすじゃない？だから一回コアを介してっていうプロセスを踏む分、どうしてもタイムラグが生じてしまうのよ」

そういつて本日何度目かのため息をつくフェデリカ。

「ああ、そういつことか」

今度は俺がぼんと手を打つ番だった

「更識は何か武道やっているか？」

「ええ、家柄いろいろとね、やってるわ」

「じゃあ、たまに感覚が鋭敏化する時ってないか？」

「ええ、……ああ、そういうこと！」

どうやら、楯無も理解したようだ。

要するに、ISを使っている状態で四肢の動作をするときに一回、コアでの処理というプロセスが入ってしまうため、どうしても遅くなってしまうのだ。ISに搭載されている高性能センサー、ハイパー・センサーで特に感覚が鋭敏化している状態だと、その差が一気に出る。元からISで訓練している者にはあまり感じれない、また

はしようがない差と取られてしまいが、身体強化で思考と反射のタイムラグが極めて少ない状況に慣れているウィッチにとっては大きな差で、反応が鈍いと感じてしまう一因なのだろう

「まあ、いろいろ話が脱線しちゃったんだけど。要するにウィッチの能力を最大限発揮できるシステムが私の機体の特殊兵装についていなければならない」

「なるほどね……ウィッチ専用ISかあ」

更識は考え込むように目をつぶる

「その過程でウィッチでも使えるイメージ・インターフェイスの開発が一統合先進打撃航空技術（JASFT）開発計画の目的のひとつなのね」

「ええ、ストライカーユニットの特性上、手での操作が困難だから火器管制、量子変換システムの操作はイメージ・インターフェイスがストライカーユニットには最適なのよ」

「なるほど……確かにイメージインターフェイスを使え

たら楽ではあるな・・・」

「とうわけです、私たちの目的は特殊兵装とウィッチでも使えるイメージインターフェイスの開発っていうことね」

話は終わりとばかりにフェデリカは手元にあったコンソールを元の場所に戻す。

「ん？もうこんな時間か・・・やれやれ、銃の整備に来たはずがいつの間にかISの講義を受けてしまったな」

ラルの言葉にふと格納庫においてある古臭い時計を見る。

時刻は午後一時、

結局俺たちはフェデリカの話を一時間近く聞いていたのか・・・

「やれやれ、貴重な昼休みを潰しちゃったな」

「あら、結構有意義な昼休みだったでしょ？」

「昼飯を食べていたらな」

「あら残念」

午後からはまた訓練がある

その前に少しでも腹に食べ物を入れておこうと思い、オフィスへ帰る為に格納庫から出て行くことにすると……

「済まない、こちらに緋村少佐はいるか？」

整備員たちの声が彼方此方から飛び交う格納庫の中でもその毅然とした声は綺麗に澄み渡り、奥の方にいた俺達にも聞こえていた

「ん……この声はバルクホルンか？」

ラルがその声の主に見当がついたのか確認するように入り口を見る

「本当だ、トゥルーデだ……おい、トゥルーデ」

その声の主を見つけその名前を呼ぶ。

その呼び声に気づき、一人の少女がこちらに向かって歩いてきた。

「やはりここにいたか」

毅然とした口調でカールスラント軍人の鏡のような彼女の名前は
ゲルトルート・バルクホルン

ラルと同じくカールスラントJG52に所属するウィッチで飛行
隊長を務めている。

彼女とは去年の4月にこの基地に派遣された時に知り合い、同じ
中隊長という立場からすぐに意気投合し互いによく相談する間柄に
なっていた

「どうかしたのか、お前が人のことを探しに来るなんて珍しいな」

「いや、午後は我々第二飛行隊の訓練ということだったからな。
その細かい調整をと思ってな」

「ああ、そういえばそうだったな……」

「まったく、お前というやつは……ん？」

そこで彼女はこの場に見慣れない人物がいることに気づきそちらに目を向ける。

「優刀、彼女が例の補充人員か？」

「ああ、更識、自己紹介」

「初めまして、昨日義勇統合戦闘飛行隊に配属されました更識楯無少尉です。よろしくお願いします」

「JG52第二飛行隊隊長　ゲルトルート・バルクホルン中尉だ。
よろしく頼む」

そういつて互いに敬礼を交わす。

「ラルすまない、オフィスに言ったら俺のサンドウィッチ冷蔵庫に入れといてくれ」

「ん、わかった、行くぞ二人とも」

ラルは察してくれたのか二人を連れて格納庫を出て行った。

その様子を眺めながら、俺たちは格納庫の外に出る

「ふう、やれやれ……また昼飯食い損ねたな」

「ふ、多国籍部隊の隊長はなかなか忙しいみたいだな」

「まったく、猫の手も借りたいよ。……で、どうだ、彼女の印象は？」

そういつて彼女がこの格納庫に来たホントの目的を指摘する。

「……気づいていたのか」

「ああ、やはり？あの戦い？を経験している以上、彼女が気にならないはずがないからな」

「……そういつお前はどうかんだ、彼女のことをどう思っている？」

「……………彼女は？あいつら？じゃない、比べても意味がない」

「よくそこまで割り切れるモノだな……………私も頭では分かっているつもりなんだが」

そういつて表情を曇らせるトウルデー

「いいさ……………そこまで割り切れるほど俺も大人じゃないさ……………」

「そうか……………」

それ以上は何も言わない

上を向く……………

最近は雪の日が多いカールスラントの東部の空は珍しく晴れており、

その青い空はどこまでも広がっていた

というわけで、ついにバルクホルン登場です。

やっとです。

やっとアニメのキャラがメインで出せました。

といっても最後の方だけでしたけど……

あともうこれで技術回終了です。

次回からはちゃんとストーリーが進行します。

……ここ最近ハイペースでしたのでこれで少しはスピードを落とせるかな？

最後にご意見ご感想をお待ちしています

EP・10 仲間の条件（前書き）

どうも、シユウ禅です。

今回はエーリカ主演です。

では、さようなら！

「緋村少佐、十時方向にリバウ方面へ航行する敵編隊を確認。その数二十……こちらにはまだ気づいていないようです」

私の横を飛んでいた下原が隊長に敵発見の報告をいれる

「了解だ下原……よし、ドラッヘ02率いる第二中隊は右から迂回して奴らの側面に攻撃を仕掛ける」

その報告を受けた隊長はいつも通り簡潔に命令を下す。

『 周りは気にするな、いつも通り突っ込んで叩き落としてやれ！
』

「了解！」「了解！」「了解！」「了解！」「了解！」

隊長の極めて簡潔な檄を受けて私達第二中隊は上昇、敵より高度を取った後、敵に向かって一気に加速、その距離を詰める。

敵の編隊を射程にとらえる。

「 ドラッハ02よりドラッハ03、ドラッハ05！ 初撃は任せるわ！」

「了解だ……クルピンスキー、行くぞ！」

「りょーかい、ラル。……じゃあフラウ、先に行ってくるわ」

そういつて私にさわやかに微笑んで敵へと矢のように飛んでいく
伯爵とラル中尉

続いて、ロスマン先生と私が敵へと呐喊。

降下し速度を失った二人の背中を追いかける敵に向かって銃の引き金を引く。

銃弾を食らった敵はそのまま成すすべなく爆砕、敵の一群を突き抜ける

その私達の背中を敵の一体が追いかけてくるが私たちは気にせず
に再び高度を取るために上昇を始める。

もちろん、敵もおめおめと黙ってみているわけではない。

高度を取らせまいと私たちの上に出ようとするが……

「はあっ—」

更に私たちの後に降下を始めていたカトー中尉にとって落とされる。

「よし、各機ブレイク!!」

その掛け声を聞き、私たちは残りの敵機を叩くために各々攻撃を開始した。

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

・
・

「お疲れ様、エーリカちゃん。今日は二機撃墜おめでとう。お姉さんびつくりしちゃった」

帰投後、格納庫で一息つく私について先日配属された更識少尉が笑顔を浮かべながらスポーツドリンクを差し出してきた。

「ううん、あんなのロスマン先生のおこぼれだよ・・・それに、更識少尉の三機撃墜の方がすごいじゃん」

敵編隊を撃破した直後、新たな敵編隊が現れてその編隊を隊長率いる第一中隊が迎えうち、その中で彼女は単独で三機落としたのだ。

そちらの方がすごいと思うのは私だけだろうか？

「そんなことないわよ、私はまだまだISの性能に助けられている部分が大いいわ。なんだかんだで攻撃をくらちゃってるし・・・だから一発も被弾しなかったエーリカちゃんの方がすごい！ お姉さんが言うんだから間違いないわ」

そういつて私の頭を姉が妹を褒めるようになでる。

そこへ・・・

「やあ、二人して何の話をしてるんだい？」

陽気なキザったらしい笑みを浮かべて伯爵が現れた。

「あら、伯爵」

「もうお説教は終わった：みたいだね」

よく見るまでもなく、その綺麗な彫刻を思わせるような端正な顔の左頬には小さい赤い手形がくつきりつついていた。

キザつたらしい笑みを浮かべて爽快と登場したはいいが、その所為でなんだか間抜けに見える。

「あはは、いやあエディータも可愛いところがあるよね。私がお子に話しかけるだけですく嫉妬するんだから」

「絶対違うと思う」

「ええ」

大方、帰ってきて早々に他の隊の後輩ウィッチをバーに誘おうとした所を、偶然発見したロスマン先生に思いつき張り手を食らったのだろう。

「やれやれ、二人とも手厳しいね……ところで、二人して一体何の話をしていただい？」

「今日のエーリカちゃんはすごかったって話をしていたのよ」

「そうだね、今日は二機撃墜だなんてやるじゃないかフラウ」

「まだまだだよ。まだ出撃のたびに緊張するし、銃を撃つのにも手が震えるんだ」

そう、震えるのだ。

戦場に出るのが怖くて仕方がない。

もしかしたら、自分が落とされて死んでしまうかと思うととても立っていられなくなる。

銃を撃つときだって味方に当たったらどうしようなどと考えてしまっただ。

「軍人としては失格だろう。」

「それでいいんだよフラウ、戦場では恐れを忘れた人から死んでいく……恐怖を感じるっていうことは生きていくうえでとても大切なことさ」

伯爵は普段のさわやかなキザったらしい笑い方ではなく、人を安心させるような穏やかな笑みを浮かべ頭を撫でてくる。

「伯爵……」

「でも、フラウがそうやって震えてしまつたらしょうがない、私が優しくベットで」「このエセ伯爵うつつうつつっ……っ」「ぐはっ！？」

そんな叫び声とともに何か飛んできて伯爵の後頭部にクリーンヒット。

頭に重い一撃を受けた伯爵はそのまま前に倒れる。

「え？……辞書？」

伯爵の頭に直撃した物体を手取る。

そこにはカールスラント語でジーニ〇ス独扶辞典とでかでかと言っていた。

「なんで辞書なんか……」

辞書が飛んできた方へと目を向けるとそこには……

「まったく、このエセ伯爵！ 私のかわいい教え子に何してくれようとしてるのよ」

部隊の新人教育係のロスマン先生が立っていた。

「ロスマン先生……」

「フラウ、大丈夫？ 変なことされなかった？」

「うん、大丈夫だったけど・・・」

「まったく、油断も隙もないんだから！」

この、この、どこからか普段講義中に使っている指揮棒を取り出し、気絶する伯爵の頬をつつく

「ねえ先生・・・」

「何かしらフラウ？」

「どうすれば、隊長達みたいに強くなれるかな・・・」

「え？」

「…………ごめん、なんでもない。先に戻るね…………」

そういつて私は二人に敬礼し、足元に転がっている伯爵をそのままに格納庫を出た

「……………はえ？」

顔に暖かい感触を感じ目を覚ます、

季節は冬の為太陽が昇り切っていないのか、カーテンが完全に閉まっていない窓からは弱い陽光が入り込んでいる。どうやらその陽光が顔に当たっていたのだろう。

ベット脇のテーブルの上の時計に目を移す……

時刻は午前6時を指している。

いつも起床ラッパが鳴るまで眠っている私にとっては未知の時間帯だ。

辺りを見回す。

反対側のベットには同室であるハンナ・ユステイーナ・マルセイユが気持ちよさそうに一定のリズムで寝息を立てている。

もう一人のルームメイトである下原は起きて朝食の準備の為にオフィスに行っているのだろう。上からは人の気配がしない。

「……………起きよ」

いつもであれば二度寝を敢行するところであるが、とてもそんな気にはなれなかった。

ベットから抜け出し、枕元にある携帯端末をいじり始め、空中にディスプレイを投影させる。

そのディスプレイの中では優刀と、ラル、二人のウィッチが高度な空中戦を繰り広げている

先日の模擬格闘戦の映像だ。

「はあ……………まだまだ隊長達のようにはいかないなあ」

この部隊に配属されてから数か月経つが、いつもこの部隊の先任達の技量の高さに驚嘆させられてばかりだ

圧倒的な空戦機動、正確な射撃能力、なにものをも恐れないその

精神力・・・数を挙げればきりが無い。

同じ時期に入った同期のハンナは隊長の二番機に抜擢されて次々と戦果をあげ、先任だけど私たちと同じ時期にこの部隊に来た下原はこの部隊の目として皆から頼りにされている。

それに比べて私ときたら・・・

初陣では長機であるロスマン先生を敵機と誤認して逃げ回った拳句墜落。

そのあともいろいろと墜落やらなんやらやらかした。

最近は何とか慣れてきて、敵機を撃墜できるようになったがそれでも二人に比べればずっと少ない

はっきり言ってダメダメだ。

「…散歩に行こ」

沈んだこの気持ちを朝の寒いけど清々しい空気がきつと変えてくれるだろうと信じて身支度を整えるべくロッカーに向かう。

その時ふと目を窓の外に向ける

「……………隊長？」

窓の向こう側に隊長の姿を見つけた。

名前はなんだったか忘れたが、愛用の扶桑刀を持ち、戦闘中に来ている扶桑独特の上着、羽織を着て宿舎の裏手の林へと入っていった

「なんだろ、行ってみよっかな？……………」

私は隊長の後を追うことに決め、ロッカーから防寒着を取り出し、まだ寝ているハンナを起こさないように静かに部屋を出た……………

隊長の後を追いかけて林に入ると少し広がった場所にその姿を見つけた。

私は気づかれないようにこっそりと木に身を隠す。

隊長は腰に差した扶桑刀に手をかけて目を瞑っていて動く気配がない、

(いったい何をしているんだろう?.....)

サアツと辺りに冷えた風が吹く.....

一体何をしているのか聞き出そうとして物陰から出て行くようにしたその時……

隊長がゆっくりと目を開く……

ビクッ！！！！！

隊長の纏う雰囲気が変わる

いつもの辺りを穏やかにする温かい雰囲気から、そこにいるモノを斬り殺すような、冷えた、ひどく恐ろしい空気にその在り方を変える

次の瞬間……

「オオオオオオオッ！！！！！！」

隊長が叫んだ瞬間、隊長の周りの空気がはじかれたように辺りに吹き荒れる

辺りには吹き荒れた空気によって木の葉が舞い散り、切り裂かれ次々と粉々に弾ける

「キヤッ!？」

その光景に驚き、その場に倒れてしまった

「！……………フラウか？」

隊長が私に気付いた

近寄ってくる今の隊長はいつもの暖かい雰囲気の隊長だった

「お……………おはよう隊長」

「何やってるんだ お前？」

隊長が呆れたようにつぶやく

「あ、朝の散歩……………な、なんちゃって」

そう言うのが精いっぱいだった。

後をつけてましたなんてとてもじゃないが言えない。

「ふうん、まあいいけど。ほら立てるか？」

そう言って手を差し出してくれる

「だ、大丈夫…一人で立てるよ……あれ？」

何とか一人で立とうとするが腰に力が入らない

「まったく……ほら行くぞ？」

私の脇の下に手を入れて立たせる隊長……しかし

「わ、わわー!!」

「どうやら腰が抜けてしまったらしく足に力が入らない……
うう、我ながら情けない」

「しょうがないな……よっこいせ」と

「そついうと器用に私をおんぶする隊長、」

「うう、ごめん隊長……」

「いいえ、別に」

「そついつて隊長と私は宿舎の方へと歩き出した」

「ねえ隊長。さっきのは剣術の練習？」

宿舎への道の途中、私はさっきの事が気になり聞いてみた

「ああ、違う違う。練習っていうほどのものじゃない、ただ体が鈍らないように気を引き締めていただけだ」

「いつもの訓練とは違うの？」

「ああ・・・」

そういつて上を見上げる隊長。

「俺の場合、時折あやまって気を引き締めないと心の中が黒くなっていつて、気持ちが悪くなっていくんだ」

「ん~~~~、どじいじいよっ？」

「そうだな・・・フラウ、銃を持った時どう思う？」

少し考えるようにして私に聞いてきた

「え？それは怖いよ……だって人を殺せちゃうんだもん」

「そうだな、それが普通だ……けど、どっかで好き勝手に撃つてみたいって思わないか？」

「う……たまに、ちょっとだけ」

私は情けなく答える。

銃を持ったとき、確かに怖いと思う、けど同時に、少しだけ使ってみたいと思うのも事実である。

だからこそ余計に銃を持ちたくないし、引き金を引くのにもためらいが生まれるわけだが……

「まあ、要するにそういった風に力を持ったら使いたいって思うわけだ……けど、俺たちは好き勝手に力を使っているわけじゃない……俺たちが使っている銃は人をも殺せる道具でもあるんだから」

「うん……」

そつだ・・・今はネウロイに向かつて銃を放つてはいるが、今使っている力は人も殺せるんだ・・・

「だから、たまにああやって気を引き締めるんだ。・・・
自分が持っているその力に飲まれないように」

「どんな力だつてその力の振るい方を間違えばそれは悲しみを増やすだけのただの暴力だ。だから強くなることに焦っちゃいけない・・・焦つて手に入れた力に心の成長が追い付いていないんだ。そついった力には必ず振り回される」

そついつて淡々と話し続ける

そついつと今まで上に向けていた視線を私の方に向け諭すように語りかける

「……………剣は凶器、剣術は殺人術。どんな綺麗事やお題目を口にしてもそれが真実……………だからこそ、俺たちはその力の振るい処を間違っちゃいけない……………強くなる事を焦っちゃいけないぞ、フラウ」

「え?……………」

「エディータから聞いたぞ? 最近お前が沈んでいる、訓練中にもどっか焦りが見えるって……………何を焦っているんだ、フラウ」

「……………私はまだ足手まといだから、速く強くなって、早くみんなと一緒に胸張って飛べるようになりたい、皆に背中を預けてもらえるようになりたいんだ」

わたしはもつとみんなにちゃんと仲間として認めてもらいたのだ。

背中を預けられる仲間として……………

「ならお前は大丈夫だ、フラウ」

「え?」

「皆、お前のことを頼りにしているよ。俺が言っただから間違いない」

そうやってにこやかに笑う隊長

「そんなことないよ……初陣ではロスマン先生を敵と思って逃げ回って落ちちゃっうし、そのあとだって何回も落ちちゃってるし……みんなに迷惑かけっぱなしだよ」

「……でも、今は違うだろ、エディータが言ってたぞ？ 最近のあの子はすごいって、ときどき私でもビックリするぐらいいいタイミングで敵の攻撃を仕掛けるって」

「そんなの偶然だよ……」

「伯爵も言っていたぞ。何回あの子に助けられたか分からないってな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「武子いわく、？彼女は私より周りの観察力がある、あの子は私が命令するよりも早く敵の弱点に攻撃している？だ、そうだ」

「・・・・・・・・」

「大将はあの高度回復の速さは見事だった、だってさ」

「・・・・・・・・」

「フェデリカヤラル、下原だって・・・・・・・・フラウ、どうした？」

「・・・・・・・・うえ、ぐす・・・・・・・・うえ えぐっ」

「なんだ、泣く奴があるか・・・」

「うっうっ・・・・・・・・だって・・・・・・・・ひっく・・・・・・・・ぐすっ！」

だってしょうがないではないか、ずっと今までみんなの足をひっぱて来ていたんだ。皆に迷惑をかけてきたのだ。いつの間にかみんなに認めてもらっていたと言われて、嬉しくない筈がない

「だから、あんまり卑下するな・・・お前は良くやってるよ。確かにまだまだ空戦技術は荒いけど、お前は他のみんなの背中をちゃんと守っているんだ、みんなお前を頼りにしているよ・・・」

「うう・・・うわああああっ！」

「・・・」

「もう落ち着いたか？」

「・・・うん」

「そうか・・・じゃあさっさと帰るとするか、もうそろそろ朝食の時間だ」

「うん・・・朝食、楽しみだね」

「ああ・・・」

私が落ち着いたのを見計らい再び歩き始める隊長

しばらくすると目の前に白い建物が見えた

「ああ・・・ッと見えたな、宿舎だ」

「ホントだ、カトー中尉と下原だ」

大方、朝食の時間になっても現れない私たちを探查能力の高い二人が探しに来たのだらう、中尉はやれやれと安心した顔でいて、下原は手を振ってる。

「さて、さっさと帰るか」

「うん………ねえ隊長」

「………なんだ？」

少し、間が開いて隊長が答える

「私もつと頑張るね………」

「
ああ
」

そう一言答えた後、隊長は二人の言う方へと歩いて行った

Ep-10 仲間の条件（後書き）

というわけでエーリカ回でした

やっとスポットライトが当たりました

次はだれを書こうかな？

祝日なんで割とのんびり書いてたらいつの間にかこんな時間！？

まあ、でも今回はすんなりと思い通り書けたんで個人的には満足です。

お知らせですがこの零章もこの話で半分を切りました。

後はもう一つ二つウィッチ個人にスポットライトを当ててそのあとにラストパート、エピソードです。

ようやく本編行けます。

こっちにIS勢はがつつり出てきます。

第零章がウィッチ達の物語だとしたら第一章はIS操縦者の物語

です

楽しみにしていただければ幸いです

それではご意見、ご感想お待ちしております!!

以上、シュウ禅でした!!

Epiloge in Erinnerung (前書き)

どうも、シユウ禅です。

前書きが書くことないです……

ゲフンっ!!

じゃあいびや……

「ふ、ふふ……」

「ハンナ、どったの？」

「急に笑い始めてどうしたんですか？」

二月上旬のある日、私達新人三人が格納庫で土田班長からストライカーユニットの講習を受けている最中に突然ハンナが笑い出した。

頬をだらしなく緩めて笑うその姿ははつきり言って気持ち悪い

「いや、なに……最近やたらと視線を感じるようになってな……」

「ええ、ハンナってそんな趣味を持ってたんだ……」

「違つっ！」

「そうですねよ、エーリカさん。ハンナさんは視られるのが好きな変態さんじゃないですよ」

「そうだ、さすが下原！良く分かってるじゃないか」

「ハンナさんは隊長達に言葉でいじられるのが好きなんですよね！」

「そう、私は言葉で弄られるのが好き……ってちがっつ」

「うわ……ごめんハンナ、さすがに私も引くよそれ……」

まさか士官学校からの同期がそんな趣味を持っていたとは驚きだ

「違うって言ってるだろうっ！ 最近、やたらと誰かに見られて
いる気がするんだ！ 今だってほら！」

そういつて格納庫の外を指さす。

指さした方には最近見かけるようになった数人のウィッチがこっ
ちを向いてひそひそ話をしているのが見え、私たちの視線に気づく
とそそくさと逃げるように去って行った。

「ホントだ……なんだろう？」

「私にエースの貫録が出てきたんだな。きつと」

「なんだそれ……」

「あははは……」

「…………へえ、さすがは未来のエース達ね。私の授業中に
よそ見なんていい度胸してるわ」

「……………」

「……………」

「……………」

突如、背後から心底冷えた声にが聞こえ、刃物でも突きつけられ
たような感覚が背筋に走り、体を強張らせる私達三人…………

ゆっくりと背後へ振り向いてみればニコリいつもの穏やかな笑
みを浮かべるロスマン先生。

しかし纏う雰囲気はまったくの逆で、その場にいる者を凍死させるのではないかというほどのひどく冷えた怒気を辺りにふりまいて
いる。

そうだった、私たちはロスマン先生の授業の一環で土田班長にス
トライカーユニットの講習を受けていたんだった

有無を言わさぬ先生の異様な迫力に思わず身を強張らせる。その
背後にはなぜか九本の尾っぽ生やす成長した先生の姿が浮かび、こ
ちらを射殺すような目で見ていた気がする。

うん、気のせいだ。

そういつことにしてほしい。

すぐそばにいた土田班長がその怒気に当てられ少し怯えている。

「さてさて、授業を真面目に聞かない子にはどんな御仕置きがい
いかしら……」

ゆらり、と先生が動く

「い……」

「い……」

「」「」「ぎゃああああああああつ！……！……！」「」「」

「久しぶりだな。緋村中尉……いや、もう少佐だったな」

「お久しぶりです將軍。將軍のご活躍はJG52まで届いていますよ」

「はは、まさか？扶桑の白き龍？の耳に入っているとは恐れ多い」

「またご冗談を……」

この日、俺は部隊のオフィスで珍しい人物と再会を果たしていた。

今日の前にいる人物はエルヴィン・ロンメル。カールスラント陸軍将軍である

巧みな戦略・戦術によって、圧倒的なネウロイとの戦いで勝利し続けるカールスラントの英雄で、兵からの人気も高い将軍である

「それで、将軍がわざわざJG52までいらした理由はなんでしようか？」

「やれやれ……君もせっかちな少佐。若いうちからそんなに急いだってなにもいいことはないぞ」

「はあ……」

にこやかに笑い、武子に差し出された特製コーヒーを飲む将軍。

「ああ、実においしいコーヒーだ……」

「ありがとうございます」

本人もまんざらではないのかにこやかに笑って返す武子

「ああ、ウィッチでなければうちの部隊に来てほしいくらいだよ」

「將軍……上司の目の前で堂々と部下を口説かないでください」

「これは失敬」

まったくわざわざ一左官にみずから会いに来て、部下を口説く
将校というのも珍しい。

そういったフランクな部分も現場の兵士達から絶大な人気を得
ている一つの要因だろう。

なんというか、將軍は他のカールスラント軍人と少し変わっている。

いや、將軍だけではない。

俺が親しくなるカールスラント軍人は皆、一般的なカールスラント軍人像から逸脱している

謹厳実直なカールスラント軍人はどこへやら

まあ唯一、バルクホルンだけがTHE・カールスラント軍人と言えるんだろうが

彼女もなんだかんだで癖強いからなあ……………

……まあ、こっちの方が親しみやすいので個人的にはいいのだが

そうしてゆっくりコーヒーを味わっている將軍の姿を見て、自分も武子のコーヒーを味わうことにした

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

三人共、無言でただコーヒーを飲む。

そうして、一杯目のコーヒーを飲み終わり、武子が再び入れてくれた二敗目を飲みながら將軍が口を開く。

「プラークが落ちた」

「……………そうですか」

ロンメル将軍が告げた内容をただ肯いて納得する。

「なんだ、驚かないのか？」

「ええ、予想はしていましたので……………」

信じたくはないが、予想はしていたことだ。

カールスラントとオストマルクの国境近くにある都市、プラーク。

カールスラントは特異な形状をしており、オストマルクの上に半分覆いかぶさるように突き出た東部地方がある。

プラークはその突き出た部分の根元ともいえる所にあり、ここを完全に抑えられてしまえばカールスラントは東部と西部に分断されることとなる。

そこが抑えられたとなると……

「我々にその奪還作戦に参加しろということですか？」

「いや、違う」

「……ですよね、だったら將軍がこんなところにいる筈がない」

將軍が本当に奪還作戦に参加するのであれば、今頃国境沿いのドレステンにいる筈だ。

「まったく可愛げのない奴だな。私が君たちに作戦に参加するよ
うに頼みに来たとは思わないのか？」

「何処の軍に一部隊の隊長に参加するように頼みに来る將軍がいるんですか……あいにくとそう思えるようなアホ臭いヒロイツクな精神構造してませんよ」

「ちえ」

将軍が子供のように拗ねる

ちえって……案外お気楽だなこの人は

「……で、将軍が来た理由はなんですか？」

「……ブランク奪還作戦が実施されるに当たり、もう一か所奪還作戦が実施されることとなった」

今までの陽気な雰囲気を一変させ、顔を引き締める将軍

その佇まいにこちらも自然と気を引き締める

「その場所って、まさか……」

「ああ、そのまさかだ……これより二週間後、我々はクラウ奪還作戦を実施する」

クラカウ奪還作戦

ついにその日が来たか……

クラカウ……

こちらもまたブライクと同様にカールスラント、オストマルクの国境近くにある都市で、昨年九月にネウロイによって陥落した都市である。

クラカウはカールスラント東部の最東端に近く、今や東部戦線に飛来する航空型ネウロイの多くは、ここクラカウから飛来しているといっても過言ではない。

先日のオラーシャからの避難民を乗せた輸送機を襲った航空型もここから飛来したと思われる

グッ・・・・・・・・

コーヒーカップを持つ手について力が入る

「優刀・・・・・・・・」

横に座っていた武子が心配そうに顔を覗いてくる。

「・・・・・・・・大丈夫だ」

心配そうな武子に笑顔で答えてやる。

そっだ、ついにこの日が来たのだ・・・・・・・・

「……あの日、君の部隊はクラカウにおいて避難民を守る為に最後まで戦い、君とカトー中尉を残して全滅……。幸い、死者は出なかつたものの、部隊は欧州からの撤退を余儀なくされた」

ロンメル將軍の言う通り、あの日クラカウにネウロイが襲来した際、東部戦線全域にネウロイが大攻勢を仕掛けてきた。俺が率いる扶桑国遣欧艦隊21航空隊第3中隊はクラカウを防衛するために出撃した。

……後は將軍の言う通りである。

「その後、君は欧州に残る事を決め、クラカウ撤退戦時に共に戦った者たちとこの義勇統合戦闘飛行隊を創設した……」

「ええ、そうです」

わずか半年前の出来事だが、今でも昨日の事のように思い出せる。

空は一面にネウロイに支配され、逃げようとする人たちに容赦なく赤い閃光を振りまく。

すぐ近くにいる味方さえも判らないほどあの日の戦場は混乱し、次々と仲間が傷ついて行った……

あの日、俺は大将とフェデリカに出会い、同様にクラカウ防衛の為に撃し、部隊を壊滅させられたラルや、エディータ、伯爵と共にこの義勇統合戦闘飛行隊を創設した……

「……少佐、この作戦に参加するか？」

「……え」

「今回、部隊がこの奪還作戦に参加するかどうかは君に一任されている……参加するもしないも君の自由だ」

なるほど・・・そういうことが

この部隊は多国籍軍である為、正確にはJG52の命令系統に属していない。連合本部の直属の独立した遊撃部隊である。

現場での行動は自分に一任されており、特にこれといった注文を付けられたことは今までにない。

そして今回も上が何も言ってきていない以上、参加するか否かは任せているといったところだろう・・・

「・・・・・・・・迷っているのかね？」

將軍のその瞳が俺の心を見透かすように覗き込む

「……ええ」

そう、俺はロンメル將軍の言う通り迷っている

もちろん、作戦に参加したいという思いはある。

けれど、それとは別にはたして参加するべきかと迷っているのだ。

「……君の所にいる新人たちが心配かね？」

「……ええ、よく御存じで」

やはり、抜け目ないな……ちゃんとこちらの情報をきちっと仕
入れている。

もっともそうでなければネウロイとの戦いで勝ち続けることなど
できないのであるが

「・・・今回の作戦、撤退戦の時よりも苛烈を極めるでしょう。・・・その中で戦場の現実をいやでも突きつけられる場面がきつと何度もあります。・・・あいつらは将来有望なウィッチです。けれどまだ13歳の子供でもあります。・・・技量の方はともかく、精神が成長しきっていないあいつらが現実を突き付けられたとき、潰れないかが心配なんです」

戦場にあるのはゴミの様な人の死だ。

どんなに大義名分を立てたところでその事実決して変わりはない。

彼女たちはきつと将来優秀なウィッチになる。だからこそ、精神が成長しきっていないうちに、トラウマになるようなことは避けない。

「俺はあの子たちに潰れてほしくないんです・・・けど」

「世界は彼女たちの成長を待ってくれる・・・わけではな

い、か」

「はい……」

だけれど、世界は彼女たちがその事実を受け入れられる程に成長してくれるまで待つてくれはしない。

今も、欧州のどこかで助けを求めている人がいるのだ。

その人たちを守る為に戦うのが我々の務めとだということは十分に理解しているのだが……

「それでも出来る事なら、そんな現実をみせてやりたくないのだらうっ。」

「はい……」

自分の考えている事が甘いという事は十分に解っている。

口では大きなことを言っておきながら、いざと言つときはその決断が出来ないのだから……

そうやって俺が悩んでいると……

「……ボス、参加しよう」

突然、声のする方を向けば、そこにはドアに寄りかかってガムを膨らましている大将の姿があった。

「つて、大将!？」

「…………ボス、この作戦に私たちは参加するべきだ。私たちにとつても、あいつらにとつてもな
…………」

「大将…………けど!」

さすがに將軍のいる目の前でいきなり横から出てきた彼女を武子が非難するように声を上げる。

將軍の方は大将の行動に特に何も言うつもりはないようだ。

「どのみち遅かれ早かれこの欧州は今以上に戦いが激しくなる。だつたら早いうちに知っておいた方がいい」

「わかっているさ…………けど」

「私はいつらがそれで潰れるほどヤワな奴らだとは思っていないぞ? 奴らなら乗り越えられる…………もう少しあいつらのことを信じてやれ」

それでもおれは…………

「やれやれ、どうもボスは過保護だな…………もしそれで潰れそう

になったら、私たちが支えてやればいい、私たちは仲間だろ？」

「大将……」

そつだ……大将の言う通りである。

「やれやれ……大将に言われて気づかされるなんてな」

そついうと自然と笑みがこぼれた

いくらかクラカウという名前を聞いてナーバスになっていたようだ

「ふふ、若いな君たちは」

そんな俺たちのやり取りを今まで黙って見ていたロンメル将軍が
ニツ口端を上げて笑いかける

「あ、し、失礼しました少佐！」

「いや、いいさ・・・それでは緋村少佐、答えを聞こうじゃないか」

ロンメル将軍のその真摯な目をまっすぐ見据えて俺は・・・

「はい・・・我々、義勇統合戦闘飛行隊はクラカウ奪還作戦に参加させていただきます」

そうだ・・・・・・・・

俺は彼女たちを信じてやればいい・・・・・・・・

そして、もし彼女たちが潰れそうになったのなら、そばできちつと支えてやる・・・・・・・・

それが、仲間なんだから・・・・・・・・

ロンメル将軍登場!!

やったぜ! イエーイ!!

え?

知らない?

これは失礼しました……

将軍はオリキャラじゃないですよ。

SWのアフリカの魔女にも出ていますが、将軍は実在した第二次世界大戦中の人物です。

彼の詳しい経歴を知りたい人は『砂漠の狐』で調べてみてください。
い。

彼がっこいいんですよ〜

………すみません、テンションがおかしな方へとってしま
いました

第零章、前話で言った通り此処から折り返し、一気に物語は加速します。

この後もよろしければお付き合い下さい。

最後になりますが、ご意見ご感想などありましたら遠慮なく送ってください。

ご感想を送っていただけたら、作者のこれからの励みにもなりますので……

というわけで、また次回！！

Ep. 12 Nacht von Tragödie des Winters

シムシムウ禅です！

Ep. 12 . . . やっちまったぜ . . .

ヤッちまったぜ . . .

ロンメル將軍にクラカウ奪還作戰に参加する折を伝えた数日後、

俺と武子、ラルはJG52基地の作戰會議室で行われているクラカウ奪還作戰の作戰會議に参加していた。

作戰の總指揮を執るロンメル將軍はもちろん、基地司令、JG52飛行隊司令のポニン少佐、陸戦部隊の指揮官、あとは周辺基地の司令なども會議に参加していた

「これが今回、偵察部隊が撮影したクラカウに展開するネウロイの映像です」

そういつて情報官がスクリーンに映像を映し出す。

「……………これは—」

その映像を見て室内がどよめく

スクリーンに映し出されていたのは……………

「『山』か……………」

忘れるはずがない

かつて扶桑海事変において、猛威を振るった超大型ネウロイ……

・通称『山』である

その黒いピラミッド状の巨体は小高い山など比較にならないほど巨大である

こいつの所為で扶桑はあわや壊滅というところまで追い込まれたのだ。

ちらりと横に座る武子に目を向ける

「……………」

武子はただじつとスクリーンを見つめていてその胸中はうかがえないがきつと考えていることは同じだ

彼女も忘れたくても忘れられないのだろう……

こいつの事も、あの時の事も……

「緋村少佐、このネウロイの説明を頼む」

「はい……………ではご説明します」

スクリーンの横に立つ

「……………このネウロイはご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、扶桑海事変においても確認された超大型ネウロイです。その大きさは見てわかる通りそこいらにある小高い山ほどあります」

そして説明を続ける。

「このネウロイの特徴はをその堅牢な防御力と他を寄せ付けない攻撃力、その攻撃の有効射程です」

「こいつの高出力ビームの有効射程は優に半径15000mを超えます。その出力も駆逐艦を一撃で沈めるほどであり、ウィッチのシールドを持ってしても精々一、二発といった所でしょう」

「更に極めつけは体内から無数の小型機を輩出できる能力です・・・これにより瘴気外の小型機の活動時間を大幅に引き上げており、まさしく移動要塞といっても過言ではありません・・・」

その驚異的な性能にその場の全員が押し黙る・・・

「緋村少佐、率直に聞きたい」

そんな中、一人手を上げる人物が一人

「なんででしょうか、ボニン少佐？」

「少佐達はどうやってこのネウロイを倒したのだ？ 扶桑が健在で少佐がここにいる以上、攻略法がない訳ではないのだろうか？」

ボニン少佐の言う通り、攻略法がない訳ではない……

しかし……

「……当時我々がとった作戦は至極簡単です。 当時は海上戦でしたので戦艦を囷に使用して小型機を誘導、その間に航空ウイツチで敵に接近、コアを発見して破壊しました」

「コアはどこにあるんだ？」

「おそらくここです」

そういつて、ネウロイの頂上付近を指す

「……ちょうどてっぺんか」

「……はい、一年前に現れた奴と同型であればここだと思われます。 もちろん、ここ以外も十分に考えられますが……その事も考慮して、今回コアを発見できる能力を持つリバウ航空隊の坂本一飛曹に助力を乞いました」

「コアの発見はそれでどうにかできるとして問題はどつやっって敵

のビームを掻い潜り、コアを破壊するのだが……少佐、君たちはどうやって破壊した？」

「……あまりほめられた方法とは言えませんが、戦艦からの艦砲射撃により敵のビームをそちらに引きつけ、その間に航空ウィッチが呐喊、コアを破壊しました」

「なんと……」

「リスクが高すぎる……」

「扶桑軍人は何を考えているんだ？」

とたん会場がざわつき始める

それはそうだろう……

もしネウロイが戦艦の艦砲射撃を迎撃していなければ、艦砲射撃とビームによって現場にいたウィッチが皆全滅しかねなかったのだ

一か八かの賭けにすらならない大博打である

といっても最初からそうだった作戦だったわけではなく、その時に起きたいろいろな不運が重なりそうになってしまっただけであるが
・
・
・

どうしてそんな作戦をとったかは身内の恥以外の何ものでもない
ので、語らないでおこう……

「……緋村少佐、ありがとう」

「は」

説明を終え、俺は席に座る

「諸君、今回の作戦にはこのような巨大な敵が目の前に現れたが、撃破した前例がない訳でないという事が解ってもらえただろう。……我々は何としてもこの作戦を成功しなくてはならない。その為には諸君ら現場の人間一人ひとりの協力が不可欠だ。皆そのことを胸に刻んでこれから働いてもらいたい……具体的な作戦の立案は明日だ。以上で本日の作戦会議は終わる、解散!!」

ロンメル將軍はそう締めくくり、会議は終了した……

「少佐」

会議が終わり皆がぞろぞろと部屋を出て行く中、ローラント基地
司令に声をかけられる

「ローラント司令どうかしましたか？」

「？君？に任務だ」

そういつて、一つの指令書を渡す……

渡された書類に目を通す。

「……………分かりました、すぐに準備します」

「……………優刀」

任務の仕度の為に自室に戻ろうとする俺の背中に武子が声をかける

その声はどこか憂いを帯びているのを感じる

「……………明日には戻る。それまでは隊のこと頼む」

そんな武子に俺は振り返ることなくそう告げて、足早にその場を後にした

「 　　こちら第一部隊、所定の位置についた。第二部隊、そ
ちらはどうだ？」

『こちらも所定の位置につきました・・・』

夜

満月が辺りを幻想的に照らし、静寂が包み込む森林の中をつごめ
く黒きモノたちがいた。

その数、あわせて二十

しかしそのモノ達は件のネウロイではなく、その出で立ち風貌は
紛れもなく人間のものではなかった

「よし、全員所定の位置についたな・・・これより、我々は
この基地のIS部隊、シユヴァルツェア・ハーゼ『黒うさぎ隊』が保有する第三世代型IS
シユヴァルツェア・レーゲン『黒い雨』を奪取する。」

そう……彼らの目的はこの先の基地にあるが保有する一機のIS、彼らはそれを奪取するために今回、？組織？から選ばれた精鋭部隊である。

彼らは林の中を音も立てず疾走する。

彼らのその動きは洗練されていて、よく訓練された者たちであると観る者が見ればすぐさま見抜けるだろう。

「よし、もうまもなく基地の側面だな……第二部隊、そこらはどうだ？」

先頭を走る人物が、別働隊に連絡を入れるが……

『・・・・・・・・』

返事が返ってこない。

「どうした？応答しろ」

何度も呼びかけるがいくら呼びかけようともそのインカムから第二部隊の声は全く聞こえてこない

「第二部隊どうした！？ 応答しろ！ 何があった！？」

「た、隊長！！、前方に人影が！！」

突如、横にいる部下の声に前に顔を向ける

そこには一つの人影があった

その人物には見覚えがあり・・・

「お前は第二部隊の・・・」

そう彼は通信の途絶えた第二部隊の隊員であった。

「おい何があった！！ 他の隊員はどうした！」

「・・・・・・・・」

その問いに答えない第二部隊の隊員・・・・・・・・しかし彼はただ一言・
・・・答えた

「……………つ……………つよ……………い」

その場に崩れ落ちる隊員

その後ろに一人の人影……………

「き……………貴様は!？」

そこにいた人物……………それは

「今すぐ退け、退けば命は助ける………退かぬのなら………斬る」

白い羽織を纏い、その手には満月の光を反射して青白く光る扶桑刀

「緋村……優刀………!!」

目の前にいる者の名を忌々しげに口にする

彼らの目の前に立ち塞がるのは……扶桑の白き龍と言われる
エース、緋村優刀であった

「なぜ、扶桑の白き龍がこんなところに!」

優刀がここにいることが信じられないといった風に呟く。

355

此処は彼が駐屯するJG52基地ではない……それなのに何故
ここに彼がいる

ここが襲撃されると解っていたのか？

いや、この任務は組織でも少数しか詳しく知らされていない極秘
任務であったはずだ。

それをたかが一部隊の隊長が知りえる筈がない

「もう一度言う・・・退け、さもなければ斬る」

優刀は先ほどの言葉を淡々と繰り返す・・・

彼のその蒼い瞳にはいつももの穏やかさも、ネウロイとの戦いの際の厳しさもなく・・・ただ、ただ、相手を刺すような重く冷たい殺気が籠っていた

今の彼を見て、誰がああ扶桑の白き龍と呼ばれる少年と判るだろうか？

優刀が一步踏み出す・・・

「・・・っ!!」

優刀が放つその言いようのない威圧感に兵たちは飲まれてしまう

「構うな！殺せ……え？」

隊長格がその重圧に耐え切れなくなつて優刀を殺すように命じようとした刹那、命じ終わるよりも速くその胴体が袈裟状に切り裂かれ、生々しい鮮血が噴き出る音が夜の暗闇に響き渡る。

その動きはまさに神速

「な……なっ」

断末魔をあげる暇もなく崩れ去る隊長を部下たちは呆然と見つめ、掠れた声を搾り出すしか出来なかった。

「う、撃てええええっ！！」

仲間の一人がそう叫ぶと、皆いつせいに優刀に向かって射撃を始める……しかし、すでにその場所には彼の姿はなく、放たれた銃弾は、まだかるうじて息のあった隊長にそそがれることとなりその命を絶つ事となった。

「た、隊長!!」

「ち、ちくしょう……よくも!!」

「皆同士討ちには気をつける!! 一か所に固まれ!!」

そうしている間にも次々と優刀のその凶刃によって仲間が倒れていく……いかに彼らが精強な部隊であっても、目の前の理解しがたい状況に彼らの思考が追い付かない。

「くそおおっ!!」

「いたぞ！　そこだ！！」

優刀の姿をとらえた一人が銃弾を放つも、それを左右のステップを踏んで回避し、その距離を縮める。

相手の懐に入り込むと、刀を下から掬い上げるように振るってその両腕を断つ

赤い鮮血が弧を描き、斬り離された腕が宙を舞う。

「うをおっ！！」

後ろにいた兵が銃では形勢が不利とみてナイフを抜き放ち、突き出す。

その一撃を体を時計回りに捻ることで避け、その際発生した遠心力を加えた斬撃を相手に叩き込む。

そのまま、離れた兵へ錐もみ上に体を回転させ突進、その胸を斬り捨てる。

背後に回っていた優刀の倍は背丈がありそうな兵が優刀にその組

んだ剛腕を振りおろすがそれに対し、優刀はそれを下から峰に手を添えて振り上げると同時に跳躍する。

跳躍の力を得た一撃は兵の固く組んだ両手を斬り離し、顎を切り裂く。

そして優刀は倒れ行く兵を踏み台にしてさらに跳躍、空高く飛び上がり、更に次の敵へ頭上から襲い掛かる。落下の力を利用した縦一閃の斬撃を放ち、相手の腕を切り裂く。両断された傷口から噴水のように鮮やかな朱い血が噴きだし、その朱が暗い闇の中では月の光に照らされてその美しさが更に映える。

「ぎゃっ!?!」

その一撃を食らった兵は無様な声を上げてその場に倒れる。

そして倒れた彼の眼前に鮮やかな朱を吸っても尚、その淡い蒼白い輝きが損なわれることのない美しい扶桑刀の切っ先が向けられる。

「答える……お前たちの目的はなんだ？ 何が目的でISを集めている？」

その切っ先を向けたまま、優刀はその兵に問いかける。

「それに我々が答えると思うか？……」

「だろうな……少なくともお前たちは半端なテロリストどもじゃない。よく統率のとれた屈強な兵士だ。この程度の事で口は割らないだろうな」

この程度の事か……

内心で兵士は舌打ちする。

部隊をたった一人で壊滅させたことをこの程度という……

では、壊滅させられた我々は一体なんだというのだろうか？

しかもただ壊滅させられたのではない……彼らが撃ち殺した

隊長以外の兵は皆、虫の息ではあるもののまだ息をしているのだ

もちろんあと三十分もすれば出血多量で死ぬことになるだろうが、それでもかろうじて生きている。

もちろん、偶然ではない。

緋村優刀こいとうは殺せるのに殺さなかったのだ

「……我々をどうする気だ？」

「決まっている……情報部隊に引き渡す。あと少しで到着するからな。そこで何かしらの情報が得られるだろう」

そう淡々と言い放つ優刀

その間も兵士から視線を逸らさず、にらみ続ける。

「……………!!」

突如優刀は自身に向けられる鋭い殺気に気が付き、高く跳躍してその場を飛び退く

刹那

優刀がいた場所には無数の銃弾の雨が降り注ぎ、その場にいた兵士たちを物言わぬ骸に変える

その雨がやみ、優刀がその場に降りるとその場所にいた兵たちはもはや何者であったかわからないほど・・・それこそ動物に食い荒らされたかのごときその亡骸を無残に晒していた。

「なんだよ使えねえ奴らだな・・・たかがガキ一人にやられやがって、こんなことなら最初から私一人でやりゃあよかったぜ」

「貴様・・・！！」

優刀は声のした方に視線を向ける……

そこに現れたのは……

「まあいいさ！あたしがこの餓鬼をさっさとぶっ殺してISを奪えばいいんだからなあ！」

その身を黄色と黒の毒々しい色で染め、背中から八つの脚を生やす異形のISだった

.....

やっちまっ た~~~~!!

あんだけるる剣要素出さないようにしてたのに、要素出まくりじやねえか!!

くそう.....俺のばか、なぜその衝動に勝てなかったんだ.....

だつてしょうがないじゃない、好きなんだもの B

Y楯無(み お風)

というわけで、次回もるる剣要素満載で続けてお送りします

最後に、ご意見ご感想の方お待ちしてます!

誤字脱字、批判その他もろもろバッチコイです!!

では次回！！

どうもシユウ禅です

今回も前回同様、要素満載でお送りします。

ではどうもー！

「嫌な月ね・・・」

武子は部隊のオフィスの窓から空を見つめる。

彼女の見つめている空には綺麗な蒼白く光る満月が浮かんでおり、その柔らかな蒼い輝きで地上をこの世のものとは思えぬ程美しく照らしていた。

しかしその幻想的な美しい光景も、武子のその黒曜石を思わせる黒く美しい瞳には、月に照らされている世界が酷く脆い虚構の世界に見えてしまっていた。

少し前まではこの夜空が儂くも美しく感じられていたはずなのに、今ではその儂さが酷く脆いガラス細工のようで・・・ちよつとしたことで今の温かみを感じる幸せな日常が壊れてしまうのではないかと不安に駆られてしまう。

そんなふうに一入窓の空を見上げています……

「窓辺に立って満月を見上げる一人の少女か……ふむ、絵になるな」

「ラル」

入り口の方から声がし、そちらに振り替えるとそこにはグンドユラ・ラルがいた。

「まだ寝ていなかったのか？……もう二時を回ってるんだぞ？」

ラルの言う通り、壁に掛けられた古ぼけた時計の短い針は確かに二時を指しており、基地全体が静まりかえっていることから昨夜が更けていることがわかる。

そんな夜が更けきっている時間にナイトウィッチでもなく、普段から規則正しい生活を心掛けている武子が起きているのは確かに珍しい事であった

「ラルこそ・・・こんな時間にどうしたの？」

だが、その規則正しい生活を送っているのは何も武子だけではない。

武子の目の前にいるラルもきちっと規則正しい生活を送る人間の一人で、その彼女がこうやってこの時間に起きているのであるから彼女も人のことは言えず、珍しい事この上ない。

「いや・・・なかなか寝付けなくてな、気分転換にコーヒーでもと
思ってた・・・武子も飲むか？」

「じゃあ、お願いしてもいいかしら？」

「わかった」

そうして給湯室に向かうラル。

しばらくしてラルはカップを二つ持って戻ってきた

「ほら」

「ありがとう」

ラルからコーヒーを受け取り、口に運ぶ。

「……おいしいわ、ラル」

「それは何よりだ」

互いに微笑む二人

「……」

「……」

しばらく二人は言葉を発することなく淡々とコーヒーを飲み続ける

「……なあ武子」

その静寂を破ったのはラルだった

「優刀あいつは今日も戦っているんだな……」

「ええ……」

そう、優刀かれは戦っている

どこの誰とも知れぬ者を、同じ？人？から護る為に……

「歯がゆいな……こうしてただ待っていることしかできないとは」

そう、こうやって二人で夜を明かすのは一度や二度ではないのだ。

以前から優刀に対して今回の様な任務に謎の襲撃者からの対象を護る任務が舞い込んでくるのが度々あり、その度に二人はこうやって夜を徹している。

そうして、ただ待っていることしか出来ないのが二人にとっては歯がゆくてしょうがなかった。

「そうね・・・けど、優刀は？それ？を望んでなんかいない」

過去に一度だけ共に連れて行くように言ったことがある

けれど、そのとき彼は頑としてその願いを聞かず、その理由を聞いた彼女達には一言だけ答えた

お前たちは？人々おれ？の？希望？なんだ

そう言って彼は出て行った。

その言葉に込められた彼の気持ちが嫌というほど分かってしまった彼女たちは彼に詰め寄ることはしなかった

そう、？私ウィッチ？達は人々の希望でなければいけない。

だからこそ、彼は人を傷つけるような事を私たちにさせたくなかったのだらう……

「まったく、人の気も知らないで……あいつは好き勝手やるから困る」

そう、ラルはふてくされたように言う。

その顔を見て武子は苦笑する

「ふふ、そう言わないの…… 私たちに来るのは、彼が帰ってきたときにいつものように笑顔で出迎えてあげる事だけなんだから」

「それはそうだが……ああ、まったく！ いい女を待たせるとは……あいつは女を泣かせるのだけは本当に上手いな」

「ふふ、そうね」

そう、私たちに出来るのは彼が帰ってきたときに笑顔
で出迎えてあげる事

う

だから、彼が無事に帰ってくることを祈る

「貴様……いつたい何者だ」

「優刀は突然現れた襲撃者を睨み付ける」

「ああん？ 知らねーのかよ、悪の組織の一人だつっの！」

そういつて、異形のISのパイロットはそその口端を釣り上げる。
パイロットのその容姿が整っている分、その笑みは一層不気味だった。

「その悪の組織は随分と人材不足なんだな」

「……ああん？」

優刀の一言にパイロットは今度はその眉根を釣り上げる

「お前程度の三下がISパイロットなんて……その悪の組織の程度が知れるな」

そういつて優刀はふっ…と鼻で笑った

「てめえ……このオータム様と？ファントム・タスク亡国企業？に喧嘩売るとはいい度胸してんじゃねえか」

「そうか、やはりお前たちは？ファントム・タスク亡国企業？だったか」

「！！ てめえ！嵌めやがったな！！」

その女　オータム　は自身が嵌められたことに気づき、怒りを露わにする。

しかし優刀はその怒りもどこ吹く風、さらに続ける。

「この程度の事にも気づかないなんて……やはり三下だな」

「てめえ……ガキの癖にふざけた真似しやがって！ てめえもこいつらみたいにミンチにしてやらあつ……！」

オータムはそう叫ぶと背中から生えた八つの装甲脚……その先端が割れるように開き、中から銃口を見せる

「っ……！」

その銃口が見えるや否や優刀は横に跳ぶ

直後、その鉛色の雨が襲う

「はっはあ……！ おらおらあ！ 逃げる逃げるお……！」

オータムは優刀の後を追うように、実弾射撃をを行う

優刀は何とか追いつかれまいと横に駆け続ける

そして、優刀が避け続けているとオータムは手にマシンガンを呼び出し、優刀に向けて放つ

先ほどよりも密度を増した鉛弾の豪雨が優刀を襲う

「おらおらあ！さっきまでの威勢はどうした！？ 逃げてばかりでよお！ そんなんじゃあたしに殺されちまうぞあ！？」

それを避け続ける優刀

「・・・ふっ！」

防戦一方の優刀・・・

躲し続ける最中、突如優刀は手に持つ扶桑刀を神速で地面をえぐる様に勢いよく振りぬく。

衝撃で土砂が巻き上がり、剣を振ったことによって生じた衝撃波と共にオータムに襲いかかる。

「はっ！！馬鹿があ！ 目くらましのつもりかあ！？」

たかが土砂・・・

そう思ったのが彼女の命取りであった

「がっはあっ！？」

突如、オータムの体に痛みが走る

その土砂はISのシールドバリアーを突き抜けてオータムに襲い掛かってきた

肉体は絶対防御という機能で守られている為に傷つきはしないが、その痛みまでは消してくれない

その事実には彼女が驚愕していると

「なっ！？」

突如、その目の前に優刀の姿が映る。

そして……………

紫電一閃

優刀は扶桑刀を右に薙ぎ、オータムの体に衝撃が走る

「ぐうっ!？」

「っ、浅い……………」

その場から飛び退くオータム

その表情は困惑と驚愕、怒りが無い交ぜになって醜く歪んでいる

「……………てめえ、一体どんな手品使いやった」

「……………」

オータムの殺意を込めたその問いに優刀は何も言わず、ただその蒼白い輝きを放つ刀を構え、殺意を持って答える。

「てめえ、何者だ！？ 答える！！」

「……………扶桑国空軍遣欧部隊第281航空隊隊長、並びに義勇統合戦闘飛行隊隊長、緋村優刀だ」

優刀は刀を鞘に納める

そして左足を後ろへ下げ、腰を軽く落とし、左手は腰に差した鞘を掴み構える……………

その構えを取った瞬間、優刀から今までとは比べ物にならないほどの殺気が放たれオータムを包む。

それは殺気といつには優しく……もはや、それとは一線を画する。

「っ……！！ くそがあああっ！！！」

身に走る恐怖に耐えきれなくなったオータムはその根源である者を亡き者にすべく、跳ぶ

宙に舞う影……………

「があああああつ！！？」

聞こえてくるのは自身の悲鳴……………

そして、オータムは宙を舞う……………

はらはらと、黄色と黒の破片をまき散らしながらその身は落ちていく……………

何が起きた？

オータムには理解できていなかった。

自分は奴を殺すために跳んだのではなかったのか？

確かにいま自分は跳んでいる　　けれど、そこには鋭さなくただ自分は墜ちて行っているだけだ

視界の端にはあの餓鬼の背中が映る……

なぜ、後ろ姿なのだ？

自分は真正面にいたはずだ

いくら考えてもオータムにはその理由が解らなかった。

そして、オータムの体は地面に叩き付けられる。

「がはっ！！」

その衝撃がオータムに襲い掛かる。

しかしその痛みは先ほどの痛みとは比べ物にならないほどであり、意識が飛びそうになる。

「あ……げ……」

(なぜ、絶対防御が発動しない?)

「そう言おうとしたが、言葉がうまく出ない

それどころか、全身の感覚がない……

動かせるのは目ぐらいである……

「さすがはISの絶対防御だな……あの一撃を食らって
もまだ生きているとは」

「……あ、が」

声のする方に目を向ける……しかし首も動かさないので眼だけがそこに向く。

視界の端に足が見える

「まあ、死んでいない方がこちらにも都合がいい……これが基地でいろいろとしゃべってもらって、覚悟しろ」

「……な……ぜ」

「ん？」

「な……ぜ……て……え……き……い……？」

なぜてめえが生きている

その言葉にしようとしたが、言葉にならなかった。

だが、彼には伝わっていたようで……

「俺が貴様を斬ったからだ」

そう答えた

抜刀術……

それが優刀がオータムに放った一撃の正体である

抜刀術……それは刀を鞘に納めた状態から抜き放ち相手に一撃を加える術であり、その最高度にまで高められた刀を抜くまでの体術の精妙さは極めて洗練された剣術で知られる扶桑剣術の中でも最高峰であり、一つの到達点とされている

その鞘走りからなる斬撃の速度と、強力無比な一撃の反面、外してしまうと無防備になる為、使い処の難しい極めて高度な技術でもある。

そして、その抜刀術は扶桑剣士の中でも指折りの実力を持つ彼が最も得意とする技であり、彼の流派の真髄である

優刀はオータムが飛ぶと同時に抜刀術の一撃を放った。

その一撃は彼女のISのシールドバリアーを裂き、絶対防御を極限まで発動させた。

しかしそれでもなお、その衝撃は収まることなくオータムに襲い掛かり、彼女を墜としたのだ。

「く……………そ……………が……………あ」

睨み付けるオータムの視線を無視し、その身を持ち上げようとす
る優刀

そこへ……………

突如、優刀に向けて一つの赤い閃光が襲い掛かる

「つう!?!」

間一髪、察知した優刀は飛び退くことでそれを避ける

しかしそのあとを追うように閃光は次々優刀に襲い掛かり、ついには彼を捉える。

「くっ!!」

障壁を展開し防ぐ

閃光が現れた方に目を向ける

鬱そうと生い茂る木々の間をその速度を落とさずに飛来する青い
機体

その間にも優刀への攻撃を辞めずにオータムとの距離を広げさせる

「迎えに来たぞ、オータム」

その青い機体はオータムのそばに降りる

「て・・・め・え・・・な・・・ぜ」

「あの？女？からの命令だ・・・作戦は失敗した、退くぞ」

そういつて、謎の襲撃者は優刀の方に顔を向ける

しかしその顔はバイザーに覆われていて口元しか見えない

「緋村優刀・・・貴様はいずれ私が殺す」

その言葉に込められた明らかな殺意・・・それを感じた優刀は同じように殺意を向ける

「貴様・・・何者だ？」

「答える必要はない・・・ではな」

「……っ待て!!」

そういつてオータムを掴み、飛翔する青の襲撃者はそのまま満月の夜に溶けていくように消えて行った……

「…逃げられたか」

襲撃者が飛んで行った方を睨む優刀、そして

「そこにいるのはわかっている、いい加減出てきたらどうなんだ？」

ある一本の木を見据える

その後ろから出てきたのは……

「あらら、ばれちゃった」

自身の部下である更識楯無、その人がいた。

「すごいわね、結構自信があっただけど……いつ気づいたの？」

「あの青い襲撃者が来たあたりだ……もう一つよく知った気配を感じたからな」

「そう……さすがね緋村優刀ね、なんだか私がここに来た意味

が無くなっちゃっわ」

楯無がここに来た理由……それは優刀と同じだろう。

彼女の家は代々、暗部に對抗するための暗部、そして彼女はその家の当主という事を優刀は知っている

「いや、そうでもないさ……」

優刀は刀を振り、その刀身についた血を払い落とし鞘に納め、息をなく

その場に漂っていた、言いようもない重い空気が消える。

「更識は内部の警備に当たっていたんだろ？ おかげでこっちは遠慮なく戦えた」

そういつて穏やかな笑みを彼女に向ける

「そう……」

その笑みに更識は同じように穏やかな笑みで返す。

そうやって返したものの、更識の内心はかなり動揺していた

全くこの男は……どうしてそういう笑顔を簡単に人に向けるのだろうか……

気を抜くと一瞬でその笑顔に落とされてしまうではないか。

ラルが女たらしと言っていたことが良く分かる。

「……それにしても驚いたわ。まさかISを生身で倒しちゃうなんて」

内心の動揺を悟られまいと本日一番の珍事に話題を変える

ISを生身で倒す……

ISが世界最強の兵器として認識されている今、目の前で起きた

出来事はそれがいかに幻想かという事を知らしめた。

無論、更識とてISが強力な兵器であって絶対無敵な兵器ではないと分かつてはいるものの、ウィッチであつてもまさか生身でISを倒す人物が現れるとはさすがに思わなかった。

それこそ奇想天外、青天の霹靂としか言いようがない。

しかし、それに対して優刀は・・・

「いや、今回はこっちを侮っていたから勝てたようなものだ。もう少し向こうが冷静だったら、こっちが殺されていた」

そう優刀は淡々と答える。

「そうね・・・」

更識は優刀の言葉に同意するように頷く。

今回はたまたま運が良かったただけだ。相手がこっちをなめてかか

り、優刀はその隙をついて一気に圧倒したに過ぎない。

実際、敵は空を飛んで上からじつくりと長期戦に持ち込めばよかったのだ。

もちろん、その対処方法もあるにはあったが、それを使うのはあくまでもどうにもならない時、最後の最後、いわば奥の手であり、それを使わなくて内心ほっとしている。

そしてさすがにもう一機出てきた時には覚悟した。

あのまま戦闘を続けていれば、間違いなく優刀は殺されていた。

いかに優刀といえもう一機ISを相手にするのはさすがに無理がある。

ましてや敵はアウトレンジから攻撃してきたため、生身の状態では相性が悪すぎる。

そういう訳で敵が退却してくれたことは行幸、あるいは奇跡としか言いようがない。

それでも・・・と更識は思う。

「それでも、やはりすごいわ・・・・・・・・さすがは最強の剣術、飛天御剣流の使い手ね」

「……………知っていたのか？」

「ええ、もちろん」

そして更識は語りだす……………

「飛天御剣流……………戦国時代に端を発する古流剣術で。その名が示す通り、その使い手は天空を飛翔するかの如き跳躍力を持って相手の遙か上空から斬撃を放ち、その身のこなしや斬撃の速さは「神速」とまで謳われる最強の剣術。ああ……………でもまさか幻とまで云われる剣術を使っている人に出会えるなんてびっくりだったわ！！」

「随分と詳しいな、おい」

嬉々とした様子の更識に優刀が少し引いている

それはそうだろう、まさかここまで更識が熱を上げて饒舌に話すのだ。

はたから見ればディープな格闘マニア以外の何ものでもない。

「それにしても、さっきの抜刀術すごかったわ。まさかあんな

一瞬で間合いを詰めて敵の懐を一閃、その衝撃に相手は宙をに浮いてしまふんですもの、その威力は推して図るべしね！」

引いている優刀を気にもせず、更識はそのボルテージを上げていく。

そんな更識を放っておくことにした優刀はある方へ目を向ける。

そこには先ほど、オータムによって肉塊へと変えられた兵たちの亡骸があった

「隊長……もしかして、後悔してる？」

いつの間にやら素に戻った更識がそう聞いてくる

「……後悔なんてしてないさ」

正確には優刀が殺した訳ではないが、そうなった要因の一つは自分にあると優刀は思っている。

「……結果はどうあれ、俺は彼らをこの手で斬った、その事実は変わらない。であるならば、そのことを後悔するなどあってはならない……彼らの命を奪ってきた以上、その行動には責任を持つべきだ……そしてそれを罪と思うなら、彼らの命を奪ったことは決して無駄ではなかったと、より多くの人々を救うことで示していくしかない……と俺は思ってる」

そう優刀は淡々と語る。

「そう……よかった」

そうしてまた更識は優刀に微笑みかける。

「ん、どうしてだ？」

「だってあなたはちゃんと自分のした事と向き合ってる。己の罪を認め、どう贖罪をしていくかきちっとその答えを持っているんだもの」

彼は優しい少年だ。

そのことを改めて更識は感じた。

彼はどこまでも優しくて、そして強い。

これが緋村優刀。

これが扶桑最強の剣士

力だけでなく、その心までが強くそしてきれいだ。

そう、更識がしみじみ感じていると、いくつかのの明かりが見えてきた。

優刀が言っていた情報部の者たちだろう。

「さてと……帰るか」

「ええ、そうね」

そうして二人はそちらに向かって歩き出す……………

不意に優刀が立ち止まり、亡骸に視線を向ける

そして……………

「せめて来世では幸せに生きてくれ……………」

頭上には蒼く光る満月……………

優刀のその願いは、優しい蒼い光の中に溶けて行った。

いかがでしたでしょうか？

すいません、実は最初から優刀に飛天御剣流を使わせようとはず
っと思ってたんです。

オリ主を書く以上はやはりかつこよくないといけないな〜とか思
っていたら、やはり剣術は外せないだろうとおもいまして・・・
で、結果最強の剣術とは？と考えたら一番に浮かんだのは飛天御剣
流でした。

でも、さすがにもろに出すのはいかがなものかな？ とか考えて
たんですけど自分で考えた技はどうにも優刀には合わず、結果開き
直って

.....もういいじゃん、使っちゃいなよ you!!

.....というわけです。

飛天御剣流は技もそうですが、その流派の理が以外にもウィッチ
との相性が抜群という事に気づきました。

今回は再びウィッチの話に戻ります。

最後にご意見ご感想の方、お待ちしております。

感想が来たら作者のテンションがキタ

(。。(

！！！！！！　　っで感じに上がって喜びますのでジャンジャン送
ってください

批判その他もろもろバツチコイです！

それでは、また次回！！

追記・・・PV33、787アクセス、ユニークアクセス5、
248人

ありがとうございます！！こんなに見てくれる人がいてくれて嬉
しくて嬉しくてしょうがないです。

これからもがんばりますのでどうかよろしくお願いします。

EP・14 譲れない誇り(前書き)

どうもシユウ禅です。

いつの間にか日付が変わっていました・・・

とうとうわけでEP・14です

それではどうもー！

クラカウ攻略作戦を一週間後に控え、JG52基地ではその所属する者たちが日に日に慌ただしく動き回っていた。

整備班、補給班はもちろんの事、基地の管理を任されている施設班も作戦に参加する部隊の受け入れ準備の為に奔走している。

もちろん義勇統合戦闘飛行隊の面々も同様で、本日到着する増援の受け入れの為に奔走していた。

「土田班長、整備班の方はどうですか？」

格納庫に赴いた俺は増援のストライカーユニットの受け入れの為に予備の発着台を準備している土田班長に聞いた。

「はい、発着台の準備も万端です。あとは彼女たちが来るのを待

つばかりです」

「そうですか……補修部品の方は？」

「はい、あちらさんが使用しているのは少佐の？十二試艦上戦闘脚？の生産モデル、？零式艦上戦闘脚？ですから今回は補給の手間がだいぶ省けました」

「それは良かった」

そうして班長はつぶやく

「……しかし零戦ですか、こっちにも回して貰いたいですね」

班長の言葉に頷いて同意する。

俺が使っている十二試艦上戦闘脚は名前からもわかる通り試作機であり、本国では既に採用モデルである零式艦上戦闘脚が量産され、リバウ航空隊を始めとする航空母艦所属の部隊に配備され始めている。

先日、同じように試作機のテストを受け持っていた武子の方は先行試作型の『隼』吉型から『隼』弐型へと変わったというのにいまだに自分の方はいまだ試作機であるというのは少し悔しかったりする。

ちなみに、俺が今使っているユニットはテストが終了した後、俺と土田班長、フェデリカが精度の高い部品をわざわざ選んで、一から組み上げたエンジンをつみ、フレームも出来る限り強化したカスタムユニットである。

おかげで出力は一割ほどアップしているのだが最近ではネウロイの方も強力になってきており、十二試の出力の低さに頭を悩ませているのだ。

ある程度は技術でカバーできるものの、やはり新型が出力アップ型があるなら早く乗り換えたいというのが本音だ。

しかし、一向にこちらに回ってくる気配はない。

まあ、ウチの部隊は空母所属の部隊では無い為、回ってこないのは当たり前なのだ……

「俺もいい加減零戦にしたいんですけどね……そうだ、いっその事エンジン付け替えるか？」

零戦は十二試のエンジンをより馬力のあるエンジンに載せ替えただけなので、やろうと思えば出来る事に気が付く

だったら、もっと馬力のあるマーリンでも乗っけようかな

うん、我ながら名案かも知れない

とか考えていると……

「マーリン乗っけようとか勘弁して下さいよ？……零戦のエンジンに付け替えるだけならいいですけど、マーリンなんか乗せたらそれこそ空中分解起こしますよ？ 何せ機体強度が弱いとこまで？ オリジナル？ と似ているんですから」

「……ばれました？」

さすがは土田班長

だてに扶桑海事変から俺のユニットの整備を担当していたわけじゃない

考えていることがバレバレである

「いい案だと思ったんだけどな……まったく、宮藤博士もなんでそんなところまで原型に似せるのかね、そんな必要ないだろうに」

「いい人なんですがねえ・・・」

二人して設計者のあの人のよさそうな顔を思い浮かべる。

宮藤一郎博士・・・・・・・・

魔導エンジンの権威で、エンジン背負い式であったストライカーユニットをエンジンをユニット内に納めるようにした理論「宮藤理論」を完成させ、「ストライカーユニットの父」とも呼ばれている扶桑の研究者である。

その博士が開発したのがこの十二試艦上戦闘脚なのだが、なぜ短所までオリジナルに似せたのかはテストパイロットとして共に過ごした事のある俺にも今一つ理解出来ない。

今度あったら文句の一つでも言ってみよう

そんなふうに二人して話していると・・・・・・・・

「少佐!！」

格納庫の入り口の方から聞きなれた声がして、その方へ視線を向けるとそこには……

「マルセイユどうした？ 弾薬の在庫確認は終わったのか？」

自身の二番機である新人ハンナ・ユステイーナ・マルセイユ少尉と一緒に在庫確認をしていたラルがいた。

「二人とも、在庫確認は終わったのか？」

「ああ……これがそのリストだ」

そう言ってリストを渡してくる

「ありがとう……やはり薄殻魔法榴弾マインゲシヨスが足りないな」

薄殻魔法榴弾マインゲシヨス……

その名の通り、魔法力を用いた炸裂弾でその威力は折り紙つきである。しかしその分製造が難しく、なかなか前線に行き渡らないという、一発が非常に高価な弾丸である

「ああ、フェデリカもそう思ってロマーニヤ上層部に掛け合っているらしいんだがな、必要十分な数を揃えるのは厳しいらしい」

ちなみにこの薄殻魔法榴弾マインゲシヨス、使用できる銃が限られており、フェデリカの使うMG151/Rの様な機関砲とでないと、発射時の衝撃に銃自体が耐えられないという非常に使い勝手の悪い、使う者に高い技量を求められる銃弾である。

「今のままだと精々一弾倉分が限界か……しょうがない」

無いものをあれこれ言ってもしょうがない、どのみち使うのはいつもMG151/Rを使っているのはフェデリカのみで一弾倉であれば彼女ならどうにかなる。

すでに申請はしてあるので作戦までに十分な数が間に合うようであれば無駄撃ちをしないラルに使うてもらおう。

「そうだ優刀、お前にお客人だ」

ふと思い出したようにラルがいい、入口の方を指さす。

「俺に?・・・」

ラルに促されそちらを見る

腕を組み、入り口に片膝を立てて寄りかかる見慣れない制服を着

た少女がいた。

あの制服は確か

「やっと見つけたわ、緋村優刀」

ふっと小さく笑みを漏らし、その頭のツインテールが揺れる。

こちらに視線を向けようとするが……

「嬢ちゃん、通行の邪魔だっ！！さっさとそこ退いてくれ！！」

「ご、ごめんなさいっ！！」

外から大きな荷物を運んできた整備員に怒鳴られ、すごすごと退く少女。

さすがは現場叩き上げの整備員、そんじょそこらのごころつきとは迫力が違う

整備員その迫力に先ほどの気取った雰囲気とは打って変わって完全にビビッていている

普段は気のいい整備員の人達も、今は大きな作戦前で皆気が立っている。

そんな中、入り口であんなふう立たれていたら邪魔以外の何もでもない。

怒られたのがよっぽど怖かったのか、他の整備員の邪魔にならないうようにそそくさとこちらに歩いてくる少女

少女は扶桑人とよく似ているが微妙に違う。扶桑人の温和で誠実さを感じさせる瞳とは似ていて非なるもので、その瞳は鋭角的で艶やかさを感じさせる。

体からはあふれんばかりの活気がとらえられ、彼女のイメージを表すとしたらズバリ、雌豹といった所である

「ん、んん！・・・久しぶりね優刀。元気そうで何よりだわ」

気を取り直してまたさっきの気取った口調で話しかける

けれど、その姿はエディータと同じくらい小柄な体格の所為で背

伸びした子供のようである。

その少女を見て俺は……

「……どちら様で？」

そう返すのが精一杯だった。

「へ？」

少女が呆けた顔をしている。

どうやら、彼女は俺のことを知っているようだが俺の方はまるで
覚えがない。

どこかであったらだろうか？

今一思い出せない。

「ちょ、ちよつと！．．私よ私！、覚えてないの！？」

「うん、人の顔は一度見たら忘れない方なんだけどな．．．
済まない覚えがない。どこかであったか？」

「そ、そんな．．．．．」

少女は目に見えて落ち込む．．．

彼女には悪いが本当に覚えていないのだからしょうがない。

「おい、優刀。思い出してやれ、いくらなんでもこの姿はいたたまれない」

その姿を不憫に思ったラルに思い出すようせかされてしまった。

「そんなこと言われてもなあ……」

すると……

「ま、まあ会ったのはもう5年前だもんね、覚えてなくても当然
だわ!」

そう結論付けて少女は復帰する

立ち直り早いな……

「私の名前はファンリンイン 鳳 鈴音……IS中連国家代表候補生よ!!」

「ファンリンイン 鳳 鈴音……おお、思い出した!」

その名を聞いて思い出す。

彼女の名前はファンリンイン 鳳 鈴音

扶桑の西南に位置する国、中華人民連邦の出身で小学四年の時に

実家の近所に転校してきてよく遊んだ仲であった

「ようやく思い出したの……一体、同級生を忘れるとかどういう頭しているわけ？」

「……いや、そんなこと言われてもな」

彼女が転校してきたのは小学4年の春ごろ……その年の秋に俺は全寮制の軍付属小学校に転校してしまったために実質一緒の学校に通っていたのは三ヶ月ほどで、後はたまたま外で会うくらいだったので覚えているという方が無理だろう。

421

「まあいいわ、思い出してくれたわけだしね」

「いや、悪い悪い……どうにも小学生の時のことは思い出しくくてな」

「ま、あんたの場合しようがないって言えばしょうがないんですけどね」

どっちら許してくれるよつだ。

そう言えば、こいつはさばさばした奴だったな……話しているうちにどんどん思い出してくる。

「それで鈴、お前いつの間に代表候補生なんかになったんだ？」

「アンタこそ、何、ウィッチ部隊の隊長なんてやってる訳？ ニューズで見たときはびっくりしたじゃない」

「ま、いろいろあってな。話すと長くなるんでそのうちにな」

そんなふう二人で話していると……

「優刀、いい加減に私たちの事も紹介してもらっていいか？」

「ああ悪い……鈴、彼女はうちの部隊のウィッチ、グンドユラ・ラル」

「グンドユラ・ラルだ……気軽にラルと呼んでくれ」

「ファンレイン 鳳 鈴音よ……私の事も鈴で構わないわ、よろしくね」

そう言って二人は握手を交わす

「でこつちが……」

「……ハンナ・ユステイナー・マルセイユだ。？少佐？の二番機を務めている」

やけに俺の二番機であることを強調して自己紹介をするマルセイユ

「ふうん、そうなんだ」

鈴はマルセイユをじろじろ品定めするよつに見る。

「初めまして、よろしくね」

「ああ、こちらこそ」

そうして挨拶を交わす二人の間で火花が散ったような気がした。

「ほら、二人ともそこまですておけ・・・それで鈴、お前は優刀に何か用があったんじゃないのか？」

「ああ、そうだったわ！ すっかり忘れる所だったわ」

ラルの言葉で鈴は用を思い出したのか俺に尋ねてきた

「ねえ優刀。アンタの部隊って今隊員が十一人って本当？」

「そうだが、それがどうかしたのか？」

「お願い！！ 私も部隊の一員として今度の作戦に参加させてっ
！！」

そう言って、バシンと手を合わせて拝むように頼んでくる鈴

それに対して俺は・・・

「ムリダナ」

「早っ！！！」

人差し指でバツテンをつくり即答。

「ちよっと！いくらなんでも速すぎでしょ！もうちよっと考える
とかない訳！？」

さすがに納得できなかったのか鈴は詰め寄ってくる。

「いや、今回はもつすでに増援を手配済みでな。増援合わせて1
4人・・・さすがにこれ以上は戦力過多になるから俺の指揮下
には置けない。」

「そこを何とか！！」

さらに深く拝む鈴。

「て、言われてもなあ・・・大体なんでわざわざそんな頼みをしてくるんだよ？ お前のほかにもISは来ているんだろ？」

さすがに鈴一人でこの作戦に参加するとは考えられない、ほかのISも来ている筈だ。

その者達は今回作戦に参加しようとはしないのか？。

代表候補生で欧州に派遣されているという事は専用機のデータ取りもかねてなのだろうから余計に部隊単位で動くべきだろうに。

そんな疑問を感じていると鈴が観念したように口を開く。

「・・・実はもともと中連わたしたちはブライク攻略作戦に参加するつもりだったの。けれど向こうの作戦司令部に行ったら今回の作戦にIS部隊は要らないって言われて追いつ返されちゃったのよ」

「・・・なるほどな、それでこっちに？」

「ええ、でもこっちでも似たような反応でね・・・作戦の総予

備部隊として運用するって、言われたわ。」

なるほどな……

ロンメル將軍のその判断は正しいと思う。

ISのパイロットは戦闘機パイロットやウィッチ達と比べると明らかに稼働時間が少なく、錬度が低い。

代表候補生と言われる者たちもその例にもれず、前線ではその錬度の低さが指摘されてきた。

錬度の低い兵がいるというのは戦場では弱点以外の何ものでもない。

だったら、予備部隊として後方で待機してもらった方がよほどいい。

「でもそれじゃ国としての面子が丸つぶれだから何とかして作戦

に参加させてくれって言ったら・・・何とか専用機持ちは前線に立たせてもらえることになったんだけど・・・」

「何処の部隊も専用機を扱いたがらないという訳か・・・」

「ええ・・・」

実際、土壇場で入れると言われれば、かなり嫌がられる。

ISを部隊でどう扱えばいいのかというのも問題の一つなのだろう。

更に専用機と言えはいろいろ特殊である為に特にである

だからISとの混成部隊であるうちに何とか入れてもらおうとしたのだろうが・・・

「でも、やっぱり無理だ。」

今回、あの超大型ネウロイ？山？がいる

俺達はその山を破壊する挺身部隊である。

高度な連携が求められる以上、そこに不確定要素を入れたくないというのが本音だ。

「ああもう……どうすればいいのよ……」

がーっと叫び声を上げる鈴

……そこへ

「……濟まない、緋村少佐はいるか？」

入口の方から毅然とした澄んだ声が聞こえ、

JG52第二飛行隊隊長、ゲルトルート・バルクホルンが現れた

「トウルデー、どうかしたのか？」

「ああ、作戦の細かい確認をしておこうと思ってな、お前達の露払いをするのが我々の任務だからな、不備があってはまずい。」

相変わらず生真面目な奴だ。

そう思っていると……

「優刀、彼女は誰だ？」

トウルーデは鈴に目を向ける

「ああ、彼女は……」

「初めまして、私はIS中連国家代表候補生の鳳^{ファンリンイン} 鈴音よ、よろしく」

「ゲルトルート・バルクホルンだ。よろしく」

挨拶を交わす二人を見てふとあることを思いつく。

「そうだトゥルーデ・・・確かお前の部隊一人欠員出てたよな？」

「ああ一人風邪をこじらせてな・・・今は後方で療養している」

「だったら、鈴をトゥルーデの部隊に入れてもらえないか？」

「・・・どういふことだ？」

トゥルーデに事のあらましを説明する

「なるほどな・・・事情は良く分かった」

そう言ってトゥルーデは頷く

「え・・・じゃあっ!!」

鈴の顔に喜色の色が浮かぶ。

「済まないが・・・私たちの部隊に入れるわけにはいかない」

トウルーデは冷たく言い放つ。

「そんな・・・」

「今回の作戦いかんでは欧州の運命が決まる・・・そんな作戦で不確定要素の多い者を入れるわけには行かない」

「だろうな・・・」

「ちよっと優刀！最初からわかってたの!？」

鈴にもものすごい形相で睨まれる。

目にはうつすらと涙が見える

それはそうだろう、はたから見れば俺は鈴に希望を持たせという
思いつきりどん底にたたき落としたのだ我ながら酷いとは思う。

だからこそ俺は彼女に？ある提案？をする。

「だからトゥルーデ……一つ提案があるんだが」

「なんだ？」

「一回、こいつの戦いを見て決めたらどうだ？」

「なんだと？」

「一回、こいつの戦いぶりを見てから決めても遅くはないんじゃないか？」

要するに実力が分からないから扱いに困るわけで、だったら実力

を見せてしまえばいい……

それで実力が無いようであれば断ればいいし実力があろうと思っ
たら使えばいい

至極単純なことだ

「なるほど……よし、いいだろう」

トゥルーデは納得したように頷く。

「決まりだな」

「早速、準備してくる」

そう言って格納庫を出て行くこととするトゥルーデ……

「ちょっと待った」

その背中を声をかけることで引き止める

「なんだ、まだ何かあるのか？」

「おおありだ・・・お前が戦ってどうする」

「実力を見るんだ、自分で戦ってみなくてどうする」

至極真つ当な意見を言うトウルデー

しかし・・・

「鈴、お前ISの稼働時間ってどれくらいだ？」

「えっと・・・300時間ぐらいかしら？」

やっぱり……思った通りだ

「……優刀、本当に使えるのか？」

かなり訝しむトゥルーデ……

戦闘機パイロットにしてもウィッチにしても前線に出ている新人で総飛行時間が300時間程度という新人はまずいない。

だからこそトゥルーデは訝しんでいるのだが

「俺にもわからないから見てみるんだ」

百聞は一見にしかず……

とりあえず見る。

話はそれからである

けれど300時間程度の新人が、カールスラントでも指折りのエースであるトゥルーデ相手に勝負を挑んでも瞬殺されるのがオチだ。

だったら、もっと技量が近い者で全力を出させたほうがいい

だから……

「マルセイユ、お前が相手しろ」

傍にいる自身の二番機、マルセイユに声をかける

「ええええっ！？ 私が相手するのか！？」

まさか自分が戦うとは思っていなかったのか、マルセイユはかなり驚いている。

「お前がどれくらい成長したか確認したかったからな、ちょうどいい機会だ……マルセイユ、俺の二番機ならこの程度の試練乗り越えて見せる」

「少佐……」

その俺の言葉にマルセイユは頷く

「そこまで言われたらしようがないな……いいさ、やってやる!」

「上等じゃない、やってやるわよ……私が勝ったら作戦に参加させてくれるんでしょうね?」

「ああ、貴様がマルセイユに勝った時は私の部隊に入れて作戦に参加させてやる」

「ふ、ふふ……」

「ふ、ふっふっふ……」

火花を散らす二人……

二人には互いに譲れないプライドがある。

・
・
・
・
・
その二人の互いの誇りをかけた戦いが、今始まるうとしていた・
・

Ep-14 譲れない誇り（後書き）

セカン党のみなさんお待たせしました。

鈴、満を持して登場です

クロスである以上、きちつと原作キャラ同士の絡みも書かねばいけないなあと思ひまして原作を読み返したところ、

鈴の意外に冷静な部分を発見しまして、予定より早い登場という事となりました。

原作を読み返したおかげで危うく鈴は唯のかませ犬になる所を何とか脱出しまして個人的には良かったなと・・・

というわけで今回はマルセイユ対鈴です。

今回はバトルメインで書きたいなと思います

最後になりましたがご意見ご感想、お待ちしております！

ではまた次回！！

Ep. 15 Eigene Magie (前書き)

どうもシユウ禅です。

遅くなってしまい申し訳ありません

ではどうぶー！

太陽がJG52基地の真上に入った頃、

基地の滑走路には模擬戦の話を聞いて集まった大勢の人だけが出来ていた。

人だかりの視線の先には二人の人物。

マルセイユと鈴だ。

マルセイユはストライカーユニット、メッサーシャルフBf109-Eを装備して、

鈴はIS『シエンロン甲龍』を身にまとい、模擬戦開始の合図を待っている

鈴のIS、『シエンロン甲龍』は更識やフェデリカのISの無駄のない洗練されたフォームとは違い、アンロック・ユニット非固定浮遊部位の棘付き装甲が特徴の攻撃的で無骨な印象の機体だ。

「ルールは単純、鈴はシールドエネルギーが零、マルセイユは規定値以上の魔法力使用で撃墜判定とする。装備は自由！同高度ですれ違った時点から模擬戦開始よ」

「了解ッ！」

審判は例によって武子

ルールを説明すると彼女は一足先に上空へと飛翔する

「では、始め！」

優刀の開始の合図とともに二人は蒼穹へと飛翔する。

「さて……どっちが勝つかな」

二人の駆けあがる姿を見てラルは呟く。

「……………」

その二人をじっと睨むトゥルーデ。

「……………トゥルーデ不満そうだな？」

「……………そんなもの別にない」

その声には若干のいら立ちが含まれていて不満があることは誰の目に見ても明らかであった。

「やれやれ、まったくいい加減にしたらどうだ？ 焼きもちなん

てらしくないぞ?」

ラルはからかう様にバルクホルンに笑みを向ける

「なっ!!! だ、誰がマルセイユに焼きもちを焼くか!!!…私はただ、マルセイユが未だに軍人をやっているのが信じられないだけだ。」

「また、ずいぶん前の話を……」

「優刀はあんなチャラチャラした奴の一体どこが気に入ったんだ? それこそ信じられん」

ドンドンぶてくされていくバルクホルン。

その姿を見て、ラルは思いっきりからかいたい気分であったが今は置いておく。

「はっはっはっは!!! 確かにぶっ飛んだ奴ではあるな……配属初日に他の部隊の模擬戦に乱入する大馬鹿者なんて早々いない」

当時のことを思い出し、大笑いするラル

ハンナ・ユステイーナ・マルセイユ……

義勇統合戦闘飛行隊に所属する新人でその入隊にはひと悶着あったのだ。

彼女は本来はバルクホルンの部隊JG52第二中隊に所属する筈であったのだが、配属初日に他部隊である義勇統合戦闘飛行隊の模擬戦に突如乱入し、隊長であった優刀に模擬戦を申し込むということでもないことをしでかしたのだ。

「本来ならとつくに辞めさせられていたんだぞ？ それをお前たち二人は辞めさせないように嘆願するなど……あんな奴の為に頭を下げたお前たちが信じられん」

「なに、せっかくだから義勇統合戦闘飛行隊に貰いたいといっただけだ」

飄々と返すラル。

返されてしまってさらに不貞腐れるバルクホルン。

「……ま、配属時にはいろいろ問題があったのは確かだが今は特に問題も起こしていないじゃないか」

「確かにそうだが……優刀に気に入られるために猫を被っているだけかもしれないだろ！うん、そうだ、きっとそうに違いない！」

やっぱり焼きもちを焼いているんじゃないか……

そう言ってやろうと思ったが、ラルは面倒なので止めた

「まあ、気持ちはわかるがな……真面目な話、これからはあいつ奴が必要になってくる」

「確かに空戦技術は大したものだと思うが、お前が二番機の座を明け渡すほどではないだろうに」

バルクホルンの言う通り、マルセイユ達新人が配属される前に優刀の二番機に就いていたのは他でもない、目の前にいるグンドユラ・ラルであった。

「欧州でも五指に入るお前たちが目をかけるほどの腕を持つているとはとても思えん」

「なにもそれだけであいつを優刀の二番機に押しした訳じゃないさ」

「…どういう意味だ？」

構わずラルは続ける。

「これからの時代、ただネウロイを倒すだけでは人々に希望は与えられない。もっと確かな希望が必要なんだ。人々に生きる希望を与えられる太陽みたいなやつが必要なんだ。あれには華があるからな……磨けば化ける」

「だからお前は優刀の二番機の座を明け渡したのか？」

「あれは周りがどうこう言うよりもきちつとした道しるべを示してやる方が伸びるタイプだ。優刀の背中を追わせた方がまっすぐ成長するさ」

どこか自嘲するような笑みをたたえ、ラルはそう語る

そのラルの確信めいた口調にバルクホルンは押しだまる。

「ま、なにせよ、その判断が正しいかったのか、そうでなかったのかはこの模擬戦で分かるさ……」

そう言ってラルは上空に目を向ける。

バルクホルンもラルに従い空を見上げる。

そこでは、件の二人の空中戦が激しく繰り広げられていた……

「はあっ!!」

掛け声とともに鈴がその手に持つ青竜刀マルセイユに突撃、一気に振り下ろす。それをマルセイユはシールドを斜めに展開することで突撃の勢いを乗せた青竜刀の軌道を逸らす。そしてマルセイユはMG52をすれ違いざまに放ち鈴から距離を取る。

至近距離で攻撃を受けることとなった鈴はそのシールドエネルギー

―を大きく削られ体勢を崩すがPICですぐに体勢を立て直す

鈴は通り抜けたマルセイユの後を追い、その背中に青竜刀を振り落す

その攻撃をマルセイユは左にロールすることで避ける

「やるじゃない！」

「そういつお前こそ！」

二人は絡み合う様に上空へ昇る……

「はあっ！！！」

鈴はもう一刀青竜刀を呼び出しそれを連結、高速回転させてマルセイユに向けて青竜刀を振るう。

それを障壁で受け止めるマルセイユ。

しかし、回転の威力を加えられたその連撃にマルセイユは徐々に推され始める

（く、さすがに近距離格闘戦はこちらが不利だ。ここは距離を取って）

マルセイユは牽制弾を放ち鈴から距離を取ろうとする。しかし・

「甘いわッ!!」

突如、一非固定浮遊部位のカバーがスライドして開き中の球体が光った瞬間、マルセイユに殴られたような衝撃が走る

「ああっ!!」

マルセイユはその衝撃に半ば意識が飛び、錐もみ上に落下する。

「クッ!!」

何とか意識を取り戻して体勢を立て直し、墜落を免れる。

「今のはジャブだからね」

不敵な笑みを浮かべる。

「くっ!!」

見えない衝撃がマルセイユを襲う。当たる直前に障壁を展開することでは何とか防ぐが魔法力を大きく削られる。

形勢は一気に鈴の方へと傾きつつあった

「ちょっと、なによあれ」

ラルとバルクホルンの二人から少し離れたところで模擬戦を見ていたエディータは呟く。

それに答えたのは皆が上空に目を向ける中、一人下を向きキーボードをたたいているフェデリカだった。

「？衝撃砲？ね・・・空間自体に圧力をかけて砲身を形成余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾にして打ち出す　　なかなか中連もまたもな兵装を開発するじゃない」

うんうんと感心したように頷くフェデリカ。

「そ、そうかしら？」

「何言ってるの、少なくとも楯無の水を自由自在に操ろうっていうよりよっぽど現実的で堅実な兵装よ」

「私にはどっちもトンデモ兵器よ・・・」

会話の最中であっても二人のそれぞれの視線は動かされることなく、エディータの視線の先ではおそらく見えない衝撃を避け続けているのだろう、マルセイユが右へ左へと不規則な機動を取っている。

「なににせよ、ハンナは苦しくなるね」

隣にいるクルピンスキーが呟くとそれに答えるようにドミニカが続ける

「……ああ、マルセイユの奴はあの見えない衝撃を警戒して常に障壁を張り続けなさいといけなくなった。」

「砲身も見えない以上どこに向けられているかも分からないからね。タイミングもつかめないっつらないよ。」

「極めつけはあの射撃角度の広さね。」

エディータの言葉にクルピンスキーとドミニカは頷く

「うん、……後ろを取ったハンナが吹き飛ばされているのを見ると砲身射角はほぼ無制限。これはなかなか攻めづらいね。」

「ああ……。」

三人が戦況を観察している中、一人ふと思い出したようにフェデリカが呟く

「……ねえ、そもそもなんで優刀はマルセイユに今回相手をす

るよつに言ったのかしら？」

「と、言つと？」

「確かにマルセイユはよく優刀の二番機として良くやってるわ。・
・けど相手の実力を測りたいというならやっぱりバルクホルンが
やるべきよ」

「確かに・・・」

フェデリカのその言葉にクルピンスキーとジェンタイルは頷く。

バルクホルンの部隊に入るか否かを決める模擬戦であるはずなのに、その隊長であるバルクホルンではなく、他の部隊の隊員であるマルセイユが相手をしているという不可解な状態になっているのだ。

疑問に思つのが普通だろう

「謎だね」

「優刀の事だからあの代表候補生を鼻屑しているわけじゃないんでしょうけど・・・」

こと戦闘において優刀がそんな出来レースをする事など、ありえないという事は彼女たちが一番よく理解している。

そんなふうには三人が頭を捻っていると、その答えは意外なところから帰ってきた。

「ああそれはね、マルセイユの固有魔法がなんなのか確かめようとしているのよ。」

答えたのは新人教育係のエディータ・ロスマンその人。

「どういうことだいエディータ？」

今ひとつわからないといった風のクルピンスキーはその真意を聞こうとエディータに聞く。

「言った通りよ・・・彼女は何かしらの固有魔法を持っているってことは解っていたんだけど、それがなんなのかははっきりと解っていないの」

固有魔法・・・それはウィッチの中でもごく稀に発現することがある稀有な技能の事である。

様々な国のウィッチが集まる義勇統合戦闘飛行隊でも現在固有魔法を有しているのは優刀、武子、下原、ハルトマンの四人だけ。

具体的に言えば、大気を扱えたり、より遠くのものを見渡せたり出来る技能の事なのだが、どれくらいの種類があるのかも不明であり、固有と言っても同じ能力を持つウィッチも多々いる。

「それで彼女が配属された初日の訓練で？検査？してみたんだけど・・・」

「ねえ、検査つてもしかして？あれ？？」

「そ、？あれ？」

フェデリカはマルセイユが配属された日に行われた？歓迎会？を思い出し顔をひくかせる。

その日、マルセイユ達三人が配属された日に優刀は歓迎会もとい、ペイント弾による模擬戦を行った。

しかしその模擬戦は通常の模擬戦とは違っており新人たち三人が先任と延々と戦い続けるという極めて過酷な内容であった。

終わるのは隊長である優刀が終了というまで

それまで先任の背中を追いかけ、銃弾を躲すという行為を延々と繰り返すのだ。

「・・・あれが検査って、いくら天狗になっていたからってマルセイユも可哀想に」

その模擬戦で最後まで戦っていたのはマルセイユであり、また全身をペイント弾でオレンジ色に染まって半泣きになったのは今や酒席でのいい肴である。

「鼻の押し折るにはちょうど良かったわ。・・・結局あの時分かっただのは空間把握能力と？魔弾？が優れているという事だけで、その能力も他と比べると中途半端でねえ・・・だから私も優刀もどっういう方向性で育てたらいいのか解らなくて。」

困ったわ、と手を頬にあてため息をつくエディータ

「今までは基礎を教える段階だったから良かったけど、そろそろ

それぞれの特徴を生かした戦い方を見つけてあげたくてね」

この固有魔法があるのとないのとは戦い方もおのずと変わってくる。

例えば優刀は固有魔法の大気操作で周辺大気を操作して圧倒的な機動性を利用してのヒット&アウェイであったり、武子の三次元空間把握能力を生かした集団戦法など・・・各々が自分の固有魔法を活かした戦い方をしている。

「なるほど・・・で、ボスはこの模擬戦を利用してマルセイユの方向性を見極めようとしているのか」

優刀の考えていることがようやく分かったという風に呟くジェン
タイル。

「そついつ事」

人の真価は極限状態で試されるとはよく言ったもので、優刀はこの模擬戦を利用してつとより早くマルセイユの固有魔法の正体を掴んでしまおうというわけだ

「けど、よくエディータ気づいたね」

「当たり前でしょ、私は彼女たちの教育係よ？ 優刀と一緒に彼女達を指導しているんだから見破れるのは当然じゃない」

フフン、と年の割には小柄ともいえる体で胸を張る彼女

しかしその姿はどう見ても褒められたことを喜んでいる小学生である。

「そう言えばそうだったわね」

「すっかり忘れていたな」

「・・・貴方達、私の事なんだと思ってたの？」

「マセた子供ガキ」

「手を出しても大丈夫な 学生」

「合法ロリ」

スココーンッ！！

チヨークが飛んできて三人の眉間に突き刺さり、その場に倒れ悶える三人。

「まあなんにせよ、優刀の目論見は功をそうしたようね」

その三人を置いておいて、エディータはマルセイユに目を向ける。

「まったくもう・・・手のかかる教え子なんだから」

その言葉とは裏腹にエディータはどこか満足そうに呟いた

Ep-15 Eigene Magie (後書き)

遅くなつてしまい申し訳ありませんでした!!

(THEE扶桑・土下座)

どうも季節の変わり目に風邪を拗らせてしまいまして、そんな中で講義やらバイトやらで書く余裕が無くてもう……

皆さんも体調管理には気を付けてください。

申し訳ないついでにまだこの回は続きます。

ホントはこのEp-15で終わらすつもりだったんですが、あれもこれも入れてたらいつの間にか一万字を超えちゃいまして……

さらに分けることになりました。

申し訳ありません……

再び (THEE扶桑・土下座)

最後になりますがご意見ご感想お待ちしております。

24時間365日、料金はプライスレスでスタッフ一同お待ちしております
ております

それではまた次回!!

Ep. 16 Knftige Augen (前書き)

どうもシユウ禅です！

というわけで第十六話です・・・

ではどうも！

「このおおおおっ!」

鈴の叫びと共に肩部ユニットである衝撃砲叫びと共に肩部ユニットである衝撃砲《龍咆》の砲口が開く

その砲口から放たれた衝撃波はマルセイユを吹き飛ばし、その魔法力を大きく削る

. 筈だった

その一撃をマルセイユはロールして躲し、鈴にその銃口を向ける
その瞬間、鈴は迫り来るであろう銃弾を回避するために後退する
が

「きゃあっ!?!」

その攻撃を避けることが出来ずにシールドエネルギーを削られる
お返しとばかりに龍咆をマルセイユに放つが、またもや回避され
てしまった。

「ああ、もうさっきからなんで当たらないのよ!?!」

鈴は明らかに焦っていた

模擬戦開始直後は衝撃砲と青竜刀による波状攻撃で圧倒的に優位
に立っていたのだが

今ではその衝撃砲が躲されるようになり、波状攻撃も精彩を欠い
てきた。

(どうする? こっちの射撃武器は龍咆だけ・・・エネルギーが切
れたらこっちの武装は『双天牙月』だけになる)

衝撃波を弾丸としている『龍咆』でも無限に撃てるわけではない。エネルギーが底をつけば撃てなくなる

いくら甲龍シエンロンが燃費と安定性を主眼に置いて開発された機体とはいえ今だ試作機であることには変わりなく、エネルギー消費型の兵装を装備している以上、第二世代型と比べるとやはり多少稼働時間に不安が残る。

しかも相手はどういう訳か見えない筈の衝撃砲を避け始めているのだ。

油断はできない。

（あつちが射撃型……下手に突っ込んでいったら蜂の巣ね）

衝撃砲があてにならない以上、しばらくは様子を見るしかない

何せこの戦いには作戦に参加できるかどうかかかっているのだ。

……負けるわけにはいかない。

鈴は別に国の面子がどうかそういうものには一切興味はないし、代表候補生だからというアホ臭いプライドもない。

そんなことよりも鈴にはもっと大事な事があった。

扶桑海事変・・・・・・・・

その末期、扶桑はネウロイの大攻勢によりウラル方面にあった戦線を裏塩まで後退させられ、大陸側にいた住民は次々に本土への避難を余儀なくされた。

鈴の家は中華料理屋で当時は裏塩に店を構えており、鈴の家族もまた裏塩からの避難を余儀なくされた。

幸い扶桑軍の対応が早かったおかげで鈴たち家族は無事だったが、戦争が終わり裏塩の町に戻るとそこには信じられない光景が広がっていた。

あの綺麗だった港町の風景は見る影もなくそこに広がっていたのは・・・・・・・・

ネウロイ蹂躪しつくされて瓦礫の山となった町の姿だった

今まで家族と幸せに過ごしていた町が破壊しつくされていたのだ・
・
・
・
・

その光景を見たとき自然と涙がこぼれた。

その後、紆余曲折あつて中華連邦に帰国することとなり、故郷で受けたIS適性検査で適性が高いことがわかるとすぐさま鈴はIS操縦者になることを選んだ。

もう自分の街を失うような悲しい思いはごめんだ。

自分に戦う力があるなら自分は戦う。

ネウロイの驚異から、国を、人を、両親を守りたい……

その思いで鈴はISパイロットになった。

必死にISのことを学び、厳しい訓練にも耐えてきた。

そうして厳しい訓練に耐え、代表候補生に選ばれて戦闘データ収集の為に欧州に派遣されることになった

けれど、欧州で待っていたのは作戦参加を許されず追い返されるという冷たい現実だった。

もちろんそんなこと納得できるわけが無く、何とか作戦に参加させてもらおうと食い下がったが……

？貴様らの様に戦争をゲームかなにかと勘違いしている連中になれ以上兵を傷つけられてたまるか？

指揮官にそう言われ追い返されてしまった。

戦争をゲームか何かと勘違いしているつもりは全くない。けれど一部の心無い人たちの所為でそう思われているのがたまらなく悔しかった。

だからこそ、与えられたこのチャンス……

モノにして少しでも認めてもらわなければならない。

でなければ他に自分と同じような気持ちでIS操縦者になった者たちもきつと悔しい思いをする。

そんなことは絶対に許せなかった。

「はああっ！……！」

だからこそこの戦いは何としても勝ってみせる……

全ての思いを込めて鈴はマルセイユに向けて最大出力の衝撃砲を放った。

「すごいですねえ・・・マルセイユさん」

「うん、あんなの真似出来ないよ」

私は感心している下原が漏らした呟きに同意する

何せ見えない攻撃を避け続けているのだ。

そんな芸当はまず普通の人間じゃできないだろう。

二人の視線はただひたすらマルセイユの機動を追っている。

そんなふう上空を見つめていると...

「ほう……あれが優刀の言っていた面白い？新人？か……」

「え？」

横に見慣れない人物が立っていた。

すらりとした長身に腰まである艶やかな黒髪、端正な顔立ちに浮かぶ微笑みは優雅で、自分たちがここにいるのは場違いなのではないか、そう思わせるほど目の前にいるその女性は気品に満ち溢れていた。

「あのう…すみません、あなたは一体どちら様でしょうか？」

恐る恐る目の前にいるその女性にそう尋ねる。

その下原の問いに対してその女性は……

「ああすまない、邪魔をしてしまったかな？ 私はアドルフイーネ・ガランド……今回の作戦に参加する部隊の一人さ」

「ええ!？」

その名を聞いてエーリカ達は驚く

アドルフイーネ・ガランド……

ヒスパニア戦役から活躍するウィッチで、対地攻撃ウィッチとして勇名をはせ、現在はJG26の司令を務めるカールスラントを代表するウィッチの一人である

今回の作戦で航空部隊の総指揮をとるためにこつちに来るとは朝のブリーフィングで聞いていたのだが…まさかこんなふうに対面することになるとは夢にも思わなかった。

「し、失礼しました!!」

慌てて敬礼、しかし彼女はそれをにこやかに手でやんわりと制する

「ああ構わないでいいよ、今は公式な場じゃないからね……それにしても君たちが緋村の所に入った新人かい？」

「は、はい！」

思わず声の上擦ってしまった。

新米^{ひよっこ}ウィッチである私達からすれば雲の上のような存在である彼女が何の前触れもなくひよっこりと目の前に現れたのだ……驚くなどという方が無理だ。

そんな私達の緊張を知ってか知らずか、彼女 ガランド中佐はその青く澄んだ瞳で私たちの瞳を覗き込む……

「うん……いい眼だ。退屈しのぎの散歩で君たちの様な将来有望なウィッチに出会えるとは 私の運も捨てたモノじゃないな」

微笑む中佐

その動作一つ一つが優雅で気品に溢れており、私たちはドギマギしてしまう。

そこへ……………

「中佐……………なにしてるんですか？」

私たちの背後から呆れたような声がため息とともに聞こえてきた。

「あ、隊長」

我らの隊長、緋村優刀少佐だった

「やあ優刀、ずいぶん久しぶりだね」

「お久しぶりですガランド中佐……………確か中佐は明日お見えになる
のではありませんでしたか？」

中佐をジト目で見る隊長。

そんな隊長に中佐は

「ふふ、早く君に会いたくてね。雑務は副官に任せて私は部下を引き連れて一足先に来たんだよ」

そう言って隊長の頬に指を滑らせる中佐。

その蠱惑的な笑みは同性の私でさえも見惚れてしまうほどに魅力的で、思わず息をのむ

しかし、その笑みを向けられた当の本人はというと……

「なにアホなこと言ってるんですか……おかげで予想外に早い到着でうちの整備班はてんやわんやですよ」

おかげで土田班長からお小言言われましたし……と

その笑みになびくこともなく一蹴

心底呆れたような顔をする。

「ははっ、怒られてしまったな。」

「まったく……」

隊長はそんな中佐の姿に頭を抱え、当の中佐は先ほどの蠢惑的な笑みではなくいたずらっぽく笑う。

「あの、お二人はお知り合いのですか？」

二人のやり取りを見ていた下原が疑問に思い尋ねる

二人のやり取りはどこか上官と部下という関係としてはあまりにも砕けすぎていて不思議に思ったのだろう。

一体全体、この二人はどういった間柄なのだろうか？

「ああ、彼は私の婚約者だよ」
フィアンセ

「「ええ!?!」」

ガランド中佐から投下された爆弾発言に驚く私達

確かに隊長くらい的人物なら恋人がいるんじゃないかと思っただけだ、まさか婚約者がいたなんて……

ちよつとショックだ

しかし当の本人はというと

「……はあ、違うからな二人とも」

本日二度目の深いため息を吐き即否定

中佐の発言を切り捨てる

「扶桑海事変の時、中佐は観戦武官として俺や

武子がいた基地に赴任してきてな。それが縁で知り合ったんだ」

「そ、そうなんだ」

隊長のその言葉を聞いてほっとする。

否定された中佐はというと……

「やれやれ……相変わらず酷い男だね君は。もう少し残念そうな顔をしてくれないじゃないか。」

「そうですね、人をからかう癖さえなければ彼女にしたいくらいですけどね」

肩をすくめる中佐。

隊長のこういった反応は予想どおりだったのだから否定されたこととはあまり残念ではないようだ

「まあ優刀をいじるのはさておいて……優刀、彼女はなかなか面白いね」

そう言って上空のハンナを見る中佐

「大した観察力と判断力だ。さすがは君が眼をつけただけの事はあるな」

「まったく、見ているこっちは冷や冷やモノですけどね」

苦笑する隊長

「さてと……二人とも、この戦いを見てどう思う？」

「え？」

突然、隊長から感想を聞かれ、戸惑ってしまった

「うーんと、良く見えない攻撃を回避しているなあ」と

こんな感想しか思い浮かばなかった。

だってそうだろう。他になんて言えばいいのだ？

そんなありきたりな感想しか浮かばない自分が恨めしい。

きつと隊長に呆れられてしまった……

「そつだな、あいつは良く避けているよ。ではなぜ見えない攻撃を避け続けることが出来ると思つ？」

「うう……隊長わかんない」

そういう私の頭をポンツポンツとなでながら隊長は続ける。

「少し難しすぎたな。何せ弾が見えないのだから避けられないのは当たり前……そう考えるのが普通だし、でも実際は避ける事自体に弾が見えるとかそういうのは関係ないんだ。」

「え……どういふことですか？」

訳が解らないといった風の下原。

それはそつだ。見えないから避けられないのに見えないこと自体は避けるのには関係ないといわれたのだ

こんなとんちの様な話が理解出来る方がすごい

「例えば……拳銃の弾を避けられるかい？」

「無理です……」

「どうして？」

「え……だって見えないじゃないですか……………あ
！」

「そう……実際の話、実弾も撃つた時にはその弾丸自体は視覚で捉えることは出来ない。よしんば捉える事が出来たとしても、弾丸を見てから行動を起こしていたら間に合わない……ならどうやって避けるか？」

「えと……動き続けるとか？」

「うん、半分正解……けどそれではすべての弾を避け続けるのは無理だ。ならどう避け続けるか？……相手の目を見ればいい」

「相手の目を？」

「そう、相手の目だ。銃を撃つときは目で照準を合わせるだろう？あの機体はどうやらいちいち自分で照準を合わせなければいけないからみただからな……マルセイユもそれに気づいたんだろう。マルセイユは相手の視線の向かう先をみてタイミングと方向を予想して避けているんだ」

「はえ〜」

そんな驚嘆の声しか出なかった

「でも相手の目を見るのなんて、ネウロイ戦に役に立つんですか？」

下原が当然の疑問を口にする

それはそうだろう。ネウロイには目も口もないのだ。小型は航空機的なシルエットをしているが中型大型ともなると全身に機銃が装備されており、眼を見て射線を読むことなどはとても無理だ

「もちろんこれは対人相手じゃないと意味のないことだ……けれども今この模擬戦で一番重要なのは勝ち負けよりもどれだけの観察力と判断力を持っているかだ。相手を観察し的確な選択をする事……これは戦場で最も重要なことだからな」

「はあ……」

「まあなんにせよ、これで彼女にも少しは勝機が見えたかな？」

中佐がそう締めくくると……

「そこまであいつは甘くないと思いますけどね……」

「とうとうと?」

「鈴の方も戦法を変えたようですからね……ほら」

その言葉に促され、私たちは再び上空を見る。

確かに隊長の言う通り、鈴という人の動きが変わってきた。

「……………なるほど、衝撃砲の優位性が崩れたと解るや今度は近接格闘にシフト。彼女、なかなか思い切りがいいじゃないか」

「ええ、さすが代表候補生といった所でしょうか。自分の機体の性能をきちつと理解しています」

最初は衝撃砲とあの大きなブレードの波状攻撃だったのに、今はどうやら衝撃砲を牽制に使用して近接格闘を仕掛ける戦法に変えたようだ。

「互いに攻めあぐねているな」

「ええ……鈴の方は衝撃砲とブレードによる波状攻撃から牽制による一撃離脱に変えたのはいいですけど、元々マルセイユは射撃型ですから常に一定の距離で攻撃を仕掛けるからその一撃離脱も使い処が難しい。マルセイユの方も距離を取っている分、一撃一撃の威力が低い」

「両方とも決め手を欠いたままか……」

「ええ……ですが」

そういつた隊長に笑顔が浮かぶ。

「マルセイユの固有魔法が開花すればあるいは……」

「固有魔法？ でもハンナの固有魔法って解ってないんじゃないかな？ たっけ？」

確かハンナの固有魔法については隊長とロスマン先生があれこれと検査をしていたがいまだに解っていなかったはずだ。

「ああ確かにあいつの固有魔法についてはまだ分かっていなかった」

「という事はもうわかったんだな」

「ええ……………」

そう言って隊長は言葉を区切り……………」

「あいつの固有魔法は未来視です」

Ep-16 Knftige Augen (後書き)

すみませんまた終わりませんでした。

なんかこの鈴対マルセイユももう少し続きそうです。

ごめんなさいです。

もう少しお付き合い下さい。

最後になりますがご意見ご感想お待ちしております！

ご感想をいただけたら作者のテンションが上がってうれしいです。

それではまた次回！

どうもシユウ禅です。

やっと鈴対マルセイユ終了です

二人の戦いの結末やいかに!?

ではおしまいー！

「未来視か・・・また随分と大層な固有魔法だな」

ガランド中佐が驚いた様な呆れたような声で呟いた。

実際の話、マルセイユが衝撃砲の攻撃を避け続けられる理由を相手の目を見て回避しているといったがそれだけで避け続けるのは無理である。

であるならば、それを成すとしたら未来を知る以外にはない。

しかし・・・

「そうですねって言いたいところなんですけど・・・実際、あいつのあれはそこまで凄まじい能力じゃないみたいなんですよ」

俺は苦笑いを浮かべる

「とととと？」

「以前、検査と称していろいろ悪戯をしたんですが……」

その時の出来事を思い出す。

~~~~~ある日~~~~~

「よしマルセイユ 準備はいいか？」

「あ、ああ……た、大尉、何する気なんだ？」

目隠しをされて滑走路のど真ん中に立たせられたマルセイユは不安そうな声で優刀を訪ねる。

「ん……検査だ」

その声にしやがみこんで何やら「そそそとやっていた優刀はのんきな声で返す

「け、検査って何の？」

「決まってるだろ？ 固有魔法の検査だ」

もちろん検査である。しかしその内容はというと……

「ボス、こっちはOKだ」

「こっちも同じく」

大将とフェデリカから準備完了の知らせが入ると優刀は立ち上がり、ある方向を向く。

その視線の先には義勇統合戦闘飛行隊を支える整備中隊の姿があった。

その数二十人

彼らも彼らで何やら「そ」そとやっている。

「土田班長ー！！ そっちはどうですかー？」

「こっちもOKですー！！」

返事をした彼らの手には銃の形をしたプラスチック状の物体。

所謂水鉄砲ウォーターガンという奴だ

彼らはせつせと化けるに組んだ水の中にタンクを沈めて水を入れている。

もちろん大将ら二人の手にも水鉄砲を持っている。

「こっちもOKだよ」

横にいた伯爵がうれしそうに言う。

彼女の手にはひとときわ大きな水鉄砲を持っている。

その笑顔がまたさわやかなことこの上ない。

そして極めつけは傍においてあるかごの中の水風船



「マルセイユ！これからお前が未来予知の固有魔法を持っているかどうかの検査を始めるぞ！今からお前に向けてここにいる全員がお前に向けて水鉄砲を放つ！全部避ける！！」

そう・・・この検査、最近スオムスで発現したウィッチが見つかったという”未来予知”の検査なのだ。

「な、無理に決まってるだろ！！こんなことに付き合えるか！！」

そついで目隠しを取ろうとする・・・が

「なっ！？と、取れない・・・」

だが外れない・・・目隠しは片結びできつく縛られている

「ふ……当たり前だ、私が外れないようきつく縛ったからな」

犯人は大将。

彼女が全力で結んだのだからマルセイユでは外す事は無理である。

「よし、じゃあ始めるぞ……用意はいいな？マルセイユ」

「よ、よくない！私がそんな能力持っているわけないだろ！」

「そんなのやってみないとわからないだろ！ スオムスでお前と同じくらいのウィッチが発現したんだ！お前だってやればできる  
」！」

「なんなんだ！その根性論は！？絶対違うから、お願い、お願いだから！まって、待ってえ大尉！」

「オールウェポンズフリー 問答無用！！総員全兵装自由！！ マルセイユに叩き込めええええっ！！！」

「いやああああああっ!」

.....

.....

.....

.....

「と、まあこんな感じで検査をしたんですが  
ってどうしました?」

中佐と下原が呆れたような目でこっちを見ている。

「いや・・・さすがにやり過ぎだろっ」

「マルセイユさんが可哀想ですよ」

「いや、つい楽しくなって・・・」

中佐と下原の言葉にただ苦笑するしかない。

実際やってみると馬鹿馬鹿しくも楽しく、いつの間にか本来の目的である検査のことを忘れて皆で遊んでいた。(ちょうど冬まっただ中でビショビショになれば風邪をひくこと確実、マルセイユは本気で逃げていた)

「結局、武子が来るまでやってたんですね」

騒ぎを聞きつけた武子が現れて音頭を取り終了

マルセイユは大して濡れることなく事なきを得たように思えた………

「……で、その時彼女は避けていたのか？」

「ええ」

そもそも、目隠しをしている者相手にそこまで遊べるわけが無い

その時マルセイユは目隠しをしていたにもかかわらず、ほとんどの水鉄砲の攻撃を避けていたのだ。

「目隠ししても避けられる・・・まさしく未来予知じゃないか」

「いえ、この話にはまだ続きがありまして・・・」

~~~~~

「まったく……揃いも揃って何考えているのよ」

「いや悪い悪い……つい楽しくなっちゃってな」

しばらく遊んでいると、どこからか騒ぎを聞きつけた武子が現れた。

「まったくもう……とにかく検査は終了。整備班の方々もさ

つさとあと片付け始めてくださいね マルセイユ、ほら・・・

・目隠しを取ってあげるから」

「うっう・・・中尉」

目隠しを取ったマルセイユと連れだって、そのまま滑走路を後にする武子。

まずいあの方向は

「武子！そこは通るな！！」

「え？・・・きゃあつ！？」

いづが早いか、二人の姿が突然視界から消える。

ドボー・・・・・・・・ン

大きな水柱が上がる。

「そこには落とし穴があるから気をつけてって言おうとしたんだけど・・・間に合わなかったか」

もし未来予知が発現しているなら落とす穴ぐらい避けられるだろうと思つて作つておいたのだが……

彼女はモノの見事に引つ掛かった。

「み、みんな逃げるぞつて……いないっ!？」

さつきまでそこにいたメンバーの姿はすでになく、皆に散り散りに逃げていた

「……優刀」

背後からは武子の声、

振り向くとそこには二人の姿が……

どうやら自力で這い上がってきたらしい。

全身ずぶ濡れ、ぴたりと張り付いた制服、水を滴らせる武子の姿に胸が高鳴るのを感じるがそんなことを言っている場合ではない。

それこそ表情は笑顔ではあるが、その額にはくつきりと青筋が見える。

こええ……………

普段穏やかで人当たりがいい分、怒ると余計に怖い……………

しかもヒステリックに怒るわけじゃなく、普段と変わらない穏やかな笑顔で威圧してくるもんだから余計に恐ろしい……………

鬼の副長とはまさにこのこと……………

ギンっ！！！！

「緋村大尉……………？」

笑顔でこちらを見る武子

「……………なんでもありません、サー」

「そう……………なにかいい残すことは？」

「アリマセン」

隊長としての威厳？

そんなものではありません……

「まあ、そんな感じで落とし穴に引っ掛かっていたので
完全な未来予知とは違うという訳なんですよ」

その後散り散りに逃げた奴らも武子の固有魔法
三次元空間把握 の前では歯が立たず、敢え無く御用となり、皆
でくそ寒い夜の格納庫で正座をさせられたのも今やいい思い出だ。

「な、なるほどな」

「緋村少佐……やりすぎです」

「あはははっ！おっかしー！！」

三者三様の反応をする

「けど、今回の模擬戦でようやくあいつのその固有魔法の正体がわかりました・・・どうやらあいつの魔眼は？未来？を見通すんじゃないくて、どうやら？物体の未来位置を正確に把握できるっていうこと、精々分かるのはモノが動いた時それがどのように動いてそれにどう対処すればいいかという事だけのようですね」

「なるほど、決して未来に起こる出来事が分かるわけではないという事か」

「ええ・・・」

マルセイユの魔眼は何が起きるのかを見るわけじゃなく、対象の僅かな動きからその行動を予測して理解するというものなのだろう。

しかしその後の事象が解るという点では範囲は違えども、未来予知と同じである。

故に？未来視？

「 と話は脱線しましたが、マルセイユは？未来視？？空間把握？？魔弾？の三つ固有魔法を持っているわけです」

「なるほど…固有魔法を三つも持っているとはなかなかすごいじゃないか」

中佐はただ感心するように何度も頷いている。

「まあ、どれもこれもその専門の能力と比べたら中途半端なんですけどね。でも、この三つの固有魔法をうまく使用することが出来れば……」

「 I S に勝てるかもしれない？」

「ええ……どのみち、このまま長期戦に持ち込まれたら近接格闘武器のないマルセイユは弾切れになった時点で負けも同然ですから」

「勝負は一瞬という事か」

「くっ!!」

瞬間、マルセイユの頬を風が撫でる

衝撃波がすぐ横を通過した証拠だ。

(どうする？ 何とか衝撃波は避けることが出来始めたのはいいがこっちの攻撃は距離があつてなかなか効果的とは言えない……なんとか相手に効果的な戦法を考えないと)

相手は見えない衝撃を牽制に使って近接格闘による一撃離脱に切り替えてきた。

何とか距離を取っているために対応は出来ているが、こちらの弾が切れれば牽制も出来なくなるために一気に距離を詰められた瞬間

に負けは確定する。

少佐やラル中尉であればその圧倒的な空戦機動で相手を引き離して一気に決める事が出来るだろう。けれど、自分の腕ではそんなことはまだ出来ない。

相手からはこの戦いにかける熱意が尋常じゃないほど感じられ、気を抜けば飲み込まれそうになる。

けれど負けられないのはこっちも一緒だ。

少佐が自分に課した試練であるなら、自分はそれに答えないといいけない。

今思えばあの人との出会いはそれは散々なものであった。

私ははっきりいって問題児だった。

おかげで士官学校の主席はハルトマンにとられるわ、卒業させられなくなりそうになるわといういろいろあったのだが何とか卒業出来た。

私の腕を惜しんだ士官学校の教官がいろいろ手をまわしてくれた上での卒業だったらしいのだが、それを私は？天才なんだから卒業させるのが当たり前だ？と思っていた。

所謂、？天狗？になっていたという奴だ。

だから配属初日に違う部隊である筈の少佐に対して模擬戦を申し込んだ。

士官学校の時から噂になっていた？扶桑の白き龍？の腕がどれ程か見てやるうと思ったのだ。

結果は案の定惨敗・・・

模擬戦を申し込んだことが問題になり、不名誉除隊を言い渡された。

その瞬間、目の前が真っ暗になった。

軍を辞めさせられる事がショックだった訳ではない・・・

空を飛べなくなる事・・・

それが何よりもショックだった。

その時、思い出した……なぜ自分が航空ウィッチに憧れ、その道を目指したのか

大空を飛びたかったのだ

何ものにも縛られることのないこの大空を……

その時、初めて自分のやってきたことの馬鹿さ加減に気づき、後悔した。

後悔してももう遅かった。

けれど、そこに手を差し伸べてくれたのが少佐とラル中尉だった。

二人はこんな私の為に頭を下げってくれ、自分たちの部隊に引き入れてくれたのだ。

あまつさえ私を成長させるためにラル中尉は二番機の座を明け渡してくれた。

そして少佐は言ってくれた

『お前は将来人々に希望を与えられるようなエースになると俺は

信じてる』

少佐がいてくれたから、自分は今も空を飛んでいられる。

だからこそ負けれない……………

少佐が、ラル中尉が、隊のみんなが。私が成長するのを待っていてくれるのだ、信じてくれるのだ

自分に居場所をくれた人達を裏切りたくない…………

その信頼に応えたい。

だから……………

「私は負けれないんだあああああ!?!?!」

一気に呐喊する。

どのみち長期戦になればこちらに勝機はない。

だったら敵の懐に入り込んで十分に魔力を込めた一撃を叩き込む！

「く！！ だったらこっちも！！」

向こうも覚悟を決めたのかこちらに向かって一気に突撃してくる。

衝撃波を次々と放ってくるがその砲火の中を一気に駆け抜ける

そして……

無骨な鎧を着た相手が目の前に迫る

「この距離ならっ！！」

相手は巨大なブレードを振りかぶっている

構うものか、相手が振りぬくよりもこちらの方が早い！

ドオンッ！

「!？」

敵の懐に銃身を向け、トリガーを引こうとしたその瞬間……

突如上空から飛来した侵入者が二人の間に割り込み、私の銃をその左手に展開したシールドで射軸を逸らし、相手が振り下ろしたブレードを右手に持つ扶桑刀で防ぐ。

「……………二人ともそこまでよ」

侵入者はそういうと体を回転させてブレードと銃をはじく。

「ちょっと、いきなり割り込んできて……あんた何者よ！」

飛び退いた向こうの方は侵入者にそのブレードの切っ先を向ける
当の侵入者はブレードの切っ先を向けられても涼しい顔のまま。

私はその凜とした顔に見覚えがあった。

「あんたは確かリバウ航空隊の……」

「扶桑国空軍遣欧艦隊所属、竹井醇子少尉です……二人とも、
模擬戦は終了よ」

彼女は名乗り、模擬戦が終了したことを告げた。

ゴッ！

模擬戦終了後、滑走路に降りてきたマルセイユの頭に拳骨を食らわせる。

その場につづくまるマルセイユ

「いったゝゝゝ何するんだ少佐」

余りにも痛かったのだろう目に涙を浮かべ抗議するマルセイユ

「全くヒヤヒヤさせて・・・竹井が来なかったらどうなっていたことか」

「もちろん私が勝っていたに決まってる！！」

ゴンッ！

グリグリグリ

「痛い痛い痛い痛い……」

さらにもう一発食らわせぐりぐりと拳を押し付ける

「アホか、あのままだったらお前の上半身と下半身は永遠にサヨナラをするとところだったんだぞ？竹井に感謝しろ」

実際、竹井が止めに入らなければ危ないところであった。あの時マルセイユは攻撃することに集中しすぎていて、まったく防御のことを考えていなかった。もし障壁が発動しても重量のある青竜刀の一撃は防ぐことは難しかった

「うっ……ごめんなさい」

「ま、なにせよ無事でよかった」

そう言って頭をなでてやる。

「……」

そんなふうにマルセイユをなでていると……

「ちよっと、なんで止めたのよ！あのまま言っただけならば私が勝ったのよー！」

今度は鈴がこちらに向かってズカズカと大股で歩いてきた。……
なんとというか女らしくないな

「お前ももしあのままマルセイユの魔弾を食らっていたら腹に大穴が開いていたぞ。それでもよかったのか？」

「？……」

鈴は鈴でマルセイユの全力の魔弾を食らっていけば間違いなく死んでいた。身内轟屑するわけではないが、彼女の魔弾は狙撃主体のウィッチの魔弾に比べれば威力は墜ちるがウィッチの魔法障壁をいとも簡単に貫く。シールドエネルギーが残り少ない状態でくわいでもしたら、鈴の上半身と下半身も永遠にサヨナラをするのは目に見えていた。

「ま、なにせよこれで模擬戦は終了・・・で、どうだった？トゥルーデ。」

今回の判定人、トゥルーデの方に視線を向ける

当の本人は腕を組んで何かを考えるように目をつぶっている

数瞬後、彼女は口を開く

「射撃も近接格闘も間合いの取り方が雑でまだまだ甘く、肝心の空戦機動はお遊戯レベル……最後には一か八かの突撃も中途半端な加速で勢いが無い……話にならない」

「う……………」

トゥルーデの容赦のない評価に鈴は俯く

彼女は戦闘において甘い評価を下すことはない・・・

きつと作戦参加を認められないだろう、そう思われたが

次にトゥルーデの口から出た言葉は意外なものだった。

「　　だが特殊兵装の効果が薄いとみるや、すぐさま近接装
備に切り替えた判断の速さは評価出来る…………稼働時間300時間
であそこまで冷静に早く判断が出来れば大したものだ。」

「え…………」

トゥルーデの意外な評価に鈴が顔を上げる

「勝負は引き分け、実力も確認して…………いいだろう、今度の作戦
でお前を私の隊に編入するようにボニン司令に頼んでおいてやる」

「ほ、ホントに？」

鈴が信じられないといった風に聞く

「嘘をついてどうなる・・・私の部隊に入る以上は私の指示は聞いてもらってください?」

そう言ってトゥルーデは鈴に微笑みかけ、手を差し出す。

「あ、ありがとうございます……これからよろしく頼むわね、隊長!」

鈴もまたトゥルーデに笑いかけその手を握り返す

「上官には敬語を使い……私の部隊の仲間を紹介する、ついでに来て」

「サー、イエッサー!」

そうして二人は隊舎の方へ歩いて行った。

「……………雨降って地固まるってところかしら？」

去っていく二人の背中を微笑ましそうに見ていた武子が呟く。

「別に雨なんて降ってないさ、ただ単にトゥルーデの奴が頑固だっただけだ」

「それもそうね」

「そういつて微笑む武子……………」

しかし、すぐに顔を引き締め、遙か彼方を見据える

「けどおしやく始まるのね……」

「
ああ
」

彼女につられてその視線の先に目を向ける………

そこに映るのは遙か先にある戦場………

そこにはかつての仇敵がいる………

扶桑を壊滅の危機に陥れた強大な敵

戦いは苛烈を極めるだろう……

だが……

自分には師が託してくれた飛天御剣流と仲間がいる

そして

「もう何も失わせはしない………今度こそ全てを守る」

そう、恐れるものは何もない……

今度こそ全てを護って見せる

義勇統合戦闘飛行隊の仲間と共に……

鈴対マルセイユ、いかがでしたでしょうか？

なんか場外乱闘が多かった気がしないでもないですけど、楽しんでいただけたのなら幸いです。

今回はついにクラカウ攻略作戦が開始します。

長かったです・・・

予定では第零章、10話の予定だったんですけどね・・・
小説書くのって楽しいですね、調子に乗って書き過ぎた感があります

ようやく本編に入れそうです。

最後になりましたがご意見ご感想お待ちしております。

感想が書かれたら作者の気分が上がりによって嬉しすぎて涙が出てくるかも！？

ではまた次回！！

WORLD WITCHES 義勇統合戦闘飛行隊版 其の二（いわゆる登場）

どうもシユウ禅です

今回は義勇統合戦闘飛行隊の残りのメンバーを紹介します

〈登場人物紹介〉

ヴァルトルート・クルピンスキー

年齢 15歳 誕生日 11/11
身長 175cm 階級 カールスラント空軍少尉

概要

カールスラント空軍でもトップクラスのエースで無類の酒好き女好きの享楽主義者で楽道家。すらりとした長身と優雅な身のこなしから伯爵、グレーフィン・グレーフィン・ブンスキーブンスキー伯爵と呼ばれる豪傑

義勇統合戦闘飛行隊の中ではフェデリカと共に騒ぎを起こすムードメーカーまたは問題児。

空戦では勇猛果敢、敢闘精神に溢れるあまり必要以上にネウロイに接近しユニットを壊す事が多く、被弾からの不時着も多数。

ハルトマンとマルセイユが部隊に着任した当日、炎に包まれたストライカーユニットで目の前に不時着、啞然とする一同に涼しい顔で握手を求めたなど逸話は絶えない。

高い技量とタフネスを併せ持ち、射撃の腕も確かだが、防御を捨て

れば撃墜できるという状況下では迷わず攻撃を選択する性格。
ドッグファイトよりも一撃離脱を好むが、被弾を気にせず猪突猛進
して攻撃を行なう。

義勇統合戦闘飛行隊では前衛、ラルの二番機を担当

使用武器

M G 5 4

ストライカーユニット

メッサーシャルフ B f 1 0 9 E

エディータ・ロスマン

年齢 1 6 歳 誕生日 1 / 1 1

身長 1 5 1 c m 階級 カールスラント空軍曹長

概要

扶桑海事変の前年に起きたヒスパニア戦役にも参戦していたベテラ
ンウィッチ。

幼少時に大病を患い、体の成長が遅れ、部隊最年長でありながら、
小柄な体格である。

陽気で前向きな性格だが、戦闘スタイルはクレバーそのもの。

これは、長時間急激な機動を伴うドッグファイトが行えない体のため、入念な観察と一撃離脱を主軸にした戦法を身につける。人当たりが良く、教え上手であることから新人教育を任されることが多い、義勇統合戦闘飛行隊でも新人三人の教育に当たっている。ハルトマンの散々なデビュー戦時の長機。今日もクルピンスキーから新人を守る為、彼女の辞典がなる。

使用武器

M G 5 4

ストライカーユニット

メッサーシャルフ B f 1 0 9 E

- - - - -

下原定子

年齢 1 3 歳 誕生日 5 / 7

身長 1 6 0 c m 階級 扶桑国一飛曹

概要

扶桑国出身、学者一家の生まれで本人も文学と歴史に興味を持っており、将来はそちらの研究に進もうと考えている。

元はリバウ航空隊所属のウィッチで竹井や坂本の下で経験を積んでいたが、義勇統合戦闘飛行隊発足時に？索敵能力の高い夜間戦闘もこなせる優秀なウィッチ？として引っこ抜いてきた。

戦闘技能は同時期に配属されたハルトマンやマルセイユに一步劣るもの何事もそつなくこなし、大人しい性格ではあるが他人との協調性も高い事から組む相手を選ばないオールラウンダーとして重宝され、普段は指揮能力の高い加藤中尉のサポートに回っている

料理も得意で、頻繁に作る扶桑料理は各国ウィッチに大変好評となっている

得意料理は肉じゃがと味噌汁で、機会さえあれば扶桑からの補給を得て作るうとしてしている。

小さくて可愛いものに目がない。
抱きつき魔でよくハルトマンを抱き枕代わりにしている。

固有魔法

遠距離視と夜間視の複合魔法視力

周囲警戒能力と哨戒に長けており、危険察知能力が高い。

魔導針を利用した広域探査能力は持たないものの、リバウ基地の夜間襲撃が増加した為にカールスラント式夜間戦闘の速成訓練を受けている。

地上指揮所や他のナイトウィッチ隊と共に夜間戦闘に参加し、共同戦果を挙げた事もある。

使用武器

MG54

ストライカーユニット
十二試艦上戦闘脚

エーリカ・ハルトマン

年齢 13歳 誕生日 4 / 19
身長 154cm 階級 カールスラント空軍少尉

概要

義勇統合戦闘飛行隊に配属された新米ウィッチ。

まだまだ実戦経験が浅い為、他の隊員たちより技量は劣っているが時に天才的な勘と冷静な観察力で周囲の状況を把握し、敵を撃墜しエールの片鱗を見せる。

勉強熱心で頑張り屋なのだが私生活がずぼら。ズボン一つ見つけるのにも苦労するほど部屋は汚い。

同室の下原が毎日部屋を掃除している為、部屋自体は清潔を保っているが一日でも掃除しないと魔窟と化す。

最近は部隊の享楽家、クルピンスキー、ドツリオ両名が？明るく楽しい軍隊の過ごし方を教えてしまった為に本来のいたずら好きな明るい性格が見え始めたとのこと。

使用武器

M G 5 4

ストライカーユニット

メッサーシャルフ B f 1 0 9 E

ハンナ・ユステイーナ・マルセイユ

年齢 1 3 歳 誕生日 1 2 / 1 3

身長 1 7 2 c m 階級 カールスラント空軍少尉

概要

フルネームは ハンナ・ユステイーナ・ヴァーリア・ロザリンド・ジークリンデ・マルセイユ

義勇統合戦闘飛行隊に配属された新人三人のうち、一番の問題児。

元々はバルクホルン率いる J G 5 2 第二飛行隊に配属されたが、配属初日に優刀率いる義勇統合戦闘飛行隊の訓練に乱入。その際、優

刀に対し模擬戦を申し込むが返り討ちにあってしまう。
その行動が問題になり、あわや不名誉除隊となるところを優刀の助
言で事なきを得、そのまま引き抜かれる。
その後は問題行動を起こすことは少なくなり、先任たちに追い付く
ために日々訓練にいそしむ。

使用武器

M G 5 4

ストライカーユニット

メッサーシャルフ B f 1 0 9 E

いかがでしたでしょうか？

少しでも彼女達の魅力が伝われば幸いです

Extra・Epo1 とあるお姉ちゃんの憂鬱（いわゆる番外編）（前書き）

どうもシユウ禅です

今回はいつもとは趣が違ういわゆる番外編という奴です。

それではどうござい

「……………では失礼します」

そう言って、その重たい扉を閉める。

「ふう……………」

やっと終わった

今日の作戦の報告書を大急ぎでまとめて司令に何とか今日中に提出
することができた

時刻は午後8時30分

ふと窓から外を見ると日はもうすでに落ち辺りは漆黒の闇に包ま
れている

これでようやく休める……

自室へ帰るつとすると

「なんだ、お前がため息とは珍しいな」

突然後ろから声をかけられ、その方向に体を向ける

「ああ、トゥルーデか」

カールスラント空軍中尉、ゲルトルート・バルクホルンが立っていた。

「……ずいぶんと疲れているようだが、大丈夫か？」

人の顔を見るなり酷い発言だな

まあ、遠征先から帰ってくるなり報告書を大急ぎでまとめたからな、
実際結構疲れてるけど

「大丈夫だ」

「そ、そうか……ところで優刀、この後は何か予定はあるか？」

「いや、特にないけど」

「そうか……じゃあ、少し付き合ってくれないか？」

「今日はずいぶんと活躍したらしいじゃないか」

「それでもないさ、いつもと変わらない敵を、いつものように落と
しただけだ。」

基地内の食堂の片隅、その一角を俺とトゥルーデで占領し向かいあって飲んでいた

「まったくお前というやつは・・・ほら」

「ありがとう・・・もういいぞ」

少し呆れ気味に笑いながらトゥルーデは空いたグラスにコルンを注ぎ込む。

ちなみにバルクホルンはまだ年齢が15歳を超えていないので彼女はミルクだ。

カールスラントでは15歳から飲酒がOKらしく、同じ部隊の仲間に勧められてからというものの週に一、二度は酒を嗜むようになり、最近はこのコルンという小麦の蒸留酒がお気に入りだ。

「……それで、急にどうしたんだ？ トウルーデが飲みに誘うなんて珍しいな」

彼女とは去年の4月にこの基地に派遣された時に知り合い、同じ中隊長という立場からすぐに意気投合し互いによく相談する間柄になり、たまにこうして飲むことがままあった。（といっても飲むのは自分で彼女はいつもミルクなのだが……）

「ああ、じ、実はな……妹のクリスの事なんだが……」

「クリスって……また何かあったのか？」

またかと思いながら話を聞く

彼女には一人妹がいる。

クリスティアーネ・バルクホルン

トウルーデは彼女のことをとても大事に思っていてよく妹の相談を

持ちかけられる

「いや、特に何もないんだが、ここ最近は何も忙しかったらう？特に今年に入ってからには休暇が取れず、家にも帰れていない。もしかしたらクリスマスに淋しい思いをさせているんじゃないかと思うといてもたつてもいらなくなつてな、家に両親がいるから大丈夫だとは思つてはいるんだが・・・」

「毎日電話かけてるんだろ？」

「ああ、その日に起きた事を毎日楽しそうに話してくれるんだ。」

「じゃあ、いいじゃないか」

「良くない!!」

どん！ とテーブルを強くたたたくトゥル〜デ。

「なんでだよ・・・」

少し呆れるように問いかける

「もしかして私を心配させないために無理して元気よく振る舞っているかもしれないだろ！」

「そんなことはない……ともいえないな」

不意に幼いころを思い出す。

自分にも歳の離れた姉がいて、両親を早くに亡くした俺は、幼いころ心配かけまいとして姉の前では明るく振る舞っていたことを思い出し、強くは否定できなかった。

「や……やはりそうなのか……わ、私はクリスマスに淋しい思いをさせているのか」

トゥルーデの顔がみるみる青くなっていく

あ、やばい。地雷踏んだ

「まっまあ、どちらにせよお前はいつもどおり振る舞うべきだな」

これ以上凹まれると朝まで付き合わされるのでさっさと解決策を上げる

いつも思っんだが、こいつ酒飲んでないよな？

「どうしてだ！ クリスがさびしがっているんだぞ！！そのままにしておけるか！！」

がたん！ と突然身を乗り出して人の首をグイグイ締め出した

「うぐっ！ぢよっ、落ち着け！ぐ、首しまってる！」

「これが！ 落ち着いて！ いられるかああああああっ！！
！！」

その状態から後ろに回り込まれ、更にスリーパーホールドをかける

その動作がこれまた綺麗なこと。

さすがカールスラント軍人の鏡、バルクホルン。

完璧に極まっている

あ、これ落ちるな

「あがががが………」

あ、やばい ぼくとしてきた。

このままトゥルーデに首を絞められて死ぬのか・・・

「やあ、トゥルーデに優刀。二人とも相変わらず仲がいいね」

極まってから約6秒、落ちる寸前に救いの女神が現れた。

「クルピンスキー!!」

「仲がいいのは羨ましいけど、トゥルーデ、早く放してあげないと死ぬよ?」

「え?・・・ああッ!?!」

が眼をやるとそこには顔を青くした俺

あ、ちゃんと気づいてくれたか

「す、済まん！」

侘びの言葉と共に技をはずすトゥルーデ

「ふう……さすがに今回は死ぬかと思った。」

「完璧に極まってたね、さすがトゥルーデ！惚れ惚れするほどきれいな締め方だよ。」

「ぐ……」

「ところで伯爵、こんな時間に食堂に来るなんてどうかしたのか」

時刻は現在午後9時を回っている。

一応この食堂は夜勤の隊員も利用するので24時間いつでも開いてはいるのだが、夜戦ウィッチでもない伯爵がこの時間に来るなんて珍しい。

「フラウと同時期に入った第3中隊の子達いるでしょ？あの子達と一緒にディナーをね。」

「ああ、あの子達が……」

一度だけ見かけた少女達の姿を思い出す

そつえば三日前に伯爵が何やら話しかけていたような

「……相変わらずだな、クルピンスキー。少しはその女と見たらすぐさま声をかける癖どうにかしたらどうだ？」

「何言ってるんだい。かわいい子がいたら食事に誘う、常識じゃないか」

なに当たり前のことを聞いているんだいといった風に返す伯爵

「じいじは……」

さすがは伯爵、ヴァルトルート・クルピンスキー。

無類の酒好き女好きの享楽主義者で楽道家。

その行動にはブレがない。

「それで？ いったい何の話をしていたんだい？」

「ああ、それはな……」

……

……

……

「 というわけだ。クリスがさびしい思いをしていると思っ
たらいてもたってもいられなくてな」

「なるほどね・・・それで勢い余って優刀を絞め殺そうとしたん
だ」

「そついう事」

「うう・・・」

事のあらましをクルピンスキーに説明する。ついでにちょっとした
ジョークを入れるのも彼女らしい。

「そつか・・・うんやっぱり、優刀の言う通り、いつも通りに振る
舞うべきだね」

そしてあっさりと同じ答えが返ってきた。

「なんでだ!?!」

「考えてみる。仮にクリスマスちゃんがさびしい思いをしているとして、なんでトゥルーデに黙っているんだよ。」

「私を心配させないためだ」

「でしょ？ それなのにトゥルーデがいかにも心配してますって顔したら余計心配かけさせまいとしてさらに無理するに決まってるじゃないか。」

「そ、それもそうか。なら、私はどうすればいい」

「だから今度休暇で家に帰ったら思いっきり甘えさせてやれ。普段構ってやれない分思いっきり、な」

そうやってコルンを一気に飲み干す

「そう、か……そうだな、そうだ。思いっきり甘えさせてやるんだ！」

先ほどまでの沈没していた表情から一転、あふれんばかりの笑顔になるトゥルーデ

「そういうことだよ。まったく、トゥルーデッては本当にクリスチヤン命だねえ。」

「なんだ、悪いか」

少しばつの悪そうにしてそっぽを向くトゥルーデ

「いやいや、家族を大切にするのはいいことだよ。それに、そういうことなら私が相談に乗ってあげるのにな、優刀」

「俺に同意を求めるなよ・・・伯爵の事だからどうせ、？ベットの上で聞いてあげるよ？的な感じだろ？」

「べー…！…ベットのう上でと！！？」

その意味を正しく理解したのか顔を真っ赤にさせるトゥルーデ。

「さすが優刀、よくわかってるじゃないか！」

「なんだかんだで、付き合いが長くなっただけだからな」

適当に返す

「みんなが寝静まった夜に一人悶々と悩んでいるトウルーデに優しく、「どうしたんだい？」って語りかけてあげるんだ。最初はなかなか悩みを打ち明けられないトウルーデだけど真摯に聞いてくれる私に少しずつ悩みを打ち明けてくれるようになる。そして己が悩みをすべて打ち明けたトウルーデにこう一言、「大丈夫だよ、私がついてるからね」って」

「ぎゃーっ！！やめるーっ！！人でヘンなこと妄想するなーっ！！」

「何言ってるんだいこれからじゃないか！・・・それから二人の距離はだんだんと近づいて行く。いつしかトウルーデは私のことを自然に目で追いやるようになり・・・私がほかの女の子としゃべっているのを見るとなんだか胸がざわついてくる。ああ、この胸のもやもやは一体なんだろうか？」

「優刀も見えないで止めるー！！」

「すまん、こうなった以上は俺も無理だ」

そうこうしている間に伯爵の妄想は進み……

「……そしてついにその日がやってきたんだ!!」

「わあああ!! もうやめてくれ!!」

「薄暗い部屋の中、二つの影がついに一つに……そして「天誅
うう!!」「ぐはあ!!」

突然、伯爵の脳天に何かが振り下ろされ、伯爵を襲う。

テーブルにひれ伏す伯爵

その後ろには

「はあっ!はあっ!はあっ! まったく、このエセ伯爵! 目を
離すとすぐこれなんだから!!」

部隊の新人教育係のエディータ・ロスマンが立っていた。

「よ、エディータ」

「ろ、ロスマン……」

「や、やあ……エディータ」

「まったく!!いつまでたつても帰ってこないから、探しに来てみれば!!」二人していったい何やってるのよ!!」

その小柄な体格からは考えられないほどの貫録を見せるエディータ

「ごめんよエディータ、淋しい思いをさせて」

強烈な一撃を食らったにも拘らず、すぐさま復活した伯爵は怒られている事などどこ吹く風、といった風にそう囁く。

「このエセ伯爵は・・・優刀も一緒にいたなら彼女を止めてよ！」

「いや、俺にこいつを止めるのは無理。」

俺がこうなつた伯爵を止める？

はは、そんなの無理に決まってるだろ？

だってこんなに面白いんだから、止めるなんてもったいない。

「まったくもう・・・」

その言葉に呆れているエディータ

「トウルーデもごめんなさいね、うちの二人が迷惑かけて。」

「い、いや二人には相談に乗ってもらっていたんだ」

「そうなの？優刀はともかく、伯爵に相談はねえ・・・」

伯爵を白い目で見るエディータ

「エディータ、何気に酷いね」

「ま、まあ、とにかくありがとう。二人とも助かった。気分が楽になっただよ」

「それはよかった」

「また何かあったらいつでも相談に乗るよ？」

「なっ！？ まったく、貴様というやつは・・・」

「ほら、二人とも行くわよ。」

「ああ」

「それじゃお休みトウルーデ。また明日」

「ああ、お休み。また明日」

そういって食堂を出て、各々の部屋へと戻って行った

数日後・・・

「・・・・・・・・・・では失礼します」

そう言って、その重たい扉を閉める。

「ふじ・・・・・・・・」

やっと終わった

今日の戦闘の報告書を大急ぎでまとめて司令に何とか今日中に提出
することができた

時刻は午後8時30分

ふと窓から外を見ると日はもうすでに落ち辺りは漆黒の闇に包ま
れている

これでようやく休める……ってこれと同じ光景を先日見たよ
うな？

まあ、いつか

それよりもさっさと自室へ帰ろう

そうして自室への進路を取る。

ギョッ

「……………へ？」

突如、何者かに制服の端を掴まれる

その主を確かめようと振り向くと……………

「……………」

「……………ば、バルクホルンさん？」

トウルーデがいた

しかしその表情は暗く、この世の終わりの様な顔をしている。

「……………」

「……………え〜っと、一杯付き合おうか？」

「……………コク」

場所を移動して食堂に、いつものように片隅を占領して向かい合
って座る。

ちなみに今日はコルンじゃなくてキュンメルのソーダ割り。

いつも同じものを飲んでいると味気ないので今日は少し変えてみ
た。

「……でどうしたんだ？確か今日は休暇で実家に帰っているん
じゃなかったのか？」

確か昨日の朝、彼女が大きな風呂敷もって基地を出ていくのを見
たよ。うな気がするのだが……

「……ああ、確かに帰った。久々に取れた休暇だから、クリス
の好きなお菓子もいっぱい買って、欲しがっていたW iも買って

「いったさ」

ええ〜〜

もしやあの風呂敷包みの中に一杯お菓子が入っていたのか？

さすがにあれだけの量を持っていったらさすがにクリスマスちゃんも引いただろうに

シスコンここに極まる・・・

「・・・そして、やっとの思いで家に着き、クリスマスを驚かせてやるうとこっそり庭の方へ回ったんだ」

「お前はストーカーか・・・」

「そして庭からリビングの方を覗きクリスマスの姿を見つけた・・・けれど、そこにいたのはクリスマスだけじゃなかった」

「ご両親もいたのか？」

「・・・いや、二人とも共働きで昼間は家にいない」

「じゃあ、いったい誰が・・・まさか、泥棒か!？」

「そつだ……」

そつ言つて彼女は身を震わせる……

その姿を見て、なぜ彼女が落ち込んでいたのか理解する。

クリスちゃんを危ない目にあわせてしまったことを後悔している
のだろう……

もし自分が早く帰っていれば彼女に怖い思いをさせなくて済んだ
かもしれない……そつ思っているのだ。

生真面目で、責任感の強い彼女の事だ、そつ思っているに違いな
い。

「……トウルデー、君の所為じゃない」

そつして彼女の肩に手を置く……

そう、彼女の所為じゃない。

悪いのはその泥棒だ……………

今の彼女はとても壊れそうで……………

だから少しでも慰めてやりたくて……………

その言葉を口にしよつとする……………

「あの泥棒……人がいないことをいいことに、クリスマスとツイスターゲームなんかして楽しそうにしてたんだ……………クリスマスもク

リスだ、あんなどこの馬の骨とも分からないやつとあんなに楽しそうに……くそおおおおっ！！」

「……はい？」

一瞬、思考が止まる

「私は耐え切れず「クリスその男は誰だ!!」と叫びながら飛び出した……」

その間もトウルデーは話し続ける。

「おつするに、事のあらまはこうだ

彼女が家に帰ると、クリスちゃんは学校の同級生と遊んでいた・
・
・

それだけだ・・・

他に言いようがない・・・

「うわ〜」

そっから先の事は大体想像できた

大方、トゥルーデが今日は自分がクリスと遊ぼうと思っていたの
に先に同級生と遊ばれていた。

それにシヨックを受けたトゥルーデは何も考えずにそのまま出て行った。

クリスちゃんと同級生は突如現れた謎の人物に驚く。そしてクリスちゃんはそんなわけのわからない行動をとったトゥルーデに対して……

「……………？お姉ちゃんなんて大嫌い！もう絶交？と言われた、と」

「うわあああああんっ！！！！」

その場に崩れ落ちるトゥルーデ……………

「はあ……………」

盛大な溜息を吐く

なんか余計に疲れた……

もうとっとと帰って寝たいが、そうもいかないだろう。

こつなつた彼女は朝まで止まらない。

今夜は徹夜決定だな……

彼女を慰めるために気合を入れるべく、そばに置いてあったコリ
ンを飲み欲し……

「わかった今日は付き合ってる……だから飲め、思いつき
り」

そう言ってミルクを差し出す。

それを一気に飲み干し、トウルーデは

「うわああああああんっ！！！！ クリスウウウウツ！！！！」

・・・・・・その夜、食堂から聞こえる一人の少女の泣き声
は夜が明けるまで続いたという・・・

いかがでしたでしょうか？

なにぶんこういったコメディチックな話は初めて書いたので楽しんで頂けたのなраいいのですが・・・

ちゃんと、コメディになってましたでしょうか？

気分転換にだいぶ前に書いていざ投稿しようとしたら、まだお姉ちゃんがきちんと出ていない状態です、そのままお流れになっていたのを今回ちょうど良かったので載せました。

本編ではあまり活躍していないお姉ちゃんですが次の話で活躍してもらいたいと思います。

ではまた次回！！

E p - 1 8 e n t s c h e i d e n d e K a m p f v o r h e r i g e

どうもシユウ禅です。

ついに始まるクラカウ奪還作戦・・・

それではどうぞ!!

クラカウ奪還作戦前日……

ついに明日、クラカウ攻略作戦が決行されるという事で基地全体が異様な緊張に包まれていた。その中で俺はフェデリカに呼ばれ、同じように呼び出されたトゥルーデと共に格納庫にいた。

「フェデリカ、量子変換システムが使えるようになったっていうのは本当か？」

俺は呼ばれた用件……量子変換システムのストライカーユニットへの搭載が可能になったという知らせを聞きに入る。

「はいはい、もうそんなに焦らなくなっただってモノは逃げないわ……はいこれ」

そう言っ て彼女は手の平にあるものを差し出す。

手の平にあるものを凝視する

「……イヤホン？」

「ええ、そう」

彼女の手の平にあるのはハンズフリーマイクロフォンという通信機に使われるイヤホンマイクだった。

通常、機械化航空歩兵が使用するイヤホンは耳にスッポリと入るマイク内蔵型の円形タイプであったはずだが、現在この片耳に掛けるタイプのイヤホンは使われていない。

というのも、このタイプはデザイン性が良くまた円形のイヤホンに比べて音質もよかったのだが、非常に外れやすく高機動戦闘などしよつものならすぐさま外れてしまうので現場からはかなり不評だったのだ

なぜそんなものがこんなところに？

「ふふ…言っておくけれどこのイヤホン、ただのイヤホンじゃないのよ?」

「とうとう?」

フェデリカが自信満々に説明を始める

「いい?このイヤホンはね、装着者のイメージを感知するシステムを搭載しているの。これによって装着者のイメージを感知、そのイメージに合った武器を構成するの」

「よくそんな小さなサイズに収まったな」

「元々そんなに脳波感知システムは大きい訳じゃないし、量子変換システム自体もストライカーユニットに搭載できるくらいのもので大きなものじゃなかったから割とすぐに出てたわ」

そう言つて、フェデリカは格納庫にある簡素な机の上におかれた箱状の物を見せる

大きさは片手で楽に持てるサイズ。

おそらくそれが量子変換システムなのだろう。

「これ一つで汎用機関銃二つ分くらいの容量があるわ・・・後はこれをユニットに乗っけるだけでOK」

「しかしフェデリカ、本当に使えるのか？」

今まで黙っていたトゥルーデが当然の疑問を口にする。

彼女の言い分ももつともだ。

戦闘の最中に使っていて武器を呼び出そうとして無反応は洒落にならない。

「ええ、もちろんよ……ちょっと見てて」

そういつて彼女は背後にあった自身のユニット、ファロットG5
5チエンタウロに飛び乗る。

彼女の頭から使い魔であるイタリアングレーハウンドの耳が出てくる

「はいこれ持ってて」

そしてひょいっと彼女のISの待機状態である赤いバングルを放り投げて渡してくる

そして、

「…インターセプター」

彼女がそう呟くと彼女の手に光の粒子が集まり、形を成す

光が剣の形を成すまでの時間は1秒とかからなかった

「・・・ね？」

形成された小剣をこちらに見せてくるフェデリカ。

どうやら使用する分には問題がなさそうだ。

「フェデリカ、皆が使えるようになるまでどれくらいかかる？」

「そうね……普通に出し入れするだけなら一時間もあれば何とかなるはずよ。実戦で使えるようにするにはもうちょっとかかると思うけど……まさか使うつもり？」

フェデリカの言葉にうなずいて肯定する

「……………ぶつつけ本番は避けたいところだけど、今回は長丁場になるからな。継戦能力が上がるなら使いたい、ドッグファイトとかの最中に使わなければ問題はないだろ？」

「まあ、それはそうだけど……………」

「それに、フェデリカも使用を考えていたんだろ？」

「まあね、今回はどうしたって長期戦なんだからたぶん使っつて言い出すだろうなって思って、とりあえず作れるだけ作っておいたけど全員分は無理だったわ」

そういつて息を吐く

「今のところ用意出来たのは七つに増量パッケージが二つ。全部取り付けるのに二時間もかからないわ」

「じゃあ頼む、乗っけられるだけ乗っけといてくれ。」

「了解、ついでにバルクホルンのユニットにもつけておくわね」

そう言っつてバルクホルンのユニットにもつけようとするフェデリ

カ……………しかし

「い、いや……………わ、私は遠慮しておこう」

フェデリカの提案を断るトゥルーデ。

「どうしてだ？火力重視のお前なら特に必要だろう。」

「もちろんそうだが……………やはりここはお前たちの部隊が優先的に使うべきだ」

「あら、もともと先任にだけ渡そうと思っていたから問題はないわ。それにね？あなたには絶対持たせてくれって頼まれちゃったのよ。」

「？ど、どついうことだ？」

「あなたの所の整備員泣いてたわよ？バルクホルン中尉が銃を乱暴に扱いすぎるって。いくらなんでも弾切れ起こしたからって銃で殴ることはないでしょうに。」

「う……………いやしかしたな、あの時はしょうがなかったんだ。手近にいい武器が無くてな」

「だったら余計に必要なじゃない。今ならついでに増槽パッケージも付けて？あれ？も付けるわよ？」

そう言つて奥においてあるものを指さす。

そこには二対の大きな剣があつた。

大きさは2 m程度、その幅広い刃は見るからに重そうで叩き付けたときの破壊力は想像に難くない。

「また随分と大きな剣だな」

「カールスラント製IS近接戦闘用兵装、BWS-02よ」

フェデリカは説明を続ける。

「元々カールスラントがISの装備として開発したものらしいんだけど……見た目通りに破壊力は抜群で取り回しが不便で外した時の隙も大きいからなどの欠点があつて、結局お蔵入りになつた代物よ」

「BWS-02……」

その姿を見て息をのむトゥルーデ。

相手を破砕する……それに特化したデザインというべきかその刀身はなかなか肉厚で、視る者を圧倒する迫力がある。

無骨な中にも洗練されたデザイン……彼女が好きそうなデザインだ

「どう？ 使ってみたくない？」

どうやら脈ありと見たのかフェデリカは彼女に誘うように囁く

「いや、しかし……」

しかし、それでもなお、彼女は首を縦には振らないでいる。

いつもなら決断は早いほうなのに、今日に限ってはどうにも齒切れが悪い……

そこでぶつとあることを思い出す

「 ああ、お前そう言えば機械音痴だったな」

グサッ!!

そんな音が聞こえた。

「え！そうだったの!？」

フェデリカが信じられないといった風に呟く。

それはそうだ。

なにせトゥルーデはフラックウルフ社製のストライカーユニットのテストパイロットを務めているのだ。

同じテストパイロットであるフェデリカからすれば彼女が機械音痴という事実の方が信じられない。

「うう……」

肩を落とすトゥルーデ。

「トゥルーデ、あんまり落ち込むな。人間誰にだって得手不得手があるさ……」

そんな彼女の肩を慰めるようにたたいてやる。

「まあ、機械音痴なのは驚いたけどそれはさておいて……大丈夫よバルクホルン。そんなに難しい操作はないから私が教えてあげる。こっちに来て」

フェデリカは気を取り直しトゥルーデに自身のチェンタウロを履かせ、扱い方を説明する。

「いい？ まずはあなたが使いたい武器をイメージするの。そうね……まずはさっきのインターセプターをイメージしてみて」

「わ、分かった……」

トゥルーデは目を閉じてイメージを描く……すると

彼女の前に光が集まり、剣が形成される

「おお……」

「ね、簡単でしょ？」

「なんだ、やればできるじゃないかトゥルーデ」

「あ、ああ……」

顔を赤くするトゥルーデ

「なにせよフェデリカ、頼んだぞ」

「ええ、任せておいて」

そういつてにっこりと笑うフェデリカ。

その場を彼女に任せて俺は明日の作戦に必要な書類を提出するためにその場を後にした。

「納得できませんっ！！！」

異様な緊張に包まれたJG52基地から南へと下ったところにある陸軍駐屯地、そこに用意された執務室で明日の作戦の細かなところを確認していたロンメルは目の前で怒り狂う少女の姿を見て深く息を吐く。

腰まで長くのばされた銀に輝く美しい髪、端整な顔立ちである彼女は間違いなく美少女と言ってもいいが、その左目を覆っている漆黒の眼帯が彼女の異質さを表していた

「何が納得できないのかね？ ラウラ・ボーデヴィッツ少佐」

そんな彼女の姿を見ながら呆れたように言葉を返すロンメル。

「なぜ、我が部隊が後方の予備部隊なのですか！！ 納得できません！」

「……………なぜだね？」

「我々はカールスラントに十機あるISのうち、三機の所有を許された精鋭部隊です！であるにもかかわらず、今回我々の任務は前線でネウロイと戦う事ではなく後方で指をくわえて他の者の戦いを見ていると言われたのです。納得できるわけがありません！！」

585

彼女の訴えにロンメルは再び深く息を吐く。

作戦というものは全てにおいて念密に計算されて立案される。

与えられた任務、彼我の保有する戦闘力、作戦地域の地形や気象、敵情などの情報を総合的に考慮し、具体的な攻撃目標や陣地配置などを決めて実施される。その一つ一つに無駄なものなどなく、考えうる状況全てに対応し、作戦を成功に導くために考え抜いて考え抜いて立案され、決行される。

「用件はそれだけかね？　だったら早く立ち去ってくれないか？
まだまだやることは山ほどあるんだ、君の妄言に付き合う時間など
ないのだよ」

「な！？」

ロンメルは鬱陶しいといわんばかりに退出するように促す

ロンメルも別にたかが一佐官が身の程を弁えずに直訴しに来た事
をとやかく言うほど器量の狭い人物ではない。

直訴しに来た内容が考えるに値する意見であればもちろんその意
見には耳を貸す。それくらいの度量は持っているつもりだ。

しかし自身が活躍したいからという極めて個人的な欲求で作戦変
更を一部隊の隊長が作戦の総指揮を執る人物に直訴しに来るとは…
…そんなバカげた話に付き合っつてやるほど彼も暇な人物ではない。

「しかし！！」

それでもなお食い下がろうとするボーデヴィッツ

その姿を見て更にロンメルは呆れ、深いため息を落とす。

目の前にいる少女のなんと器量の狭いことか……軍人の資質を問いただしたくなる。

もしこのような者が自分の旗下の少佐であれば即刻全ての権利を
はく奪し、一兵卒からやり直させている所である。

軍人としての礼節、心構え、そのどちらも足りない

所詮はISという兵器の恩恵にあやかったモノという事が……

その一言で全てが片付いてしまうのだから笑い話にすらならない。

「……………くだいな少佐。これはすでに決定したことだ。それでも前線で戦いたいというのであれば……いいだろう、戦わせてやる。その場合はISは今ここにおいて行け」

「つ！それでは意味がありません！我々はISで戦果を挙げなければいけないのです！」

「ふ……ISで戦果を挙げることにどれだけの意味がある？ それすらも解らない貴官に作戦に参加する資格など無い。…とっとと出ていけ少佐、これは命令だ。」

退出するようにせまるロンメル……そこへ

「……失礼します」

突如その空気を断つように執務室に毅然とした声が響く

その声と共に入室する女性

すらりとした長身に良く鍛えられているが過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い釣り眼のカールスラントの軍服を着た扶桑出身と思われる黒髪の美女であった。

「……ブリンヒルデー織斑千冬か」

ロンメルはその女性の名を呟く

入室してきたのはIS世界大会ーモンド・グロツソー第一回優勝者、織斑千冬であった。

「教官！」

ラウラは千冬の登場に歓喜の声を上げ、ロンメルは千冬の顔を見付ける。

「……………何か用かな？ 織斑教官」

ロンメルやラウラが教官と呼んだように、今現在彼女は代表を引退してここカールスラントでIS部隊の教官の職に就いている。

その教官と呼んだロンメルのその声には険を含んでいた。

しかし、それを気にした風でもなく彼女はその整った口を開く

「……………私の教え子が大変失礼いたしました。数々の失礼な振る舞いお許しください」

頭を下げる千冬

「・・・別に気にしていない。それよりも何か用件があったわけではないかね？」

さつさと用件を言えとばかりに言い放つロンメル。

その姿は温厚で常に紳士然とした態度をとる普段の彼とは思えない態度である。

「……………お願いがあつてきました」

「何かね？」

そう言つてまっすぐロンメルの目を見据える千冬。

「どうか、彼女たちを前線で戦わせて上げてください」

そう言つて深く頭を下げる千冬。

「……………教官」

ラウラは敬愛する教官のその姿を申し訳なさそうに見つめる

その誠心誠意頭を下げる千冬の願いをロンメルは……………

「……………言いたいことはそれだけかね？」

冷たい視線で見下ろし切り捨てる

「……どうかお願いします」

切り捨てられても尚、頭を下げ続ける千冬

「……あの時の事を忘れたわけではないだろうな」

「っ！」

ロンメルはその言葉に体を強張らせる千冬

「あの日……撃墜数欲しさにクラカウの避難民を見捨て、ネウロイの勢力圏内に無謀にも侵入したのはどこの部隊だ？」

「!?!」

その言葉と共に辺りを尋常じゃない覇気がつつむ。

「……………私が教導した部隊？ シュヴァルツァ・ハウンス？ です」

その覇気に気圧されそうになりながら何とか言葉を絞り出す千冬

クラカウから避難民を撤退させる作戦に彼女の教えていた部隊の一つが参加していた。しかし、その部隊は戦闘が始まると避難民の護衛を放棄した挙句、ネウロイを深追いしてさらに彼らの活動を活性化させるという取り返しのつかない失態を犯したのだ。

「あの部隊の所為で一体どれだけの兵が傷つき、民間人を危険に晒したと思っている？」

「もしあの日、？彼ら？・・・扶桑国遣欧艦隊21航空隊第3中隊がいなければ今頃カールスラントも奴らの勢力圏内に入っていただろう」

扶桑国遣欧艦隊21航空隊第3中隊……

その名を聞いた千冬はビクツと体を震わせる・・・そこに先ほどの毅然とした雰囲気はもはや感じられなかった。

そしてロンメルはラウラを睨み付ける

「……あれから半年経ったが君の教え子は変わらず傲慢のようだな」

「私は！あのような屑たちと違います！！」

ロンメルのその言葉にラウラは必死に否定する。

「何が違うとどういうのかね？ISで戦果を上げたい……そんな個人的な要望で作戦の配置替えを行わせようと作戦指揮官の所に乗り込み声を荒げる……撃墜数を稼ぎたいといって避難民を護ることを放棄した奴らと何が違うとどういうのだ？」

「っ！！」

ロンメルの非難に何も言えず押し黙るラウラ

ロンメルはそんな彼女を気にも留めずにいまだ頭を下げ続ける干冬に視線を戻す。

「織斑教官……君は何をこの半年教えていたのだ？」

そのロンメルの容赦ない言葉に何も言い返せない干冬……

ロンメルはうつむく彼女の耳元に顔を寄せ

「ブリュンヒルデという称号に酔い、家族にすら見放された君に誰かを教え導くことなど出来はしなかったという事が」

「っ！！！！」

そう呟くとロンメルは立ち上がり机の荷物をまとめ、部屋を後にしようとしてドアに手をかける。

「今の君たちにこの作戦、ひいてはこの戦争に参加する資格はない・・・帰ってまえ。」

最後にそういつとロンメルは俯く彼女たちを置いて部屋を後にした。

ロンメルが去った後も顔を上げることなくうつむき続ける千冬。

「申し訳ありません教官……私の所為で」

「・・・」

ラウラの言葉に返事を返すことも視線を向けることもなく部屋を後にしようとする千冬。

「教官!?!」

「……………帰るぞボーデヴィツヒ」

そう一言つぶやき部屋を後にする千冬。

「……………教官」

その去る背中をただ見ていることしか出来ず、顔を俯かせる

「……………私は認めない……………あの男が教官の?弟?
などという事を……………絶対認めない」

そして顔を上げる。

その瞳には決意と深い憎悪の炎が宿り、ここにはいないその者に
殺意を抱く

「？————？！貴様は……………この私が必ず殺す」

・
・
その怨みを込めた決意の声は暗い夜の闇に溶けていく……………

そして……………

それぞれの思いを胸に抱き、そして夜は明ける

「……ちつ、皆準備はいいか？」

俺は目の前に並ぶウィッチ達に声をかける。

「ええ、もちろん。」

皆を代表して答えるのは武子。

彼女の言葉と共に皆頷いて返事をする。

「……皆、ありがとう」

そう言って頭を下げる

「いろいろ苦しい事、つらい事あったけれど皆に出会えて本当に良かった。」

「何言ってるんだい優刀、それじゃお別れの挨拶だよ」

その姿を見た伯爵がおかしそうに笑う。

「それに、お礼を言うのは私たちの方よ」

そう言って微笑むのはエディータ。

「そうだな・・・ボスのおかげでこんなにも面白い奴らと一緒に空を飛べたんだからな」

大将がいつもの気だるげな態度で笑みを浮かべる

「おいおい、これじゃ本当に今生の別れみたいじゃないか」

今までのやり取りを見ていたラルが呆れたように笑みを浮かべる

「え！？この部隊今日で解散なの！？」

ラルの言葉に本気で驚くフラウ。

「大丈夫ですよ、まだ解散なんてしませんよ。……ね？マルセイユさん」

フラウをあやす様にマルセイユに同意を求める下原

「ああ、こんなに気の合う仲間はいないからな！解散なんてさせるか！！」

その言葉に強く頷くマルセイユ

「ふふ、そうね。こんなに面白い子達が揃った部隊は他にないわね」

そういうと更識は扇子をパツと開く・・・そこには？最高？と書かれていた。

「ま、とういう訳でこの部隊はあなたがいたからまとまったのよ。貴方が嫌って言っても解散なんてさせないわよ？」

そう言って微笑むフェデリカ。

「そういう事・・・だからありがとう。この部隊を作ってくれて」

そう言って微笑む武子。

「皆・・・」

皆のその言葉に目頭が熱くなるのを感じる。

そこへ・・・

『…義勇統合戦闘飛行隊は誘導路へ、滑走路手前で待機』

「ドラツッへーっ了解」

管制塔から指示が入り、俺たちは出撃するために誘導路へと向かう。

滑走路には発進台が並べられており、そこでは土田班長達整備班が次に発進する俺たちのストライカーユニットを準備していた

「少佐、準備できました！」

「ありがとう班長」

「御武運をお祈りしています」

そついうと班長は敬礼して離れていく。

「義勇統合戦闘飛行隊へ……離陸を許可する。御武運を……！」

「ドラッへー了解……よし、みんないくぞ……！」

「……了解……！」

その声を聴き俺は号令をかける

「義勇統合戦闘飛行隊、発進する……！」

あれえ・・・？

なんかロンメル将軍が悪役っぽくなってしまった気が？

．
．
もっと紳士で騎士道精神あふれる人だったはずなんですけどね．

まあ、言いたいこと書けたので良しです。

最後になりますがご意見ご感想お待ちしております。

感想が来たら作者の気分がレベルアップ、不思議なアメなんて目
じゃないくらいに作品が成長するかもしれません。

ではまた次回！！

Ep.19 Strategianfang(前書き)

二日連続投稿!!

というわけでついにクラカウ奪還作戦始まります。

ではござい!!

「うわぁ・・・すごいね隊長、飛行機がいっぱいだよ」

カールスラント上空を南方にあるクラカウに向かって飛行しているとフラウは珍しいものを見るかのように見回している。

彼女の言う通り、今自分たちの周りには今回の作戦に参加するために各基地から飛び立った戦闘機がちらほらと飛んでいる。

「F-35ライトニング？にEF-2000、ガリアのダッスオ
ー・ラファール……、おいおい扶桑のF-2Aまで参加するのか？」

大将が飛んでいる戦闘機の多様さに驚いている。

それはそつだ・・・何せ今周りを飛んでいるのが四半世紀ほど前に空を飛んでいた戦闘機だ。

普通に考えれば航空博物館で展示されていてもおかしくないような代物ばかりである。

「まるで戦闘機の大見本市ねえ……」

その光景の特殊さにエディータがどこか呆れたような言葉を漏らす。

すると……

『はっはっはっは！　　おいおい嬢ちゃん達、見本市はねえだろ
うっ……』

610

突然、インカムから男性のものと思われる笑い声が聞こえてきた。

その声と共に一機の戦闘機が後方から接近してきて横に並ぶ。

その戦闘機はF・22「ラプター」……

かつて世界最強の戦闘機と言われ、大空を支配した戦闘機が今自

分たちの横にいる。

『はははあ！ 久しぶりだな坊主、元気にしてたか？』

「その声……冬后さん!？」

黒く染め上げられたラプターに視線を向ける。

キャノピーにはこちらに向かって手を振る男の姿が

「彼の名前は冬后蒼哉

扶桑国空軍に所属するパイロットであり、扶桑海事変では一般航空歩兵でありながら航空型ネウロイを単機で10機撃墜した伝説のEースパイロットで、漆黒に塗られた機体と騎士のパーソナルマークから「黒騎士」と呼ばれ讃えられている。

「お久しぶりです冬后少佐」

今回の作戦の為にリバウ航空隊から派遣された坂本がうれしそうに挨拶する。

扶桑海事変の時から兄貴分である冬后さんに会えたのがうれしかったのだらう、普段は見せないような笑顔を見せている。

「少佐もこの作戦に参加するんですか？」

『おうよ、何せ欧州の未来がかかっているこの大一番、参加しないわけにはいかないだらうよ』

だとはつと豪快に笑う冬后さん。

相変わらずお気楽な人だなあ

「冬后さんが参加するなら心強いです」

『ははははつ！まさか扶桑の白き龍にそう言われるとはな。ま、この作戦が終わったら一緒に酒でも酌み交わそうや！』

「了解です」

冬后さんは敬礼をして離れていく

そこへ……

『 諸君 』

毅然とした声が響く

『 忠勇なる世界各国の兵たちよ……今回の作戦の指揮を執るカール
スラント陸軍のロンメルだ……まずは各国より支援に来てく
れた皆に祖国を代表して厚くお礼申し上げます。本当にありがとう……
……今滅亡の危機に瀕している世界の中で、君たちの様な勇猛なる

者たちに出会えたことを誇りに思う　　そして君たちと平和な世で出会えなかったことを悲しく思う。ただ、現在我々は存亡の危機に瀕していることもまた事実。世界中の人々が一致団結し、迫り来る脅威に対峙せねばならない。諸君らにおいてはその一致団結の先端となりて黒き異形の敵を粉碎し、未来への一条の希望となつてほしい。』

そこで一旦息をつき、そして言葉を続ける

『　　半年前、我々はクラカウで苦汁をなめさせられた。護るべき場所も、人も護れずただ逃げることしか出来なかった。あれから半年……今日この日、我々は再びかの地へ向かう……あの美しいクラカウの町を黒き異形の魔の手から解放し、人々に再び平和をもたらすために……』

そして將軍は高らかに声を上げる。

『行こう！皆の平和を取り戻しに！』

『行こう！皆の笑顔を取り戻しに！！』

『さあ諸君！奪われた我らの美しい大地を取り戻そう！！』

ワアアアアアアッ……………

「さすがはロンメル將軍だな」

通信機越しに陸軍兵たちの歓声が聞こえる。

「どうやら今のロンメル將軍の演説で兵たちの士気が上がったようだ。」

かくいう俺も胸の奥から十二カ熱いものが込み上げている

そして次に無線機から聞こえてきたのは凜とした女性の声

『空にいる全ての諸君！聞こえるか？ 今回、航空部隊の総指揮を執ることになったカールスラント空軍、アドルフィーネ・ガランドだ。作戦を改めて説明する』

ガランド中佐は続ける

『今回、我々の作戦目標はクラカウ上空に鎮座する超大型ネウロイ『山』の撃破だ……まず、クラカウ周辺に展開する航空型ネウ

ロイを殲滅。その後支援戦闘機部隊による対地攻撃を行い、味方陸戦部隊とクラカウ上空の安全を確保。そして部隊をクラカウ直上の航空型をひきつける囮部隊と『山』に直接攻撃を仕掛ける挺身部隊の二部隊に分ける』

『囮部隊はクラカウ上空部隊に攻撃を仕掛け、敵の注意を牽きつけて『山』から引き離す。・・・その間に挺身部隊は『山』に攻撃を仕掛け撃破しろ・・・何か質問は？』

ガランド中佐のその問いに皆無言で肯定の意志を示す

『よし・・・ではこれより作戦を開始する、諸君！奴らに教えてやろうじゃないか、人間は貴様らの様な虫に負けはしないとな！』

「「「「了解！」「」「」」

此処にいる皆が叫ぶ。

『中佐！4時方向にネウロイの反応を感知！！・・・その数、数えきれません！！』

「坂本、下原！確認できるか？」

「はい！高度5,000m、距離30,000mに敵確認！」

「大型8、中型15、小型は・・・ざつと70！！ 勲章の大盤振る舞いだ！！」

「中佐！！」

『こちらでも補足した・・・戦闘機部隊、さつそく出番だ！』

ガランド中佐の号令と共に戦闘機たちが前に躍り出る。

『ネウロイ、目視内射程に入りました！』

『よし！攻撃開始！！』

『メビウス1、FOX3!!』

『ガルーダ1、FOX3!!』

ガランド中佐の号令と共にミサイルが一斉に発射される。

ミサイルは白い尾を引いて黒き軍勢に一直線に突き進む

ドオン!!

轟音が響き、優刀達の所にも爆風によって飛ばされた空気が優刀の頬をなぐ。

「オールウェポンフリー全機全武装自由! 攻撃開始!!」

一斉にネウロイへと呐喊する

「よしラル行くぞ!!」

「ああ、久々のロット復活だ！派手にいくぞ!!」

優刀も二番機のラルを引き連れてネウロイの大群の中に飛び込む。

狙うは中央に坐する大型ネウロイ

そこに向かって一気に突撃する。

その前に立ちふさがる多数の小型のネウロイ

しかしその小型を前にさらに加速する優刀

減速する必要などない、なぜなら……

「ふ!！」

後ろに彼女がいるからだ。

ラルは彼に攻撃を仕掛けようとするネウロイに素早く魔力を込めた銃弾を放つ。

その攻撃を食らって落とされるネウロイ

優刀も自らの射線に飛び込んできた敵機に機銃を斉射、そのまま次に飛び込んできた敵機に一気に接近……

「はあ!！」

MG52を量子変換システムで収納し腰に差した扶桑刀を一閃、その刹那の一連の動作で敵機を両断する。

消えていくネウロイの白い破片の中を一気に突っ切る。

その後を飛行するラル。

大型をやらせはしないと二人の行く手を次々に小型機が遮り、二人に向けてビームを放つがその中を二人は気にも留めてないようにすり抜けて突き進んでいく。

「なめるなっ!!」

再びMG54をその手に展開した優刀は前方に向けて一斉射。バランスが崩れ隙を見せた敵を背後のラルが打ち抜く。

そのまま優刀は扶桑刀を構えて一気に大型へ……

大型は優刀を近づかせまいと幾重ものビームを放つがすべて見切りネウロイに迫る

「もらった!!」

魔法力を込めた扶桑刀を逆袈裟で一気に振りぬく

その一撃で優刀は300mはあろうかというネウロイを一刀のもとに切り伏せる。

勢いを殺すことなくそのまま次の敵へと向かう

「全く、いつ見ても凄まじいな」

ある時はラルがサポートに回り、ある時は優刀が彼女を援護する…

二人の息の合ったコンビネーションを見たジェンタイルが呟く。

「…マルセイユ、遅れるなよ?」

「もちろんだ大将、背中には任せてくれ!」

大将の言葉にマルセイユはうなずき、共に突き進む。

ジェンタイルは眼前に立ちはだかる中型に狙いを定めて猛禽の如く襲い掛かる

そのジェンタイルに背後から襲い掛かるうとする小型にマルセイユは一連射、わずかな銃弾でネウロイを木端微塵にする。

撃ち落としたネウロイに目を向けることもなくマルセイユはジェンタイルの援護をする為に後を追う

その間もジェンタイルは目の前の中型に向けて銃弾を放ち続ける。

そしてついに中型のコアを露出させる。

「これで終わりだ」

ジェンタイルは手に持つM249を即座にレミントンM870に変え、コアへと放つ

その強力な一撃を食らったコアは見る影もなく粉碎され、あたりに白い破片をまき散らす。

「……ふむ、使えるな」

一連の動作で量子変換システムの有用性が実証され、その結果に満足そうに呟くジェンタイル

そして再度M249を展開、今度は更に左手にグレネードランチャーを展開する。

「さて、今の私はすごぶる機嫌がいいんだ……墜とされた
い奴はかかってこい」

「やれやれ、大将ったらあんないい笑顔で物騒なこと言うね」

「でもジェンタイル中尉らしいですね」

ジェンタイルの暴れまわる様を見て、クルピンスキーはおかしそうに、下原はいつものように困ったように笑う。

「じゃあ、私たちは四人の残りのお掃除と行くところか？」

「はい！」

その場から左右に飛び退く。二人がいた場所に左右から飛んできたビームがぶつかり爆発する。

クルピンスキーと下原は一瞬でビームを放ってきた二機の敵の側面に回り込み……

「これで終わり（だよ）です！」

同時にトリガーを引く。

二人の攻撃を食らったネウロイは成す術もなくおちていった。

武子や、ロスマン……その他のウィッチ達も縦横無尽に活躍し、次々とネウロイを墜としていく。

それに負けじと戦闘機乗りたちもネウロイに挑み、勝利を収めていく。

戦場に次々と白い破片が舞う

この蒼穹に白い破片が舞うたびに人類は勝利へと近づいている……

今、この戦場にいる誰もがそう信じていた

しかし彼らはまだ知らない

この戦いはるか上空から見つめる黒き影の存在を・・・

Ep-19 Strategianfang(後書き)

ああ・・・やっぱり戦闘シーンって難しいです。

書いていてとても楽しいんですけどねえ・・・

それよりもロンメル將軍の演説の方が難しかったです。

これで少しは彼の悪役っぽいイメージが払拭出来ればいいんですが

最後になりますがご意見ご感想お待ちしております。

感想が来たら作者の気分が上がって何かいいことあるかもしれないな
いす

それではまた次回！！

Ep-20 schwarze Hexe (前書き)

どうも、三日連続投稿でテンションが変な方向に向かっているシ
ユウ禅です！

というわけでクラカウ奪還戦の続きです。

それではどうぞー！！

Ep - 20 s c h w a r z e H e x e

「こいつでラスト!!」

双天牙月を横なぎに振るう鈴。

その一撃を食らった小型ネウロイはコアを砕かれ、砕け散って墜ちて行く

「はあっはあっはあっはあ!!」

肩で大きく息をする鈴。

「よくやった、鳳。これでここ一帯のネウロイは倒した」

その鈴にねぎらいの言葉をかけるバルクホルン。

「バ、バルクホルン中尉……」

「ほら、これでも飲め」

そういつと彼女は鈴にあるものを渡す

「……………え、これって」

「リンデンティーだ。気分が落ち着くぞ」

「あ、ありがとう……………」

そういつて渡されたリンデンティーを一口飲む。

ほのかに甘く優しい味が口の中に広がって不思議とすぐに落ち着
いた

「……………おいしい」

「そうか」

そういつて優しく微笑むバルクホルン

ふと鈴はあることに気付く

「あの中尉、もしかしてこれ……私の為に？」

今回が初の実戦である自分の為に用意してくれたのか？

そう思い尋ねた

「極度の緊張は大きな失敗を招く。だからそうならないようにな」

634

まあ、気休め程度だが……というバルクホルン。

だが鈴は嫌われていると思っていた人物からのそのさりげない心遣いが嬉しかった。

「なににせよ、これで作戦第一段階は終了だ……今扶桑のF-2Aを中心とする地上攻撃部隊がクラカウ周辺の対空陣地と陸戦部隊の支援に向かっている。今のうちに呼吸を整えておけ」

「はい！」

「いい返事だ……皆呼吸を整えろ！それが済み次第、我々は義勇統合戦闘航空隊と合流し、超大型ネウロイ『山』の撃破に向かう！」

「ロンメル將軍、航空部隊が敵第一波を殲滅。作戦第一段階は終了……今現在、F-2Aを中心とする地上攻撃部隊が対空陣地の制圧を開始しています」

「よし、全軍作戦を第二段階へ移行、陸戦部隊は我に続け」

そう言ってロンメルは指示し、クラカウに向けて軍を進める

作戦は予定通りに進んでいる……………

誰もがそう思っている中、ロンメルは眉間にしわを寄せ、そのカールスラント人らしい端整な顔に厳しい表情を作っている。

(嫌な空気だな……………)

彼は作戦の指揮を執る際に大勢の指揮官が安全な後方であつてくる情報を元に指揮を執る将校が多い中、常に前線の中に身を置き陣頭で指揮を執つた。

戦場の空気というものを肌で感じるからだ。

その戦場の空気が酷く悪い……………

こういつ時には何かが起る。

うまくは説明できないが彼の長年の経験からそう感じていた。

(何事も無く終わればいいのだが……)

しかしそれは絶対に有り得ないだろうと自身の中に浮かんだ希望を即座に否定する。

基本、戦場においてはどこか楽天的な部分があるといわれている
ロンメル。

しかし、それは彼が常に自分に言い聞かせていることでもあった。

どこかに何とかなるであろうという気持ちが無ければ、とてもではないがこの殺伐とした戦場で兵士たちに生き残る希望を持たせることはできない。

空にいる一人の少年たちを思い浮かべる。

(緋村、死ぬなよ……)

「よし、クラカウ上空への進路は確保された！ これより第二段階に移行する。Ⅲ部隊はクラカウ上空に展開する航空型に攻撃を仕掛ける！」

ガランドの号令に従い、次々とクラカウに向かって飛翔していくウィッチと戦闘機。

そこへバルクホルン率いる第二中隊と合流した優刀達が近づいてきた。

「……………優刀、どう思う？」

傍まで来た優刀にガランドは顔を近づけて聞く。

その問いに対して優刀は

「今のところ順調ですね………順調すぎます」

「そう順調すぎるのだ。」

交戦開始からわずか30分……その短時間で大規模空中戦を制し、作戦の第一段階が済んでしまったのだ

士気が高まっていたからこそその快進撃……とてもそのようには思えない

うまくいき過ぎている

それが二人にとっては何か良くないことが起きる事の前兆ではないかと思えてならなかった。

「なににせよ、一層気を引き締めなければならないな……ここが
らが正念場だ」

「はい……」

「ここでうだうだ言ってもしょうがない

何か起きたときはその時に考えれば良い……

二人は胸によぎる不安を振り払い前を向く

『こちらボニン、クラカウ上空の敵部隊を釣り上げた！これより
北東へ進路を取り、敵航空隊を目標から引き離す……後は頼みまし
たよ、ガランド中佐！！』

「了解だボニン、感謝する！……ではいくぞー！」

その言葉に続き、優刀達はクラカウへを目指し飛翔する。

その前方には優刀達を向かい撃つべくネウロイが立ち塞がる。

しかし……………

「じゃまだっ!」

鎧袖一触… 彼らの勢いを止める事は出来ず、ただ撃ち落とされていき、その身を黒から白へと変えていくネウロイ達。

自らが通った道筋に白い破片をまき散らしながら優刀達は突き進む

そして遂に……………

「……捕捉しました!!」

ガランド旗下のナイトウィッチが声を上げる

「どこだ!!」

「このまま直進、クラカウ上空、距離10、000、高度3000mにひととき大きな反応があります……大きい……こんな大きな反応見たことありません!!」

その報告に自らも魔眼を発動して首から下げた小銃用、照準眼鏡を通してその方向を見る。

「こちらでも補足した……おいおい、報告より大きいじゃないか」

「3人ともどうだ？」

優刀はすぐ後ろを飛んでいた武子、坂本、下原に声をかける。

「ああ……あの時のネウロイよりも一回り近くも大きいな」

「それに表面には赤いビーム発射用のセルが見受けられます」

「そうか……中佐」

その二人の報告を聞いた優刀はガランドに声をかける。

「ああ……では当初の予定通り、我々JG27はこれより奴の周りにいる敵機を叩く。その間に義勇統合戦闘飛行隊の面々は奴の懐に侵入、奴を叩け……バルクホルン中尉、彼らのエスコートを頼むぞ」

「了解です」

「よし、では各ー」まって、下方に敵機!!」「・・・なんだとっ!」?

「各機散開!!」

武子の叫ぶような報告に優刀は反射的に指示を出す。

その場から散りぢりに飛び退くウィッチ

次の瞬間・・・・・・・・

ドンッ!!!

下から白い雲海をかき分けて巨大な紅い柱が立ち昇る

その姿を見た優刀達は驚愕する

雄々しく広げられた禍々しい翼・・・・・・・・

酷く鋭く伸びた尻尾・・・・・・・・

そして頭部と思われる部分には赤く輝く3つの模様・・・・・・・・

目の前に現れた巨大なネウロイはまさしく怪鳥と呼べる姿をしていた。

「奴が此処の番人という事か・・・・・・・・」

「あんなタイプのネウロイ見たことないよ・・・・・・・・」

その姿を見たマルセイユとフラウが呆然としている。

無理もない、あのようなタイプ誰も見たことないのだ。驚くなどという方が無理である。

「ちっ……この時間のないときに」

舌打ちする優刀。

「部隊が航空部隊の大半を引き連れて行ってくれたおかげで今は手薄だが、それもいつまでなのか分からない。」

あの『山』はネウロイを生み出せるのだ。

時間がたてばたつほど向こうの戦力は増えていく……

早急に破壊しなければならぬのに、目の前に現れたのは新種のネウロイ……

状況は一気に不利へと傾いた

この状況を打開するにはどうするべきか？

優刀とガランド、それぞれが考えていると……

「ガランド中佐……ここは私たちに任せてください」

「な、フェデリカ!？」

その声の主、フェデリカに視線を向ける

「私と更識少尉でこの新種を足止めします、その隙に中佐たちは行ってください」

「な、しかしそれでは……」

「今こいつに時間をかけるわけにはいきません……今最も倒すべきは『山』です。あれを破壊しない限りは敵の兵力は増えていくだけです。」

そう言ってガランドを諭すフェデリカ。

「フェデリカ……」

そんな彼女を優刀は悲しそうな目で見つめる

「優刀、心配いらないわ。こんな奴に負けるほど私たちはヤワじゃないわ」

フェデリカはいつものような陽気な笑みではなく、慈愛を含んだ聖母の様な笑みを浮かべる

「……死ぬなよ」

「もちろん」

互いに言葉を交わす二人……すると

「じゃあ、あたしも残ろーっと」

この場に緊迫した空気などつゆ知らず、のんきな声で言いだしたのはバウ航空隊の西沢義子

「な、義子！」

「ちよつと義子、本気なの？」

そんな戦友の言葉が信じられず聞き返してしまう竹井と坂本。

「だって、あの『山』っていうの固くて機関銃じゃ装甲削れないんでしょ？ だったら機関銃しか持っていない私がいても意味ないじゃん」

「確かにそうだが……」

西沢の正論に言葉を詰まらせる坂本

「見た感じさ、あのネウロイ……アホみたいな威力のビーム撃つし動きも素早い、砲門の数がデタラメで強そうだけど、あんなに砲門の数多くしてるってことはきつとあのネウロイ装甲はそこそこしかないんだよ」

「なるほどな……」

西沢の言葉に優刀は一人頷く。

彼女の言う通り、あの新種のネウロイは異常なほど砲門が多い。その理由が装甲が薄くて相手を近づかせない為についているのだとしたら納得がいく。あのネウロイは速度と火力を高めるために装甲を犠牲にしたのだ。

拠点を防衛するには確かにうってつけだ。

「だったら大勢であれに立ち向かうよりも、少数精鋭で機動力の高い人でコアを潰しちゃえばいいんじゃない？………って、どうしたよ二人とも？」

西沢の説明に目を丸くしている竹井と坂本

「いやだって、……なあ」

「まさかあなたがそこまで考えて行動しているなんて………」

・何か悪いものでも食べた？」

「うわ！ひどっ！！？ 二人ともあたしの事どんな目で見てたのさー！？」

「太○胃散ジャンキー」

「新三○胃腸薬中毒者」

「ひどー！！いくらあたしが胃腸弱いからってそこまで言っ！？」

そんな二人の言葉にショックを受ける西沢

とぞこへ…………

「うわっ！！」

「ちいっ！！」

次々とビームを撃ち込んでくるネウロイ

再び散開する優刀達。

そして楯無が口を開く。

「まあ、そんなわけだから隊長、ここはお姉さんたちにお任せあれ。」

「更識……」

「心配しなくても大丈夫、きちっと私が年長者として付き添うから」

ほほっと笑う楯無……

そこに再び撃ち込まれる幾条ものビーム

「・・・いくぞ、ここは彼女たちに任せよう」

今まで黙って聞いていたガランドが決断する。

「了解、三人とも・・・死ぬなよ」

そして優刀達は次々と雲海へと飛び込んでいく

「そっちは任せるわ!!」

「山を頼んだわよ」

「二人とも帰ったら覚えとけ

!!」

「・・・・・・・・あれが」

雲の下に降り立ち、クラカウの町を視界に納めた優刀達はその光景に息をのむ。

かつての古き美しい町並みは今はなく、荒廃した街並みを覆う様に巨大な黒い影が浮かんでいる。

「あれが『山』・・・・・・・・」

町に覆いかぶさる黒き異形……『山』がついに優刀達の目の前にその姿を表した

その山の周りにはいまだ多くの小型ネウロイが護るように飛んでいる。

そして眼下に広がるクラカウの街には陸戦型のネウロイが姿が見え、既にロンメル將軍率いる陸戦部隊と戦闘を始めていた。

「見えた！コアの位置は頂上！この位置は変わっていない！！」

眼帯を外して山を見ていた坂本から嬉しい知らせが入る

「よし……全機準備はいいか？」

その報告を聞いたガランドは優刀達に声をかける。

「これより我々は『山』に対して攻撃を仕掛ける……ここ
まで来たらもう何も言う必要はないな。私からはただ一つ……
・死ぬな、絶対生き延びろ！！」

「了解！！」

「よし、全機攻撃開始！この街を奴らから取り戻すぞ！！」

そして優刀達は山に向かって攻撃を開始する

「じゃまをするな!!!」

山へと向かっていく途中、次々と小型のネウロイが優刀達を襲うがそれらを掻い潜り、敵を次々と落して『山』へと迫る。

「っ!!!! 皆避ける!!!!」

次の瞬間……

ドンッ!!!!!!!

『山』から四条のビームが発射され、優刀達に襲いかかる

「くっ!」

それを何とかギリギリのところまで回避する

優刀が避けた一撃はそのまま地表に直撃して大地を揺らす

辺りに白い破片が舞う。

「相変わらず敵味方お構いなしか……!!ラル、一気に行くぞ!」

「ああ!」

そう吐き捨てる優刀は一気に山との距離を縮めようと加速する。

『山』唯一とも言っているいい欠点、それがあの強力なビームを放つた後、次の発射までにいくらか時間を要するという事だ。もちろんその時間は微々たるものだがその間に一気に距離を詰めてコアを両断すればいい。

距離を詰めよつとする優刀に小型機が群がるがそれをラルが全て
撃ち落とす

「相変わらず頼りになるな」

「惚れてもいいんだぞ？」

そして『山』の頂上へと迫ったその時

「なつ！！？」

はるか上空から降り注ぐ赤き閃光が優刀に襲い掛かる

それを間一髪、障壁で防ぐ優刀。

「まっ……」

すぐ下から』山』のビームが迫る

「っ！！」

左右のストライカーの出力を器用に操作してその場で宙返りをする。

そのままビームは空しく上空へと昇ってゆく

紙一重で避けた優刀は一旦『山』から距離を取る

「優刀！無事！？」

インカムから武子の心配そうな声が響く。

「ああ、大丈夫だ……」

武子のほっとしたようなため息が聞こえる。

「しかし今の攻撃は一体……」

謎のビームの正体を確かめようと上空を見上げる

「な!!」

「そんな!!」

「まさか!？」

優刀につられて上空を見上げた者たちから驚愕の声が漏れる

彼らの視線の先……そこには

「ウィッチ………なのか？」

その身を黒く染め上げ、赤き燐光を発してこちらを見下ろすウイ
ツチがいた

Ep-20 schwarze Hexe (後書き)

アホ兔を期待していた皆さん、申し訳ございません。

正体はウィッチ？でした・・・

さすがにここでアホ兔出したらトンでもねえ結果になると・・・

というわけで次回に続きます

最後になりますがご意見ご感想の方お待ちしております。

それではまた次回！！

Ep. 21 Quattro serrature (前書き)

どうもシユウ禅です!!

遂に『山』前にたどり着いた優刀達、しかしその前に立ちはだかる謎のウィッチ・・・

それではどうぞ!!

「ウィッチ……なのか？」

遙か上空からこちらを見下ろす人物を見上げて優刀は驚愕の声を上げる。

その姿は紛れもなくウィッチだ。

足にはストライカーユニットを履き、そしてウィッチである証の使い魔の耳と尻尾もある。

しかしその体は黒い無機質で光沢を放ち、顔にはのっぺりとした

マスクを被っている。そのマスクと腰まで伸びる漆黒の髪の毛の所為でその人物がどんな顔をしているのか確認することが出来ない

その漆黒の魔女が腰に差した扶桑刀を引き抜き、優刀に掛かる

「くそっ!!」

迎え撃つ優刀

漆黒の魔女のその漆黒の扶桑刀から放たれた斬撃を優刀は魔法力を込めた扶桑刀で受け止める

その斬撃を見た瞬間、優刀は驚愕する

「まさか……そんな……」

この太刀筋を俺は知っている。

いや、そんなはずはない……

だって彼女は今……

「智子……なのか？」

眼前の漆黒の魔女は答えない

「智子……なの？」

その戦いを見ていた武子も信じられないといった風に目の前の
魔女に問いかける

魔女を力づくで押し返して距離を取る

「二人とも、あいつを知っているのか？」

俺たちの反応を不思議に思ったラルが聞いてくる

「ああ、あいつは穴吹智子……扶桑で同じ部隊に所属していたウィッチだ」

「こつちでは？扶桑海の巴御前？って言ったほうが解るかしら？」

669

「なんだと!?!」

「あの？巴御前？なの!?!」

皆が出てきた名前に驚く

彼女の名は穴吹智子……

優刀と武子の扶桑海事変の時、共に戦った仲間であり、？扶桑海の巴御前？と呼ばれる扶桑を代表するエースの一人である。

「だが、今あいつはスオムスにいる筈だ……こんなところにいるわけが無い」

今は遙か北欧の国、スオムスにて迫り来るネウロイからスオムス防衛についている筈である。

・
・
そんな彼女がはるか南のカールスラントにいる筈がないのだ……

「答える……お前は誰だ？」

しかし、漆黒の魔女はその問いに答えることなくただ無言で優刀達を見続けている

間違いない・・・今の太刀筋は間違いなく彼女、智子のものだ。

幾度となく剣を交えたから分かる

彼女だ・・・

間違いない・・・それなのに

違う彼女じゃない、彼女である訳が無い

かつて共に戦った彼女である筈がない

心が彼女であることを認めない・・・認めようとするな

そんな優刀の葛藤を見透かすようにただ見つめ続ける漆黒の魔女。

優刀の脳裏に昔の記憶が蘇る……

彼女と一体何度剣を交えた事だろうか？

一体どれだけの戦場を駆けぬけただろうか？

共に笑い、共に泣いた……数少ない幸せな懐かしい記憶、
その全てが脳裏を過ぎる

目の前いる漆黒のウィッチが彼女なら俺は

決断する

「 昏、あいつの相手は俺がする……手を出すな」

俺は彼女を斬る

「何馬鹿なこと言っているんだ優刀！」

「得体のしれない相手なんだ、ここはみんなで戦うべきだよ」

俺の言葉にラルが驚き、伯爵が止めようとする

しかし……………

「今、俺たち全員でこいつを相手にする余裕はない……………こいつに構っていたら後ろから『山』に撃たれる。」

そう……………今、相手にしなければいけないのは目の前の彼女だけではない。

最大の目標はその後ろにそびえる『山』なのだ。

その肝心の『山』は今はどういう訳かただじっと何もせずにいる。

「だとしてもボスが戦う必要はない、仲間かも知れないなら……………
・私がやる」

漆黒の魔女に向かおうとする大将を手で制する

「悪いが大将それはダメだ

俺がやる」

そういつて漆黒の魔女に目を向ける

その漆黒の魔女はいまだにこちらを無言で見続けている

「もし彼女が本当に？穴吹智子？なら俺が討つべきだ」

「しかし、ボス……」

何か言おうとする大将を手で止める

「ありがとうな……お前が憎まれ役をやる必要なんてない。これはかつて？仲間？であった俺がやらなくちゃいけないんだ。あいつが人に仇名す存在になったのなら、かつての仲間である俺が討たないといけない」

そうだ、彼女はかつて共に戦った仲間である。

その彼女が敵に回るといふのなら、仲間である俺が止めるべきで、他の誰かにやらせる訳にはいかない

彼女に向かって行こうとすると・・・

ぎゅ・・・・・・・・

後ろから羽織の裾をギュッと強く握られる

「・・・・・・・・」

「武子・・・・・・・・」

握っていたのは武子だった

振り向くと俯き、何かに耐えるように体を震わせている

智子は彼女の……武子の親友だ。

突撃癖のある智子の身を案じ、激戦区であるカールスラントではなく侵攻が比較的緩やかなスオムスに派遣するように上層部に掛け合ったのは他ならない彼女なのだ。

何よりも共に戦っていた智子を騙す形になったとしても、それでもなお彼女の身を案じていたのだ。

そんな彼女の親友を俺は殺す……

「……………恨んでくれて構わない」

視線を前に戻し、彼女に告げる

「恨むなんて、出来るわけじゃない……………」

背中に頭をつけて彼女は弱々しく声を出す

「お願い……彼女を……貴方の手で殺して」

そして背中を押される……

「……あゝ」

「……いくわよ皆、私達で『山』を破壊するわ!!」

その武子の声を背中で聞気ながら俺は彼女に向かってまっすぐに
飛ぶ

彼女を殺すために

そして彼女もこちらに向かって一直線に飛ぶ。

俺を殺すために

刹那、白と黒……その二つの煌めきが交差する

「かかってこい智子!! 今日でお前との勝負に決着をつける!!」

優刀と智子が戦いを始めたその時、クラカウ上空では……

「く……早い……!」

フェデリカの横を黒い壁が通り過ぎる。

その場から何とか離脱しようとするが・・・

「っ!？」

前方から次々と赤い光弾がフェデリカに襲い掛かり、壁の傍に釘付けにする

それを体をロールさせながら右へ左へと動き続けることで躲し続ける

振り向き攻撃を仕掛けようとするが、

「もうあんなところ!」

すでに黒禽くろいんは遙か彼方、その姿は豆粒まめつぶほどしか見えない

クラカウの空を覆う雲海の更上空ではフェデリカ達三人が？怪鳥？を相手に苦戦を強いられていた。

「まったく、厄介な敵ね……」

遙か彼方の『黒禽』を見据えながらフェデリカは考える。

（敵はその攻撃力と機動力を生かした一撃離脱タイプ……おかげでこつちが捉えようとしたときにはその巨体は遙か向こう……やりにくいっいたらないわね。）

何とか足止めできればいいのだが、足止めを行おうと先ほどから西沢と更識が攻撃を仕掛けているが、あまり効果があるとは言えない。

稀に攻撃がヒットしているが、その勢いを殺すことが出来ていない。

「せめて、何か足止め出来る手段があれば……」

足が止まれば、後は自身の？とっておき？で叩き落とすことが出来る

何か使える物が無いかいつも機械を弄っている時の癖で辺りをつい見回してしまう・・・

しかし、目に映るのはどこまでも続く青い空と先の見えない白い雲の絨毯だけである

そんな都合よく何かがあるなんてことは蒼穹の上ではまずない。

しかし

フェデリカは？それ？が眼に入った瞬間・・・

「これよ！！ これだわ！これならいける！！」

そう叫んだかと思うとフェデリカはすぐさま行動に移る

「二人とも聞こえる!？」

『何かしら、今こっちは手が離せないんだだけ……く!？』

「楯無!？」

『だ、大丈夫……それより何か思いついたの?』

「ええ、とっておきの秘策がね」

フェデリカは彼女に?それ?を話し始める

『それ本気?』

インカムからは聞き終えた更識の驚きを通り越して呆れた声が返ってくる。

「本気よ本気、あれを倒すにはそれしかないわ」

『……わかった、あなたに賭けるわ。』

「ありがとう」

聞こえてたわね西沢飛曹長！」

そういうと一人で『黒禽』の相手をしていた西沢からすぐに答えが返ってきた。

『りょーかい、中尉！』

そして三人はすぐに行動を開始する

フェデリカは西沢へと向かい、西沢を通り過ぎた『黒禽』は今度は真正面から迫るフェデリカに狙いを定め、頭部からの強力な一撃を放つ。

「はあああっ!!！」

それをギリギリ紙一重で躲し、そのまま速度を落とさずに突き進むフェデリカ

しかし躲したのもつかの間、紅き閃光の後には無数の光弾がフェデリカに迫る

その間をすり抜けるように突き進むフェデリカ・・・そして『黒禽』の黒き巨体とすれ違い、その禍々しい翼の下を潜り抜け、背後に出る。

しかし、その背後に攻撃を放つことなくそのまま西沢と合流、一気に加速して旋回、その場所へと進路を取る

旋回してそのあとを追う『黒禽』

「・・・来た!!!」

「振り向かないで！このまま一気に行くわよ!!!」

白い尾を引きながら飛ぶ二人、そこにまたも『黒禽』から強力な閃光が放たれる

それを寸でのところで躲すフェデリカと西沢。

……だが

「っ！しまった!!?」

その一撃がフェデリカのユニットを掠った

爆発して黒煙を吐くユニット。

「中尉!!」

「飛曹長!!そのまま飛んで!!」

フェデリカは微笑み、白い雲海にその身を墜としていった

「くっそおおおおおっ！！！」

雄叫びを上げながら西沢はその場所へとひたすらに飛ぶ。

その後から次々に光弾を放つ『黒禽』

それらを何とか躲し続ける西沢だが『黒禽』はその距離を詰めて
いく

「く……もう駄目」

西沢が諦めかけたその時……

『上出来よ、西沢飛曹長』

パチンつと指を鳴らす音

次の瞬間、

ドンシ……！

突如、雲海から巨大な爆発音とともに立ち上った巨大な白柱が、『黒禽』を飲み込む。

G Y a S A A A A A ! ? * % & \$! ! ?

突然の出来事に『黒禽』は混乱したように雄叫びを上げる

水蒸気爆発……

それが『黒禽』を襲った巨大な白き柱の正体だった。

それを成したのはISオラーシャ代表、更識楯無その人

彼女の纏うIS、ミステリアス・レイディ霧纏の淑女？の特殊兵装は水を操る能力。雲の中に潜んでいた彼女は周囲にISエネルギーを伝達させる特殊なナノマシンを散布。散布されたナノマシンは水滴と氷の粒で構成される雲に溶け込み、その範囲を拡大させる。そしてナノマシンに伝達されるエネルギーを一気に熱に変換させることで水を瞬時に気化

させ、水蒸気爆発を起こしのだ。

いまだ完成には至っていない為、ナノマシンの変換効率も反応も悪く、とても楯無が考えているような使い方も実戦での使用も出来ないが、それでもナノマシンを散布させ、熱に変換させるといふ動作が出来た……おかげで？霧纏ミスティアス・レイディの淑女？のエネルギーは底を尽きかけているが、期せずして兵装の稼働データが得られたのだ。十分おつりがくる。

しかしあまりに広範囲での爆発であった為に、その威力は見た目に反して高くない……

けれどその動きを止めることはできた

突如、雲海を突き破り一つの影が現れる

それは赤き雄々しい翼を広げた猛禽。

それは……

「あとは任せたわよ!!
フェデリカ!!」

IS? 赤い嵐?テンペスタ・ロッシをその身に纏ったフェデリカだった。

「はあああああああつ!!」

その手に大剣、BWS-3、通称?フォートレス・スレイヤー大型級殺し?を構えて一気に『黒禽』のその懐へと飛び込み、その巨体へと突き刺す

G Y d a e a e a e r o p a ! ? !

苦悶の声を上げる『黒禽』

体勢を崩し、その胴体をフェデリカの眼前に曝す

「見せてあげるわ……私の？とっておき？！……！」

フェデリカは両手にMG151/Rを呼び出し、主翼のマイクロミサイルポッドの照準を『黒禽』に向ける。

「全弾持って行来なさいッ！！ クアドラロック……！！」

Ep-21 Quattro serrature (後書き)

いかがでしたでしょうか？

フェデリカさん、楯無さん大活躍回でした。

ついに次回、クラカウ奪還作戦も大詰めです。激闘の果てに待つのは一体何か？

最後になりますがご意見ご感想お待ちしております！！

それではまた次回！！

Ep・22 g?ttlicher Wind(前書き)

どうもシユウ禅です

いよいよ作戦も大詰め、その先にあるものとは？

ではどうぞ！..

「はあっ!!」

二つの影が交差する

一つは白を纏い、もう一つはその身を漆黒に染めている

優刀と智子だ

既に二人は何十合も打ち合っている。

それでも二人の戦いに終わりが見える気配はない

「ふっ!!」

優刀が上空から智子へ肉薄し、蒼く煌めく扶桑刀を横薙ぎに振る

う。その一撃を智子は体を優刀の方へ正面を向けて、漆黒の扶桑刀で弾く。

一瞬の交差……そして二人は共に体を上に向け急上昇を始める。
二機は絡み合うようにその機動で螺旋を描きながらどんどん上昇する

しかし、智子は優刀からどんどんその距離を離されていく。

速度勝負ではかなわないと悟ったのか智子は上昇を止め、降下にうつる。

それを見計らったように優刀は反転、完全に智子の後ろをとった形で降下を始める。

優速と体重を生かした降下でその距離を一気に詰める

息が掛かるような間合いに迫った瞬間……、

「もらった！」

智子めがけて優刀の白刃が一閃

しかしそこには智子は既にいなく、優刀の放った一撃はむなしく空を切る。

「上か！」

斜め左上空を睨む優刀、そこに智子の姿があった。

？ツバメ返し？

智子が最も得意とする戦闘機動である

智子は右足と左足を複雑に動かし、後ろ回転の要領で智子は一瞬で宙返りをて、優刀の頭を押さえたのだ。

宙返りをしながら握った扶桑刀が煌めく。

「くっ！！」

受け止める優刀

そして互いに刀を押し返し、距離を取る。

距離を取った優刀はMG54を展開、側面に回り込むような機動を取りながら智子に向けて撃ち込む

対する智子も左手をこちらに向けると、赤い光弾を放ち、側面を取らせまいと反対方向に回り始める

不規則な加速を行いながら、円を描いていく速度を上げる二人

「……………おかしい」

闘い初めてから数分…優刀はふと、ある違和感を目の前の智子に覚える

(なんなんだ？智子の奴……単調過ぎる)

元々頑固で堅物、生真面目で猪武者という言葉を描にかいたような奴だが、その飛行センスと剣術の腕は確かだ。

彼女の腕は自分がよく知っている。

あの太刀筋は間違いなく彼女のモノだった。

だとうのにいざ戦い始めてみると、先ほどからどうにも戦い方に違和感を覚える。

剣の太刀筋も、射撃の腕も、飛行技術もまさしく彼女の動きだ。

だとうのにその戦い方はどうだ？

その戦い方には駆け引きも何もありません…目の前に敵がいれば剣を振り、離れていれば銃を撃つ、それだけだ

いくら猪であった智子もここまで何も考えていないような戦い方はしなかった。

だとうのに目の前の智子はただ敵の動きに反応しているだけ…
…そんな戦い方であった

「弱いな……」

とてもじゃないが自分の知っている穴拭智子の強さではない。

いつだって彼女は自信満々、自分の技量に絶対の自信を持っている。そのアホみたいな強情さから武子に心配され、スオムスに追いやられるくらいだ。それが振るう刀からいつも伝わって来ているのに今はまるで伝わってこない。

もちろんネウロイに洗脳されているのであれば、そんなものを感じ取れというのが無理な話だが、それにしただって弱い。

目の前にいる漆黒の魔女はあの穴拭智子ではないのかもしれない

そんな僅かな希望が脳裏を過ぎる

そうであってほしいと思う。

けれど、今はそんなことを言っていられる状況じゃない。

優刀が思考の海に沈んでいると・・・

「・・・っしまった!？」

優刀の後ろに智子の姿が・・・

完璧な位置取りだ。

十分にビームで撃ち落とせる距離である。

智子は狙いを定めてビームを放とうとする

しかし……

!!!!!! - -

突如、智子の視界から優刀が消える

瞬間……

上空から優刀が一気に接近、智子に襲い掛かる

!!!!!!? - -

彼女がビームを放とうとした、まさにその瞬間……

彼もまた先ほどの智子と同じように？ツバメ返し？を行い、彼女の頭を押さえたのだ。

そして一気に加速、智子に向かってその手の扶桑刀を振り下ろし、智子の左腕を叩き切った。

「……なぜ反応しなかった？」

優刀が驚いていること……

それは智子が何も反応しなかったことだ

彼女とは幾度とも剣を交えている。優刀が？ツバメ返し？が出来るのを智子は知っている筈なのだ。

何せ二人で？ツバメ返し？を練習し、先に覚えた優刀が彼女にコツを教えたのだ。

知らない筈がない。

事実、何度も彼女との模擬戦で優刀は？ツバメ返し？を行い、攻撃を何度も防がれている。

である筈なのに彼女はとても驚いているようだ

まるで、優刀の？ツバメ返し？を初めて見たかのような反応である

(まさか、本当に・・・？)

707

芽生えた小さな希望が僅かに大きくなる。

しかし確証はない・・・

ならば

「もう一回確かめるだけだ!!」

優刀は彼女から距離を取り、扶桑刀を鞘に戻し、MG54を展開して智子にその銃口を向ける

智子は優刀に攻撃を試みようとして突撃してくる。

優刀は迫る彼女に構わず、銃口を向けたまま、跳び続ける。

優刀の体が青い光に包まれていく

するとそれに呼応するかのようには蒼き光がMG54の銃身に纏わり、強く光り始める

優刀に向かって突き進んで行く智子。

「蒼の雷光で消え失せろ」

一条の蒼き閃光が智子を貫き空を裂く

直後……

ドオオオオオオオン！！

耳を劈くような轟音が響く

半身を吹き飛ばされ、地上へと落ちていく智子

「……やはりな」

その様子を見ていた優刀はそう呟く。

「まったくあの猪娘、心配かけて……これで武子の悲しんだ顔を見ずに済む……そうだろ？」

見据えた先にいる智子に語りかける

「ずいぶんと面白い真似をしてくれたよ……おかげで半分信じた、まったくアカデミー主演女優賞モノだ……ネウロイ！」

Q Y a a a a a a ! !

甲高い雄叫びを上げて智子……智子の形を模したネウロイは吹き飛ばされた半身を再生、優刀へ向かって呐喊しようとするが……

ドンッ!!

雷鳴が轟き、またもその半身を吹き飛ばされる

「学習能力が無いんだな……それとも速すぎて解らなかったのか？」

左手にMG54を構えた優刀が冷めた眼でネウロイを見下ろす。

「俺の固有魔法である？ 大気操作？ で周辺の大気を操作、雷を発生させてそれを銃身周辺に帯電させて一気に放出する……それがお前を吹き飛ばした一撃の正体だ。」

やや、めんどくさそうに口を開く優刀

「まあ初速も早くて攻撃力貫通力もあるんだが元々俺の固有魔法は大気を操作する能力だからな、魔法力を電気エネルギーに変える固有魔法よりも消費が多くて多用は出来ないんだ。銃身の加熱も凄くて連射は出来ないし銃の寿命も縮まるが、使い所さえ見極めればとても強力な一撃だ……俺のとおきのおきの一つだ」

優刀はその冷めた瞳でネウロイを睨み付ける

「この一撃を智子は知っている、もしお前が智子であるなら銃身が光りだした瞬間に障壁を張って防ごうとするか、出来るだけ距離を取ろうとしたはずだ……けれど、お前はしなかった」

砲身から煙を上げるMG54をしまい、優刀は腰に差した扶桑刀に手をかける。

「覚悟しろ……今まで散々人の心をもて遊んでくれたんだ。

お前は俺が？殺す？」

「く、駄目！！ 敵の火力が高すぎてうかつに近づけない！！」

目の前にいた小型ネウロイを気合一閃、腰に差した扶桑刀で切り捨てた武子が悔しそうに叫ぶ

武子達は『山』を破壊するべく、コアのある頂上へと近づこうとしていたが、その道を無数の小型機によって阻まれていた

「こっちの連戦で魔法力も残り少ない……このままじゃギリ貧か」

次々に小型ネウロイを落としていくジェンタイル。その顔にはわずかだが疲労が見え始めていた。

「それに敵はまだまだ増えるようだしな……どうする武子？」

武子の背後で援護していたラルが山を見据える。

その視線の先では『山』は一機、また一機と小型を吐きだしている。

ガランド中佐やバルクホルン達がその大多数を引きつけているから武子たちに向かってくるネウロイは少ないものの、今の武子たちは極限まで消耗しており、このままでは全滅は免れない。

「せめてあのビームさえ何とか出来れば……」

武子たちの進撃を阻んでいるのは小型ネウロイだけではない。

『山』の頂上から発せられる四つの強力なビームであった。

武子たちが進撃しようとする小型によって道をふさがれ、
『山』が小型もろとも武子たちを落とそうとビームを放つのだ。

今は何とか直撃を免れているが、それもいつまで続くか解らない。
・
・
・

何か策はないか？

武子が必死に考えていると……

『ビームは俺たちに任せな!!』

突然インカムから聞き覚えのある声が……

「その声……まさか!」

キイイイイインつと甲高い音が北の方角から聞こえてくる

その方向に目を向ける武子たち……

武子たちの瞳に映るもの……それは

遙か彼方より接近してくる四つの猛禽……

その先頭を駆けるのは

「黒い—ラプター（F-22）……冬后少佐!!」

漆黒の猛禽^{ラプター}を駆る？黒騎士？……冬后蒼哉だった

『嬢ちゃん達、待たせたなッ!!
ちゃんと俺たちの獲物は残っ
てるか?』

一気に戦場に飛び込む四機のラプター

次々にネウロイを落としていくその様はまさに大空を支配する猛禽^{タイ}そのもの……

ネウロイも彼らを脅威と感じたのか、次々にビームを仕掛けるも、それらの間をすり抜け、墜としていく

「冬后少佐！！ どうしてここに!？」

武子が驚くのも無理はない……

何せ冬后は囮部隊としておびき寄せたネウロイと戦っている筈なのだ

『なに、案外早くおびき寄せた奴らを倒しちゃってな、他に獲物が無いかと思ってこっちに飛んできたのさ』

そう言って、軽快な笑い声をあげる冬后。

『フジの嬢ちゃん、『山』のビームは俺たちに任せな。俺たちで四つのセルを破壊する……その際に嬢ちゃん達は奴のコアを頼むぜ！』』

「しかし！！」

ラプターは確かに最強と謳われた戦闘機だ。

しかし機動性はストライカーユニットとISには遠く及ばない。

危険すぎる……そう言おうとするが

『確かに、お前さんたちの使っているストライカーやISには機動性は遠く及ばねえさ……けどな、スピードはどうだ？』

「……まさか！！」

武子は冬后の言わんとしていることを理解した。

『超音速によるビーム発射セルへの一撃離脱……これしかねえ』

「危険すぎます!! 一歩間違えば『山』に激突します!!」

あの巨大な『山』に超音速で突っ込むなど自殺行為だ

危険な賭けを行おうとする冬后を止めようとする

「……………死ぬ気ですか」

『別にカミカゼ精神なんて俺にはねえ……ただ証明してえんだよ』

そういつて言葉を紡ぐ冬后

『俺達、男はちゃんと？お前さん達ウイッチと一緒に『奴ら』と戦えるって事をな……………』

「少佐……………」

『別にお前たちが戦っていることが気に食わねえって訳じゃねえ．
．．ただ、な？ お前たちだけに戦うことを任せる．．．そんなこ
とが絶対に良い訳がねえ』

『確かに俺たちは奴らを倒すには力不足だ．．．けど、お前た
ちの力になってやることは出来る筈だ。だから頼む．．．やらせて
くれ』

その声に宿る決意は堅かった。

その決意の固さを感じた武子は

「分かりました．．．．．ビームをお願いします」

『．．．．．ありがとうよ』

そして武子は瞬時に作戦を立てる。

「皆よく聞いて！ これより私たちは『山』への攻撃を開始しま
す！ まずあの厄介なビームを発射する四つのセルをラプター四機

による超音速での一撃離脱で破壊する為に『山』周辺にいる敵ネウロイの数を減らし、注意を出来るだけ引きつけます！十分に数が減ったところでラプター部隊は一撃離脱を敢行、セルを破壊してください！！セルが再生する前に私と坂本飛曹長で敵直上から降下！！コアへと攻撃を仕掛け破壊します！！」

そう言っつて武子はガランドとバルクホルンの戦っている方へと視線を向ける

「お二人には北と東の敵の掃討をお任せします！！」

『ふ、了解だ中尉』

『任せておけ、必ず成功させてみせる！！』

そして武子は義勇統合戦闘飛行隊の面々へと視線を向ける

「皆、これは危険な賭けよ……もしかしたら」

死ぬかも知れない……そう言おうとするのをラルに肩に手を置かれて止められる

「大丈夫だ武子・・・皆死にはしないさ」

「ええ・・・そうね」

目の前には隊員たちの笑顔があった。

大丈夫だ、作戦はうまくいく・・・そう確信し、武子は『山』を見据え、声を上げる

「全機、攻撃開始！！！！！！」

武子の号令の元、ウィッチ達は空を駆ける

全てを・・・明日を取り戻すために

Ep - 22 g?ttlicher Wind (後書き)

次回、ついにクラカウ奪還作戦決着!!そして第零章完結

物語は終わり・・・そして始まる。

ご期待ください!!

Ep. 23 Befreiung von Cracca (前書き)

どうもシユウ禅です……

遂にここまで来ました。

クラカウ奪還作戦終結!!

それではどうぞ!!

?

それは

いつの時代も連綿と繰り返されてきた戦い

その中で人は傷つき、悲しみながらも前を向き、歩き続ける

西側の敵を受け持ったラルとクルピンスキー、ロスマン、ハルトマンは敵の群れの中へと一気に突っ込む

「いやあ、これは勲章の大盤振る舞いだね」

そう言っただけのいきなり声を出すのは伯爵ことクルピンスキー。

彼女は真つ先に赤き閃光の雨をすり抜け、ネウロイの群れへと突っ込んでいき、魔力を込めた銃弾を次々に叩き込む。

その攻撃で墜ちていくモノもいれば、体勢を崩すだけのモノもいる
クルピンスキーの後方を飛ぶラルが体勢が崩れたただけのものを見
分けて銃弾を叩き込み、とどめを刺す

その更に後ろを飛ぶロスマンは前方をゆく二人の様なハイペース
おとしていくことはせず、着実に一機ずつ、確実にピンポイントで
攻撃を仕掛けて装甲を削り……

「フラウ!!」

「うん!!」

その呼び声に答えたハルトマンが装甲が削られたネウロイに銃弾
を浴びせ、落とす。

次々と撃ち落としていく四人のウィッチ。

すると……

「やれやれ……此処で大物とはな」

「私達も人気者ね」

その前に突如中型のネウロイが姿を現し、彼女たちに赤い雨が降り注ぐ

しかしその猛攻を前にしても四人は止まらない。

「やれやれ・・・これは私の好みじゃないんだがな」

そう言いながらラルは手に持つMG54を量子化させて別の銃を構成する

手に姿を現すのはMG151/R。

フェデリカが使う機関砲と同タイプのものである

ラルはMG151/Rを中型ネウロイに向けて引き金を引く・・・

次の瞬間、

蒼い燐光がMG151/Rから断続的に放たれ、その光が中型に襲い掛かる

薄殻魔法榴弾・・・

マインゲシヨス

それが放たれた光の正体だった

薄殻魔法榴弾マインゲシヨスは着弾すると蒼く耀く巨大な光球となり、中型を覆う。

次々と放たれ、光の花を咲かす

その横を通り過ぎる四人

その光が収まると中型の姿はそこになくなっていった。

「くそっ！！またか！！」

またも目の前に現れる中型

その中型に向けてラルは薄殻魔法榴弾マインゲシヨスを放とうとするが……

「待つてラル中尉、ここは私がやる！！」

そう言って前に躍り出るハルトマン

「な！フラウ、無茶だ！！」

一人で中型と戦うなど無理、そう言おうとしたクルピンスキーだが、

「行きなさい！！フラウ！！」

それを遮るロスマン

「あなたの成長した姿……その姿を私達に見せて！！」

尊敬する恩師の声にこたえ、ハルトマンは一気に突き進む

迫り来る一つの敵など恐れるに足らずとばかりに赤い閃光をハルトマンに向けて放つ

その間を縫うように無駄の一切ない動きで進んでいくハルトマン

信じてくれている

先生が、隊長が、伯爵が、皆がずっと、迷惑をかけてきたこの私を信じてくれている

もうそれに私たちは答えないといけない……

もう一人前なんだと、一緒に飛ぶ仲間なんだと、そう証明しないといけない。

マルセイユはその期待に応えた

今後は私の番だ

「シュトルム疾風!!!」

彼女がそう叫ぶと彼女の周囲に風が発生、それは大きな竜巻となつて彼女を包み込む

「いっけえええええええっ!!!!!!」

? 衝撃波の竜巻? となつたハルトマンは一気に中型へと呐喊する

ハルトマンの纏つた衝撃波に成す術もなくその身を深く挟られ、コアを破壊される中型。

しかしハルトマンの突撃はそれだけでは飽き足らず、目の前にいる敵を次々に飲み込み、破壊する

「フラウ……」

ロスマンの眼に涙が浮かぶ。

自身の教え子の成長した姿にうれしさが込み上げる

しかし、まだ喜ぶその時ではない……いまは眼前にいる敵を倒す、それだけだ。

「……おっ」

ジェンタイルはただ突き進む。目の前にいる敵をただ、ただ、撃ち落としていく。

その顔にはいつもの気だるそうな表情はない。

「真正正銘、全力全開、彼女は持ちこたうる全てを賭けて突き進む

彼女の戦闘スタイルは突っ込んで、撃って、落とす。

それはいつだって変わらない。

目の前の敵を倒す…それだけしか彼女の頭にはない。

後ろは気にしない……なぜなら

「はあああああつー!」

ジェンタイルの背中に付こうとした敵機をマルセイユが撃ち落とす。

自分の背中を預けることが出来る……信じられる仲間がいるからだ

故に彼女は突き進む……仲間の道を切り開くために

そんな彼女の前に大型のネウロイが現れる

それにもかかわらず、彼女は速度を落とさずに突っ込んでいく

赤く耀くセルが彼女を捉え、撃ち落とすためにビームを放とうとした瞬間

そこに次々と放たれる銃弾

「行くわよ、下原さん!!」

「はいつ!!」

竹井と下原だ

かつての上司と部下であった二人は完璧なコンビネーションで次々に赤いセルに銃弾を放ち無力化していく。

三人の援護を受けたジェンタイルはグレネードランチャーを呼び出し、大型へと放つ

爆発

大きな衝撃が大型を襲う

だが、ジェンタイルの猛攻は終わらない

速度を更にあげて大型に迫る

ジェンタイルは拳に魔法力を一点集中、その手が蒼い光に包まれる

「ボスに教わったとっておきだ……受け取れ!!」

蒼く拳をその大型の黒き巨体に叩き込むジェンタイル……そして拳に込められた魔力を解放、解放された魔力の奔流は大型の内部を貫き、コアを飲み込む

ジェンタイルの一撃でコアを破壊され、大型はその姿を光に変える

ジェンタイルは白き破片になりゆくネウロイを気にも留めずに次の標的へと飛翔する

バルクホルンの中隊は次々とネウロイを破壊し、その注意を惹き付ける。

そしてバルクホルンと鈴の目の前には大型のネウロイ。

大型ネウロイが彼女たちを落とそうと、矢継ぎ早にビームを浴びせていく。

彼女たちはそれに怯むことなくネウロイに肉薄し、銃弾を叩き込んでいく

「中尉！！私が隙を作る！！とどめは任せた！！」

そう叫ぶと鈴は自身のIS？（シエンロイ）甲龍？最大出力の衝撃砲を放つ。

瞬間空気が爆ぜる

大きな衝撃が大型を襲い、その装甲をゆがませる大型をはるか上空から襲い掛かる一つの影

バルクホルンだ

その両手にIS用近接格闘用兵装BWS-02を握り、一気にその距離を詰める

「ずおおおりゃあああああああつ!!!!!!!!!!」

乾坤一擲、その巨体に二振りの大剣を十字に交差して叩き込むバルクホルン。

その威力は歪んでいた装甲を破砕し、奥深くに有るはずのコアがその衝撃に耐えられず砕ける

その体を光の破片に変えるネウロイ

その降り注ぐ光の破片の中を飛行するバルクホルン。その手には先ほどの大剣BWS-02はなく、MG54二丁を構え、迫りくるネウロイへと立ち向かっていく

「第二中隊全機、これ以上奴らに大きな顔をさせるな!!一機でも多く撃ち落とせ!!」

「了解!!」

その叫びに答える中隊のウィッチ達

「よし、Gehenn!!」

「道が開いた!! 冬后少佐!!」

『心よ!!』

固有魔法、三次元空間把握能力で遙か上空から戦場を見渡していた武子叫ぶ

その叫びに應えるように遙か彼方の上空、四つの方角から猛禽の名を冠するかつての大空の覇者が『山』へと猛然と迫る

「皆、準備はいいか!!」

『メビウス01 了解!』

『ガルダ01 了解』

『ウォーウルフ01 了解だ』

三機のラプターが冬の叫びに應える

「さあネウロイ共に教えてやろっぜ!!人間は絶対に負けないっ
てなあっ!!」

「了解!!」

次の瞬間……

ドンっ!!

大きな音と共にラプターは一気に空気の壁を突き破り、音速の世界へと突入する

ソニックブーム
衝撃波を巻き起こし、周囲の白雲を吹き飛ばす

はるか上空から一気に降下しその距離を詰める

「イイイイイヤツホオオオオオオウ!!!」

眼前に迫るは怨敵『山』

まだ、その距離は4000mも離れているというのに冬の視界を埋め尽くしていくネウロイ

一瞬、機首を引き起こしそうになるも思いとどまる。

まだだ、

まだ、

まだその時ではない・・・

冬后達に気付いた『山』が赤い雷を放ち撃ち落とさんとするが、ラプターはバレルロールでその巨大な一撃を躲す。

閃光の余波が機体の底を掠めるが冬后は構わずさらに加速、最高速度に到達したラプターは後ろから迫る小型のネウロイの追隨を許さず、振り切る

「俺たちをなめるんじゃねえええええええつ！！！」

冬后の咆哮、その照準を赤く耀くセルへと合わせる。

「「「「フォックスー！！！！」」」」

四機はAAMを発射

胴体側面から放たれたそれはまっすぐ突き進む。

そして……

ドオオオオオンッ!!

山の頂点は爆炎に包まれる

「今だっ!! 嬢ちゃん達、後は頼むぜっ!!」

「了解っ!!」

高度6000から一気に坂本と武子の順に逆落として急降下して
いく

雲を突き抜け、『山』へと迫る

二人の視界には爆炎を上げる『山』を背に、猛禽が蒼穹へと駆け上がる姿……

その姿はかつての雄々しく、大空を制していた頃の姿を取り戻していた

しかし……

地表から放たれた赤き一撃が黒きラプターに突き刺さる

炎に包まれ墜ち行く猛禽

「冬后少佐あああああっ！！」

坂本がその名を叫ぶ

『構うな、行けえええ坂本!!』

猛禽は地上に落ち、爆発

その様子が視界の端に映り、眼には涙が生まれ落下の中で後ろへと過ぎ去る

「嗚呼あああああつ!!!!」

坂本は右の眼帯を外し魔眼を発動、更に速度を上げてネウロイのコアへ

「はあつ!!」

ネウロイの頂上を一閃、赤く輝くコアを露出させる。

「加藤中尉つ!!!!」

坂本の背後から武子が躍り出て、腰に差した扶桑刀に手をかけ、その鞘を引く

無双神殿流、空の太刀

抜き打ちざまの一撃で相手を両断する。

その一撃を放ち、コアを破壊する

その時

ズドンッ！！

地表から放たれた一撃が武子を襲つ。

「きゃああああっ！！」

障壁で防ぐも吹き飛ばされ、その進路がコアから外れてしまう

「あ、ああああ・・・」

その視界からコアが遠ざかる

『諦めるな、武子！……！』

絶望に頬を濡らし、墜ち行く武子の耳に少年の音が響く。

自分たちを導いてくれているその少年の声に武子は上空に視線を
向ける

はるか上空には蒼く輝く光の軌跡……

それは紛れもなくストライカーユニットによって生み出される魔
力の輝き

「……………っ、優刀

!」

願う様にその者の名を叫ぶ武子

その名を呼ばれた少年は一気に『山』に向かい降下していく。

しかし、その背後には……………

「……………
智子!」

武子の友である穴拭智子、その姿を模したネウロイが迫っていた

Q y a a a a A A A A A ツ ! !

優刀を『山』へ近づかせまいと一気にその背後へ光弾を放ち襲い掛かる

後ろから迫る赤い光弾に構うことなく、優刀は『山』へ突き進む。

「うをおおオオオオオオっ!!」

その距離を詰めていく。

しかし……

「まずい！ ボス!!」

いち早くそのことに気付いたジェンタイルが叫ぶ

「駄目だ、優刀！！行くな！！奴の赤いセルが再生している！！
！ ビームが来るぞ！！！」

ジェンタイルの言わんとしていることに気付いたラルが叫ぶ

「優刀 ……！！！」

叫ぶ武子たちの声を聴きながらも優刀は駆ける

構わない

たとえビームが来ようが構うものか

今ここで奴を倒さなければまた多くの人が傷つき、悲しむ

もう、？あの時？の様な思いはたくさんだ！！

前方に赤きセルが光を帯び始め、背後からはネウロイ智子が一気に距離を詰める

距離を詰めたネウロイ智子はその手に持つ扶桑刀を横に薙ごうとしたその時

！！

優刀は弧を描く螺旋を描がきながら飛行する特異な機動　バレ
ルロール　を放ち、？ネウロイ智子？をオーバーシュートさせてその背後
を取る

突如標的が忽然と姿を消したことで驚愕する？ネウロイ 智子？

？ネウロイ 智子？の前方には『山』は放とうとしている赤き閃光の光・・・

身の危険を察知した？ネウロイ 智子？はその射線上からずれようとするが

「逃がすか！！」

優刀が展開した障壁で押し出される

「うをおおおおっ！！」

押し出された？ネウロイ 智子？はそのまま真っすぐに『山』へと向かう

！！！！？

『山』は大出力のビームを放つ。

仲間諸共敵を消すために……

Q Y a a a a a a a a A A A つ!!!!!!!!!!!!!!!!!!?

その一撃を真正面から受け止める？^{ネウロイ} 智子？

^{ネウロイ} 通常であれば、一瞬で消し炭になっていることだろう。しかし？
智子？は通常のネウロイとは違う……ウィッチを模した特異性ゆ
えに体の強度も高く、再生力も早い。その身を焼かれては、再生す
るその苦を長く味わうことになる。

Q Y a a g e r i o g e a r k j r g a r a h o ! ! ! ! ?

正面からのビームの直撃、背後からの強力な推進からくる痛みに苦悶の叫びを上げる？ネウロイ 智子？

そしてその威力に障壁を張った優刀も徐々に押し返され始める

一瞬でも気を抜けば押し返され、その身をビームに飲み込まれる

「くっ、そ……な、める……なッ！！！」

叫ぶと優刀はさらに出力を上げてビームを押し返そうとする。

しかしまだ押し返すには足りない……

「見せてやる……これが、俺の？奥の手？だあああああああ
ああっ！……！」

瞬間、蒼が爆ぜる

その蒼が彼を包み込み、巨大な魔力の奔流が大気を震わせる

「覚醒おきろ！！ ? 刀龍? ! !」

優刀の中に眠る、彼の使い魔が目覚める

ヴオオオオオオオオオオオッ!!

咆哮

その咆哮は大地を揺るがし、大気を目覚めさせる

その咆哮の主の名は？刀龍？

遙かな昔、巨大な怪異と共に封印された使い魔が数百年の時の中でその存在を自然と同化し、強大な力を得るに至った存在……

彼こそが……優刀の使い魔、？刀龍？である

そして目覚めた？刀龍？は咆哮を上げ、己が全ての力を主である優刀へと捧げる

「うおおおおおおおっ！！」

？刀龍？の咆哮が辺りを震わせると、優刀にも変化が起きる。

使い魔の白い耳と尻尾が現れ、艶やかな黒髪は伸びて風に靡かせ、その青き瞳は獣のような光を湛える

? 覚醒?

それが優刀の奥の手であった。

覚醒は使い魔との同調率を上げることにより、爆発的に身体能力と魔法力を増加させる反面、魔力の消耗が激しく余り多用は出来ない。

優刀は覚醒によって得た膨大な魔力を今にも崩れそうになっていた障壁に叩き込み、その強度を上げる。

巨大なビームを押し返し始める。

「ヴオオオオオオオオっ!!!!!!!!!!!!!!」

声にならない声を上げ、優刀は一気に加速する

膨大な魔力の奔流に彼のストライカー、十二試艦上戦闘脚は悲鳴を上げ、バラバラと崩壊していく

（頼む！！あと少しだけ、あと少しだけでいい！！持ち堪えてくれ！）

崩れゆく愛機へと心の中で声をかける

その声に応える様に十二試はその速度を上げていく

押し返そうとしたそのとき不意にビームの抵抗がなくなる

『山』のビームが途絶えた

「今だっ！！！！」

優等の周囲に風が集まり始め、大きな嵐となって彼を包む

それはもはや竜巻……

ハルトマンのそれをはるかに超える規模の？衝撃波の竜巻？を纏って優刀は駆ける

Qygaagarreaerer!!!!!!

その衝撃波によつて？ネウロイ 智子？はその身を塵に変え、白き破片すらも残さず、消滅する

それでも彼は止まらない

一気に『山』へと向かう

扶桑刀を引き抜き、その刀身にその全ての魔力を込める

「これが俺達

人の！！」

崩れゆく巨大な『山』

その白き破片の中を墜ちゆく優刀

「よくやってくれた」

そう自身の愛機に語りかける。

彼の脚にはボロボロの十二試艦上戦闘脚

欧州で共に戦い続け、共に成長していった大事な仲間

？零？の名を与えられずに散って行った物言わぬ戦友……

もはやその命の灯を失った彼は優刀の脚からすり抜け、墮ちてゆく

「すまなかつた……そしてありがとう」

心からの感謝を込めたその言葉は光の中に溶けていく

そして優刀も墜ちてゆく

そんな彼の顔は安らかであった

自分の大切なものを護れた……その思いでいっぱいだった。

死を覚悟しているわけではない

なぜなら……

「優刀!」

信頼する？仲間？がいるからだ

武子は墜ち行く優刀へと向かい、その身を受け止める。

そして強く抱きしめる

「優刀！……良かった」

「武子……助かった」

「……終わったのね」

「ああ、終わったんだ」

二人で落ち行く光の破片を見つめっていると……

「タイチヨ

！！」

「ぐはあっ！！..?」

腹に思いつきりタックルを食らった

「ちよ...!! フラウ!？」

腹に埋もれるハルトマンを離れさせようとするも

「うえ...ひぐっ!! 良かったよう...」

思いつきり泣いていた

そんな彼女の頭を撫でてやっている... ..

「終わったな」

そういつて近づいてくるラル。

その後ろには義勇統合戦闘飛行隊の面々とバルクホルンに鈴、そしてガランドがいた

「……………ああ」

そう言つて優刀は笑いかける。

そしてガランドは声を高らかに叫ぶ

「よし、これにて任務完了！…！ これより帰還する…！…！」

光る白い破片の中、ロンメル率いる地上部隊は歓喜の声を上げていた。

771

『山』が破壊されたことによつてよる所を失ったネウロイ達は次々に退却、クラカウから撤退していった。

その光景に歓喜する兵士達

肩を抱き合い、共にこの勝利を喜びあっている

そこには国も男女の差別もなかった

そしてロンメルは上空を飛ぶ戦友たちを見て微笑む。

「これにてクラカウ奪還作戦終了！ 我々の勝利だ
！！
！！」

2040年、3月……カールスラント国境沿いの町、クラカウはその多くの犠牲を払いながらも、空を駆けるウィッチ達、そして世界各国から集まった者たちの手によって解放された。

Ep - 23 Befreiung von Cracau (後書き)

.....おわった。

やっとクラカウ奪還作戦終結です！

いや、長かったです

クラカウ奪還を果たした優刀達.....しかしそんな彼らの前に新たななる試練が.....!!。

次回.....第零章ついに完結!!

E p i l o g u e

クラカウ奪還作戦終了後、帰還した優刀達を待っていたのは盛大な拍手と喝采だった

帰ってきて間もなく祝勝会が行われ、夜が更け始めた今も基地内ではどんちゃん騒ぎの真っ最中である

そんな中、一人会場を抜け出して空を見上げるのは緋村優刀その人

今回の主役は彼と言ってもいいのにその肝心の彼はすでにその会場を後にして一人こつやつて空を見上げている……

そんなふうにただ、ぼおつと空を見上げていると……

カチンッ！

何か固いものがぶつかつたような音が聞こえてきた。

その音の方に視線を向けると

「よっ
」

「……冬后さん
」

手に二つの缶ビールを見せて笑う？黒騎士？冬后蒼哉がいた。

「 まったく驚きましたよ」

そう言って優刀は缶ビールを口にす

「まさか、あの墜落で無傷でいるんですから……」

そう彼の駆るラプターはネウロイによって撃ち落とされ、黒煙を
上げながら地面に叩き付けられた。

その姿は見るも無残で、すでにその原形をとどめていなかった。

にもかかわらず、彼は墜落直前で何とかベイルアウト

ちょうど不時着したところに地上部隊がいて救出され、ここにいる

しかもなんと無傷で……

「はっはっはっは！ 何、俺様は黒騎士だからな！ 不死身な
んだよ」

「なんですかそれ・・・」

そういつて苦笑する優刀

なににせよ知り合いが無事であったのだ。

それで良しとしよう

しばらく二人の間に沈黙が流れる

「・・・・・・・・やっ たな」

「・・・・・・・・ええ」

冬後の眩きに優刀は返す。

その声には確かな達成感と充実感があつた。

「一年半前……俺たちは挺身作戦で海軍の連中に嵌められ、危うく奴らと一緒に殺されるどころだつた」

「ええ……」

そう、かつて扶桑海事変で行われた挺身作戦で優刀達は一部の海軍将校に嵌められ、『山』諸共吹き飛ばされそうになつたのだ

「あの時俺たちは信じた仲間に裏切られ、連中の策略を逆手にとつて作戦を成功させた……けど、今度は違う。皆が互いを信じて勝利をつかんだんだ」

「ええ……」

相手を出し抜いての勝利と互いに信じ合つて掴んだ勝利……そのどちらも勝利であり、その是非も場合によって変わるであろうが、心に残る清々しさは信じ合つての勝利の方が万倍もある

「あの戦いから一年半、今までこの時代の苦難から人々を護る為にずっと戦ってきました。けれど、いくら戦っても世界から脅威はなくならず、世界はどんどん混迷を極めていく……その中で自分の行いが正しいのかどうかわからなくなり、ずっと悩んできました」

星を見上げながら優刀はポツリ、ポツリと言葉を漏らす

「誰かの為に剣を振るう事……そうは言っても、心のどこかでは？あの人？と同じでただ力を振るいたくて振るっているのではないか？……そう感じてしまう事が何度もありました……」

そういつて優刀は冬后へと視線を向ける

「けど……ようやく前に進むことが出来ます」

脳裏に過ぎるのは作戦が成功したときの隊員たちの笑顔。

それを見た瞬間の自分の気持ち

「この命ある限り、時代の苦難から人々を護る為に剣を振るう・・・
もう迷いません。俺は戦います」

「・・・・・・・・そうか」

そう言って冬后は笑い、二人は蒼穹へと視線を戻す

二人の向ける視線の先では星々が今日の勝利を祝う様に瞬いていた

「うっさむ、さすがに扶桑と比べると寒いな。」

基地内の廊下を滑走路に向かって歩く優刀。

クラカウ奪還作戦成功から数日……

今日もJG52基地は平常勤務

いくら大きな作戦が成功したからと言っていつまでも浮かれてはいれない。

皆普通に職務に就いていた

「しょうがないわ、此処は扶桑より緯度が高いから三月とはいえまだまだ寒いのだよ。」

と、彼の隣を歩いている武子。

今彼が本日搬入される補給物資を確認するために滑走路へと向かっていた

「それにしても寒過ぎるだろ。もしかして暖房効いてないんじゃないか？」

「そんなことはないと思うけど・・・それよりも今は補給よ。やっと扶桑から届いたのね。」

まったくもう、と隣でため息をつく武子。二人で他愛のない話をしながら滑走路に着くと、扶桑からの補給物資を載せたと思われる輸送機がすでに滑走路に降り立ち荷物の搬出を始めていた。

「二人とも遅かったな、先に搬出を始めてもらっているぞ？」

「扶桑からお味噌やお米が届いていますよ！」

そこでは二人の少女が荷物の搬入を手伝っていた。

ラルと下原だ

「ああ、悪いなラル、下原。しかし随分大量に送ってきたな。」

「ええ、これ2ヶ月分くらいあるんじゃない？」

送られてきた大量の物資に驚く優刀と武子。二人がその送られてきた量に驚いていると補給部隊の隊長と思われる人物が近づいてきた。

「すみません、緋村優刀少佐でありますか？」

「はいそうですが……」

「はっ！！ 自分はこの補給部隊の隊長をしている扶桑国海軍海鳴航空隊所属、橋爪肇雄大尉です。」

「遠路はるばるご苦労様です。」

お互いに敬礼を返す。

「ではこちらにサインをお願いします」

そうして出された書類にさらさらとサインする優刀

「では、我々はこれで失礼失礼します！！」

橋爪大尉は輸送機の方へ走り去っていった。

「……………さてと」

優刀は補給物資を再度チェックをしようと物資の方に眼をやるとなにやら見慣れない物体が眼に入る。

「……………なんだこれ？」

他の物資は基本木箱に入っているが、それだけは鋼鉄製の無機質なコンテナであり他のとは違う異様な雰囲気をかもし出していた。

「こんなリストにあったか？」

「いや知らないな、こんなリストの中には入ってなかった。

おおかた他の部隊に送るはずの物資が紛れ込んだんじゃないのか？」

4人はコンテナの中身が気になり、近づいて中身を確認しようとする。

「中身は何でしょうか？」

「……新しい武装かしら？」

「……もしや、年代モノのワイン？」

「いやいや、それはないだろさすがに……」

四者思い思いの反応をする。

「うーん……まあ開けてみれば分かるだろ。」

そう言い、優刀はコンテナに手を触れた。

「!？」

キンツと金属音が頭に響く。

そしてすぐ、意識に流れ込んでくる夥しい情報の数々。

「な、なんだ……………」

光に包まれる優刀……………

・これが彼、緋村優刀とISの出会い―

第零章

(完)

Prologue

「はあ、はあ、っはあっはあっはあ……」

走る……

「はあ、はあ、っはあっはあ……」

ただ走る

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

ただ、ただ走る……

なぜ走るか？

簡単だ。逃げるためにだ……

なにから？

自分を追いかける？ナニカ？からだ……

なんで自分が終われなければいけないのか？

自分はただ、両親の御墓参りに来ていただけなのに……

分からない……

両親のお墓に来ることがいけないことなのだろうか？

「うわっ!?!?」

何かに躓き、転んでしまった。

起き上がろうとするも、どこやら打ち所が悪かったようで足に力が入らない。

けれど、何とか前に進もつと這って行こうとするが……

G Y a a a a a a a i h a e r a a a a a

突如大地が揺れ、この世のものとは思えぬ叫び声が大気を震わす

きた!!!

そう思うが早いか、森の木々をなぎ倒し、その異形が姿を顕わす

「あ、あ……」

その姿を見た瞬間、体が恐怖で固まり動けなくなる

怪異だ……

怪異・・・遙か昔より人々を脅かす存在

その怪異が今自身の目の前に現れた。

怪異はもう10年以上も前にいなくなったはずだ。

・・・なのに何故？

解らない・・・

解らない・・・

いやだ、死にたくない

まだ自分は何もしていない。

大好きだった両親との約束も、姉との約束も全然果たせていない
まま、死んでしまうなんて嫌だ。

「・・・助けて」

空に浮かぶその者に助けを乞う

その青き空に映える、白き鎧を纏った謎の騎士に……

しかし、その願いに応える事も、こちらを見ることもせず、その騎士はただ目の前にいる異形との戦いに夢中になっている

「助けて!!」

叫ぶ

「助けて!!!!」

叫ぶ

「助けてえええええええ!!」

いくら叫ぼうとも、その白き騎士は答えない。

怪異のその剛腕が振るわれる

もう駄目だ……

そう思ったその時……

H G A Y A a a a a a A A A A A A A ! ! ?

突如、怪異のもたえ苦しむ声が辺りに響く

「……え？」

理解できなかった

殺されそうになったのは自分だ。

である筈なのに、なぜ、目の前の怪異がもたえ苦しんでいるのか？

その理由はすぐに分かった

ないのだ。

さっきまで自身を押しつぶそうとしていたその剛腕の半分から先が無くなっている。

そこへ一つの影がさす。

上を見上げると空高く飛び上がった人の影、

その人影は手に持つ扶桑刀を振りかぶり、落ちてくる。

一閃

怪異はその上空から振り下ろされた一撃によって二つに両断される。

ズウン……………

怪異が大きな音を立て倒れる

しかしそんなことは気にせず、目の前にいる人物をただ見つめる

今、怪異を一刀のもとに切り伏せた人物はなんと女性だった。

艶やかな長い黒髪を後ろで一つに結い上げ、使い魔であるドールマンの耳を生やしたその女性はこちらに振り返る

その端正な容貌に黒真珠を思わせる双眸……まさしく扶桑撫子と呼ぶにふさわしい女性だった。

こちらを安心させるように柔らかな笑みを浮かべ近づいてくる。

そして………俺はその人の名前を呼ぶ

「ふみか 章香・ねえ 姉」

その声に応える様にその女性

ひむらふみか 緋村章香は微笑み・
・
・

「さあ・
・
・帰ろうか、優刀」

俺の手を取った

.....

「

優刀
」

「んあ？」

呼ぶ声に目を覚ます。

寝ぼけ眼の目をこすり、前を向くとそこには向かい側に座って詩集を読んでいる副官の加藤武子中尉の姿があった。

「……武子、どうかしたのか？」

重たい瞼を覚醒させるように目を擦りながら訪ねる

その様子を見た武子はやれやれといった風に肩をすくめる

「何寝ぼけてるのよ……ほら、もうそろそろ着くわよ」

その言葉に優刀の頭が次第に覚醒していく。

そう今自分達がいるのは輸送機の中……

周りを見渡せば土田班長達、義勇統合戦闘飛行隊の整備兵たちが座っている。

しかし、そこには彼女達の姿はない……

この機にいるウィッチは優刀と武子の二人だけである。

「観て……」

そう言って窓の外に目を向ける

そこには一面の蒼を湛えた太平洋が広がっている。

そして、その中にポツリポツリと小さな島々が見え始める

「
？扶桑ふそう？か」

そう彼らが今向かっているのは彼らの故郷………扶桑ふそうである

窓枠に肘をつき、頬杖をしながら優刀は眼下に広がる故郷を視る

しかし、彼の眼には祖国に帰れた喜びというものはない。

まるで、二度と帰ってくる気はなかった……そんな雰囲気
が今の彼にはある

なぜ自分がここにいいのか？

その意義すら分からない

そして彼は？扶桑？を険しく観続ける……

そんな彼を、？扶桑？^{そく}は悠然と迎え入れようとしていた

EP・01 再会（前書き）

どうもシユウ禅です

ついに始まった本編

ここから優刀の物語は始まります

では、どござー！

(.....これは想像以上にきついな.....)

彼は辟易としていた。

なぜ彼が辟易しているのかというと.....

(.....どうにかなんないかね、この視線.....)

周囲から好奇の視線が寄せられているのである。

周りには数多くの少女……そんな中、優刀は一人洗面を作
って座っていた

ちらりと何かしらの救いを求めて廊下側に座るかつての相棒に目
をやると、やれやれといった風に肩をすくめている。助ける気はな
いらしい。

更に後側にいる友人その1は全く興味なしとばかりに椅子に寄り
かかってガムを膨らませている

窓側にいる友人その2に目を向けるとにやにや笑ってこちらを見
ている。

彼に味方はいない。

「……………はあ……………」

「……………くん。 緋村優刀くんっ」

「……………はい？」

もつめんどくさいので寝てしまおうか、そんなことを考えていると目の前から声をかけられる

その方向に目を向けると何とも頼りなさそうな眼鏡をかけた小柄な女性がいた。

「あつ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『ひ』の緋村くんなんだよね。だからね、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？　だ、ダメかな？」

目を向けるとその女性……山田真耶がその視線にびくつと体を強張らせてペコペコ頭を下げる。

「いや、そんなに謝らなくても……ていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？　本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、優刀の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。

（これ以上注目されるのもいやだしさっさか挨拶を済ませるか・・・）

意を決し、席を立つ優刀。

（うっ・・・）

席を立つと一層クラスメイトからの視線が強くなる。

「えー・・・ 緋村優刀です。これからよろしくお願いします。」

儀礼的に頭を下げ、上げる。・・・しかし教室はいまだ異様な空気につつまれていて、『もっといろいろ喋ってよ』的な視線が優刀の背中に容赦なく突き刺さる。

(なんでこんな事に……………)

『はい、始まりました朝まで煮テレビ』

そんな言葉と共に番組は始まり…………政治家、経済評論家や環境評論家、揚句には漫画家やらが囲むように座る四角いテーブル、

その一番奥の中央に座る初老の司会者と思われる人物が口を開く

『今日は今話題の緋村優刀くんについてです……私良く分からないんだけどねえ、これって大変な事なの？』

そういつと司会者は斜め前に座る政治家と思わしき人物に目を向ける

『ええ、それはもう……なにせ？世界で初めて？ですから』
そういつて言葉を区切る

『男？がISを動かすなんて』

「いや、よく映ってるじゃない。なかなかカッコイイよ、緋村」

そう言ってソファーに座ってテレビに映る自分の写真を観てケラケラと笑う目の前にいる人物

「……………笑い事じゃないですよ織田おのだ官房長」

俺は目の前にいる人物に持てる殺気全てをぶつける。

言うておくが、今俺は凄まじく機嫌が悪い。

なぜか？

それは……………

『政府としては、あそこに行かせるでしょうね』

『IS学園に』

テレビの中の政治家がアホ面曝してそんなこと言っている。

そう、俺は4月からIS学園に通わなくてはいけなくなったのだ

8年前、ISが発表されたことにより世界は一度、激変した。

現行の戦闘兵器はISの前ではただの鉄くずに等しく、それゆえに世界の軍事バランスは崩壊、しかも開発したのが扶桑人だったので、扶桑は独占的にIS技術を保有していた。

当然諸外国は危機感を募らせ、IS運用協定 通称『アラスカ条約』によってISの情報開示と共有、研究のための超国家機関設立、軍事利用の禁止が決められた。

そしてその超国家機関の一つが優刀が生徒として通う事になるであろうIS学園である。

そんな学園に、ウィッチである優刀が通わなくてはならなくなっ
たのか？

滑走路で運悪く、ISを動かせることが分かってしまい、世界で唯一ISを動かせる男子としてその理由を調べる為に優刀は上層部の命令で入学させられるというのだ。

軍人である以上は命令に従わなければいけないが、こんなに胸糞悪いことはない

「そうかしら？ 君たちもよく映っていると思わない？」

殺気を当てられているのもどこ吹く風

織田官房長は俺の後ろに控えている義勇統合戦闘飛行隊のメンバーにこやかに声をかける。

しかし誰も笑ってなどいない。

笑っていられるはずがないだろう

織田官房長がここにいる理由

それは……

「やっぱりショックだったみたいだね・・・部隊解散の話」

そう、義勇統合戦闘飛行隊は俺がIS学園に入学するのを機に解散する

「・・・納得できるわけないだろ」

肩を震わせ呟くマルセイユ

「納得出来る訳ないだろっ!!なんでだ!なんで少佐がIS学園に行かなくちゃならないんだ!!」

叫ぶマルセイユ。

それをただじつと聞いている織田官房長

「おかしいだろ!!今欧州はネウロイに襲われていて、一人でも優秀なウィッチが必要な筈なのに!なんで少佐が行かなければいけないんだ!!」

「……やめろマルセイユ」

俺が制止するように声をかけるもマルセイユは止まらずに叫び続ける

「こんなのおかしすぎる!!しかも部隊まで解散なんてしなくちゃいけないんだ!!」

「やめろ!! マルセイユ!!」

その大きな声でマルセイユはようやく止まる。

その眼には涙が浮かんでいた。

今まで黙っていた織田官房長がようやく口を開く

「マルセイユ君だったかしら？」

「……………はい」

織田官房長の問いに慚然とした顔で答えるマルセイユ

すると……………

「
済まない、こうなってしまったのは止められなかった僕たちの責任だ」

立ち上がり、頭を下げる官房長

その光景に驚く部隊の皆

それはそうだろう・・・扶桑軍の人事を担う人間が一介の尉官に頭を下げているのだ。驚かないわけが無い。

「IS委員会の対応が早かった・・・僕にも、大久保総理にもどうにも出来なかった」

「官房長・・・」

官房長の言わんとしていることがようやく理解できた。

今の扶桑政府はどちらかというところ反IS的な立場を取っている。

扶桑海事変でISの兵器としての欠点が露呈した以上、国家の防衛にISは向かないと判断して年々その予算を削減している

しかし、政治家の中にはISの威光を利用して当選した政治家が多い。

そういった者たちの中でもIS関連者との癒着がある者たちが何かしらの圧力をかけてきたのだろう……

このままいけばISは廃れて行ってしまうのは確実である

少なくとも、国家の防衛の要という存在たりえなくなっているのだ。

国という大きなスポンサーがいるから今のIS産業は成り立っているといっても過言ではない。

そのスポンサーから見捨てられてしまえば、IS産業はもう後は潰れるのを待つばかりである。

その中で見えた一筋の光明……それが俺だった。

俺を突破口にISの謎を解明し、男でも女でも使える様になれば、それこそISは国家防衛の要としてまた返り咲くことが出来るかも知れない……そんなふうに思っているのだろう。

……それ以前にもっと大きな問題があるのだが、その話は置いておく。

本来ならばIS学園に入るかどうかは個人の自由である……

しかし俺は扶桑軍に籍を置く軍人だ。だったら命令してしまえばいいだけの話だ。

いくら扶桑国全軍の任免を総括する人物だからと言ってさすがに政府の命令であれば聞かないわけにはいかない。

こうして自分自身で謝りに来ているのだからこの人もずいぶんとお人よしだ。

「まあ俺がIS学園に行かなければいけない理由はわかりました。……けど、なぜ部隊を解散させなければいけないんですか？」

それよりも問題はこっちである。

俺個人の話は気にくわないが良く分かった。

しかし、それと部隊解散の話は別問題な筈だ

「部隊解散という言葉はちょっと違うかな…正確には再編成という方が正しいね」

顔を上げた官房長は説明を続ける

「説明をする前に……フェデリカ中尉とジェンタイル中尉、君たちにも本国から辞令です。君達もIS学園に通う様になってね」

「まあ……そうですね」

「ちよつと待ってくれ……なぜ私にそんなふざけた命令が来るんだ？」

官房長の言葉に大將はかなり驚いている。

確かにフェデリカはわかるが、なぜ生粋のウィッチである彼女が呼ばれるのか理解に苦しむ

「君にIS適正Aあるからだって」

極めて簡潔に答える官房長。

「『『えええ!!!?』』』」

驚くメンバーたち……

大將は部隊の中でも一番IS関連に対して嫌悪感を抱いているのだ。にもかかわらず、高いIS適正がある……ビックリするなどという方が無理だ。

「な……」

しかし、一番驚いているのは大將……ドミニカ・S・ジェンタイルである

それに構わず、官房長は説明を始める

「じゃあ、キリのいいところだから説明しましょうか……君たちの所属は統合先進打撃航空技術（JASFT）開発計画、それは覚えてるよね？」

「ええ……」

「今回、統合先進打撃航空技術（JASFT）開発計画にも動きがあつてね、君たちの働きのおかげで次の段階に進む事になったん

だ
」

「次の段階ですか？」

「そ、君たちのおかげでデータはかなり集まったからね、ようやく概念実証の段階から試作機製作段階へと移行することになったんだ。その際に計画の呼称も変わることになるから義勇統合戦闘飛行隊を一度解散させて、そのまま試験部隊へと再編制されることになったんだ」

「なるほど・・・そういう事だったんですか」

「じゃあ、みんな一緒にいられるのか？」

マルセイユがうれしそうに言う。

しかし・・・

「いや、希望者だけだよ・・・なにせ今度の活動場所は扶桑だからね」

「・・・そんな」

マルセイユが肩を落とす

「じゃあ、私達は参加できないな」

「そうね・・・」

「残念だけどうがないね」

「うん・・・」

そう淋しそうに言うのはラル達カールスラント出身者。

無理もない・・・今、カールスラントは最前線に立たされているのだ。その状態のカールスラントを放っておけるわけが無い。

だから希望者と官房長も言ったのだろう。

ここは仲良しこよしの集団ではないのだ。

皆それぞれ軍人で、護りたいモノ、譲れないものがあって此処にいる。

「まあそういう訳だからよろしく頼むよ。十日後に扶桑行きの輸送機を手配したからね。それに乗るように」

「

それから十日後、部隊は解散した

フェデリカと大将は一度、学園入学の準備の為に各々の国に戻り、ラルたちはカールスラントで故郷を護る為に戦っている。

まだ自分がテストパイロットを行うほどの実力が無いと判断した下原は古巣のリバウ航空隊へ、更識は今も欧州で活動しているIS学園部隊の増援としてそちらへ向かい、約一か月後にIS学園に戻ってくるらしい

そして扶桑に戻ってきたのは俺と武子の二人だけ……

そんな風に優刀が回想、もとい現実逃避をしている間にも女子からの期待に満ちた視線はより一層強さを増している。

優刀は覚悟を決めたのか一度息を止め、そして再度大きく息を吸い思い切って口を開く

「以上です」

がたたっ！！
思わずずっこけるクラスメイト達。

相棒は肩をすくめ、フェデリカと大將は机をたたいて爆笑……

だが次の瞬間、反射的に手を上に構える。

バアンツ！ 防いだ右腕に衝撃が走る。

「満足に挨拶もできんのか、この馬鹿者が。」

「……なんであんたがここにいるんだ」

その人物に目を向ける・・・

そこにいたのは

ーブリュンヒルデー 織斑千冬がいた

Ep・01 再会（後書き）

まさかの部隊解散！？

そして舞台は扶桑、IS学園へ……

次回に続きます！

EP・02 INFINITE WITCHES (前書き)

どうもシユウ禅です。

ついにその姿を見せたブリュンヒルデ・・・

そわそわしゅんげん

ーブリュンヒルデー

3年に一度開かれるIS世界大会の第一回総合優勝者で世界最高のIS操縦者として知られる伝説の人物、織斑千冬……もう二度と会うことは無いと思っていた人……その人が目の前にいる

「……………なんであんたがここにいるんだ」

そう言い放つと目の前にいる人物を全ての殺気を込めて睨み付

ける

しかし、それを涼しい顔で受け止めるブリュンヒルデ

「織斑先生、もう職員会議はいいんですか？」

「ああ、山田先生。クラスへの挨拶を押し付けて済まなかったな。」

先ほどとは打って変わって優しい声で語りかける

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、良く理解しろ。できない者には出来るまで指導してやる。なお、逆らってもいいが私の言うことは聞け、いいな」

とんでもない自己紹介が終わるや否や、教室中が黄色い声援に包まれた。

「きゃー……！ 千冬様よ！ 本物の千冬様よ！！」

「ずっとファンでした！」

「あの千冬様に指導いただけるなんて嬉しいです！」

「……よくもこれだけ馬鹿者が集まったものだ。感心させられる。それともなにか？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

きゃいきゃい騒ぐ女子達をうつとうしそんな顔で見る。

「……で、お前は満足な自己紹介も出来んのか、お前は？」

「……あいにくとそんな人に語れるほど面白ろ可笑しい人生を送ってきていけませんので申し訳ありません。織斑先生」

そう言い放ち、睨み付ける優刀

「……まあい、よし次の者。さっさと自己紹介しろ。」

一瞬、優刀の方を悲しげな表情で見たもののすぐに切り替え、次のクラスメイトに自己紹介を促す。

その間もキヤイキヤイ騒ぐクラスメイト

な。
() くそ、やっぱりISにかかるとろくな事が起きない

黄色い悲鳴を上げ続けるクラスメイトの姿を横目で見て一人心中で愚痴りつつ、あとは静かに朝のSHRが終わるのを待っていた。

IS学園はコマ限界まで使ってIS関連教育をする為、普通に入学式当日から授業がある。

今はその一時間目のIS基礎理論の授業が終わった休み時間。しかし、いまだ教室は異様な雰囲気にもまれていた。

その中で俺は一人席に座り先ほどの授業の復習を淡々とこなしていたが。

(まったく、本当にどうにかなんないのかこれは……)

簡単にいえばさきほどと状況はあまり変わらない。いやむしろ休み時間であるから余計に面倒である。

どうやら世界で唯一ISを使える男子というのは世界的にニュースになっただけで、現在他のクラスやら一、三年の先輩まで廊下に詰め掛けている事態となっている。

クラスの中でも同じで、誰が先に話しかけるか互いに互いを牽制しあっている状況だ。

「Ciao、ユウ」

そんな中、一人の女子生徒がその張り詰めた雰囲気などお構いなしと言わんばかりに話しかけてきた。

「……………なんだフェデリカか」

話しかけてきたのはフェデリカ、先ほど、隊長である自分をあっさりで見捨てた薄情な部下Aである

「あら、もしかして拗ねてる？」

「拗ねるか」

そこへ

「お疲れ様、ユウ。なかなかかっこよかったわよ、」

更に一人の女子生徒が話しかけてきた。

少し茶色がかった猫っ毛・・・

その姿を見て俺は・・・

「ケイ・・・」

その名前を呼ぶ

彼女は加東圭子、扶桑国空軍少尉で二年前の扶桑海事変で自身の僚機を務めたウィッチである。

「・・・久しぶり、元気そうでよかった」

そういつて彼女は微笑む

そう、彼女と会うのは実に一年ぶりなのだ。

本来、彼女も欧州派遣に参加するはずだったが、扶桑海事変の戦勝記念式典の儀典飛行で墜落。

生命を危ぶまれるほどの事故であった

かろうじて命は取り留めたものの、長期の入院を強いられて欧州派遣には参加できず、東京の病院で治療に専念していたと聞いたが

「退院……したんだな」

「ええ、もちろん」

その笑顔は一年前より大人っぽくなったものの、変わらぬよく知った笑顔であった。

「ええ」

「ISなんて使えたのか？」

彼女がISを使えるなんて話聞いたことないのだが

「いやぁ……実は入院していた時、暇つぶしにIS簡易適正検査っていうのを受けてみたんだけど……そしたらA判定とつちやって……」

そう言ってあははッと笑うケイ。

「それを 江藤中佐にいつたら・・・？よし、あんたちよつと敵情視察してきなさい！！？なんて言われたのよ」

「おいおい・・・敏子姉」

かつての上官である、その人を思い浮かべる

確かに豪放磊落なあの人ならいいそうである

「優刀、こちらの方は？」

そういつと、ケイはフェデリカの方へ視線を向ける

「ああ紹介するよ、彼女は・・・」

「初めまして・・・フェデリカ・N・ドゥリオよ、よろしく」

そう言うてにこやかに笑うフェデリカ

「加東圭子よ。気軽にケイ、もしくはヒガシって呼んでちょうだい。」

お互いに名乗り、握手を交わす。

「あともう一人、知り合いがいるんだが……」

薄情な部下Bも紹介しようと思い、その席へと視線を向けるが……

「……いないわね」

フェデリカの言葉通り、その席の主はいなかった。

大方、この騒ぎが煩わしくて休み時間になると同時に出て行ってしまったのだろう

「まあ、大将はあとでいいか」

「そうね」

そうして改めてケイに向き直る

「けどユウも初日から災難ね。」

「まったくだ、俺は客寄せパンダじゃないぞ」

「そうね、パンダのほうが確実に愛想はいいわよね」

「……一度お前らとは拳で語り合わなきゃいけないようだな」

「「いやよ、メンドクサイ。」」

息の合った二人の声……すごいハモリである

そんなふうには三人で談笑していると……

「ちよつといいか」

突然一人の女子が話しかけてきた。

「……?」

目の前に現れたのは一人のクラスメイト

きれいな黒髪を白いリボンでポニーテールにまとめあげた少女は、日本刀を思わせる鋭い雰囲気を感じ、そのきりつとした瞳でこちらを睨み付け……もとい見ている

「……な、何か用かな?」

今一つ学生らしさが解らないのでとりあえず、にこやかに笑みを浮かべてみる

我ながらやっついていきこちな

「……」

その問いに答えることなくじっとこちらを睨み付けている

はて、どこかで見たような気が……

脳をフル回転させ、自らの記憶という本棚を必死に引っ掻き回してその特徴と合致する人物を探す

……

……

……

……

いた、一人だけ合致する人物が……

「え、え……もしかして篠乃之、箒？」

恐る恐るだがその名前を呼ぶ。

すると、ピクッと体を震わせる

どつやら当たったようだ

目の前の少女……

それは幼馴染の篠乃之箒だった。

彼女とは10歳になるまで剣道場に通っていた時の練習仲間である

すると、彼女は少しだけ顔をほころばせたような気がするが、
す
ぐにこちらを睨み付けてくる

「……………話がある」

そう一言、彼女はすたすたと教室を出ていく

「はあ……………いつてくるか」

席を立つと……………

……………視界が割れた。

(・・・おいおい)

「・・・」
「・・・」

とりあえず廊下に出たものの、互いに一言も発しないまま時間が過ぎる。

「・・・なあ」

「な、なんだ!？」

「何か用があつたんじゃないか？」

とりあえず、埒が明かないので自分から切り出してみる

「う……うむ」

ふとあることを思い出し、俺から切り出した。

「剣道の全国大会、優勝したんだってな。おめでとう。」

「な！何で知っている……」

「そりゃ新聞に載ってたからな。」

「何で新聞なんか読んでいるんだ！」

一応、向こうにいるときもこっちにいる友人に月一で扶桑の新聞を送ってもらって読んでいた。大体扶桑の情報は仕入れてある。といてもその目的は四コマ漫画なのだが……というより、俺は新聞を読んじゃいけないのか？

「・・・・・・・・」

どうも空気が悪い。

「久しぶりだな、6年ぶりくらいか？」

「あ、ああ」

「・・・・・・・・」

いかん、会話が続かない。

何か話題がないかと頭をフル回転させたが何も見つからない。

キーンコーンカーンコーン。

その時俺の心を読んでくれたように二時間目のチャイムが鳴る。

二人を取り囲んでいた包囲網も蜘蛛の子を散らすように瓦解する。

「俺たちも戻るか。」

「わ、わかっている。」

「・・・・・・・・」

教室までの道のりも俺たちは無言だった

「ちょっと、よろしくて？」

「……………」

今度は二時間目の休み時間。先ほどと同じようなシチュエーションでこれまた先ほどと同じように次の授業の準備と予習をしていると、今度は知らない女子に話しかけられた。

話しかけてきたのは地毛が金髪の鮮やかな女子だった。

腰に手を当てた様がいかにも様になっていて雰囲気もさまになっているが目だけは人の事を馬鹿にしたように見下している。

(・・・あ、めんどくさいな。)

ISは国の軍事力になる。だからIS操縦者は偉い、そのISは女性にしか扱えない、だから女は偉いなんていう考えが世界に蔓延している。ともなれば自分が偉くなったと勘違いして他人を見下す輩も出てくる。

今日の前にいるのはその典型的な人物だ。

欧州にいる頃からこういふ輩には何人もあつてきたし今更どうこう言つつもりもないが、正直いつていちいち人に絡まないで欲しい。

彼女たちはねちねち人に絡むのが仕事なのだろうか？

もうすでに目の前の彼女に興味はなく教科書に視線を落とす。

「ちょっと聞いてますの？ お返事は？」

「悪いが用件はなんだ？ 出来れば早くしてくれるか？ こつちは予習をしたいんだ。」

「まあ！何ですのそのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度という物があるんじゃないのかしら？」

「悪いな。俺君が誰か知らないし。」

「私を知らない？ このセシリア・オルコットを？ ブリタニアの代表候補生にして、入試主席のこの私を？」

代表候補生と聞いて、さらにテンションが下がる……

「たかが代表候補生ごときで威張るなよ、候補生の名前なんかいちいち覚えられるか。」

代表候補生だけで何人いると思っているのだろうか？

そんなに有名なら既にフェデリカ辺りが噂話をしているはずである

「な、無礼にも程がありますわ！！この国の男性はこんなにも無礼なのですか！！誇りある貴族の私に」

肩を震わせて怒りをあらわにするセシリア

そこへ……

「ボス」

その言葉を遮るようにふらりと大将こと、ドミニカ・S・ジエン
タイトルが現れた

「どうした大将？」

「……いや、さっきの授業で少し解らないところがあるんだ
が」

「どこだ？」

そう言って二人で参考書に視線を落とす。

「な！！ちょっとあなた！いきなり割り込まないでくださる！？」

セシリアと名乗っていた少女の矛先は大将に向かう

「なんだ？」

ややめんどくさそうにセシリアに視線を向ける

しかしその眼にはいくらかの怒気が含まれている

「……」

その怒気に気圧されて、セシリアは一瞬たじろぐ。

キーンコーンカーンコーン

予鈴が鳴った。何か言おうとしていたセシリアだったが、授業を妨害するわけにはいかず、不機嫌そうに拳を握り締めながら自らの席に戻っていった。

「……で、どうだった？ 高校生活一日目は。」

「……武子、別に面白い事なんかなくて。しいて言えば久々に胸糞悪い奴に会った。ああ、胸糞悪いたらありやしない。」

メニューのヒレカツ定食についていたプチトマトをつつきながらぼやく

現在俺がいるのはIS学園からほど近いところにある扶桑国空軍海鳴基地。

そこで、優刀は武子と共に少し遅めの夕食を取っていた。

「胸糞悪い奴？」

「ああ」

今日会ったセシリアのとのやり取りを話す

「……ああ、それは腹立つわね。」

セシリアのことを思い出したのか、手に持つフォークに力がいりすっかりプチトマトをつぶしてしまふ。

「けど、ISの代表候補生ってああいうのが多いわね」

「まあ……しょうがないと言えばしょうがないのかもしれないな」

二人で他愛のない話をしていると、そこに……

『……緋村少佐、加藤中尉……お客様です。応接室へとお越しください』

放送で急に呼び出される

「……………」

「……………」

なんと魔の悪いことだろうか……

ただいま俺たち二人は遅めの食事中。

食事も半分以上残っている

「「「はあ」「」」

「やあ、ずいぶん遅かったじゃない緋村」

泣く泣く食事を断念して基地指令室に出向くとそこには織田大臣
官房がソファに座っていた。

「官房長、何かご用でしょうか？」

挨拶もそこそこに用件を聞く

「こっちは食事を中断してきているのだ。」

早く用件を済ませて食事にありつきたい

「相変わらずせっかちなね・・・まあいいや。まず最初に
緋村、今日は済まなかった。こちらの不手際で君には苦勞を掛けた
ね」

「いえ・・・」

「優刀なんかあったのか？」

「ああ、帰ってくる時にな・・・」

- 遡ること3時間前 -

いろいろと起こったもののIS学園での初日が終了した。

放課後、学園にいる予定もないのでさっさと帰ろうと帰り支度を
していると………

「ああ、緋村くんよかったです。まだ教室にいたんですね」

顔を上げるとそこにはクラスの副担任、山田先生が書類片手に立
っていた

「えつとですね、緋村くんの寮の部屋が決まりました」

そう言ってへの番号が書かれた紙とキーを渡してくる

そう、ここIS学園は全寮制だ。全ての生徒は基本的に寮で生活
を送ることが義務付けられている。将来有望な操縦者を護るための
措置らしい。実際各国のIS機関はご時勢がご時勢だけに優秀な

操縦者の確保に必死だ。

「へ？確か俺は寮に入れないって聞いていたんですけど？」

「それなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……そのあたりのことって政府から聞いてますか？」

「いいえ特には……。ああ、知らないんでこれ返します」

話していても埒があかなそうなので、とっととそのキーを返すことにした。

861

「ええ！？」

まさかの予想外の行動に山田先生は動揺する

「ちよ、ちよっと困ります！！緋村くんはどうするつもりなんですか！？」

「どうするつもりって……。基地から通うつもりですけど？」

何を言ってるんだこの人は？

微妙にだが話がかみ合っていない

すると……そこへ

「どうした、山田先生」

クラスの担任、織斑千冬が現れた

「あ、織斑先生！！」

「何かもめているようだが、一体どうした？」

「実はですね……」

そう言って事の次第を話し始める

「・・・どういっつもりだ？ 緋村」

「事の次第を聞いた織斑先生が睨み付けてくる

「どういっつもりも、自分は他にやることがあるんで帰らせてもらう・・・そう言っているんですが？」

「IS学園は全寮制だ・・・お前もこの生徒である以上は寮に入らなければいけない。従え」

そう言ってこちらを威圧するように睨み付ける

しかし・・・

「お断りします」

そう笑顔で答えてやる

瞬間、教室内に険悪な雰囲気は漂い始める

まあ、教師である彼女たちからすればいう事を聞かないおれは問題児なんだろうな

悪いがこっちには帰ってやることがあるのだ・・・そんな命令にしたがえる訳がない

「・・・貴様、どういっつもりだ？」

「すみませんが俺は此処の生徒である前に扶桑空軍に所属する軍人です・・・此処でISを学ぶことよりも優先すべき任務が基地にある・・・それだけです」

「ISを学ぶことよりも重要な事・・・だと？」

ISを学ぶことよりも優先すべきこと・・・それが

「空を飛ぶことを夢見る未来のウィッチ達に自分の持てる技術の全てを教える事・・・それが俺の任務です」

教導官・・・・・・・・

そう、それがIS学園に通う事と同時に織田官房長から与えられた任務なのだ

元々、扶桑海事変で甚大な被害を被った扶桑が欧州へ多くのウィッチを派遣していたのは何も国際貢献という側面だけではない。

壊滅的な被害を被った扶桑が無理してでもウィッチを欧州へ送った理由……

ウィッチ達にネウロイ達との実戦経験を積ませる事だった。

確かに扶桑海事変は終結した……。けれど今後また扶桑にネウロイの脅威が来ないとも限らない。

扶桑海事変で優秀な人材を多く失った扶桑にとって次世代の優秀な人材を育てることは急務だった。

その為、扶桑海事変で生き残った者たちや訓練校で優秀な成績を収めた将来有望なウィッチが欧州派遣に選抜され、送られた

戦争が長期化した場合、二年程経ったら派遣部隊は一度帰国し、教導官として扶桑各地の訓練校で教官として欧州で培った戦術と技術を教えまわることになっていた。

それが今回、俺たちはIS学園への入学にあわせて一年前倒しに

する事になったのだ。

そう説明すると・・・・・・・・

「我々はそんな報告を受けていない・・・・報告を受けていない以上、お前の言葉を信じるわけにはいかないな」

そう言ってなおも認めないという織斑先生の態度に俺はため息を吐きたくなる

相変わらずこの人は・・・・・・・・

「だったら確認すればいいじゃないですか・・・・どこかで報告の不備があるかもしれません」

「・・・・・・・・山田先生」

「は、はい!」

山田先生に声をかけると山田先生は走って行く。

「教導任務は主に午後からだから生活の拠点は向こうよりもこっちの方がいい・・・そう思ってた基地から通えないかと織田官房長に掛け合ってたんだが」

「元々、緋村の所為で部屋割りがかなり揉めていたようですからですんなりいくかと思っただけど、これまたあちらさんがゴネてね・・・やっぱり向こうとしても自分の手元に置いておきたかったみたい」

そう言っただけ視線を向けると当の本人はお茶を啜っていた

それはそうだ・・・せつかく見つけた一筋の光明、自分たちの監視の眼が届かないところにあるというのは不安でしょうがないのだろっ。

「やれ、保護だ、監視だとするさくいうもんですからね・・・軍の方から出している研究資金を減らすって言ったらやっとな黙ったよ」

ISS学園と海鳴基地は目と鼻の先である。

通学距離だったたかだかレールウェイ一本三十分。

生活拠点が基地内であるなら保護、監視なんて意味が無いに等しいし、海鳴は基地としてセキュリティも最高レベル・・・IS学園と同等である。

そう言った事情から海鳴基地から通学出来るからいいよって言われたのだが、どうやら調整が難航していたらしい。

「ホントありがとうございます官房長」

頭を下げる

「まあ、こちらとしても実戦経験豊富で優秀なウィッチを三年もの長い間、あんなところであんなに腐らせるのを良しとする程余裕があるわけじゃないからね・・・こちらにも旨味が無いとフェアじゃない」

そう言ってお茶を啜る官房長

「さて……二人とも本題に入るけど、ようやく決まったよ」

そういうと立ち上がり、こちらへと視線を向ける

「……扶桑国空軍 緋村優刀少佐、並びに加藤武子少尉……
本日付で君たちは扶桑国空軍技術開発本部、航空戦技教導隊に転属
・そして本日より君たちは連合共同の統合先進技術機動兵器開発
計画試験部隊「Infinite Witches」に出向、試作
機のテストパイロット、並びに海鳴基地での教導官の任に処す」

「はっ！！了解しました！！」

敬礼、

そして官房長は満足そうにうなずき……

「それじゃあ、Infinite Witchesの隊長と他の
隊員を紹介するね……入ってきていいよ」

「失礼します」

ドアが開き、室内に続々と入ってくる

「……全く、いつまで待たせる気だったんだ。ボス」

「Buona sera 優刀、武子」

気だるげな声とともに入ってきたのは大将とフェデリカの二人。

その後には……

「久しぶりね、二人とも……ああ、優刀は違ったかしら？」

入り口からひょっこり現れる、少し茶色がかった猫っ毛……

「な、・・・ケイ!？」

「圭子!？ どうして!？」

驚く俺たち二人にケイは少し恥ずかしそうにしながら、はにかむように笑みを浮かべる。

「そういう訳だからまたよろしくね、二人とも」

「・・・ああ!!」

「ええ、こちらこそ」

懐かしい彼女とまたウルルにいたときのように空を飛べるのだ。

こんなにうれしいことはない

そんなふうに騒いでいると・・・

「失礼します」

そこに凜としていながら、柔らかな声が響く

「まさか・・・その声・・・」

恐る恐る、その声の主がいるであろう方へと顔を向ける

そこには・・・

「
章^{ふみ}
・
・
・
香^か
姉^{ねえ}
・
・
・
」

「
久しぶりだね、
優刀」

柔らかに微笑みを向ける

? 軍神? … 緋村章香ひむらあけかの姿があつた

EP・02 INFINITE WITCHES（後書き）

お케이さん、登場！……ついでに第たちもね

とテンション高めで叫んでみてもお케이さんって誰って解らない人もいると思うんで軽く説明を……

彼女の名は加東圭子、今度連載されるアフリカの魔女に出てくる主人公です

アフリカの魔女は第零章でてきた優刀の二番機のマルセイユのアフリカ戦線での活躍を彼女視点で見たお話です。

そして、最後に出てきた軍神、緋村章香……彼女を見てあれ？って思った方もいらっしやるみたいですのでこちらも軽く説明します。

彼女は坂本のお師匠です。

これだけです……それ以外は今のところ言えません。後なんて苗字が緋村なの？って思った方は次回を楽しみにしていただけだと思います

第一章はストパン勢は基本ストライクウィッチーズ零のメンバーが主体です。

どマイナーなところを突っ込んですいません……アニメ501メンバーが出るのは第二章以降となります

最後になりますが、ご意見ご感想の方、お待ちしております!!

では次回!!

EP・03 クラス代表（前書き）

どうもシユウ禅です。

第三話です、それではお楽しみください

EP-03 クラス代表

扶桑国空軍中佐、ひむらふみか 緋村章香……………

個人の戦闘能力は言うに及ばず、それでいて新航空戦術や空戦技術の考案、駐欧武官も務めたほどの頭脳明晰

海鳴に道場を構える講導館剣道免許皆伝、同館師範代も務めるほどの腕前で、その二刀の斬撃は海を割るとさえ言われる人物

それが？軍神？緋村章香……………

俺の？姉？……………たった一人の大切な家族が目の前にいる

「章香姉……もう、立てるのか？」

思わず声が震えてしまう

彼女は挺身作戦の時、海軍の殲作戦による艦砲射撃から俺たちを護る為に江藤中佐とたった二人で戦艦に立ち向かっていった。

その時、戦艦の主砲により撃墜され、発見された時には事切れかけていて何とか命は助かったものの、俺がブリタニアに十二試艦上戦闘脚のテストパイロットとして派遣される……その瞬間まで目を覚まさなかった。

・
・
後から欧州にきた武子から目を覚ましたと聞いたていたが……

「ああ……もう大丈夫だよ」

以前と変わらぬその笑顔を向けてくれている

「うん・・・背が伸びた」

「・・・うん」

そう言って頬に手を当ててくれる・・・

「顔も大人っぽくなった・・・」

「うん」

笑いかけてくれる・・・

「う、あ、あ」

目が熱くなり、頬を何かが流れる

「……………けど泣き虫なのは変わってない
ね」

そして少しだけ困ったような笑顔

限界だった

章香姉は崩れ落ちた俺を愛おしそうに抱きしめてくれた・・・

「……………官房長、お見苦しいところをお見せしました」

とりあえず落ち着いたので、官房長に謝罪して立ち上がる。

い。
官房長の前であり大事な話の最中だ。しっかりしなければいけない。

「いや、いいよ。折角の再会なんだ。もう少し待っても大丈夫だ
けど?」

「いえ、大丈夫です」

そう毅然と返す。

積もる話もあるが後でできる。

それよりも今は試験部隊の話だ……

こっちの方が重要である

それに、これ以上?彼女?に弄られるネタを提供するつもりはな
い。

……ちら

？彼女？のほつに目を向けると

「・・・ふふ」

笑っている・・・これ以上ないくらいに笑っている。

義勇統合戦闘飛行隊の二大ムードメーカーもといトラブルメーカーの一角、フェデリカ・N・ドツリオ

その彼女が笑っている

「さて、緋村が泣き止んだところで次に行くよ・・・緋村中佐」

「はい」

官房長の言葉に緋村中佐は前に出てこちらへ向き直る

「当面は君たちはここで試作機の試験と此処、海鳴基地の訓練生の仮想敵をしてもらいたい・・・緋村少佐、加東少尉、ドツリオ中

尉、ジエンマイル中尉は基本IS学園に行ってもらうけど、教官任務がある日は向こうを休んでもらって構わない。最優先はこっち、分かったね？」

「分かりました」

「で・・・加藤中尉は主に私の補佐と主に他計画からの新型ストライカーユニットのテストをお願いすることになるからね」

「了解です」

「本当は？もう一人？参加する予定なんだけど・・・今回は間に合わなかった。いずれ紹介することになると思っているつもりで」

コホンと咳をして続ける

「みんな、・・・我々がこうしている間にも前線では多くの仲間が戦っている。我々の仕事はその仲間達が信頼できる最高の武器を仕上げることだ。かなりの仕事量になるけど職務に邁進してく

れ、以上……解散!!」

「了解!!」

緋村中佐の掛け声に敬礼して返す。

こうして、統合先進技術機動兵器開発計画試験部隊「Infinites Witchs」結成された

「……ふあ」

大きな欠伸を一つ

まずい・・・

頭が回らない、集中出来ない、倦怠感がある

いわゆる寝不足である

顔合わせが終わって遅くなった夕食の続きを皆で取り、残りの仕事を片付けて布団に潜り込んだのは日付が変わった午前2時。

起床ラッパは午前6時、長年の生活習慣とは怖いもので、この15分前には目が覚めてしまう。

身支度をして部隊にあてがわれたオフィスへと顔をだし、ミーティングを行って少し早めに基地を出た。

おかげでかなり眠い。

幸い授業の開始までにはまだ時間がある。

少しでも寝て頭をすっきりさせようと机に顔を埋める

「何を朝から寝ようとしているんだ優刀、起きろ」

「・・・んあ？」

そこへ現れたのは昔の剣道仲間である篠乃之箒

人の目の前で仁王立ちそしてこちらを見下ろしている

「なんだ箒か……」

「なんだとはなんだ。さっさと起きろ、授業が始まるぞ」

「分かってるよ。でもまだ5分も時間があるだろ……悪いけど俺は寝不足で眠いんだ、だから寝かしてもらおうぞ。」

箒には悪いが頭がまともに回転していない。

このままでは授業に支障が出てしまう。

そう思って、再び寝る体勢に入ろうとすると……

「何を言っているんだ！ さっさと起きろ。」

そう言って無理やりたたき起こされる。

「別に俺が朝の時間をどうしようが勝手だろ？ それよりもお前こそ早く席に座った方が良い……ホームルームが始まるまであ

と3分、もうそろそろ先生が来る」

「う、分かっている!!」

・・・

・・・

・・・

(まったく!!・・・何を考えているんだあいつは!!)

篠乃之箒は一人席に座り憤慨していた。

6年ぶりに再会した幼馴染・・・

その再会は実に運命的と言ってよかった。

本来女性しか扱えない筈のISを動かした唯一の男性・・・

それが優刀という事をニュースで知った時には驚いた

その顔写真を見た時には正直に?格好良い?とさえ思った

そしてIS学園に入学し、直接成長したその姿を見た瞬間

眼が眩みそうになった

幼さを残しているものの、引き締まった端正な顔立ち、その身に纏う大人びた雰囲気、そして何よりもその強い意志を秘めた蒼い瞳・
・
・
・

その彼の姿を見た時には自然と胸は早鐘を打っていた。

(・・・だというのに)

ちらりとある方向に目を向ける。

「なるほどね」

「そう、だからここは・・・」

その視線の先にはフェデリカと加東圭子がいた

いま彼女達は机の上に出されたノートパソコンの画面を見て、なにがしかを話している。

幕の位置からでは何を話しているのかはいまいち良く分からない。

勇気を振り絞って声を駆けようとした直前、彼女達に

先を越されてしまった。

しかも彼女たちと優刀はどうやら知り合いのようで気さくに会話している・・・何とか割り込もうと近づいてみると三人はブリタニア語で流暢に会話をしていて更に声をかけづらくなった。

(・・・だが優刀はちゃんと覚えていてくれた)

もしかしたら彼は自分の事なんて忘れてしまったのではないか？
それが声をかけづらかった一番の理由だ。

けれど、彼は覚えていてくれた。

最初見た時は誰だか分らなかったようだが、それでも覚えていてくれたのだ。

しかも、彼は自分が剣道の全国大会で優勝したことも知っていた。

大丈夫だ、今も二人の絆は確かだ。

(大丈夫だ・・・なんといっても私と優刀は幼馴染だ、彼女達と優刀がどういう関係かは知らないが優刀の幼馴染は私だけだ・・・彼の事は私が一番よく知っている)

何度も自分に言い聞かせるように心の中で何度も呟く・・・そして

「ほう・・・」

ため息をつく。

思い出すは自分に向けてさわやかに微笑む優刀

思い浮かべて笑う篤はまさに恋する乙女そのもの

篤も高校一年の春を迎えた少女である。一番色恋の話が楽しい時期だ。

彼女が色恋に浮足立ったとしても何ら不思議ではない。

そんな彼女の前に現れた障害・・・恋敵

（彼女たちには負けない、負けるわけが無い。負けてなるものか！）

キーンコーンカーンコーン。

聞こえてきたチャイムの音に筭は視線を前に移す。

「よし、皆席に就け、ホームルームを始めろぞ」

チャイムが鳴り千冬と真耶が教室に入ってきてホームルームを始めめる。

「さて、唐突になるが授業の前に一つ決めなければならないことがある。再来週に行われるクラス対抗戦の代表者の決定だ」

教壇に千冬が立ってクラスを見渡しながら言う

彼女は続ける

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生

徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が騒ぎ出した。何せクラスの代表者を決めるのだ。そうやすやすと簡単に決めていいものじゃないという事は誰にだって分かってのことだ

と言っても既に予想はついている、大方、代表候補生になるのだろう……。クラス長である以上は実力が高いものが出るだけなるべきだ。

(……ま、俺には関係ないか)

そんな中、俺は特に我かんせずといった態度をとっていた。

フェデリカや、大将も同様で、特に興味はないらしい……。フェデリカは教壇から見えないように愛用のノートパソコンを覗き見て、大将はつまらなさそうに上空を見ている

俺もノートパソコンを開いて書類仕事をしたいのだが、あいにく俺の席は中央一番前、教壇の真ん前だ。そんなことしたら教壇にいる鬼がうるさく言いそうなのでやめておく。

そんな中、一人の少女が躊躇いがちに手を上げた。

「はい、私は緋村君を推薦します」

「・・・へ？」

瞬間、一気に教室が沸きあがる。クラスの総意とばかりに喧騒に包まれる。

（あ~~~~~やっぱりそう来るか~~~~）

その可能性はもちろん考えていた。けれど正直言ってクラス長なにかやってる暇なんてない。

IS学園の授業に試作機のテストに教導官任務もある。

さすがにこれ以上は無理だ。

断ろうと立ち上がろうとしたその時、クラスに甲高い声が響く。

「納得がいきませんわ!！」

ガタリツと椅子を引く音をたてて立ち上がるのはセシリア。机に両手をつき、いかにも憤慨している様子だ。

「そのような選出は認められません!! 男がクラス代表だなんて
イイ恥さらしですわ。
このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっ
しゃるのですか!？」

選出方法については同意するが、彼女から放たれた言葉にもう突っ込む気も起きない

「実力から言えば私がクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困りますわ!!! 私はこのような島国までISの訓練に来ているのであってサーカスをする気は毛頭ありませんわ!!!」

さすがに周りのクラスメイトもあまりの彼女のいいように少し引いたり、嫌悪感を顕わにする。人を猿呼ばわりする口上なんて普通は聞きたくない。

そんな周りの反応など気にせず、彼女は続ける。

「いいですか!?! クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ!!!」

結局何が言いたかったかと、そういうことらしい

「だいたい文化的に後進的な国に暮らさなければならぬこと自体、私わたくしにとっては耐え難い苦痛で」 「五月蠅いサルだ、少し黙れ」

「な……!?!?」

エンジンが最高潮にかかったセシリアのその甲高い声を遮るやたら気だるげな声

その気だるげな声の割にはクラスに良く響き、セシリアの演説を中断させた

その声のした方に視線を向ける。

そこには……

「まったくさつきからギャーギャーと……お前は飢えたサルか？ そんなに餌が欲しかったら購買に行って買ってこい、あそここのナンヨーバナナはうまいぞ？」

めんどくさそうに椅子の背もたれに寄りかかっていたその体を起こす大将こと、ドミニカ・S・ジェンタイル。

「あ、あなた！！誇りある貴族の私に何という事をおっしゃるんですの！！？」

「フン……お前の生まれなんぞ知ったことか、サルにサルと言って何が悪い？ さっきのお前の大層な演説に対して中身なんてないだろ……サルが喚いているのと一緒にだ」

なおも彼女の口撃は続く

「尊敬するよ、あそこまで中身が無い演説を何の恥じらいもなく声高々に叫べるんだからな。なかなか珍しいもん見せて貰えた。ありがとう」

パチパチツと手を叩く大将。

セシリアは顔を真っ赤にしてワナワナと体を震わせせる

そして俺と大将を指さして、

「決闘ですわ!!!」

「いいだろう、四の五の言うより分かりやすい」

セシリアの言葉に速攻で決断する大将

「ちょっと大将まって」

「いくらボスの命令でも従えないな、部隊が解散してからこっちはストレスが溜まりに溜まっているんだ・・・発散させてくれ」

「止めるに決まってるだろ。代体、クラス代表になんてなる気あるのか？」

「ないな」

「だろ？ あるならともかく、ないお前が彼女と戦ったって一文の得にもならない。それに最初は俺に売られた喧嘩だ。・・・
・俺がやる。」

元々俺が推薦された事から始まったことだ……

クラス代表になるかはどうかは別として、彼女が異議を唱えたならそれを白黒はっきりさせるべきである

なら俺と彼女が戦ってどっちがクラス代表に相応しいか決めればいいだけの話だ

セシリアはズカズカと歩み寄り優刀の前で止まる。

「あら、あなたが相手をするんですの？ まあどちらが相手でも構いませんわ、勝つのは私ですから。ハンデをつけてあげますわ」

「ハンデなんかいるか、決闘である以上は互いに全力を出す……
・当たり前の話だ」

優刀の言葉にクラス中の女子が笑いだす。

「緋村君、それ本気で言っているの？」

「相手は代表候補生だよ？ ハンデ貰わないで男の緋村くんが戦うなんて無理よ、男が女より強いなんて昔の話よ？」

「今からでも遅くないからハンデをもらいなよ」

クラス中の女子がそう進める中……

「あらすつかしら？、誰が女の方が男より強いなんて言ったの？」

一人その考えに反論する一人の人物。

クラス中の視線がそこに一気に集まる……

ローマーニヤ代表候補生フェデリカ・N・ドットリオ、そこに視線が
集まる

「確かローマーニヤ代表候補生のドットリオさんだったかしら？それ
はどついつ意味ですか？」

自らの愉悦を妨害されたセシリアがフェデリカの方を睨み付ける。

「言葉通りの意味よ・・・女が男より強い・・・どうしてそんな
ばかげた発想に行きつくのか理解できないわね」

特にフェデリカはその視線を気にした風でもなく、ノートパソコンの画面に視線を落としたまま答える

「随分寝ぼけたことおっしゃいますのね・・・ISが女性にしか
使えないんですもの、女が男より強いのは当然ですわ・・・ふふ、
そんなことも理解できないで代表候補生とは・・・さすが、ロマー
ニヤ出身です事・・・頭の中が温暖な気候の所為で沸騰しているん
じゃないかしら？」

何を当たり前の事を言っているのかそんなふう挑発的な顔をす
るセシリア。

「貴方こそ寝ぼけているんじゃない？・・・女はISが使える
から強いというのなら、優刀がいる以上その大前提が崩れているで
しょ・・・そんなことにも気づけないなんて、さすが歴史あるブ
リタニア出身、頭にカビが生えているようね、医者いった方が良く
わよ？」

「あ、あなた！私の祖国を侮辱しますの！？」

「何言ってるの、あなたが先に人の国を侮辱したんじゃない。侮
辱を侮辱で返されたくなければ他人を侮辱するのはやめなさい、

それに昨日からの人を見下した態度、それがあなたの英国淑女としての在り方ならブリタニアの品位を落としているのはあなたよ」

「・・・な、なんてことを！！！！！」

声にならないほどの怒りを魅せるセシリア

しかし何とか自身を落ち着かせて・・・

「・・・そこまでおっしゃられるならあなたもクラス代表に立候補しなさいな！！そこで白黒つけてあげますわ！！！」

「いやよ」

速攻で拒否するフェデリカ

その言葉を聞いたセシリアにまた余裕の表情が生まれる。

「あら、やはり、自信がおありで無いようですね・・・あそこまで言うておいて今更逃げるなんてやはり大したことありませんわね」

ふふん、と腰に手を当てフェデリカを見下ろす。

「別に私が戦う必要なんてないでしょ、優刀が勝てばいいんだし」

「あら？私が代表候補生たる私が、素人の彼に負けると思ってますの？」

「ええ、あなたは？優刀？には勝てない……絶対にね」

そう言って、セシリアにニコリと意味深な笑みを浮かべるフェデリカ

「い、いいでしょう。全力で相手をして差し上げます！！そのかわり！彼が負けたら三人とも私の小間使い！　いいえ、奴隷にして差し上げますわ！！」

フェデリカの得たいの知れないその自信にいくらか押されながらも、セシリアはそう言い放つ。

「はいはい、負けたら小間使いでも何でもやってあげるわ……ま、勝てたらだけど」

その態度にまたも体を震わせるセシリア

それを見た千冬はパンと手を叩き、話を締める

「よし、では決まりだな。今から一週間後、第三アリーナでクラス代表決定戦を行う。オルコットと緋村両名は各自準備しておくように」

「わかりました。」

「了解です」

(さて・・・どうしたもんかな)

席に着いた優刀は既にセシリアとの戦いについて考え始める。

彼女のあの態度を見ればいずれ戦うような気はしていたが、まさかこんなにも早く戦うことになるとは思っても見ていなかった。

(やることはたくさんあるんだけどなあ・・・)

セシリアとの戦いに勝ってしまったってクラス代表になってしまったそれはそれで問題なのだが、覆水盆に返らず・・・やるといったかにはやらなければならない・・・

元から負けてやるつもりなどない・・・

やるからには勝つ、それだけだ

(なににせよ今は授業だ、試合まであと一週間もある・・・
どうするかはみんなで考えるところか)

そう言って目の前の黒板に目を移す

こうして優刀の新たな戦いがようやく始まった。

EP・03 クラス代表（後書き）

原作どおり、クラス代表決定戦への流れでした。

申し訳ないです、変えようがありませんでした。

ついに集まった部隊のメンバーですが、詳しい紹介は最後の一人が登場した後に

World witchesで載せますのでその時にでも、

最後になりますが、ご意見ご感想お待ちしております！！

では次回！！

EP・04 新たな可能性（前書き）

どいつもシユウ禅です

とらじつわけで四話目・・・とじつぞー！

EP-04 新たな可能性

優刀とセシリアがクラス代表でもめていたのとちょうど同じ頃・
・
・

「おいさつさと準備しろ!!」

「4番格納庫!!整理は済んだのか!?!」

「牽引車の準備終わりました!!」

「よし!!運搬トラックの準備もしておけ!!」

海鳴基地では基地整備兵が慌ただしく動いていた。

その慌ただしく動く整備兵の怒号を背に、じっと空のある一点を見るひとりの女性

扶桑国空軍中佐、緋村章香だ。

彼女は先ほどからこうやって腕を組んでずっと空を見上げている。
彼女が空を見上げていると・・・

「中佐、受け入れ準備の方は完了しました」

扶桑国空軍中尉、加藤武子が現れてそう報告する。

その三歩後ろには疲れ切った顔をしている元義勇統合戦闘飛行隊、
土田整備班長がいる

「そう・・・ご苦労様」

そう言って、再び空へと視線を戻す章香。

「それにしても随分と急な話ですね・・・」

章香の横に並んだ土田班長は額の汗をぬぐいながら呟く。

その言葉に章香は返し、

「本来はもっと向こうで開発を続ける予定だったらしいですが、向こうは襲撃事件が多発していてとても開発を行える状況じゃないようですからね・・・」

「やはり、戦況の悪化でしょうか？」

彼女の左にならんだ武子が同じように空を見上げて聞く

「それもあるけど、優刀が欧州からいなくなったのが原因とも言えるね」

「この人類が一つになって戦わなければいけない時に……？
奴ら？は何を考えているのでしょうか？」

「それは誰にもわからない……ツと来たようだ」

と章香の視線の遥か先に一つの影が浮かぶ。

その影は段々と大きくなっていき、こちらへと向かっている。

一見すると民間旅客機のようなそれは海鳴基地へと向かいますぐ飛んできています。

エアバス A330 MRTT……ブリタニア空軍のものと思われる大型輸送機はそのまま滑走路へ危なげなく降り立つ。

地上滑走を終え、ゆっくりとした動きで駐機場スポットへと滑り込み、この地で一時その翼を休める事となる。

「さて、お出迎えと行くっか」

章香は二人を引き連れ、駐機場で羽を休める輸送機に向かい歩を進める。

タラップの掛けられた輸送機はそのハッチから一人の人物が現れ、金属のタラップを甲高い音を立てて踏み鳴らし、地上へと降りてくる。

そして、その人物へと章香は歩み寄り……

「お帰りなさい………？博士？」

「ところで緋村、お前のISだが準備まで時間が掛かる。」

その日の四時限目の始まる直前、教壇に立った千冬が優刀の方を向きそう言った。

「一年こんな時期に専用機？」

「ていうことは、国から支援が出たってこと？」

「いいなー、私も早く専用機欲しいなー」

その千冬の言葉に教室中がざわつく

「ちようどいい……復習を兼ねて緋村、教科書六ページを
読んでみる」

周りが騒いでいる中、千冬はそう優刀に促す

「はい……『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。現在世界中にあるISは467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……以上です」

「よし、いいだろう……お前の場合状況が状況だからな、データ収集用に政府が専用機を用意することになった。だから少し待て、理解できたか？」

「状況は分かりましたが、いくつか質問してもよろしいでしょうか？」

いくつか心配なことが浮かび上がった優刀は質問をする

「なんだ？」

「その専用機はいつ頃届くのでしょうか？」

「もうしばらくかかるらしいが、試合前には届くだろう。」

「試合前ですか、……じゃあ、その機体の開発元って何処なんでしょうか？」

「倉持技研だが？」

その名を聞いて、優刀は顎に手を当てて思索する。

(倉持技研か……確かあそこは統合先進技術機
動兵器開発計画に参加している企業だったな……)

「緋村、それを聞いてどうするつもりだ？」

何事かを考える優刀のその姿に違和感を覚えた千冬はそう尋ねる

「……いえ自分が扱う機体である以上、開発元を聞いておいた方が良いと思ひまして」

そう言うのにこやかに笑顔を向ける優刀

「そうか……」

「……あの、先生」

そんな中、一人の生徒が手を上げる

「なんだ？」

「篠ノ之ってことは、篠ノ之さんは東博士の関係者なんですか？」

その生徒がいくらか緊張気味に質問する。

その生徒・・・ひいては誰もが疑問に思うのも無理もない、何せ同じ苗字なのだ・・・

篠乃之束、ISを一人で完成させた稀代の天才。

しかし、今現在彼女は行方不明・・・現在国際指名手配中である。

千冬はその質問に珍しく戸惑いを見せ、答えをはぐらかそうとするが・・・

「あの人は関係ない！」

突然大声を出してその生徒を睨み付ける筈、睨み付けられたその生徒はあまりの剣幕にその生徒は怯えてしまった。

「……………大声を出してしまつて済まない、しかし私はあの人がやない……………あの人の事なんて何も知らない」

そう言つて窓の外へと視線を向ける筈……

その彼女の態度に教室を重苦しい雰囲気包む……………

「……………さて授業を始めろぞ、山田先生、号令。」

「は、はい！！」

それを振り払う様に千冬が号令をかけて授業を始めさせた。

「良かったですわ、まさか訓練機で対戦しようとは思っていませんでしたでしょうけど」

「……毎回毎回、暇だなあんたも。」

昼休み早々、俺の所にセシリアが現れて腰に手を当ててそう言った。

「まあ？　一応勝負は見えていますけど？　さすがにフェアじゃないですね」

「はいはいそうですね……」

「……ッ！　あなたというひとは、どうしてそう……まあいいですわ、教えて差し上げましょう、この私、セシリア・オルコ

ットはブリタニアの代表候補生……つまり専用機を持っていますの」

「ふーん……で？」

そんな彼女の言葉を適当に流して俺は今やっている作業を進める

「で……て、あなた馬鹿にしていますの!？」

「だから専用機持ちなんだろ？ だからどうしたんだよ？」

「まだ解りませんか？ さっきも授業であなた読んでいたでしょう？ ISは世界で467機、つまりその中でも専用機を持つ者は全人類60億人の中でもエリートの中のエリートなのですわ」

「ふーん……で？」

「でって……あなたやっぱり私の事馬鹿にしていますわね!？」

「別に」

「あ……あなたって人は……って、何してますの？」

セシリアが俺の取っている行動に疑問を持たらしい……それ

も無理はない、なぜなら

「帰る準備」

そう簡潔に答えてやる

セシリアが信じられないといった風に叫ぶ

「な！？ 何考えてますの！？ まだこの後に授業がのこってますのよ！？ 一体どうして！？」

何せこの後の授業は織斑先生が自ら教鞭をとるのだ、ISを学ぶ者にとってそれは天に唾を吐く行為に等しいのだろう。

セシリアの叫び声にクラスメイトが何事かと思い、こちらに視線を向ける

「この後行くところが出来たんでな、早退する。」

「な、．．どいに行きますの!?!」

「倉持技研に専用機を取りに行く」

うだし、一回も触っていない機体でさすがにぶっつけ本番とかシャレにならないだろ……。お前だってそんな相手倒したって面白くもなんともないだろう？」

そう言ってセシリアの方へと視線を向ける

「そ、それはそうですね……」

さすがにセシリアも動揺している。

すると……

「ちょっと待って優刀、私も行くわ」

セシリアの驚いた顔がさぞおもしろかったのだろう、心底楽しそうに言うフェデリカ

「フェデリカいくぞ」

「了解」

二人連れだって教室を出ていこうとする

「というわけでケイ、織斑先生への報告は任せた！ たぶんあの人が俺が早退するって言ったら引き止めるだろうからな」

そう教室を出る際にケイに頼んでおく。

「はいはい、いつてらしゃい」

「気を付けてな」

そうケイと大将に送り出され教室を後にした。

「……まったく、何考えているんだあいつらは」

五時間目の授業の始め、ケイから事の次第を聞いた千冬は頭を抱えてそう呻く。

開発元を聞かれたときに何か嫌な予感がしたが、その嫌な予感が当たってしまった。

「お、織斑先生……どうしましょう?」

さすがに優刀の余りに突飛過ぎるその行動に真耶もついていけないようである

「山田先生……授業を始めましょう」

頭に手をやりながら授業開始を促す千冬

「でも……」

さすがに二人を放っておいていいものかどうか困惑する真耶

「別に二人は倉持技研に殴り込みに行ったわけじゃありません・
・私から先方に連絡しておきますので山田先生は授業を初めてく
ださい」

そう真耶に言い残して、千冬は教室を後にする

「……………ぶじ」

教室から出て職員室に向かう千冬からため息が漏れる

とんでもない問題児を抱えてしまった。

元々、自分がIS学園に呼ばれたのは？扶桑の白き龍？と呼ばれるあいつ、優刀の行動を押しさえつける為に？ブリュンヒルデ？の称号を持つ自分が呼ばれたのだ。

あいつは扶桑国の歴とした軍人である。

あいつがISを動かせると判明したとき、委員会は政府に働きかけて彼をIS学園に入学させた。

しかし、委員会が出来たのは入学させるというところ、そこまでだった。

あいつが何の変哲もない只の一兵卒であれば簡単な話であった。

しかし、あいつは？扶桑の白き龍？と呼ばれるほどのエースウィッチであり、そんな実戦経験豊富な人材を易々と扶桑軍が手放すはずがない。

当然、見返りを求めてきた

彼の教導官任務の優先と学園外からの通学を許可させた。

それがこのような形で裏目に出るとは……………

行動の自由がある以上は何をしでかすか解らない。彼の押さえとなるものが必要だったのだ……しかしその行動を全くと言っていいほど抑え込むことができていない。

こんな突飛な行動をする奴は見たことが無い

少なくとも、カールスラントで教官をしていたときにはこのような突飛な行動をとる教え子などいなかった。

(……………いや、いた)

……いたのだ、突飛どころか最悪の事をしでかした教え子たちが……

その時のことを思い出すと今でも背筋が凍る。

「？ブリュンヒルデ？……………か」

第一回、モンドグロツソで優勝したときに渡されたその称号……………

この称号を手に入れた時、自分は家族を失ったのだと初めて理解した。

……………いや、もっとその前に家族を失っていたのだ。

そのことを認めたくなくて、ただ優勝することだけを考えた。

モンドグロツソで優勝すれば、家族が戻あいつってくると……………勝手に
そう信じ込んでいたのだ。

家族を失って手に入れたものがこんな称号とは……………

「滑稽だな……………」

余りに滑稽すぎて笑い話にもならない・・・

「結局・・・私は何を手に入れたかったんだろうな？」

脳裏にすぎるは懐かしい家族の後ろ姿

しかし、今はもう笑顔も思い出すことが出来ないほど色褪せてしまっている・・・

「はっはっはっはっ！！・・・優刀、なかなか面白いことになったじゃないか」

部隊が使用する格納庫の中で章香は携帯片手に呵呵大笑、快活な笑い声をあげる

『・・・面白くなんてないって、章香姉』
ふみかねえ

電話越しに優刀のげんなりした声が聞こえる。

「何事も経験さ、優刀・・・男子たる者その程度の試練乗り越えてみせるんだ・・・うん・・・分かった・・・倉持技研には私からも連絡しておく。あそこも一応計画に参加している

からいやとは言わない筈だ……そっちに土田班長を向かわせるから、途中で拾ってもらいなさい」

そう言っ て章香は携帯を切る

「すみません、お待たせしました」

そう言っ て章香は目の前にいる人物に頭を下げる

その人物は先ほど輸送機から降り立っ た人物であつた。

男性である。

すらりとした長身に、東洋人と解る顔立ちに眼鏡をかけ、その人は章香を微笑ましそうに見ている

「いや構わないよ……それにしても相変わらず姉弟仲はいいみたいだね？」

「お恥ずかしい限りです」

そう言って恥ずかしそうに頬を掻く章香

「ウチの子は一人っ子だからね・・・君たち二人を見ていると妹が弟がいてくれたら淋しい思いをさせなくて済んだのかもしいな
いって時々思うよ」

もうちよつと頑張ればよかったかな？つと微笑む男性

それにつられて微笑む章香

「この前治療に行かせていただいた時はとても元気そうでした・・・
・・・いつか私もお母さんみたいにたくさんの人を治すんだって
楽しそうに言っていました」

「そうか・・・よかった」

安心するよつに微笑む男性

「……………お会いにならないのですか？」

そう聞いた章香の表情がわずかに曇る

「章香くん……………今はまだ駄目だ。命を狙われて極秘に帰国した以上、家族には逢うわけにはいかない。危険なことに巻き込またくはいかないからね……………」

そう彼が極秘に扶桑に帰国した理由……………現在、欧州で多発しているの襲撃事件により多数の研究者が拉致されていると知った扶桑が彼を呼び戻したからに他ならない

「大丈夫、この戦争さえ終わればいくらかでも会える……………その為に今は私たちの出来る事をやるっ」

「はい……………」

二人は目の前においてある無機質なコンテナに目を移す

「中身を見てみるかい？まだ未完成だけどね」

「……………ぜひ」

男の言葉に章香は頷くと、男はコンテナの傍へと歩いて行き、備え付けられたパネルを操作し始めた。

プシューウウウウ……………

……………コンテナから空気の抜ける音が聞こえ、その頑丈そうな扉を開く……………

「みやふじはかせ宮藤博士……これが」

男
宮藤みやふじ一郎いちろう
は章香の言葉に頷き……

「これが人類の希望、ウィッチの新たな可能性……」

「インフィニット・ストライカー
ISだ」

EP-04 新たな可能性（後書き）

一日二回投稿はきついですね、でも暇な時に一気に投稿する・・・

宮藤博士登場です。

それだけです

今回はあまりかけないです

それではご意見ご感想の方お待ちしております

では次回！！

EP・05 白(前書き)

どうもシユウ禅です!!

というわけでついに始まりますクラス代表決定戦。

では、シユウぞー!!

時は流れて月曜日、遂に迎えたクラス代表選当日……

IS学園は今二時限目の授業の真っ最中であり、物静かな静寂を破るように怒号が響く

「一体何をしているんだあいつは!!!!」

憤慨するのは篠乃之箒その人、

彼女はIS学園内の第三アリーナ・Aピットの真ん中でイライラを募らせ、右往左往している。その姿はまさに地中に眠るマグマ……今にも噴火しそうである。

「はいはい、篠乃之さんもカリカリしない。怒ったってしょうがないわよ」

傍に立っていた加東が何とか宥めようとする。その横のジェンタイルは我関せずと言った風にそこに立っている。

「何を言っているんだ加東！！もう試合まで10分もないんだぞ！？　なのにあいつは来ていないんだ！！これが落ちついていられるかっ！！」

彼女が起こっている理由・・・それは
試合当日にもかかわらず、その本人である優刀が未だに姿を見せない事であった。

あの日……優刀が倉持技研に行くと言って早退して以降幕は彼の姿を見ることはなく、そのことが余計に彼女を不安にさせる……

「・・・・・・・・まさか駆け落ち」

あり得ないことではない。

何せ優刀はあの女・・・・フェデリカと一緒にだったのだ。

ロマーニヤ出身の女性は熱く恋に生きる女性だと聞く・・・・・・・・あの得体のしれない女に騙されて勝てないと悟って逃げてしまったのではないか？・・・・・・・・そんな考えが頭をよぎる

そんなふうには良からぬ方向へ考えていくと・・・

「駆け落ち？ないない・・・
朝、普通に鮭定食を食べていたわよっ」

「そう言えばそうだったな」

加東とジェンタイルがあっけらかんと否定した

「ちよつと待て……二人とも今なんて言った？」

今の発言に引っ掛かるものを感じた篤は二人に詰め寄る

「『駆け落ち？ないない』……かしら？」

「違う!!…その後だ!!…」

「ああ、『朝普通に鮭定食食べていた』だけ……それがどうかしたの?…」

何かおかしなことでも言ったかしら？・・・と不思議そうに頭を
傾げる加東

「そう、そこだ！なんでお前達がそんなことを知っているんだ
！？」

「だって朝一緒に食べたもの、知ってて当たり前じゃない」

「なっ・・・・・・・・」

余りにあっけらかんと言つ加東の姿に篝は次の言葉が出ない。
そしてあることに気付く・・・

「・・・・・・・・・・そう言えば、お前たち二人はどこに住んでいるん
だ？」

そう、筈は彼女たちの姿を生徒が暮らす寮で見たことが無い。

IS学園は生徒の保護を兼ねて全寮制であり、一年寮は一つしかない。である筈なのに彼女の姿を寮で見たことが無い。最初は一年だけでも相当数いるし、あまり社交的じゃない自分がそこで見かけなくてもしょうがないと思ったが、一度も見かけないなんてことはあり得ない。

「……私たちは基地から通っているんだ」

ジェンタイルがめんどくさそうに答える

「基地……だと?」

「対岸に基地があるでしょ? 私たちと優刀はあそこの航空部隊に所属しているのよ」

「な、なんだと!?!?!」

その加東の言葉に箒は頭を鈍器で殴られたような衝撃が走る。

「そんな……まさか、優刀が……」

ショックを受ける箒に加東は何とも言えない視線で見つめる

無理もない……

自分の知り合いが軍に入っていたのだ……ショックを受けるな
という方が無理だ

ショックで首を垂れる箒に言葉をかけようとした加東

「……同棲、してただとっ……!」

急に憤慨する篤

「……へ？」

余りの予想外な反応に加東は呆けた声を出してしまう

しかし、そんな加東の言葉は篤の耳には入ってこない。

確かに優刀が軍人であるという事には多少驚いた。しかし彼の姉は軍人であるし、優刀も軍人になりたいとよく言っていたので軍人になっていてもおかしくはない

しかし彼が軍人であるという事実よりも、篤にとっては彼女達と一つ屋根の下で暮らしていることの方が何倍も衝撃だった

「お……お前たちどういっつもりだ!? 男女七歳にして同衾せず!…じ、常識だろっ!?」

「いや、同棲じゃないから」

加東の言う通り、同じ基地から通ってはいるが別に同じ部屋に住んでいるわけではないのだから同衾ではない。

しかし、もはやその事実にはテンパってしまっている筈の耳に入ることではなく、加東たちにもものすごい剣幕で詰め寄る……

ドゴオッ！！！

「ギャンっ！？」

とても軽快とはいいい難い音と共に出席簿が筈の頭に垂直に振り下ろされ、筈はピットの無機質な床に沈む。

「お、織斑先生……」

筈はその一撃から何とか復活して自らを床に沈めた人物を見る。

「何を騒いでいる、この馬鹿者」

クラス担任の織斑千冬がそこにいた

「せ、先生大変です!!」

「なんだ篠乃之？」

今聞いたことを千冬に聞かせようと詰め寄る箒

「優刀と、彼女達が「知っている」……え？」

詰め寄る箒の言葉を遮り、冷やかな視線で見る千冬

「緋村たちが、学外から通っていることだろう？・・・知っている」

「だったら、なぜ辞めさせないのですか！！男女、同衾せずという言葉が「篠乃之」・・・っ！」

怒気を含んだ声で名前を呼ばれる箒。その余りの怒気に箒、真耶は体を委縮させる

「これは学園が許可したことだ、お前にどうこう言う資格も権利もない・・・もちろん私にもな」

「し、しかし！！」

それでも、何とか詰め寄ろうとする箒

「くどいぞ篠乃之。理由を聞かせてもいいがその場合、お前には学園から三年間監視がつけられ、ここから一步も出ることは許されなくなるがいいんだな？」

「っ！！」

千冬のその言葉に身を震わせる筈。

彼女は自身の姉がいなくなった時の事を思い出す。あの時、姉が姿をくらましたことよって国から執拗な監視と聴取を繰り返され、心身共にすり減った時の事を……

「それが嫌ならこれ以上の詮索はするな。学友として仲良くするのは構わんが、その？一線？は越えるな……良いな？」

「……………っ、はい」

顔を俯かせる筈

悔しかった……自分が彼を一番知っているのだ。それなのに自分の知らない、手の届かないところでいつの間にも別の女性が彼と共にいる……それが何よりも許せ無かった。

あの地獄のような生活の中で唯一の希望だったのは彼に再会する事……それだけだったのだ。なのにかつてすぐ横にあった彼の隣という居場所が、今では遥か彼方……遠い。

体を震わせる筈は加東達を親の仇を見る様に睨み付ける。そんなふうに睨み付ける彼女に対し、加東は申し訳なさそうな顔をしてジエントイルは興味なしという態度である

「さて、ところで加東……あのバカ者どもはまだ来ていないのか？」

そんな筈を視界の端に追いやり、千冬は今日のメインである優刀が来ていないことを不審に思いそう尋ねる。

「はい……でも、もうそろそろ来るころかと」

そう言って入口の方へと視線を向けると……

「……すいません、遅れました」

「……はあ、やっと来たか」

その場の重い雰囲気を取り裂くように一人の少年の音が響く。

優刀だ。

ISスーツを身に纏った姿がそこにはあった。

その姿を見た千冬は安心したように息を吐く。

「……遅くなりました」

そしてその後ろにはフェデリカの姿があった。

しかしいつもの陽気な雰囲気がそこにはなく、顔を俯かせて、沈んだ雰囲気を漂わせている

フェデリカのその普段と余りに落差がある雰囲気がピットに微妙な空気を漂わせる。

「あ、あの・・・フェデリカさん、どうかしましたか？」

フェデリカの様子がおかしい事に気付いた真耶が恐る恐る声をかける。

「いえ、大丈夫です・・・」

そう言って、真耶の方へ笑いかけるフェデリカだが、そこにはいつもの活力が無い・・・

「さて・・・お前たちは良くも私の授業をサボってくれたな・・・
・・・といたいたいところだが、今回ばかりは学園側の不手際だ。
不問にする」

「ありがとうございます」

「・・・」

千冬の言葉に、感謝の意を伝えるフェデリカに対し。優刀は表情を硬くして・・・

965

「・・・織斑先生、お尋ねしたいことが」

「なんだ？」

「・・・今回俺に支給される専用機の詳細スペックを渡されていますか？」

「いや？まだだが、それがどうかしたのか？」

優刀の質問の真意を測りかねるといった、千冬は思わず聞き返す。

「まったく……？大した専用機？ですよ」

その言葉とは裏腹に、優刀は吐き捨てるように言う。

その言葉と同時に、ゴゴンッ、と大きな音を立ててピット搬入口の扉が音を立てて開き、ゆっくりとその向こう側を晒していく……
そして、

そこに？白？がいた。

無骨な装甲は須らく白。純白の白を纏ったそれは、王に忠誠を誓

う騎士の如く待っていた。

そう、こうなる事を……ずっと前から……待っていた……。この時を……、ただこの時を……。

「……これが、優刀の専用機」

「きれい……」

そのあまりの白さに箒と加東は感嘆の声を上げる。

が、

優刀はそれを射殺す様に見ている

「すごい機体じゃないか優刀!!」

その機体を見た箒が興奮したように優刀に言う。

しかしその筈の興奮とは対照的に、どンドンその表情を硬くしていく優刀。

「・・・優刀？」

優刀のその反応に戸惑う筈

「・・・もしかして何か問題があったの？」

優刀のその反応を見て加東が呟く

「ううん、機体性能は間違いなくトップクラス、そんじょそこらのISにはまず負けないわ・・・けど」

加東の疑問にフェデリカは困ったように答える。

「けど？」

「この機体、？白式？には近接ブレード一本しか装備されていない、近接格闘特化の機体なのよ」

「『ええっ！？』」

フェデリカが告げる衝撃の言葉に、真耶、加東……そしてあの

ジエンタイルまでもが驚いている。

そして千冬は頭を押さえ、筭は訳が分からないといったふうになっている

「そ……それ、ホントなの？」

「ホントよ……倉持技研の開発者達に言わせれば、この機体は近接格闘戦に特化した機体だからこれで完成らしいんだけどね」

優刀の専用機というにはあまりにもお粗末すぎる……そう
呟くフェデリカ

「それで基地に持ち帰って火器管制システムと量子変換システムを搭載しようとしたんだけど、機体のメインシステムに高度なプロテクトがかかっている、そのプロテクトを解くのに時間が足りなかったの……それで結局は火器管制や量子変換システムの搭載は後回しにして残りの時間全部使って機体の最終調整をしていたの。そして終わったのがついさっきなのよ」

きっと何日も寝ていないのだろう、よく見ると彼女の目元には大きな隈が出来ている。

「……要するに未完成機、という訳か」

「ええ、挙げ句フォーマットとフィッティングも終わらせていないし……」私がこの機体を本当に完成させてみせる『なんて啖呵切っておいて……開発計画主席操縦者が聞いて呆れるわ。情けないことこの上ないわね」

そのジェンタイルの言葉にいつも陽気なフェデリカにしては珍しく自嘲的に笑う。

彼女としても未完成な機体で大切な仲間を送り出さなければいけないというのは技術者のプライドが許さないのである。

「……フェデリカは良くやってくれたよ」

悔しそうに俯く彼女に優刀は手を置き、言葉をかける。

「優刀……………けど」

「お前は機体を最高の状態に仕上げてくれた……………そうだろうか？」

「それは、そうだけど」

「だったらそれだけで十分だ……………後は任せる」

そう言っつて優刀は白式に体を預ける

優刀が白式に体を預けると体にあわせて装甲が閉じる。

カシュッ、カシュッ、と空気の抜ける音が各部から聞こえてくる。

それと共に優刀と白式が『?』がる。

解像度を上げたかのようなクリアな視界が一気に広がる

それに伴い、各種センサーが次々と情報を告げてくる。

戦闘状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット I
Sネーム『ブルーティアーズ』中距離射撃型。特殊兵装あり。

「よし、ハイパーセンサーは問題ないわね。気分はどう？」

「問題なし、じゃないな・・・ちつ、フォーマットとフィッティングしていないと反応が遅いな。」

試しに腕を動かしてみると自分が思っているよりも反応が数瞬遅れ、その反応の悪さに舌打ちをする。

「ごめんなさい、そっちは実戦でやってもらうしかないわね。」

「了解だ・・・」

フェデリカに笑顔で答えると、

「優刀、せいぜい負けないうちにね。」

「ああ」

……ケイの声援に優刀は頷き、ジェンタイルの方へと視線を向ける。

「……」

ただ親指を立てて答えるジェンタイル

そこでセンサーの隅に何か言いたげな箒が引っかかった

「箒、」

「な、なんだ？」

「いつてくる」

「あ、ああ、勝って来い。」

そのままカタパルトに向かう

「すう……はあ……」

息を大きく吸い込み、勢いよく吐き出した。

ゲートが開く。

優刀はカタパルトの上に立ち、出撃に備える。

足をカタパルトがロックする。

ゲート解放まで後10秒……7、6、5、4、3、2、

「ドラッへー01、白式、出るー!!」

優刀がピットからアリーナへ躍り出ると、そこにはISを纏ったセシリアが上空にいた。

「あら、随分と遅かったですわね。まさか逃げ出したのかと思いましたが」

鮮やかな青色の機体『ブルーティアーズ』を纏ったセシリアが腰に手を当てたポーズでふふんと鼻を鳴らす。

（ブルーティアーズ……フェデリカが言っていた？イグニツ

シヨン・プラン？でトライアル中のティアーズ型っていう奴か)

『ブルーティアーズ』・・・その外見は特徴的なフィンアーマー4枚を背に従え、さながら王国騎士の様な雰囲気を漂わせている。

その手には身の丈を超える長大なレーザーライフル、スターライトmk？が握られている。

「最後のチャンスを差し上げますわ。」

「最後のチャンス？」

その言葉に眉根を寄せる

「私が一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ぼろぼろの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといっているのであれば、許してあげないこともなくつてよ。」

そう言って口元にうっすらと笑みを浮かべる。

それは自らの勝利が揺るぎ無いものだ と確信している 余裕の笑み

「……………はあ、言いたいことはそれだけか？」

その笑みを見て優刀は心底あきれ返った顔で呟く。

「はい？」

セシリアが優刀の心底あきれ返った顔を見て眉を吊り上げる。

「あいにくと、俺はここに来るまでにいろいろと託されてきてな
……………少なくとも、お前に頭を下げて負けを認めるっていう選択肢
は絶対に出来ないんだよ。ボロボロでみじめな姿？いいさ、いくら
でも曝してやるよ。それで本当に大事なものが護れるんだったらな
……………それと……………」

・・・？俺達？を舐めるな」

その得体のしれない迫力にセシリアはいくらか気圧される

「・・・くっ・・・そう、降伏する気がないなら残念ですわ。それなら」

瞬間、センサーが警告音を発する

「お別れですわね！」

キュインツ！と独特な音が響くと同時、閃光が走って優刀を襲おうとする。しかしそれよりも早く優刀が動きセシリアに向かって突撃、その初撃をかわす。

「やはり素人ですわね!!」

セシリアはその動きを見て笑う。まさか初撃をかわされるとは思っていないかったが、馬鹿正直に、真正面から近付いて来るとは素人の動きだと第二射を打つ。まさしく必中の一撃。セシリアはその一撃で体勢の崩れたところをさらに狙い打とうと照準を合わせる。

「甘い」

しかし、その必中の一撃を事も無げに半身ひねることで避ける優刀。

その捻った体を錐揉み回転させながらセシリアに向かってさらに突進し近接ブレードを展開、そのまま回転の勢いを加えた一撃をセシリアに叩き込む。

「ああっ!?!」

ブルーティアーズのオートガードが働き、セシリアを守る。

何とか体への直撃を避けたものの、フィンアーマーの一部が吹き飛ばす。

まさか、あのタイミングでかわされ強力なカウンターを受けるとは思っていなかったセシリアは
数瞬、呆然とする。

しかし、何とか体勢を立て直して自分の後方にぬけた優刀の方を見る。

「あ、あなた……」

今起きたことがあまりにも信じられなく言葉も出ないセシリア。

「ッ……やっぱり反応は今一つだな、それに……
まあ、フェデリカだからこれくらいで済んでいるのか」

そんな彼女を気にした風もなく、その違和感にひとり呟く優刀

「あ、あなた……!!」

セシリアの顔が驚愕に歪む

「言ったはずだぞ？ セシリア・オルコット……あんまり俺をなめるなッて。」

EP・05 白（後書き）

ついに始まりました、クラス代表決定戦！！！！

はてさてどうなる事やら・・・・・・・・

次回に続きます

最後になりますが、ご意見ご感想お待ちしております

では！！

E p - 0 6 ? W e i B D r a c h e ? V S ? B r u e T e a r s ?

どうもシユウ禅です!!

ついに始まりましたクラス代表決定戦!!

優刀はセシリアに勝てるのか?

ではどうぞ!!

IS学園、第三アリーナ・・・

今その上空では多数の火花が散っており、蒼白い閃光が走り続けている。

蒼白い閃光を放つのは大空の色に溶け込みそうな鮮やかな？蒼？、そして赤い閃光の間を飛翔するのは陽光により耀きこの空に映える？白？

？青？と？白？この空において対極に位置する二つの色は共に互いを落とさんと空を駆ける

「この・・・!」

？蒼？の主、セシリアは目の前に迫るその？白？振り払おうと次々に閃光を放つ。しかし、その？白？の主・・・優刀はその間

を縫うように飛び、その距離を縮めようとする

「くっ！！」

たまらず距離を取る為に後方へ飛ぶ。

（く、そんな……この私が押されているなんて！！）

セシリア・オルコットは焦っていた。

（先ほどからこちらの攻撃を全てかわされる……なんなんですのあの機動性は！！）

いくら彼の動作の隙を突こうとしてもそもそも隙が少ない。相手の隙を作ろうと牽制の攻撃をするも回避し、逆にこちらの攻撃後の隙をつき無駄のない機動で迫る。完全にこちらのスピードの上を行

かれている。

どうやら敵の装備は近接ブレードのみのようなのだがそれでも侮れない。一瞬でも気を抜けば一気にその距離を詰められて斬られてしまう。

（有り得ない……男に負けるなど、絶対に有り得ませんわ！）

自分はブリタニアE.S.国家代表候補生……その自分があのよ
うな極東の男になど負ける筈がない。

「あああああつ！！！」

何かを振り払う様にセシリアは叫び、優刀へと狙いを定めて最大出力のレーザーを放つ。

「……………」

その渾身の一撃を優刀は避け、ブレードを横薙ぎに一閃

「あああああつ！！!?」

その一撃にセシリアのシールドは大きく削られる

IS 同士の戦いは基本、相手のシールドエネルギーをゼロにした方が勝ちである。ただし、最初の一撃の様にバリアーを貫通し、実体にダメージを受けた場合は大きくエネルギーを削られる。実体ダメージを食らった場合は破損したりし、の大なり小なり戦闘に影響が出てくる

絶対防御によって操縦者の安全は守られているものの、その衝撃までは相殺してくれず、セシリアはその衝撃に顔を歪める。

残りのシールドエネルギーは450

まだ戦いは始まったばかりだ……

「はい……」

モニター越しに繰り広げられる戦いを見て篤は思わずそう呟く。

モニターの中の優刀は圧倒的優勢に立っており、白い鎧を身に纏い剣を振るうその姿は篤が思い描いていた通りの……理想とする優刀の姿であった。

そんな風に感嘆としていると……

「すごいですね、緋村くん」

同じようにモニターを見ていた真耶が感嘆の声を漏らす。

彼女もまた、優刀の戦い方に魅せられたようにモニターを食い入るように観ていた。真耶の驚嘆の声は優刀に向けられたものであ

たと分かっているはずなのに幼馴染が褒められた事で自分まで誇らしくなる篤。

しかし……………

「さすがは？扶桑の白き龍？ですね。ISに乗るのが初めてでも代表候補生を圧倒するなんて……………さすがです。」

？扶桑の白き龍？……………聞きなれない言葉が篤の耳に入る

「あの山田先生……………？扶桑の白き龍？って？」

気になった篤は真耶に聞く……………するとその答えは意外なところから帰ってきた。

「？扶桑の白き龍？正確には？ヴァイス We i B ドラック D r a c h e ? . . .
かつてボスが欧州で戦っていた時に呼ばれていた渾名だ。その勇猛な戦いぶりから欧州の人々から畏怖と敬意を込めてそう呼ばれるようになったんだ。」

答えたのはジェンタイル。

彼女はモニターから目を離さずにそう答えた。彼女が答えたことに多少眉根を寄せつつも筈は顔をほころませ、モニターを見ながら心の中で何度も呟く。

モニターの中で優刀の白き鎧を纏い、刀一本で勇猛に戦っているその姿はまさに白き龍そのものである。

そして近接格闘に特化された彼の専用機。

(? 扶桑の白き龍? に格闘戦特化の白い専用機・・・うん、いいな。どちらも優刀にぴったりだ。」

フェデリカが優刀が使うにはお粗末すぎるといつていたが、そんなことはない。優刀の戦う姿はもう完成されている・・・彼には刀一本あればいい。あの完成された優刀に銃なんてものは邪魔なだけだ。

「・・・うん、優刀にぴったりだ」

いつの間にかそう呟いていた

あの白い鎧を纏った優刀の横に自分が立ち次々と敵を倒していく・・・いつか来るであろうその日に彼女が思いを馳せていると・・・

「うん」

喜色の笑みを浮かべている筈とは対照的に険しい顔をする人物達
がいた。

フェデリカ達だ。

「フェデリカ、どう？」

画面を険しそうに見ていた加東の問いかけモニターではなく、愛
用のモバイルパソコンに目を落としていたにフェデリカも顔を険し
くして答える。

「やっぱり反応が遅れている……しかもかなり。フォーマ
ットとフィッティングが終わっていないからしょうがないといえ
ばしょうがないのかもしれないけど。」

「やっぱり……このままじゃ？まずい？わね。」

画面を再び睨む加東

「ええ……アホみたいなプロテクトかけた開発者をぶん殴っ
てやりたいわ。おかげで欠陥機止まりじゃない……もう!!」

悔しそうに頭をくしゃくしゃと掻くフェデリカ。

「なぜ欠陥機なんだ？ 倉持技研の人達はこれで完成とってい
たのだから？ 近接格闘特化の機体……いいじゃないか、優刀に
びつたりだ。」

感動に水を差された形になった篤は不快そうに眉根を寄せて二人を睨む・・・すると

「・・・・・・・・馬鹿かお前は」

篤に冷たい言葉を投げつけるジエンマイル。

「なっ！！・・・・・・・・それはどういう意味だ」

「邪魔された篤は当然のごとく憤慨して彼女を睨み付けるが、当の本人はそんなものに怯むそぶりはない。

「近接格闘特化がボスにぴったりだと？ 馬鹿も休み休みいえ」

「な！！ どうしてだ！？ 現にこうやって優刀は代表候補生を圧

倒しているではないか!!」

モニターを指す筈。確かにそこでは優刀がセシリアに圧倒的攻勢を仕掛けている

「はあ……よく見てみる」

そう言っつてモニターの方へ目を向けるジェンタイル。それにつられてモニターに目を戻す筈。

「……いいか？ 単純に今ボスがあのか？お嬢様？を圧倒しているのは単純に相手の攻撃が読みやすく、ボスが相手の数歩先を読んでいるからにすぎないんだよ」

「そうね……確かに彼女は『狙い』は正確なんだけど？ただ狙っている？だけだしね……行動が真つ直ぐすぎてあれじゃ無駄撃ちを重ねるだけ……あれじゃバッテリーングマシーンと大して変わらないわ……あんなのはまず優刀には当たらないわね」

ジェンタイルに同意するように頷く加東。

「当たり前だ、優刀は強いからな。あんな攻撃に当たりはしない」

「はいはい、そうね・・・でもね、さっきも言ったけど今の優刀は正直に言ってる？まずい？のよ。」

「なっ！！ 加東！！貴様は優刀が負けると思っているのか！！」

加東に詰め寄る筈、しかしそんな筈を大して相手にせず、話を続ける。

「貴方が何を根拠にそこまで強く言い切っているのか分からないけど・・・まあ負けないわね、あの程度だったらどうとでもなると思うけど・・・けど、実戦では何が起きるか分からない。全ての可能性を考えて自身の弱点を正確に把握しておかないと足下掬われて一気に盤上ひっくり返されるなんてよくある事よ。」

「う……」

加東から発せられる得体のしれない迫力に箒は怯んでしまう。

「実際近接特化なんて弱点だらけ、特に優刀が使っているあの今の？白式？は致命的過ぎる……」

「ど、どどどいっことだ？」

加東の迫力にいくらか押されながらも箒はその理由を聞くこととする

「
機体が緋村くんの反応に追従しきれていない
んですね？」

その質問に答えたのはクラスの副担任、山田真耶。いつものおどおどした雰囲気ではなく、その表情は引き締まっている。

「追従できていない？・・・どういふ事ですか山田先生？」

「ふふ、それじゃあ説明しますね」

彼女としても教師として教えるということが出来てうれしいのだろう、今一つ理解できていない筈に嬉しそうに説明を始める真耶。

「・・・ISの基本的な四肢の稼働は、皮膚の電位差を計測してISのコアが判断、四肢を動かすんですが、一回コアを介してって

いうプロセスを踏んでいるぶん、動作に極僅かなんです。タイムラグが生じてしまうんです」

「はあ……」

「本来この誤差は一般的に私たちはあまり気にならないほどの・
・普通に体を動かしている時と変わらない、敏感な人はそれに気づくかどうかの微々たるものなんです。・・・ 緋村くんの場合、本人が思った行動よりも若干遅れが生じているんです。」

「え……それって」

ようやく、真耶の言いたい事が理解出来たのか篤は顔を上げる

「はい、要するに体が思考に追いついていかない状態なんです。ハイパーセンサーによって感覚が鋭敏化にされた上にフォーマットとフィッティングが行われてないせいもあるんですけど、今の緋村くんにはその差が一気に出ています。ウィッチとして身体強化で思考と反射のタイムラグが極めて少ない状況に慣れている緋村くんにとっては……元からISで訓練している者にはあまり感じれない、またはしょうがない差と取られてしまっている？ その差？は大きな差で、彼は機体の反応が鈍いと感じてしまっているんです」

「なるほど……」

真耶の説明に納得いったと頷く筈

「今は優刀の先読みで避けているからいいけど、あの機体自体が優刀に反応が追従できていない以上は予想外の事態にそれが仇となるのは目に見えているわ……特に超接近戦ではね」

そう言っ言葉が続けるのは加東

「確かに近接格闘は重火器に比べて弾切れもないし威力も高いけど……相手に近づかないといけないからその分リスクも高いのよ」

「当たり前だ、リスクを背負わないで勝つことなどできるか」

当然だと頷く筈、その筈の態度に若干呆れながらも説明を続ける
加東

「近距離主体の機体同士なら双方同じくらいのリスクだからまだいいかも知れないけど、射撃型が相手の時は絶対に不利よ。篠之乃さんに聞くけど、あなただったらセシリアさんにどうやって近づくの？」

「そんなの決まっている、避け続けて近づくなんて言ったらぶっ飛ばすぞ」・・・う」

筈の答えを予想したジエンマイルが筈の言葉を遮る

今だ納得のいかない顔をする筈に今度はジエンマイルが説明する

「いいか？射撃型の相手に距離を詰めるには常に相手の行動を予測して相手との相対距離と速度を計算し、適切な機動を取る・・・高度な戦術と技量が必要だ。一体それだけの事をこなすのにどれだけのエネルギーが消費されると思う？」

「う・・・それは」

「？刀一本で敵の懐に飛び込んで一撃を放つ？・・・確かに威力が極めて高い戦い方だが、同時に多大なリスクと高度な技量を要求される・・・高いリスクを負うという事は自身の身だけじゃない、仲間も、ひいては周りを危険にさらす・・・それに特化した機体がボスに合っているだと？ ふざけた事を言うな。」

そう言っつてジェンタイルは箒を睨み付ける

「今のご時勢これからISを学ぶ以上、その身を危険に晒さなければいけない時が来るかもしれないんだ。もう少し考えてからものを言え」

「・・・っ、ああ」

ジェンタイルの容赦ない言葉に箒は顔を俯かせる

ピットに重たい雰囲気漂う中、試合は一気に終局へと向かって行った。

「はああああああっ！」

？スターライトMk？？から蒼白い閃光が次々と放たれる。その
幾条もの閃光は一直線に優刀へと向かいその身を貫こうとするが・
・

「……………」

またしてもその攻撃を事も無げに躲し続ける優刀

その躲し続ける優刀の姿にセシリアは悔しそうに下唇を噛む

・
『ブルーティアーズ』のシールドエネルギー残り残り250・・・
対する優刀が駆る『白式』はまるで無傷・・・シールドにすら
掠りもしない。

「……どうやら認めなければなりませんわね、私が全力を出すに値する相手であると!」

そう、ここまでくれば認めるしかない彼は強い……しかし

「けれど、あなたもこれでもう終わり……私に?これ?を使わせたことを誇りに思いなさい」

セシリアは笑みと共に左手を横にかざす

「……行きなさい!! ?ブルー・ティアーズ?
!」

セシリアの叫びに応える様にスタビライザーから四機のビットが射出、それぞれが複雑な機動を取り優刀へと襲い掛かる。

「・・・くっ!!」

ビットは優刀の上下左右に囲むように回ると先端が発光、レーザーを放ってくる。セシリアから距離を取っていた優刀はそれを紙一重でかるうじて躲す。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットと？ブル
ー・ティアーズ？の奏でる円舞曲ワルツで!!」

次々と放たれる蒼白い閃光、その閃光の雨が次々に優刀へと降り注ぐ。かるうじてそれらを回避する優刀。

「うふふ、さっきまでの威勢は何処へ行ってしまわれたのかしら？ さあ、もっと踊って見せてくださいな！」

さらに激しくなるレーザーの雨を躲し続ける優刀。

「頂きましたよ！……！」

そついうが早いか、優刀の後ろに周りこんだビットが必殺の光を放つ……が

「な……！」

その必殺の一撃は優刀が体を半身捻ることで躲し優刀はセシリアに向けて突進、セシリアにブレードを振り落ろす。

「きゃあっ!?!」

その一撃によって更にシールドエネルギーを減らすセシリア。彼女はいったん距離を取り、左手を横に振るう。それに応える様にビツトは優刀へと向かう。

「・・・はあ!?!」

優刀はそのビツトに目もくれず、一気にセシリアへと突撃、さらに一撃。

「な・・・」

セシリアの顔が驚愕に包まれる

「・・・やはりな」

その顔を見た優刀は納得がいったとばかりに頷く。

後方に下がるセシリア、左手を振るい、それに応える様にビットが優刀へと迫る

「・・・その兵装はお前が毎回指令を送らない行動が出来ない。しかも」

迫るビットを一閃

「お前はビットを動かしている間、制御に意識を割かなければならず、他の行動が出来ない」

優刀の背後に流れ、火花を散らして爆発するビット。その様子を

見てセシリアは顔を引きつらせる

「……どつやら図星のようだな」

優刀はブレードを正眼に構える。

「……!! お行きなさい、？ブルー・ティアーズ?!」

セシリアの叫びにビットが空を駆け、青い閃光を放つ。

閃光の容赦ない弾雨の中を優刀はセシリアに向かって迷わず進む。

ビットを振り切り、一気にその距離を詰める優刀。

そして……

「かかりましたわね!!!」

その言葉と共に彼女の腰部から後ろに広がる突起、それが優刀の方を向き先端から何かを射出する

「おあいにく様、？ブルーティーズ？は6機ありましてよ!!!」

セシリアの顔に笑みが浮かぶ。・・・しかし

「やっぱり、隠し玉があったか」

そのセシリアの奥の手にも優刀は驚きもせず、ただセシリアに向かって飛んでいく。

「な!!!」

「警戒していないとも思ったのか？・・・そんなあからさまについていて、分かりすぎるんだよ」

・
・ 優刀は言い捨て、近接ブレードでミサイルを叩き切るうとするが・

ガクン!!!

「なっ!!!?」

白式が突如その動きを停止する。 射出されたミサイルは一直線
に優刀を襲い

ドオオオオオンッ!!

赤を超えて白い光に優刀は包まれた。

「優刀!!」

モニターを見ていた篤が思わず声を上げる。

千冬も真耶も黒煙に包まれる画面を神妙な面持ちで見つめている。

「やれやれ……間髪だつたわね」

黒煙が晴れたとき、そのため息を吐くフェデリカ。

「まったく……冷や冷やさせないでほしいわ」

かすかに残っていた煙がはじけるように吹き飛ばされる。

その中心には白い機体があった。

そう、真の姿で――――

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを
押してください。ー

白式は輝きを放ち、徐々にその形を変えていく。

先ほどまでの角ばった形が中世の騎士のような出で立ちに変わる

そして、輝きが完全に消えた時、”白式”は真の姿になった。

「ま、まさかファーストシフト!? あ、あなた今まで初期設定
の機体で戦っていたというの!?!?」

その姿を見たセシリアは信じられないと、驚愕の声を上げる。自分を圧倒的にあそこまで追い込んだ人物が、実は初期設定の機体で戦っていたのだ。セシリアの顔に驚きを通り越し、恐怖が張り付いている。

そんなセシリアに耳を貸さず優刀は自分の手に握られた一振りの刀を見る。

- 近接ブレード 『雪片・弐型』 -

日本刀から生まれ出たような刀身をしているそれは、刀というより太刀といったほうが近い。

その刀、？雪片・弐型？は優刀にある記憶を蘇らせる。

吹き荒れる嵐の中・・・・・・・・目の前に現れる紅
き鎧を纏ったその女性。

青く光る光の剣がこの身に迫る

光にこもる殺意・・・・・・・・

漆黒の闇へと墜ちていく大切な人

咆哮が空へと響く

それはとても悲しい記憶

心が悲鳴を上げる

．．．いやだ使いたくない．．．

俺はこの刀を嫌悪する

どろりとした黒い感情が芽生える

今にもこの剣を投げ捨てたくなる

駄目だ．．．今は抑える。今はこの刀を捨てるわけにはいかない。

「あ……あなた、何者ですの？」

恐怖に顔を引きつつているセシリアが優刀に問いかける。

「
扶桑国空軍少佐、義勇統合戦闘飛行隊長・
・緋村優刀、只のしがない男のウィッチさ」

「ま、まさか……？
Weib Drache?
ヴァイス ドラッケン

その名を聞いて、セシリアは顔を引きつらせる

祖国にいた頃、その名をウィッチである知り合いから聞いたことがある。

? Weib Drache?
ヴァイス ドラッケン

かのクラカウ撤退戦で迫りくるネウロイの軍勢を抑え込んだ扶桑

より欧州の危機にはせ参じた英雄・・・

自分はその人に助けてもらったとその知り合いはいつていたが、セシリアはその話を信じてなどいなかった。男など所詮は情けない生き物だと思っていたからだ。

・・・しかし

いまその英雄が目の前にいる。

「・・・・・・・・今まで黙っていたのですか」

悔しそうに優刀を睨み付けるセシリア。彼女からしてみれば騙された・・・そういう気持ちなのだろう。

「別にいう必要がないからな。」

「な!!」

優刀のその言葉にセシリアは驚愕の声を上げる。それは自らの功績を誇らないといっているようにセシリアには聞こえた

「それを自ら打ち明ける事に何の意味がある？・・・自分が言うことに何の意味もない。肩書きで人の勝価値が決まるんじゃない・・・その人が何を考え、どう行動したか・・・それが認められて初めて人の価値が決まるんだ・・・そうだろ、代表候補生？」

「っ!?!」

そう呟く優刀の言葉に殺気が籠り、セシリアは身を震わせる

「・・・行くぞ、セシリア・オルコット・・・・・・・・ここからが本番だ」

優刀はそうつぶやくと鋭い氷のような冷たい闘気と心臓を握り潰すような重圧を放出する。

「くっ、行きなさいっ、ブルー・ティアーズ!?!」

そのプレッシャーに押しつぶされそうになりながら彼女はもはや悲鳴のような声をあげる。

その声に呼応し、ビットたちが優刀にビームを放つ。

ビームの雨の中を優刀は凄まじい速度で駆け抜けていく。

「はっ、速いつ!？」

予想を遥かに越える速度に、セシリアは怖じ気づく。

セシリアは近づけさせまいとライフルを連射するが、全て紙一重で躲かれ、その勢いを止められない。

優刀はそのまま肉薄、彼女のライフルを両断。

そしてそのまま通り抜けようとする瞬間、?雪片・弐型?の展開を解除、空いた手でセシリアの足をつかみ彼女を引きずりながらアリーナ上空へ、遠心力を利用して思いつきさらに上空へ向けて放り投げる。

通常であればそのまま上空に放り投げられるだけだが、アリーナ

の上空には保護シールドが張られており、セシリアはそこに激突する。

「ああっ！！」

激突し、落下するセシリア

その隙を逃さずブースターの最大加速で接近した優刀が下方から雪片で切り込む。

「うおおおおおおおっ！！」

優刀の咆哮に応える様に、雪片の刀身が光を帯び、強烈な光を放つ。

優刀はその光輝く刀を下段から振り上げ、突き上げるように放つ。

飛天御剣流

龍翔閃

落下している物体の質量と、高速度で上昇する力が合わさり、絶大な威力を生む。

縦一閃

その一撃に崩れ落ちていくセシリア。

雪片をしまっ優刀。

この瞬間 雌雄は決した

優刀は静かに地上に着地する。

直後、

ドンッ！！

直後、蒼い雲は地上にむなしく土煙を立てて落ちた。

『試合終了。勝者 - 緋村優刀』

決着を告げるブザーが鳴り響き、優刀の勝利を告げる場内アナウンスがアリーナに流れた。

Ep-06 ? Weib Drache ? VS ? Brue Tears ?

いかがでしたでしょうか？

きちつと戦闘シーンがかけられているといいんですが……

次回に続きます。

最後になりますが、ご意見ご感想の方、お待ちしております。

では次回！！！！

EP・07 それぞれの夜(前書き)

どうもすいません遅れました、シユウ禅です!!

EP・07です・・・

それでほむじぞー!!

EP・07 それぞれの夜

「……………」

ピットに戻り息を吐く。

一時はどうなる事かと思ったが何とかなった。やはり慣れない機体でぶっつけ本番とかやるものではない。

「お疲れ様ユウ。はい、これ」

そう言ってスポーツドリンクを投げってくるのはケイ。

「ああ、ありがとうケイ」

それをキャッチし口にする

「まったくもう心配させないでよね。ミサイルが当たった時に負けちゃうかと思ったじゃない」

そう言って非難するフェデリカは先ほどとは違い穏やかな雰囲気だった。

「まさかあのタイミングで？ファースト・シフト一次移行？が起きるなんて……もしかして狙ってた？」

そう言って少し意地悪そうな笑みを浮かべ聞いてくる。

ファースト・シフト
？ 一次移行？

ISのコアが自身で操縦者のデータを読み取り、最適化されることで機体の形状と装備を操縦者の特性に合わせて変化させる・・・それが？ 一次移行？である。

あの時・・・ミサイルが当たる直前に白式が機能を停止したのはファースト・シフト
この？ 一次移行？を行う為だった。？ 白式？の？ 初期化？と？ 最適化？が終了し、？ 一次移行？を行う為に機体の機能が一時的に停止したのだ。

「俺に言つなよ・・・こつちも必死だったんだ。まさかあの土壇場で一次移行するなんて誰が想像できるんだ？」

「ふふっ、それもそうね」

そう言って笑つフェデリカ。やはり彼女は笑顔の方が似合う。

そんなふうに考えていると・・・

「・・・・・・・・」

ふと視線を感じ、そちらの方へと視線を向ける。

そこには・・・

「・・・・・・・・」

クラスの担任、織斑千冬がどこかやるせない表情を浮かべてこちらを見ていた。

「……………なにか？」

「……………いや」

何か重苦しいものを吐きだすように言う織斑先生。

「さて緋村、お前はオルコットに勝利した訳だが……………どうする？」

彼女の言わんとしていることは分かる。

この戦いはクラス代表を決める戦い、その名目で始まったのだ。
であるならば勝利した自分がクラス代表を務めるのが当然なのだが・
・
・
・

「本来なら勝利したお前がクラス代表を務めるべきだが、そもそも言っていない？事情？がある・・・お前が決める」

彼女の問いに俺は・・・

「・・・・・・推薦してくれた人には申し訳ないですが

クラス代表は辞退します」

そう答えた。

「・・・・・・・・・・そうか」

俺の答えを予想していたのか織斑先生はやれやれと息を吐く。

推薦してくれたクラスメイトには悪いがクラス代表を引き受ける訳にはいかない、というよりも引き受ける事が無理だ。対抗戦はともかく、生徒会の会議や委員会は放課後に行われる。教官任務がある以上はそちらを最優先しなければいけないのでクラス代表を務めるのは無理だ。

「な………優刀!!ちょっと待て!!」

そう言っつて声を上げるのは今まで黙っていた筈。今の俺の言葉がとても信じられないといった表情をしている。

「……筈か、どうした?」

「お前は推薦されたのだぞ!? それを辞退するのか!!」

「ああ、そうだ」

「な!!」

俺の即答に筈は絶句する。

「あのなあ・・・言っておくが別に俺はクラス代表になるのが嫌な訳じゃないぞ？まあ、彼女がどういった理由で俺を推薦したのかは大体想像もつくがそれでも推薦してくれた以上は職務を真っ当しいとも思っている・・・」

「だったらなぜ引き受けないのだ!？」

「それは・・・」

返答に困りフェデリカたちの方へと視線を向ける。彼女たちも困ったような顔をしているが助け船を出してくれるつもりはないようだ。

「自分が聞かれたのだから自分で何とかしろ」

そんな風に目が語っている。

どこまで話していいものか・・・教導官任務の事はともかくさすがに計画のことを話すわけにはいかない。

「言えないのか？ だったらお前はその職務から逃げようとしていただけだ！！ 情けないと思わないのか！？」

返答に困っている俺の姿がどうやら彼女にはその職務から逃げ出すうとしてゐる軟弱者に見えているらしい。どんどん箒はヒートアップしていく。

さて、どうしたものか・・・そう悩んでいると

「黙れ篠ノ乃」

意外なところから助け舟が出た。全員が声の主へと視線を向ける。

「ち、千冬さん・・・」

織斑千冬が箒の方をじっと冷めた目で見ていた。

箒も千冬が口を挿んだことに驚きを隠せないでいるのか、先生と
呼ばずに、昔の呼び方になっていた。

「織斑先生と呼ばんか・・・先ほど言ったはずだぞ、仲良くするのは構わんが？一線？は超えるなと」

「し、しかし！！」

「貴様は人の話を聞いていなかったのか？そうも言っていられない事情があると私は今、お前の目の前で、そう言ったはずだ」

「それはそうですが！！それでも無碍にしている理由などありません！！それ相応の理由が無ければ納得できません！！」

織斑先生にそう反論する筈、しかし・・・

「貴様の頭は鶏か？一線？を超えるなといった以上、そこにそれ相応の理由があるに決まっているだろうが・・・まさかそこまで言わなければならぬほど貴様の頭は発達していないのか？」

「・・・う」

「これで最後だ篠ノ乃。仲良くするのは一向に構わん・・・」

だがお前には緋村の行動にとやかく言う権利はない……二度と緋村の行動に口を挟むな」

「……っ、分かり……ました」

悔しそうに口をかむ箒。その姿を横目で見ながら織斑先生は俺達に向き直る

「さて、なんにしてもクラス代表決定戦はこれで終わりだ……
・・四人とも報告は受けているから今日はこれで帰って良い、ご苦労だったな」

「緋村くん、ISは今、待機状態になっていますが、呼び出せばすぐに展開できます。けれどちゃんと規則で許可された場所以外でのISの展開は禁止されていますから気をつけてくださいね」

「分かりました」

山田先生の言葉に頷く。

セシリアは今日の試合を思い出す。

自分は代表候補生……相手は素人の、しかも男に自分は負けるはずなどない、勝てると思っていた。

しかし結果は一次移行ファースト・シフト？も完了していない、近接ブレード一本の相手にいいように翻弄され、あまつさえ一次移行ファースト・シフトしてからは瞬く間にシールドエネルギーを削られて墜ちるといふこれ以上ないほどの無様な敗北だった。

しかし、今のセシリアにとって一番悔しかったのは……

「………？ヴァイス Weib ドラック Drache？」

その名を呟く。

？ヴァイス Weib ドラック Drache？……欧州の危機に現れた扶桑を代表するウィッチ、緋村優刀。

他者に媚びることなく、自らの信念を貫かんとする強い意志が宿った蒼い瞳を思い出す……その瞳はふいに彼女の父親を思い出させた。

(・・・父は母の顔色ばかりをうかがう人だった)

名家に婿入りした父は母に引け目を感じていたのだろう・・・母には頭が上がらなくいつも機嫌をうかがっていた。母もそんな父が鬱陶しそうで父との会話を拒んでいる節があった。そんな風な父の姿を見て、『自分は情けない男とは結婚しない』と誓わずにはいられなかった。

けれどその父とは真逆の、強い意志を持つ男性と出会ってしまった・・・

・・・その彼に言われた言葉一つ一つがセシリアの心に突き刺さっていた。

なぜ自身が? ヴァイス Weib ドラック Drache?であることを黙っていたのか、そう聞いた時の彼の言葉が脳裏を過ぎる

『それを自ら打ち明ける事に何の意味がある？・・・自分が言うことに何の意味もない。自らに誇りを持つことは確かに重要だ、けれど・・・それを自らひけらかし、自分は肩書きがあるからと他人を見下すそんな奴が誇りなんぞを口にするな。』

その言葉一つ一つが鋭利な刃物となり、自信の胸に突き刺さる。

『いいか、肩書きで人の価値が決まるんじゃない・・・その人が何を考えどう行動したか・・・それが認められて初めて人の価値が決まり、だから肩書きにも価値が生まれるんだ・・・そうだろ、代表候補生！！』

代表候補生・・・そう呼ばれたとき、胸が引き裂かれるように苦しくなった。

「・・・お母様」

母は強い人だった。

男尊女卑社会以前から女でありながらいくつも会社を経営し、成功を収めた人物・・・それが自身の母親、そしてセシリアの憧れの人。

とても厳しい人だった。けれどいくつもその姿に憧れた・・・そんな彼女の娘であることを誇りに思っていた・・・

けれど、その母も三年前に事故で他界した・・・父とともに。

越境鉄道の横転事故、その事故に両親は共に巻き込まれこの世を去った。死者百人を超える大事故だった。母はその日に限ってどういふ訳か父と一緒に行動を共にしていたのかはわからない・・・けれど二人はともにこの世を去り、後には莫大な遺産とそれに群がるうとする金の亡者どもだけがセシリアには残った。

その遺産を護る為にあらゆる勉強をし、その勉強の一環で受けたIS適正試験でA+が出た。その結果、政府から国籍保持、他にもいくつもの好条件を提示され、即決。セシリアはブリタニアの代表候補生として選ばれたのだ。

（自分は誇りある貴族でブリタニアの代表候補生、そしてお母様の娘……そのはずだったのに）

貴族とは人々の模範となるべき存在でなければいけない……そう母から教わってきたはずなのに、今の自分はどうか？

振り返れば自身の浅はかな言動の数々が思い起こされる。

自分が代表候補生であることをひけらかし他人を見下し、そして愉悦する……誇りある貴族、そして母の娘と名乗るには無様な姿。

「無様ですわ……」

自身が醜悪な姿を晒していたという事実が何よりも悔しかった。その愚かな行いに気付いたセシリアは唇を噛む……

「このままでは終われませんわね……」

そして顔を上げるセシリア……そこに先ほどまでの暗い表情はない。

そう、自身の過ちに気付いたのならまた一からやり直せばいい……
また新しく一步を踏み出すのだ。

……
……
……
……
……
……

「見ていてくださいお母様……セシリアは此処からまた新しく始めますわ」

「……………」

薄暗い部屋の中……ただ一つの光が漏れている。

ここはIS学園の資料室……そこでその光……モニターの
画面を見ていたのは優刀のクラス担任、織斑千冬その人……そ
こへ

「ああやっと思つけた・・・織斑先生、ここにいらしたんですね」

「・・・ああ、山田先生ですか」

やっと思つけたとばかりに声をかけたのはクラスの副担任、山田真耶。しかし千冬はその姿を横目で確認するとすぐに画面へと戻す。

「ああ、今日の緋村くとオルコットさんの試合を見ていらしたんですね」

「・・・ええ」

画面に映し出される映像・・・本日のクラス代表決定戦の戦闘の映像をみて、納得がいったとばかりに頷く真耶に千冬はばつの悪そうに答える。

真耶はその千冬の姿に苦笑すると千冬と同じように視線をモニターに映す。

そこでは、ファースト・シフト優刀が？一次移行？前の白式を駆り、セシリアを追い詰

めている

「でもさすがですね、緋村くん……最初IS学園に入ってから聞いた時はビックリしましたけど、こうやって見ると他の生徒のいい起爆剤になってくれそうですね」

「……そう言えば山田先生は欧州で緋村達に会ったことがあるんでしたね」

「はい……ちょうど初の実戦で、危なかつたんですがあの時は彼に助けていただいたんですが……」

その当時を思い出し、嬉しそうな笑みを浮かべていた真耶に突如暗い影が落ちる

「……山田先生？」

「……せっかく助けに来てもらったのに、生徒達が彼の事をその、なんとというか……」

「男の癖にと陰口をたたいた……か」

「・・・はい」

頷く真耶の表情が曇る。

「本当なら私があの時窘めるべきだったんです・・・けど、私・・・あの時初めての实战で気が動転していて・・・教師失格です」

そう言って、顔を歪ませる真耶

「山田先生・・・それは仕方がない事だ、何せ初の実戦だ。そこまで気が回らないのはしょうがない」

そう言ってやわらかい笑みを浮かべて真耶を見る。

「でも」

「こちらに非がある以上は自分で謝らないといけない・・・違うか？」

「・・・はい」

「それにあいつはそんなことをいちいち気にする程器量の小さい奴ではない・・・少なくともそういう奴だと私は見ている」

「はい・・・そう、ですね」

そう言って、自分に言い聞かせるように頷く真耶。その姿を見ていた千冬は・・・

（そんな器量に小さい人物ではない……………か、一体どの口が言っているんだろうな）

自分で言った言葉ながら千冬は真耶に気付かれないように自嘲的な笑みを浮かべる

実際、いちいちそんなことを気にするような人物ではないという

事は自分がよく知っている。彼は誰にだって分け隔てなく優しい・・・
・・そういう人間なのだ、緋村優刀という人間は。

(・・・しかし)

再びモニターに視線を向ける千冬。

試合は既に白式が？ファースト・シフト一次移行？を果たし、セシリアに最後の一撃
を与えたところである。

(間違いない、今のは？龍翔閃？・・・それに試合開始直後のあの一撃は龍巻閃・旋・・・)

再び試合開始直後の場面を再生し、優刀の一連の動作を再生する千冬。

（間違いない……これは飛天御剣流だ………なぜ優刀が使える？ もう教えられる人はこの世にいない筈なのに）

彼女は優刀が飛天御剣流を使える事実に訝しみ、眉根を寄せる

そう……既に飛天御剣流を扱え、教えられる人物はこの世にいない、10年も前にこの世から去って行ったのだ。当時優刀は5歳、そんな子供に少なくともあの人は自らの技を教えるわけが無い、たとえそれが優刀であっても絶対に教えることはないだろう。

（……いや、いた………一人だけ教えられる人物が）

そこで千冬はある人物に思い当たる。

(教えられるとすれば、あいつだけだ……だが、そんなことよりも問題は)

そう言って映像をある一点で静止する。

そこに映っていたのは……

(まずい……優刀に？白式？を使わせるわけにはいかない)

教師として彼のことを考えるのなら今すぐ？白式？の使用をやめさせるべきだ……けれど

(あいつは私の言う事などに耳を貸さないだろうな……)

絶対に優刀が自分の言うことを聞くことなどありはしないと自分がよく理解している。そして自分に彼をとやかく言う資格もないことも解っている。

「まったくんだ問題見だな……優刀」

顔を手で覆い隠した千冬の表情は読み取れない。

「
・
・
・
・
・
・
・
教師失格だな」

その言葉は暗い室内の中に溶けて行った。

EP・07 それぞれの夜（後書き）

ちょっと、箒を苛め過ぎました・・・箒ファンの皆様、ごめんなさい。

最後になりますが、ご意見ご感想の方お待ちしております。

では次回！！！！

EP・08 人の上に立つ（前書き）

どうもシユウ禅です!!

EP・08・加筆修正をして前後編に分けました

それではどうぞ!!

EP-08 人の上に立つ

突然だが、少し俺の家族の話しよう。

俺には血のつながらない一人の姉がいる。幼いころに親類をほとんどなくした俺にとってこの人はかけがえのない存在だ。自分でも多少は依存し

すぎではないか？ と思う時があるが勘弁してもらいたい。何せこの世界で本当に家族と呼べる存在はこの人しかもういないのだから。

……とにかくその姉の話だ。

7つ年が離れており、明朗快活で人柄もよくみんなからは慕われている。父が遺した剣術道場の師範代でその腕前は折り紙つき、数人の大人が束に

なってもかなわない。それでいて頭脳明晰であり、ブリタニア語、カールスラント語は普通に話せ、更にはオラーシャ語、果てはスオムス語まで堪能

能ときている。

おまけに指導者としても優秀で数多くの優秀な教え子がいる。

ここまでの話を総合すると非の打ちどころのない完璧な人物に思えるが、天は二物を与えずという言葉がある通り私生活においては致命的な欠点

がある。

それは何と言っても料理だろう。

何せおにぎり丸く握れないならまだしも、致命的なまでに才能がない。刀をあれだけ綺麗に扱うにもかかわらず、それが包丁に変わると途端に

ポンコツだ。

頭脳明晰な脳も途端に劣化してしまう。

料理に関してははっきり言って才能がない、そうとしか言えない。

そんな欠点がありつつも、結局はとても尊敬できる姉ということには変わらない。

まあ、最後に何がいたいかというと、

「………なんでおれはボロボロにされているんですかね
？ 緋村中佐」

「なんでだと思っ？」

地べたに伸びている俺を上から章香姉が見下ろしている。

「ここは軍の鍛錬場。今まさにここで俺、ひむらふみか緋村優刀は尊敬する姉、
ひむらふみか緋村章香に徹底的に叩きのめされていた。」

頭がクラクラする。

それはそうだ。何せ頭に手加減一切なしの一撃をもらったのだから。

「なんででしょう?」

「はあ……」

呆れたようにため息をつく章香姉。

「きょうの試合見せてもらったけれど、まったくなんで龍巻閃、龍翔閃を使かったかな……。あれほど魔法力が使えない状況で使うなど言っておいただろう?」

心底出来の悪い弟子を持った……。そんなふうに呆れている章香姉。

「う……ごめんなさい」

その章香姉のありがたいお言葉にただ頭を下げるしかない

つまりはそういうことだ、

今日のセシリアとの試合。最後に放ったあの一撃。

飛天御剣流・龍翔閃

あれがまずかった

「……体の方は大丈夫かい？」

章香が心配していたのは他でもない俺の体のほうであった。

「ん……問題はないかな。少し見てもらったけど、特に負担がかかってはいないみたいだし。」

優刀が使う剣術飛天御剣流は戦国時代に端を発する古流剣術である。

「剣の速さ」「身のこなしの速さ」「相手の動きの先を読む速さ」という3つの速さを最大限に生かし、最小の動きで複数の相手を一瞬で仕留めるこ

とを極意とする、一対多数の戦いを得意とする実戦本位の殺人剣である。「飛天」の名が示す通り、その使い手は天空を飛翔するかの如き跳躍力を

持ち、相手の遙か上空から斬撃を放つこともしばしばであり、またその身のこなしや斬撃の速さは「神速」と謳われている。

またその技の威力に比例して体への負担が大きく、並の人間では到底扱うことはおろか習得すら出来るものではない。

習得している俺も例外ではなく、魔法力で身体を強化しなければ徐々に体に損傷が蓄積されていき、最悪、経った数年で飛天御剣流の技を撃てな

くなってしまふ。

そのため、章香姉は俺に身体強化なしでの飛天御剣流の連続使用

を固く禁止していたし、優刀自身も威力の高さとその危険性を理解し、実戦と章

香姉の様な超一流の剣士との鍛錬以外では使うこともなかった。

「わかっているならいいけど、ISで御剣流を使うのは無理か・・・」

「ああ・・・使ってみて分かったけど体への負担が結構大きいな」

試合の時、初撃で感じた違和感・・・その正体は内からくる歪み、体の悲鳴だった。それは普段使っている様な時には感じられない、そして、普

段は感じる事のない疲労を感じた

「多分、四肢に重りをつけているからなんだろうけど・・・そんなにISの四肢って重たいのかい？」

「そんなには重くは感じなかったけど・・・操縦者保護機能っていうのもあまり信用できないな」

ISには操縦者をあらゆる危険から守る操縦者保護機能というものがあがるが、さすがに筋肉や骨の軋みのように、内側からの負担にまでは効果が薄かったようだ。

「それにしても……飛天御剣流は威力が高いな……改めて理解したよ。」

そう、驚くべきはその技の威力だ。たった二撃でセシリアの？ブルー・ティアーズ？のシールドエネルギーをゼロにしまった。もちろん、そ

れだけで半分もあつたエネルギーが消えることなどありえないとフエデリカは言い、そのほかにも原因があるらしいと今調べているが、それでも威

力が高過ぎる事には変わらない。

欧州で謎のISと対峙した時のことを思い出す……あの時、俺は敵を殺す気で放った抜刀術……あの一撃でISは半壊、操縦者もしばら

く動けない状況に陥っていたのだ……学園生相手に軽々と使っている威力の代物じゃない

「じゃあ、改めて言うておくけど、飛天御剣流の魔法力での身体強化なしでの使用は禁じる……いいね？」

「了解です……けど、どうするか」

「……と言つと？」

「ほら、俺って飛天御剣流しか習ってないだろ？ その動きや技が体に染みついていて以上、普通に刀を持つとどうしても飛天御剣流の動きで戦

ってしまいそうです……」

「なるほどね……」

納得がいったとばかりに章香姉は頷く。

実際、飛天御剣流は俺の体に染みついてしまっている以上、刀一

本を持ってはまず間違いなく振るってしまおう……であるならば、どうやって飛天

御剣流を使わずに戦うか……それを考えないといけない。

「しょうがないな……その対策は私も一緒に考えてあげるよ」

「ありがとうございます」

そう言って頭を下げる。

その姿を章香姉は可笑しそうに笑い

「はっはっはっは……けど今日はもう夜も遅いからね、考えるのは明日以降にして今は夕食だ……いや、夜食かな？」

その言葉にふと鍛錬場の時計を見る……今、その短針はまさに10時を指している。

「かなり微妙だな……」

「ふむ……もしかしたら食堂空いてないか……そしたら私が「大丈夫、空いてる時間はさつき確認したから空いてるよ」……優刀、何気に

酷くなつたね」

「はいはい、そうですね……大体章香姉、無断で厨房に立つとまた親方に怒られるぞ?」

「う……それはそれで嫌だね」

親方の名前を聞いてしよんぼりする章香姉……

達の悪いことに章香姉は料理好きでちよくちよく厨房で料理を作ろうと試みているのだが、それを阻む人物がいた。

それこそが海鳴基地のPX、通称「海鳴食堂」を取り仕切る料理長、親方……「源さん」

扶桑海事変の時からお世話になっているこの初老の男性は基本ウイッチには激甘な人（野郎の俺は例外）なのだが、章香姉にとって親方は唯一天

敵と呼べる人物である。源さんは章香姉を厨房に立たせることは絶対にさせない……いやむしろ立つたら一週間は食事抜きといわんばかりの怒気を

みせる。

まあ、源さんが怒るのは無理もない。実際章香姉が立つと9割の確率で厨房がめちゃくちゃになっているのだ・・・しかもその成果がおにぎり)

それもいろんな具材が入って行てよく味が解らないもの(である為翌朝仕事場が荒らされているのはさすがにウィッチに激甘な彼であつても怒るのは無理ない。

は無理ない。

実際、章香姉は半日正座させられたことがあつた。

「また正座させられて敏子姉に爆笑されるのが嫌なら止めることをお勧めするよ」

「う・・・優刀は一体誰の味方なんだ？」

「もちろん緋村中佐の味方ですが何か？」

そんなふうには不貞腐れる章香姉を慰めながら二人で食堂への道を歩いて行った。

「全方位に不審な影は確認されず・・・・・・・・・・しばらくは問題ないわね」

目を瞑り、固有魔法三次元空間把握を使い周囲を索敵している武子からそう報告が入る

「そうか……」

武子のその報告に胸を撫で下ろす

クラス代表決定戦の翌日、俺たち「Infinite Witches」の面々はIS学園よりはるか200km、太平洋上空、ハワイ方面へと進路を取り巡航速度で飛行していた。

なぜそんな扶桑から遠く離れたところを飛んでいるのか？ 話は少し遡る……

「……………護送任務ですか？」

クラス代表決定戦の翌朝、学園に行こうとした俺は突如、緋村中佐に呼び出されてそう告げられる

「ああ……………本日1100時にリベリオンからアイエス一機、この海鳴基地へと運びこまれる予定になっていてね、君たちに途中まで迎えに行つてほしいんだ」

そう自分の眼を見据えてそう言う緋村中佐。

「あの中佐、いくつか質問してもよろしいでしょうか？」

「ああ」

中佐の話聞いて武子が疑問に思ったのかいくつかの質問をする。

「その護衛任務は私達だけで行うのでしょうか？」

「ああ、そっだよ」

祖質問に肯定された武子は驚いている

そもそもアイエスISであるなら向こうのIS部隊、もしくは扶桑のIS部隊がその任務に就いている筈である・そのはずなのに今回はウイチで構成された我々の部隊だけで当たれというのだ。はっきりいって異例だ

「そのアイエスIS……いや、正確には？インフィニット・ストライカーIS？かな？ウチで試験を行う機体である以上、余り人目に触れさせたくないからね……一応周辺には部隊を配置する予定だけど、直援につくのは君たちだけにしろってお達しがあってね……やれやれ、護衛をするこちらの身にもなって欲しいよ」

困ったという風に言う緋村中佐。

「もう学園側には連絡しておいたから今日はいかなくていいよ・・・
・・・出撃は一時間後、合流地点はここ、ポイントN34e145・・・
・・・じゃあよろしくね」

「奴さん（・・・）の到達時刻まであと十分・・・このまま何も起きなければいいんだけどな」

「ええ・・・一応向こうでも最低限の護衛はついているみたいだから大丈夫だとは思っけど」

そうやって俺たちは問題の輸送機が来るであろう、方向へと視線を向ける。

一応、件のISは海鳴で組み立てと最終調整を行う予定なのでコアと機体はパーツ状態で輸送されることから、途中まではリベリオンの軍用IS二機が護衛に就いていると聞いた。

だが、実戦では何が起きるか解らない・・・

そう思い優刀は気を引き締める

すると・・・

「優刀・・・二時方向、距離100000の所に機影を発見したわ」

そう報告するのは自身の固有魔法？超視力？によってはるか遠方を見据えていたケイ。

「？奴さん？か？」

「国籍マークはリベリオン……部隊番号も合致、間違いな
いわ」

「よし……、こちら扶桑国海鳴基地所属「Infinite
Witches」、緋村優刀少佐だ……応答願う」

ケイの報告に前方の輸送機、KC-46へと通信を始める

「こちら、リベリオン第8航空軍所属KC-46機長、エドガー・
ロビンソン大尉だ……お会いできて光栄です、？Weib Dr
ラッヘ
ache？」

「リベリオンより長旅ご苦労様です……これより我々「In

f i n i t e W i t c h e s」も護衛に就きます」

「ああ、よろしく頼む」

そして輸送機に並ぶように飛行する。

『・・・へえ、お前があなの？^{ヴァイス} W e i B ^{ドラック} D r a c h e ? か』

突如、インカムに聞きなれない女性のモノと思われる声が入ってきた。

「・・・？」

突如聞こえてきたその声に首をかしげる。

『悪い悪い、急に話しかけちゃって・・・輸送機の方を見てくれ』

その言葉に従い、輸送機の方へと視線を向ける。

輸送機の窓にはこちらに向けて手を振る女性の姿が・・・

『悪いな急に話しかけちゃって、私はリベリオン国家代表、イリス・コーリングだ。扶桑までよろしくな!』

そう言って親指を見せるイリスと名乗った女性。

「扶桑国空軍少佐、緋村優刀です。こちらこそよろしく願います」

そう言って敬礼をして返す。それに応える様にコーリングと向かいに座っている金の美しい髪を持つ女性が敬礼を返す。

そして、扶桑へと向かおうとすると……

『……！？ 緋村少佐！前方に敵影確認！！こっちへと真っ直ぐ向かってくる！！……これは』

ロビンソン大尉が声を上げそう報告してくる。

「っ！武子、ケイ！！」

「こっちでも捉えたわ！！・・・数は一機！！・・・かなりのスピ
ードでこちらに向かってくるわ」

「・・・そんな、これって」

？超視力？でその姿を確認したケイが信じられないと声を上げる

「 I S 」

Ep-08 人の上に立つ(後書き)

次回に続きます

EP・09 亡国企業（前書き）

どうもシユウ禅です。

加筆修正版、後篇です。

それではどうござ

「……………IS」

そういつて顔を引き締め迫り来るまだ見えぬ敵を睨み付けている
ケイ

（……………まさかあの時の）

その報告に俺は奪還作戦前に遭遇し、やり合ったあの青いISを
思い出す。

あのISが来たとなれば厄介だ。

「ケイ、所属不明機の特徴は解るか？」

「少し待って・・・なにこのIS・・・黄色と黒のまだら模様、背中から八本の爪みたいなのが生えるわね・・・気持ち悪いわ」

そう言ってケイが不快そうに顔を歪める

(黄色と黒の斑模様には八本の爪・・・・・・・・あいつか)

ケイからの情報にあるISを思い浮かべる。

そして接近するIS・・・・・・・・それは

どうやらあの馬鹿笑いを上げていた敵は俺に気付いたらしい。

依然味わった恐怖が蘇ったのか、その先ほどまでの不快極まりない笑みが凍りつき、引きつっている。

「・・・優刀、お知り合い？」

「・・・欧州にいた頃に多発していた襲撃事件の犯人の一人だ」

その何とも小物臭い姿にややあきれつつ、武子のその質問に答える。

「てめえ・・・どうして、こんなところだ！・・・」

あらぬ限りの憤怒をこちらに向けてくるオータム。

「なんだ、新聞読んでいないのか？ いい大人なんだから新聞の一つや二つは読んでおけ、三下」

「なあっ！？この餓鬼っ！！またしてもこのオータム様を三下呼ばわりしやがってっ！！」

「はあ・・・自分で様つけているなんて三下以外の何ものでもないだろ」

「って、てめえ・・・・・・・・もう殺すっ！！」

そう叫び俺に向かって突っ込んでくるオータム

その考えなしに突っ込んでくる彼女の姿に俺はいくらか失望する

「はあ、所詮は三下か・・・・・・・・とつくに気づいていたもんだと思っただがな」

「なんだとてめ」「うらあああああああっ！！！！！！」
なっ！！！！？」

オータムの声を遮る人の声……その声の主は突如現れる。

その声の主は俺の横を駆け抜け、真っ直ぐに突っ込んでくるオータムにそれを超える速さで彼女へ突っ込んでいく。

「おらあああああつ!!」

気合の咆哮、声の主は一気にその距離を詰め、オータムをその拳で殴り飛ばす。

「げぶあああああつ!?!」

オータムは成す術なく殴り飛ばされる

「随分早いですね」

オータムを殴り飛ばしたその人に声をかける

「当たり前だ。専用機は即時展開が可能なんだぜ？むしろ遅かったぐらいだ」

そう言っつて彼女、イーリス・コーリングはにやりと笑みを浮かべる。

彼女は虎模様のタイガーストラップISを纏い、自分の前を飛んでいる。

「……………てめえ、一体どこから出てきやがった？」

突如現れたコーリングを睨み付けるオータム。

「はっ！やつぱ？^{ヴァイス} We i B ^{ドラッグ} D r a c h e？の言う通り三下かよ。そんなこといちいち聞かなくても解るだろうが・・・少しはそのからっぽそうな頭を使いな。」

「なっ！？」

コーリングに三下呼ばわれされたことにオータムは顔をこれ以上なくくらいに歪ませて、こちらを睨み付ける。

別に何も難しいことはない。

謎の機影を感知した際に既に彼女は後部デッキへと移動し、そこで自らのISを展開、そして出撃してきた。わずか一分もかかっていない。

「おお、怖い怖い・・・」

睨み付けられたコーリングはどこ吹く風、そのオータムのあまりの滑稽さに口元に笑みを浮かべる。

「・・・武子たちは輸送機と一緒に先に行ってくれ。ここは俺と彼女で受け持つ」

「了解・・・いくわよ、三人とも」

俺の指示に頷き、輸送機と共にこの空域を離れようとする

「・・・ちい、行かせるかあつ!!」

・
・
オータムは本来の目的を果たさんと輸送機へと飛ばうとするが・

「それは」

「こっちの」

「「台詞だッ！！」」

突進してくるオータムを二人して同じタイミングでハイキック。

「があっ!?!」

その攻撃にまたしても吹き飛ばされる屈辱を味わうオータム

「おいおい? ヴァイス We i B ドラッグ D r a c h e ? . . . お前、今、蹴り入
れなかったか?」

「入れましたが、何か?」

よっぽど今の俺の攻撃が驚きだったのか、呆れたように聞いてくるコーリング。

「いやいや、だってお前が付いているのってストライカーじゃねえか、そんなんじゃ敵ぶっ飛ばすなよ。壊れちまうだろ」

そう彼女の言う通り、今俺はストライカーユニットを装備している。

メッサーシャルフBf-109E・・・扶桑海事変から使用している機体である。

俺はこいつでオータムを蹴り飛ばした。

「大丈夫ですよ・・・正確には障壁でぶっ飛ばしたんですから」

そう正確にはストライカーユニットの前面に障壁を展開、それでブツ飛ばしたのだ

「…………じゃあ、さっさと目の前の敵を」

「ぶっ飛ばすぜ!!」

二人は一気にオータムへと疾駆する

「ちいっ!!」

オータムは装甲脚の爪を展開、そこから現れた銃口を二人に向け放つ。俺とイーリスはその銃撃の嵐を交互に交差するように飛びながら避け続け、オータムへと迫る。

「くっ!!」

オータムは後退しようとするが……

「遅い!?!」

俺はオータムがとるべき道筋を予測し、そこへとMG54を放ち
体勢を崩す・・・そこへ

「おらあああああっ!?!」

イーリスは瞬時に加速、一気にその距離を詰めて自身のISの武
器でもあるその拳を思いっきり叩き付ける

「がああああああっ!?!?」

体勢を崩されたところへの強力無比な一撃、その身をはらはらと
散らせながら墜ちていくオータム。

「て、てめえら……!!」

なんとか体勢を立て直してこちらを睨み付けるオータム。

「……言っておくが、私はつえーぞ。殴殺される覚悟はOKか？
ウチからパクツたその機体じゃ、私とこの？ファング・クエイク？
には勝てねーよ。」

そう言うイーリスにオータムは更に悔しそうに顔を歪める

「……殴殺するかは別として、お前にはいろいろと聞きたいことがある。覚悟しろ」

前回と同じように冷たくそう告げる。

「く・・・そ・・・があああああつ！！！！」

持てる限りの呪詛をその叫びに込めて突撃してくるオータム。
腰に差した扶桑刀へと手をかけ、抜刀の構えを取り迎え撃つ。

突撃してくるオータム、その体が射程に入ったその時、

突如、一つの赤い閃光が二人を遮るように襲い掛かる

「っうー!?!」

間一髪、飛び退くことでそれを避けることができた

しかしそのあとを追うように閃光は次々に襲い掛かってくる、

「くっ!!」

障壁を展開し防ぐ

閃光が現れた方に目を向ける・・・そこには

「!!・・・また貴様か」

「こちらへと迫る、青の機体・・・？奴？だ

「・・・オータム、迎えに来た」

「迎えに来たぞ、オータム」

その青い機体はオータムの以前と同じようにそばによる

「！！てめえの指図は受けねえ！！ 奴らはここで私が殺す！
！」

そう言ってこちらへとまた突っ込んで来ようとするオータム……
だが

「……！！」

「死にたいのか？」

彼女の眉間にその長大なライフルを突き付け、それを阻止するM
と呼ばれた少女。

「あの？女？からの命令だ……退くぞ」

そういつて、謎の襲撃者はこちらに顔を向ける

「……フッ」

そう吐き捨て、去って行こうと飛翔する青の襲撃者。

「……っ待て!!」

「逃がすかぁ!!」

イーリスと二人、その後を追おうとしたが……

「なっ！！？」

突如目の前に現れた自立誘導兵器によって阻まれる

刹那そのビットは爆発

爆炎が晴れるころにはもうすでに二人の姿は遙か雲の向こうへと消えて行った……

「ああ、ちくしょう！！」

そう言ってイーリスは悔しさに拳を叩く。

ファンゲ・クエイクのその拳は鈍く大きな金属音を辺りに響かせ

「こちら緋村・・・例の襲撃者だがすまない、取り逃がした・・・
・武子そっちはどうだ？」

『こちらは予定通りの航路に戻ったわ・・・周囲に敵影なし、早く戻ってきて』

「了解・・・イーリス」

「・・・解った・・・くそムカつく！！ あのフルフェイスの野郎・・・
・今度会ったらぜってーぶん殴ってやる」

『イーリ、そんなこと言っていないで早く帰ってきて来なさい』

「ナタル！ けどよお」

突如、インカムから聞こえてきた声にしょんぼりとした声を出して答えるイーリス。

『逃げてしまったモノはしょうがないわ、とりあえず輸送機は護れた・・・それで良しとしましょう』

「・・・っ、了解」

悔しさに顔を歪ませ通信を切ると、イーリスは再び襲撃者たちが消えて行った方へと視線を向ける。

（青の襲撃者、いったい何者なんだ？

それに）

「ふむ……謎の襲撃者か」

その後、無事に基地に帰還した俺たちは謎の襲撃者の件を緋村中佐に報告した。

その報告を聞いた緋村中佐は何かを考える様に顎に手を当てる。

「でも、何より気になったのは……」

「ああ、あまりにも引き際があっさりしていた……か」

「……ええ」

中佐の言葉に頷く。

そうあまりにも敵は引き際が良過ぎたのだ。

「まるで……最初から輸送機など眼中になかったように、か」

「……ええ」

「亡国企業……一世紀以上に生まれたとされ、国家によファントムタスケらず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還らない……その目的も存在理由も不明の組織。故に亡霊、全くこのご時世に困った組織だよ」

そう言って頭を抱える中佐。

「今の所、？亡国企業？に対して私たちは受け身にならざる負えない……歯がゆいわね」

そう言って悔しそうに爪を噛む、武子。

オフィスに重たい雰囲気漂う。

「まあ、とりあえずは輸送機も無事に着いたことだし今日はゆっくり休みなさい。優刀達は明日は学校だからね……」

ング少佐、ファイルス少佐も今回はありがとうございます。二、三日は海鳴基地でゆっくり休んでください」

「はっ！..！」

中佐の言葉にイーリス、とファイルスと呼ばれた女性は敬礼で返す。

「じつして、「Infinite Witches」の初任務は多少の疑念という苦さを残し成功に終わった

翌朝・・・

いつものように学園に行き^{ショートホームルーム}SHRが始まるとありえないことが起きた。

「では、一年一組のクラス代表は緋村優刀くんです。これからがんばってくださいね」

そう笑顔でしゃべる山田先生・・・山田先生の発言に盛り上がりを見せるクラスメイト達。そんな中不機嫌オーラを出しているの

は俺だけである。

「……先生、質問です」

とりあえず挙手する

「は、はい！！緋村くん！」

挙手をした俺におっかなびっくりといった感じで返事をする山田先生。小動物の様に震えてしまっている。

「あの確か自分は辞退したはずですが？」

そう、俺は確かにあの時辞退したはずだ、そしてその場には山田先生もいたはずだ……。なのに何故クラス代表になんてなっってしまったているのだろうか？

「え、え〜とですねえ・・・それは

」

「それは私が説明しよう」

山田先生はすごく申し訳なさそうな顔で口を開こうとすると、それを遮るように口を開くものがいた。

「織斑先生・・・」

二人の間に異様な張り詰めた空気が漂い、先ほどまで騒いでいたクラスメイトもその空気の悪さに息を呑む

「学園側からお前にクラス代表を務めさせるよう通達があった」

織斑先生のその一言ですべて納得出来てしまった。

つい大勝ちしてしまったために、学園側としても俺がクラス代表として行事などで戦ったほうが注目されるとでも思ったのだろう。

実際請け負うこっちにしてみればはた迷惑な話である。

「はあ・・・要するに体の良いプロパガンダですか」

「そうだ」

いつも通りの豪快不遜な態度で答える織斑先生・・・だがその瞳には申し訳ないとばかりに揺れていた。

「でも、さすがにクラス代表は無理です」

その言葉に教室がざわざわとざわめく・・・ここまで拒否しているのだ。普通に考えれば何かある・・・そう考えるのが普通である。

「あの……」

そんなふうにはじめく中一人のクラスメイトが手を上げる。

「なんだ？」

「緋村くんって扶桑の軍人なんですよね……もしかして緋村くんがクラス代表を断ったのって軍と関係しているんですか？」

「それは……」

随分ストレートに聞いてきたクラスメイトである。

何せ普通に昨日の試合、クラスメイト全員が観ていた中で言ったのだからだ。俺が軍人であると分かった以上、そこまでクラス代表を拒む理由があるとすればそこにしかない。

まさかそこまで直球で聞いてくるとは思わなかったのかその答え

に詰まる織斑先生。

「ああ・・・その通り。俺は扶桑軍に所属する男のウィッチ（メルウィッチ）だ・・・詳しくは言えないのだが、俺は教官任務を引き受けていてね・・・さすがに任務がある以上は放課後を拘束されるクラス代表は出来ないと断ったんだ」

言葉に詰まってしまった織斑先生の代わりに答える。

俺が軍人であると知られてしまった以上、変に隠し続けるのは逆に怪しまれる。話せる最低限の事を話し納得してもらおうしかない。

クラスメイト達は俺のその答えを聞いて納得したとばかりに頷き、ざわめきが収まる

さすがはIS学園・・・やはり難関とされるだけあってそこに揃う生徒も皆レベルが高い。俺が軍人、そして最優先にすべき任務があるといった

だけでおおよその事情を察し、自分たちが立ち入るべき件ではないと理解したのだろう。

若干一名こちらを睨んできている者がいるがこの際放っておく。

「軍からも教官任務を最優先しろと通達があつたはずですが」

「・・・どうやらお前の所属先と交渉があつたようだな、条件つきでOKが出たらしい」

「条件付き・・・ですか？」

「お前がクラス代表になる条件、それは補佐をつけることだ」

「補佐・・・ですか」

「クラス代表はクラス単位で行われる試合のクラス代表と生徒会や委員会に出席するクラス長としての役割を持っているといったのは覚えている」

「な？ お前の場合、問題になっているのはこっちのクラス長としての役割をこなす時間がないという事だ、ならばそのクラス長の仕事を誰かにやっ

てもらえばいいだけの話だ。」

そうやって織斑先生は説明を続ける

「そして今回交渉した結果、特例としてお前に補佐をつけ、クラス長としての役割をその人物が行うということで合意した、という訳だ」

なるほど・・・そういう事だったのか。

「何か質問はあるか？」

「いいえ、ありません」

軍としてもIS初の操縦者という事実は無視できない案件であることは確かなので、少しでもデータを手に入れておきたいのだろう・・・であればISの稼働データを取りやすいクラス代表になってくれた方がよかったのだ。

けれど、そのクラス代表になって最も期待していた教官任務に支障が出る事だけは避けたい。それ故に補佐をつけることで許可

したのだ。

補佐がつくのであればこちらとしても問題はないし、断る理由はない。

「では、話が纏まったところで次に補佐をだれがやるかだが……
オルコット、お前がやれ」

視線を彼女、セシリアの方へと向ける織斑先生。

そして彼女は織斑先生の言葉に応える様に立ち上がり……

「申し訳ありませんが、私は辞退させていただきますわ」

そういつて、彼女は頭を下げる

またか……

そんな声がクラスメイト達から聞こえた気がした。

クラスメイトから聞いた話では彼女はクラス代表決定戦後、午後の授業を休み引きこもってしまつて、今朝やっと出てきたらしく、クラスメイトは驚いたらしい。

「……………オルコット、理由を言ってみろ」

ややうんざりしたかのように織斑先生はセシリアに聞く。

男の補佐なんて屈辱以外の何ものでもない……誰もがそう答えると思つていた。

しかし・・・・・・・・・・

「今の私にはクラスの代表たる資格がございません・・・それゆえ、辞退させていただきます」

信じられない・・・

セシリアから出たその言葉に誰もが口と開けて呆然としている。

開いた口が塞がらないとはまさにこのこと・・・

しかしセシリアはその反応を気にせず続ける。

「緋村優刀さん、並びにクラスの皆様、申し訳ございませんでした・・・先の数々の失礼な振る舞い、深くお詫びいたします。」

そう言って、深く頭を下げるセシリア

「………本来皆様の規範たる役目を背負った代表候補生であるにも関わらず数々の暴言を吐き、そして他人を見下したような態度、そのよ

うな愚かな態度をとった私にクラスの長を補佐する役目を行う資格などございません……今だ非才の身ですが代表候補生に相応しい人間に成長す

るよう努力いたしますので皆様方これから宜しくお願いいたします」

そうした頭を上げるセシリア……

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ……

その姿を見たクラスメイトから次々に拍手が起こる

クラスメイトのその拍手に応える様にセシリアはまた頭を下げる

「オルコットが辞退した以上誰が補佐をやるか……さて、どう決めるか……」

タイミングを見計らった織斑先生はそう切り出し思案する。

「やりたい者はいるか？……はさすがにまずいな……よし、ちよっと待っている」

そう言って部屋を出ていく織斑先生……そして数分後

「……………済まない、待たせたな」

戻ってきた織斑先生の手には大きな箱、そしてそれを教壇に置く

「今からくじ引きを行う……今から紙を配る……そこに自分の名前を書いて此処に入れろ、私が引いた紙に書かれた名前の者がクラス代表補

佐だ」

山田先生が紙を配り、そこに名前を書いて次々に箱へと紙を入れていくクラスメイト……

箒はその姿をじっと見ていた。

(やったぞ……これは好機だ)

そう、これこそ自身に与えられた優刀と距離を縮めるまたとないチャンス。

(必ずこのチャンスをものにして優刀との開いてしまった距離を縮めてみせる!!)

そう密かに箒は決意する……

そしていよいよその時が迫る。

「よし全員くじは入れたな……ではひくぞ」

全員が固唾を吞んで見守る……

（大丈夫だ……来い!!）

千冬は箱に手をいれ、一つの紙片を取り……

開いてそこに書いてある名前を呼ぶ。

「……クラス代表補佐は鷹月静寐たかつきしずね！異存はないな！！」

千冬の声にクラスメイト達は、？はーい？とクラス一丸となって
答え、その団結力の高さを見せる

こうして優刀の波乱に満ちたIS学園での生活が幕を開けた

「そう・・・オータムは無事なのね？」

薄暗い部屋の一角・・・そこで女は安堵のため息を吐く。

『・・・ふん、自分でけしかけておいて良くいつ』

「あら、心配していたのは本当よ？」

その電話の相手・・・Mの言葉に心外とばかりに声を上げる

「……………だって？彼女^{オクタム}？では？—彼（緋村優刀）？には勝てないもの」

『……………ふん』

電話越しのMの不機嫌そうな声にその女性、スコールはまた笑みを浮かべる。

「とりあえず、こっちで？後始末？は済ましておくから？M？は次の予定に向かってちょうだい」

『……………了解』

「気を付けてね」

そう言ってその女性は電話を切る。

「……………さて」

そして彼女は重厚な机の向こう側に座る恰幅の良い初老の男性へと視線を向ける

「お待たせしました社長……………」

そう言うてにっこりと微笑む女性。

「ミス・ミューゼル……………どういっつもりだ」

しかし、その社長と呼ばれた男性は恐怖に顔が引きつっており、何とかその言葉を絞り出す。

「どっ……とは？」

そう言って彼女は首をかしげる。

そんな彼女の後ろにはまるでペンキの朱をぶちまいたような赤、朱、紅……

赤が広がっていた……

そして、辺りには様々な大きささまざまな欠片が散乱している

「・・・人の部下を殺しておいてよくそんな顔が出来るな」

そう言った社長の顔がゆがむ。

そう、彼女の周りに散らばる欠片とは彼の部下・・・否、彼の部下だったモノだ。

「ふふ、社長も人の事言えませんわ。 私たちに頼んでライバル企業の人間を何人も葬ってきたのは他ならない社長ですのに・・・」

そうにごやかに続けるスコール

「今回の事もそう・・・ただISがウィッチに使われるのが我慢ならない・・・そんな下らない理由で私たちに輸送機を襲撃させ

た……そのお礼ですわ」

そう、今回の輸送機襲撃はこの者達からの依頼だったのだ……

確かにウィッチは世界中で羨望の的になってはいるが、何も世の中すべての人が好意的な意見を持っているわけではない。

目の前の人物もそういう？反ウィッチ？の人間の一人だった。

「この悪魔め……」

あらん限りの呪詛を込めてそう言い捨てる社長。

「あら心外ですわ。ネウロイの脅威におびえる世界からあなたを救済にきた天の使い……と言ってくださいな」

そう言って銃を彼の眼前に突きつける。

「さようなら社長……あなたは我ら？ファントム・タスク亡国企業？の良き糧と
なってくれました。これはほんのささやかなお礼ですわ」

響く銃声

当たりに鮮血が舞う

崩れ落ちる社長

崩れゆく社長を見てスコールは残念そうに呟く

「……残念だったわ、いい殿方だったのだけれど」

やはり駄目だ・・・自分を心から満足させてくれるのは？彼？
し
かない

そして夜空に浮かぶ満月を見つめ、その人物へと思いを馳せる・・・

「ああ・・・？
Weib ヴァイス
Drache? ドラッケ

その眩きは恋する乙女の眩き・・・

彼女はただ待ち続ける・・・

いずれ来るであろう、その時を・・・

EP・09 亡国企業（後書き）

というわけでクラス代表は優刀？でした。

そしてその動きを見せてきた亡国企業・・・彼らの目的はなんなのか？

最後になりますが、ご意見ご感想お待ちしております！！

では次回！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4483x/>

INFINITE WITCHES ー無限の蒼穹を駆ける白き龍ー

2011年12月8日23時52分発行